

# 第VI章 飛鳥・奈良・平安時代

## 第1節 八里向山遺跡群における当期の遺跡分布と周辺の状況

八里向山遺跡群内では飛鳥・奈良・平安時代の遺跡が5ヶ所確認されており、今回、全ての遺跡が発掘調査されている。須恵器生産関連が2遺跡（J遺跡・I遺跡）、建物を伴う宗教関連が1遺跡（B遺跡）、竪穴建物1軒での構成が1遺跡（D遺跡）、明確な建物を伴わない祭祀場1遺跡（C遺跡）など、いずれも特殊な性格を持つ遺跡ばかりである。B・C遺跡は同時期の関連性をもった遺跡だが、それ以外は時期が異なるなど、遺跡間での直接的関連は見出し難い。以下に、須恵器生産関連遺跡と寺院等宗教関連遺跡の周辺関連遺跡分布状況について述べておく。

### 1. 須恵器生産関連遺跡

J遺跡・I遺跡ともに、辰口町から小松市東部丘陵にかけて分布する能美窯跡群に包括される須恵器窯と位置付けできる。能美窯跡群は従来、手取川に面した丘陵上に分布する来丸支群・湯屋支群などの北群と鍋谷川流域に面する下徳山支群・和氣支群などの南群とに分けられ、8世紀中頃を境に北群から南群へ窯場を移動すると言われてきた。しかしながら、近年の小松市の発掘調査等で、南群のさらに南・西で新たに須恵器窯が確認されてきている。鍋谷川の南側、小松市域の河田山・八里地区において須恵器窯が確認され、特に河田山1号窯は8世紀初頭に廻ることが判明した。古手の窯が存在することから、辰口南群とは別のグループを形成する支群と評価でき、八里・河田山支群として8世紀後半の須恵器窯3基とともにグルーピングしておく。なお、群別では小松群と名称付けておく。南群の西側、寺井町側へも須恵器窯の分布が伸びることを今回の調査で確認した。調査後、八里・泉台支群としていたが、報告では、八里向山支群と訂正しておきたい。当支群は辰口南群の和氣峰山支群と、小



第214図 八里向山遺跡群の古代遺跡分布 (1/3,000)



第215図 能美窯跡群八里向山支群の立地と周辺地形 (1/15,000)

さな谷を挟むだけだが、J遺跡が7世紀に遡る点やI遺跡の窯構造の違いなどから、南群と別グループを形成する支群と評価し、寺井群と名称付けておきたい。

さて、寺井群だが、泉台団地造成前の地形図を見ると、八里向山の丘陵が、泉台の丘陵部分と連続しており、須恵器窯の分布も北側へ伸びていた可能性がある。能美窯跡群で最古となるJ遺跡須恵器窯の立地する谷が平野部側から入り込む谷と連結している状況や、当丘陵の北側に能美古墳群の中核をなす和田山・秋常山古墳が存在する点、最近、6世紀前半頃の能美窯産胎土に類似する在地産須恵器が散見される状況などから考えて、J遺跡を遡る古手須恵器窯が寺井群に存在していた可能性は十分にある。根拠資料には欠けるが、消費地資料から、今後検証してゆくべき課題である。

なお、能美窯跡群の動向の問題については、上記の様相から見て、辰口北群から辰口南群への単純移動では説明しにくい。どちらかと言えば、平野部に近い丘陵縁辺部の辰口北群、小松群、寺井群から辰口丘陵中央部の和気、下徳山、上八里へと集約していったと評価すべきだろう。辰口南群で古手に位置づけられる金谷地窯が寺井群寄りに分布していることや小松群の新しい時期の窯は、辰口寄りに分布していることはそれを裏付けよう。最近調査された和気小しょうぶ谷支群などのように、丘陵部の谷の奥まったところで9世紀代の窯が作られる状況は、能美窯跡群の窯場動向を予感させるものであろう。

## 2. 寺院等宗教関連遺跡

北陸では近年、平野に近い里山の開発に伴って、山林寺院遺跡や宗教関連遺跡などが調査・報告されてきている。特に、石川県内の事例は多く、押水町宿向山遺跡、鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡、志雄町杉野屋専光寺遺跡、金沢市三小寺ハバ遺跡、額谷カネカヤブ遺跡、角間遺跡、辰口町庄ヶ屋敷B遺跡、宮竹うっしょやまA遺跡、和気小しょうぶ谷A遺跡、小松市浄水寺遺跡、里川E遺跡、加賀市南郷堂林遺跡など、八里向山B遺跡、C遺跡を含めれば、15遺跡を数える。図示したように、このうちの7遺跡が能美地域周辺に営まれており、6遺跡発掘調査されている。調査結果から宮竹うっしょやまA遺跡、浄水寺遺跡、里川E遺跡、八里向山B遺跡は建造物伴う山林寺院等、他は仏教関連遺跡と位置づけられる。丘陵全体を調査した事例では必ずといってよいほど、前者の山林寺院跡に後者のような遺跡が伴っている（分布調査のみではあるが、里川E遺跡にも



第216図 能美窯跡群分布図 (1/50,000)



第217図 古代山林寺院関連遺跡分布 (1/150,000)

隣接する尾根部に類似した時期の遺跡が存在しており、同様の性格付けができるかもしれない）。仏教行為を行なう祭場的な性格のものだったと予想している。

次に、遺跡立地だが、平野部に近い丘陵部であるものの、平野部には直接面せず、やや奥まった谷に面する尾根頂上部に営まれることが多い。建物は丘陵部斜面を造成して営まれるもので、中心的な仏堂的建物を奥へ配置することが多いが、斜面谷側を開口部と位置づければ、ほぼいずれの遺跡も南から東の方位に開口する。この方向には白山が望め、つまりは、白山を望める方向に面した尾根部へ占地したものと言える。遺跡の時期を見ると、庄ヶ屋敷B遺跡と宮竹うしょやまA遺跡が8世紀後半を中心とする時期、八里向山B遺跡とC遺跡が9世紀中葉前後、里川E遺跡が9世紀後葉～10世紀前葉、浄水寺遺跡が9世紀末～15世紀と、徐々に南へと移動している。また、9世紀代までの遺跡が短期で廃絶されるのに対し、10世紀に創建・整備される浄水寺遺跡のみは12世紀に建物を整備拡充し、中世へと展開している。浄水寺遺跡から白山参道へと入ってゆく、中海地域の低丘陵地帯には12世紀代に白山宮の末寺として勢力を誇示した中宮八院が存在しており、これら山林寺院の移動と白山信仰の普及、中宮八院の関連性が注目される。また、当地は加賀国府・国分寺の営まれる地域であり、その関連性も当然視野に入れる必要があるのだろう。

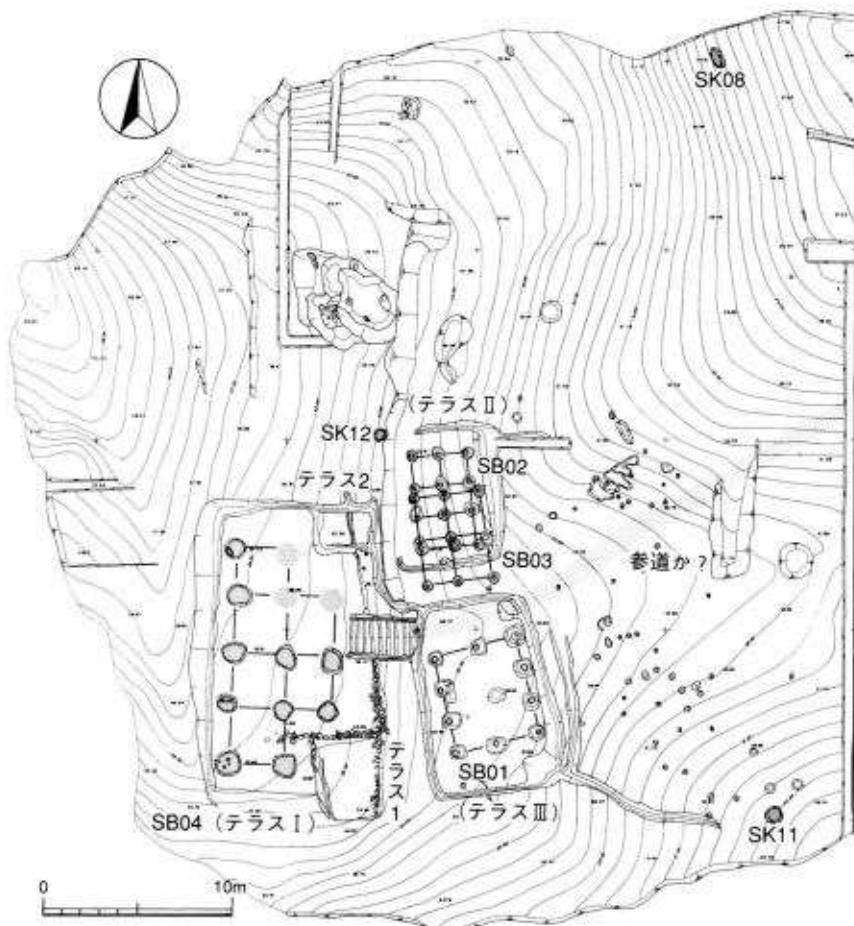
## 第2節 B遺跡Ⅱ区の宗教関連遺構と遺物

### 第1項 遺跡の概要と調査方法

B遺跡は東側へ伸びる尾根上に立地し、小さな鞍部を挟んで東西に遺跡が分かれる。古代遺構の検出された区域は、尾根が緩く下がってゆく比較的広い平坦部のⅡ区のみで、東側尾根突端部のⅠ区とは、時代を異にする。

B遺跡Ⅱ区は、尾根筋上、舌状に突出して緩傾斜地を形成する部分、東西30m、南北25mの比較的狭い範囲に、コンパクトに建物遺構が分布する。西方山側をカットして東方谷側へ盛土・整地する方法で、3箇所のテラスを形成しており、各テラスに建物遺構が確認される。最も山側に位置するテラスⅠは南北16m、東西10mの最も広いテラス面で、ここに礎石建物(SB04)が建てられる。前面に石垣を配し、中央には階段が築造されている。

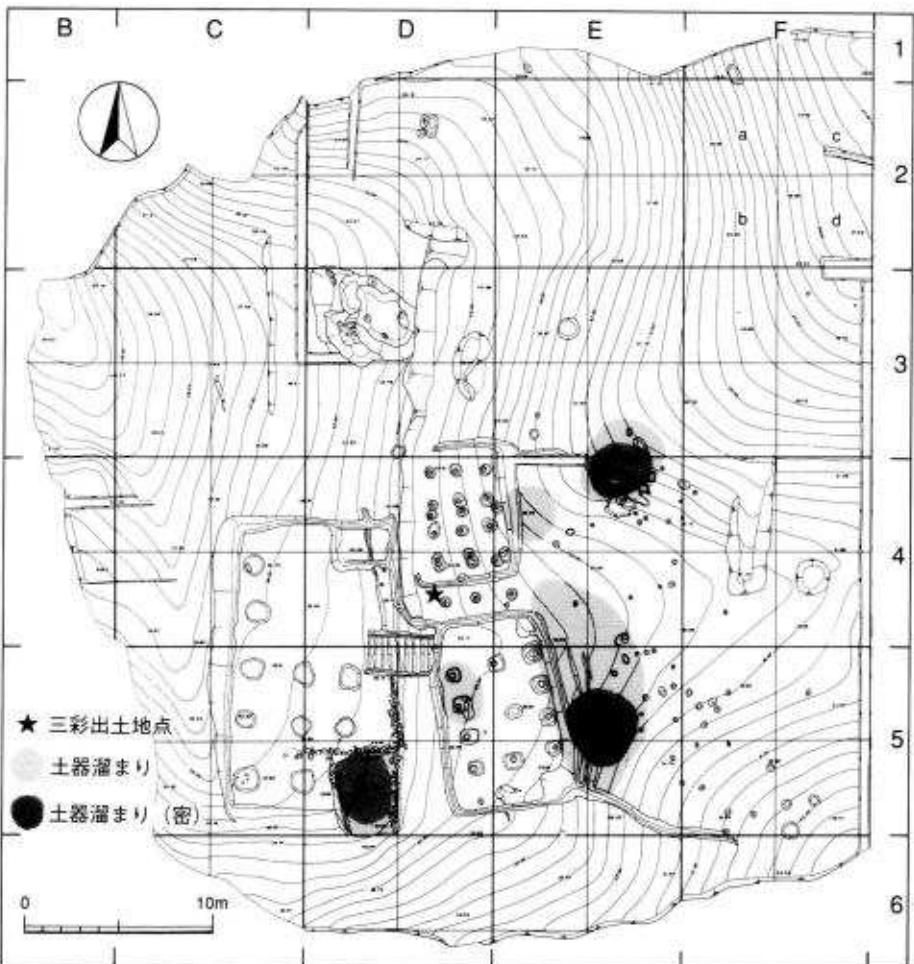
テラスⅠの下方北側にややずれて、テラスⅡが掘られている。テラスⅠ同様、山側を削り出して形成されており、総柱建物が2棟重複して確認されている。谷側に排水溝が伴うSB02とやや南寄りに建てられるSB03があり、SB02→SB03の前後関係が確認されている。テラスⅢはテラスⅠの前面、やや南寄りに位置し、山側をほとんど削らずに盛土で平坦面を形成している。排水溝で全周区画した中に側柱建物(SB01)1棟が建てられている。4棟とも南北にほぼ主軸をあわせて建てられており、中心的な礎石建物を奥に配



第218図 B遺跡Ⅱ区遺構全体図 (1/400)

し、その前方空間に2棟掘立柱建物を配置する。所謂コの字型配置と言えるが、テラスⅠに対応するテラスⅡ・Ⅲが並行して配され、コの字の中央空間をもたないことが特徴と言える。テラスⅡ・Ⅲの前方斜面には土器がまとまって廃棄されている。当区域は、上記遺構以外にも、ピットや土坑等確認されるが、当期遺物を出土するのはSK08のみである。細片出土であったため、特に取り上げなかった。また、壁面酸化被熱した土坑が2基(SK11・12)確認されたが、遺物出土がないため、位置を全体図で示すに止めた。両土坑ともに直接建物遺構に関連する遺構とは思えないため、詳細は割愛する。

次に、当区域の調査方法であるが、座標軸にあわせて、10mグリッドを設定し、東西軸西からA~F、南北軸北から1~6



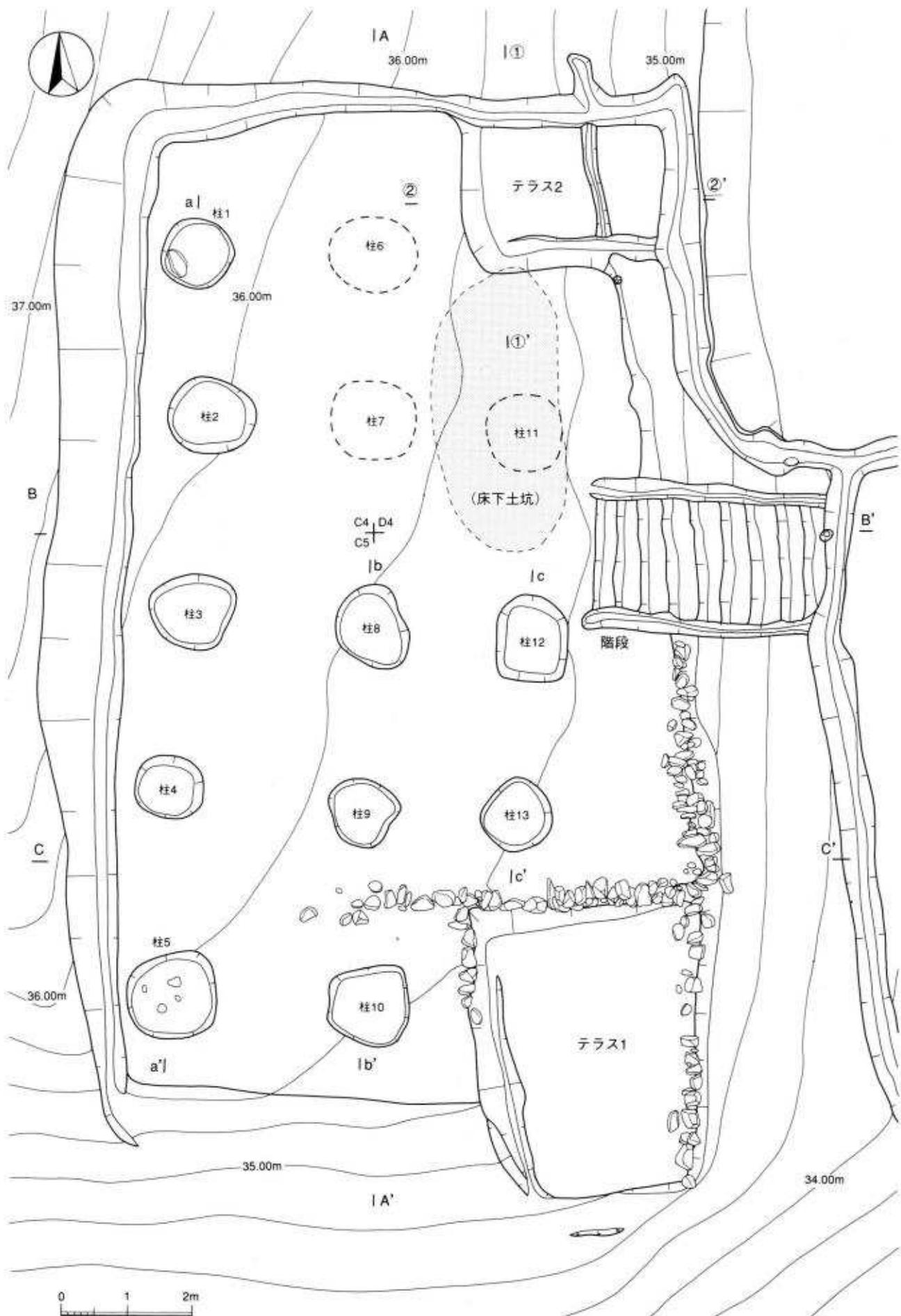
第219図 B遺跡II区グリッド配置と土器溜まり分布 (1/400)

としてナンバーリングし、その中を4分割して遺物帰属させた。表土からの掘削は人力で、遺構確認後は遺構に出土遺物を帰属させて、一部出土状況図作成を行なったが、基本的に層位重視で遺物取り上げを行ないながら、掘り下げを行なった。遺構図は調査員の手測量によるが、全体遺構図と石垣の図は測量委託した。なお、テラスⅡ・テラスⅢ前面の土器溜まりについては、特に遺構としては扱わず、グリッドで取り上げた。

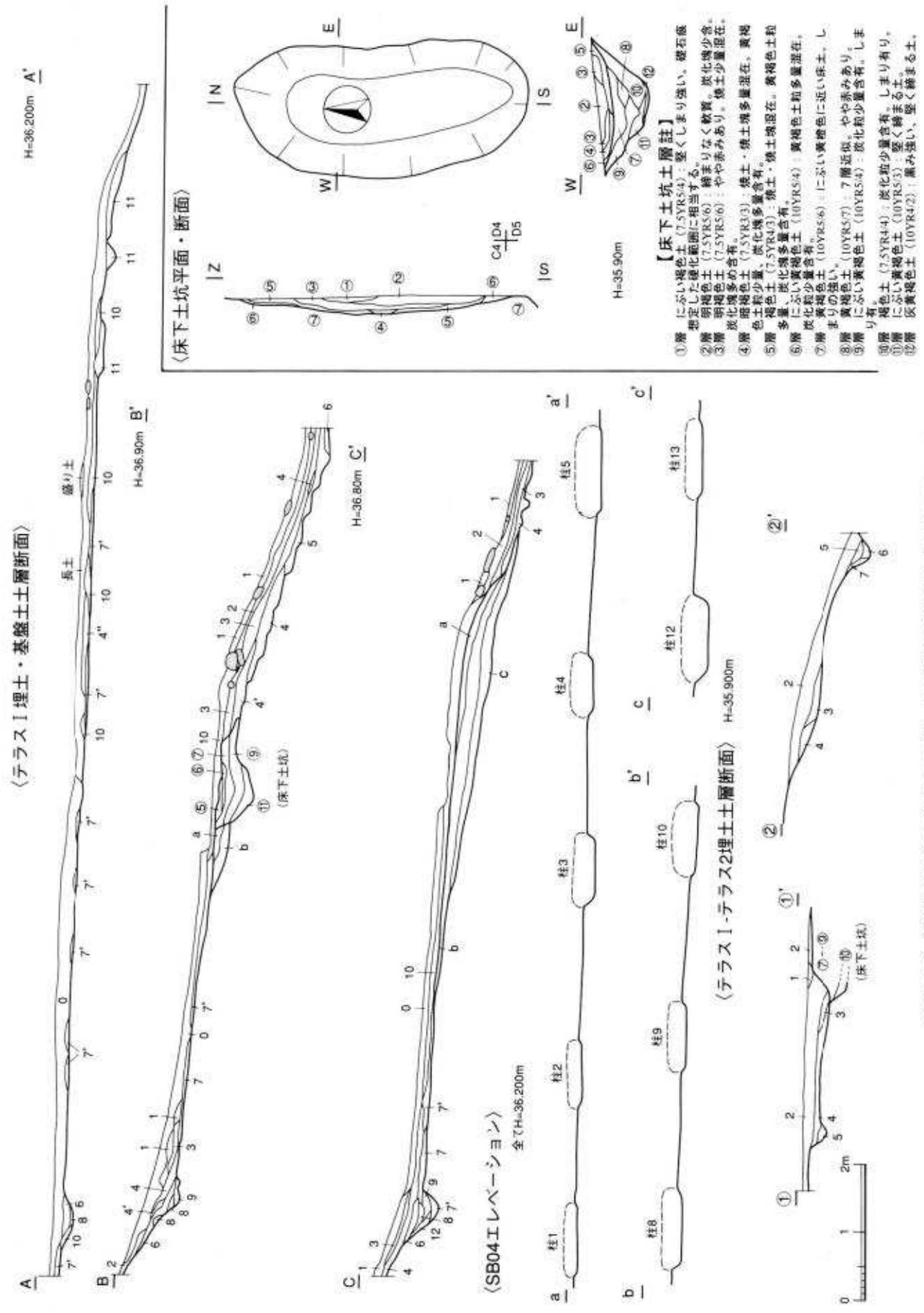
## 第2項 検出された遺構

### 1. テラスⅠ (SB04)

《テラスⅠの形態》尾根筋上を緩く13度程度で下る斜面の山側を60cmほどカットし、谷側を40cm盛土して平坦面を形成するもので、尾根の最も奥に位置し、南北15.12m、東西9.0~7.4mの広いテラス面をもつ。山側のカットは南北に方位を合わせて、ほぼ真っ直ぐに掘られているが、谷側のテラス面境は南に向かって広がっており、さらに北東隅と南東隅を一段下げて小テラス面を設けている。つまり、テラス平面形は凸形を呈するもので、その突出部に地山削り出しの階段を作る。階段部は幅1.8mで9段掘られ、両側には細い溝が伴う。階段の両側を囲う板枠だろうか。階段の末端はテラスⅢの北西部に繋がっており、SB01の建物北側に通り道があったものと予想される。このラインの延長線上には馬の背上に尾根筋が延びており、そのやや北側に硬化した層も確認できる。硬化面を参道として理解しておきたい。階段の南東側、向かって左側前面のテラス端部には護岸のためと思われる石垣が作られている。礫石を盛土に密に埋め込んで築かれており、南東小テラス(テラスⅠ)で西に折れ曲がるとともに、そこで分岐して上下2段の石垣を並べている。階段の右側に石垣はなく、盛土が薄かったために必要なかったものと予想している。石垣が護岸のためのものであることを裏付ける。当テラスにおいて、石垣とともに注意が払われているのは排水である。テラスⅠの西側壁下には幅55~75cm、深さ10~25cmの排水溝が掘られており、南端はそのまま排水溝が途切れて、谷へと水を流す恰好となっている。北側は方形にテラス端



第220図 B遺跡Ⅱ区SB04（テラスⅠ）平面図（1/80）



第221図 B遺跡II区SB04(テラス1) 土層断面図及び床下土坑図 (1/80)

を巡ってから、階段部のところで谷側へ折れて、テラスⅢの排水溝へ連結しており、山からの水が切れるようになっている。

《小テラス》北東隅の小テラスをテラス2、南東隅の小テラスをテラス1としている。テラス1は南北4.5m、東西3.5m、比高差40cmの段で、テラスIの南端よりもやや南側に張り出す形でテラスを形成する。西側壁下には細い排水溝が掘られている。テラス2は南北2m、東西3.5m、比高差25cmの段で、北東側はテラスIの外周排水溝に区画されている。南壁に細い排水溝が掘られ、外周排水溝に連結する。埋土に関しては、テラス1で土器廃棄が目立つ点以外、特記事項なく、テラス掘削の意図が疑問視される。両テラスに排水溝を掘っていることを考えれば、単なる凸形を作り出すためのものではなく、両サイドに設けられた祭壇のようなものだったのではなかろうか。

《テラス盛土と床下遺構》テラスIの盛土整地は、北西側を尾根基部として南東側へ地形傾斜しているため、南東側1/3の範囲で行なわれている。比較的下層は地山粘土塊を叩き締めて貼られているが、上層はやや軟質の土が盛られている。版築状はなさず、護岸の石垣で盛土流出を止める方法がとられている。なお、礎石建物の柱11の位置する下面には430×200cm、深さ80cmの長楕円形土坑が掘り込まれている。下層に褐色系の土がしまり強く貼られた後、上層に炭化塊や焼土を含む土が埋められ、その上面に礎石下面の硬化土(①層)が貼られている。

特に遺物の出土はないが、テラスIの盛土整地後に掘られた土坑であることと、礎石下面に存在することから地鎮に伴うものと評価しておきたい。炭化塊や焼土痕は祭祀行為によるものだろう。

《SB04》礎石の遺存はないが、礎石埋設穴と思われる浅い窪みが確認できている。窪みは径100~140cm程度の略円形で、深いもので15cmを測り、底面は平坦で硬化している。西側排水溝に沿うようにして、西側の桁行き礎石痕列が5本真っ直ぐ並んでおり、N-Eに主軸をもつ。柱間間隔はほぼ320cm、北側の1間のみ250cmと狭くなっている。桁行き長11.4mとなる。梁行きは1間(柱間300cm)で中央の3本のみ庇状に張り出す(庇含めた梁行き長は540cm、庇部柱間240cm)もので、4間×2間の北東隅と南東隅の柱がないような凸形を呈する。ちょうど隅柱の立つ箇所に北東・南東隅の小テラスが設けられているわけで、最終的に確認できた遺構の建物形は5間×1間に東面の中央部のみ庇状に張り出すものとなる。ただ、南側石垣の列の位置を見ると、南側列の柱との間を区画しており、建替えの結果、このような平面形を呈すこととなつた可能性がある。梁間1間の建物に庇状張り出しを設ける形態がやや特異な建物構造であることを考慮すれば、当初は両隅小テラスのない長方形テラス上に4間×2間の総柱建物が建っていたことも考えられる。その場合、両隅小テラスが作り出された段階では、南北両側柱痕に柱が存在していない、中央の2間×2間の総柱建物のみであったことになる。ただ、仮に中央部張り出しの建物構造を念頭に置いて考え、階段部取り付き箇所が柱11・12間であることを重視すれば、南側の石垣は建替え前という評価も可能となり、当初3間×1間+東面中央1間庇の建物から南へ1間分拡張し、4間×1間+東面中央2間庇の建物へ建替えたという考えも成り立ってくる(石川県教育委員会垣内光次郎氏よりご教示)。この点に関しては、建物配置全体の構成とともに総括で再度論じる。

## 2. テラスII(SB02・SB03)

《テラスIIの形態》テラスIの階段部より北側の区域に並列して作られるテラスで、緩く14度程度で下る斜面の山側を60cmほどカットして作り出される。谷側への盛土が最大でも20cm程度と薄く、テラス内の傾斜(11度程度に谷側へ傾斜)を解消できていない。初期のSB02段階と建替え後のSB03段階で、テラスの使い方が異なるため、前者をテラスII-1、後者をテラスII-2として区別する。

テラスII-1は山側カットラインに沿って、建物の外周を排水溝で区画するもので、区画内は南北700cm、東

## テラスI 土層註

### 【埋土層】

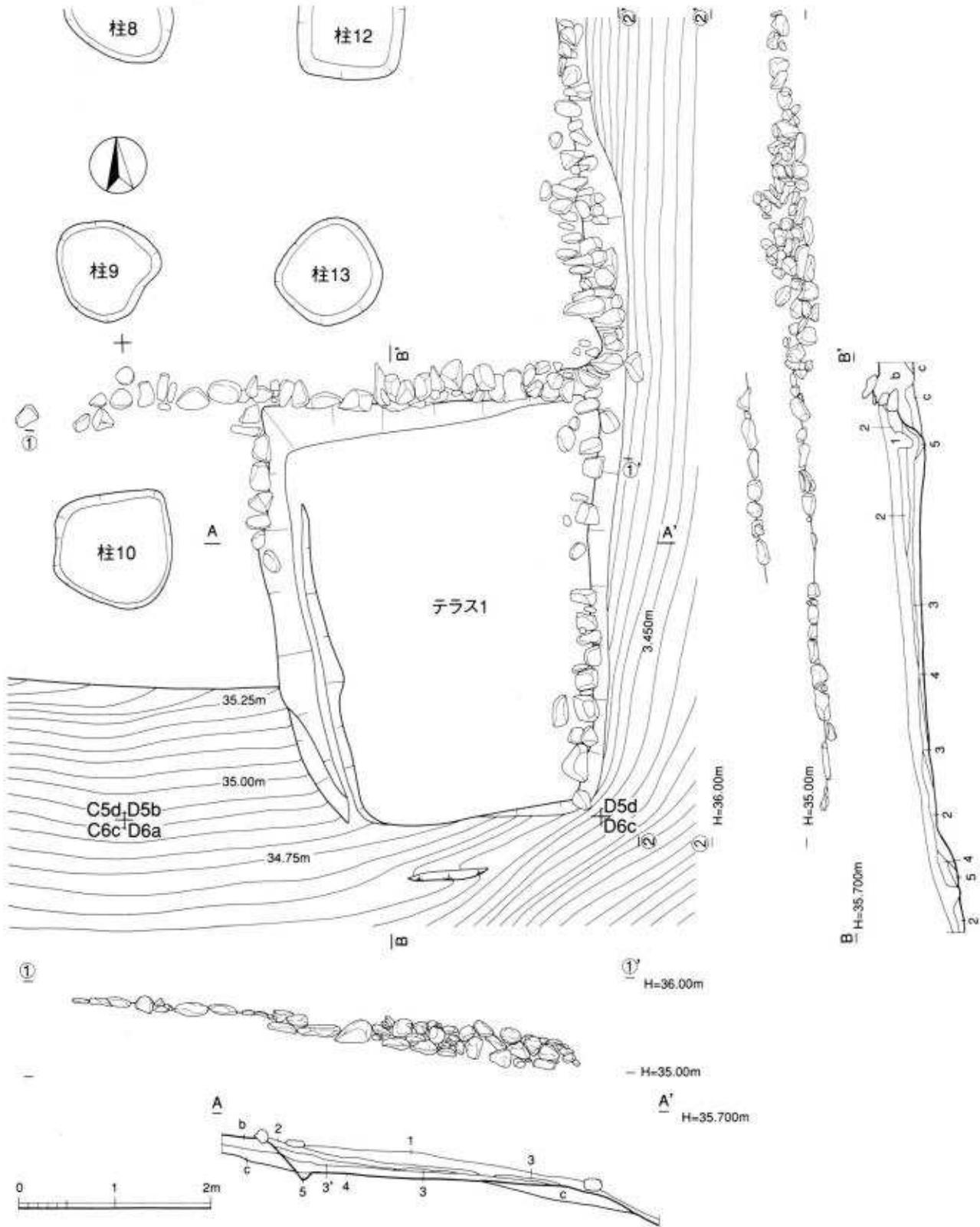
- 0層 耕作土
- 1層 明黄褐色土(7.5YR5/6): 黄褐色地山土塊多め含有。
- 2層 明褐色土(7.5YR4/6): 赤褐色地山土混在。しまり欠く。
- 3層 暗黄褐色土(10YR5/6): 黄褐色土塊ベースに褐灰色土疊ら混在の土層。堅く縋まりあり。
- 4層 黒褐色土(10YR3/2): 黄褐色土粒・塊多く混在。炭化粒少量が占有。
- 5層 褐色土: 黒褐色土粒多量混在。赤み強い。
- 6層 黒褐色土(10YR4/6): 黒褐色土粒・塊多く混在。堅く縋まり強めで強い。
- 7層 暗褐色土(7.5YR5/6): 炭化粒少量含。堅くしまり強い。
- 8層 にふい黄褐色土(10YR5/3): 黒色土粒多め含有。堅く縋まり強めで硬い。
- 9層 にふい黄褐色土(10YR4/4): シルト質。堅く縋まり強い。
- 10層 暗褐色土(10YR4/6): 黑褐色土粒少量含有。軟質。
- 11層 黒褐色土(10YR4/6): やや黒みあり。黄褐色土粒・塊多く混在。しまりあり。
- 12層 にふい黄褐色土(7.5YR5/4): 炭化粒少量、黄褐色土粒多量混在。

### 【基盤土層】

- a層 (灰)褐色土(7.5YR4/4): にふく灰色み帯びる。褐灰色土粒多く含有、やや軟質。
- b層 にふい明褐色土(7.5YR5/6): 橙色硬化粘土塊疊ら混在し炭化粒少量含有。
- c層 にふい黄褐色土(10YR4/3): 黒み強い。暗褐色土粒多く含有。にふい黄褐色土硬化塊多量混在。

### 【テラス2埋土】

- 1層 暗灰褐色土(10YR4/2): 黒み強く、炭化粒含。
- 2層 にふい黄褐色土(10YR4/2): くすんだ灰色み帯び、暗い。炭化粒少量含有。
- 3層 褐色土(10YR4/4): 灰色み帯び暗い。ややしまりあり。
- 4層 明褐色土(10YR4/6): 赤み強く。しまりあり。
- 5層 (灰)褐色土(7.5YR4/2): 炭化粒少量含有。
- 6層 (にふい)褐色土(7.5YR5/4): 明褐色土粒多め含有。炭化粒少量含有。しまりあり。
- 7層 明褐色土(7.5YR5/6): 地山土混在。しまり有。



### テラス1 埋土・基盤土層註

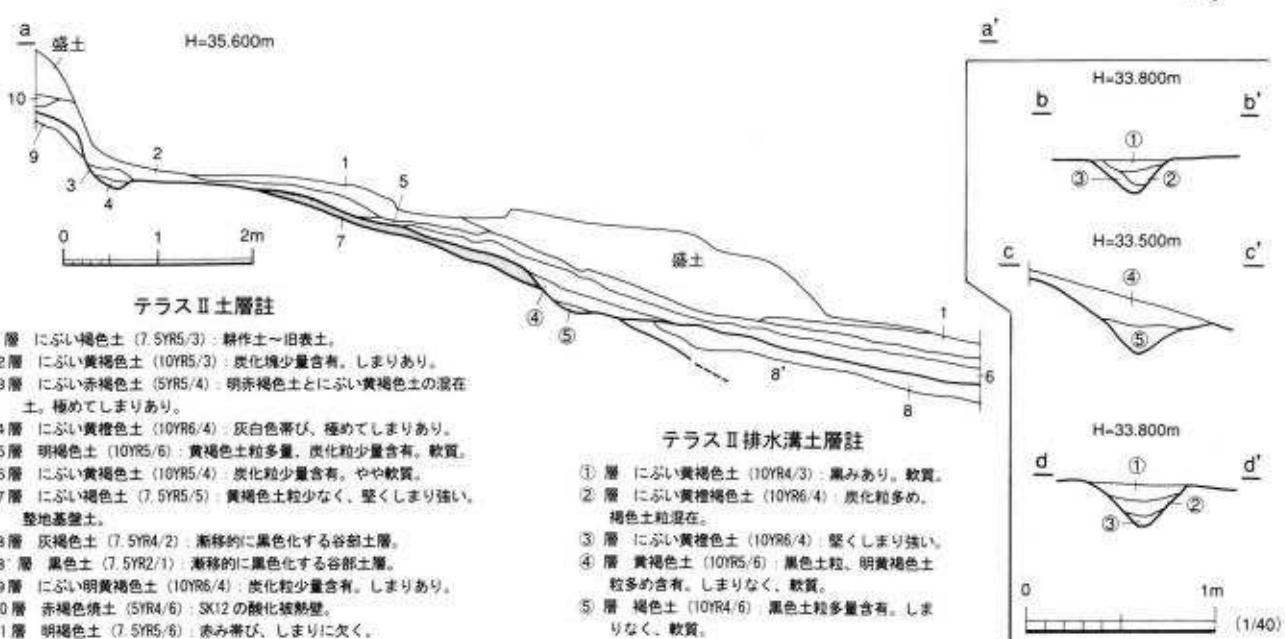
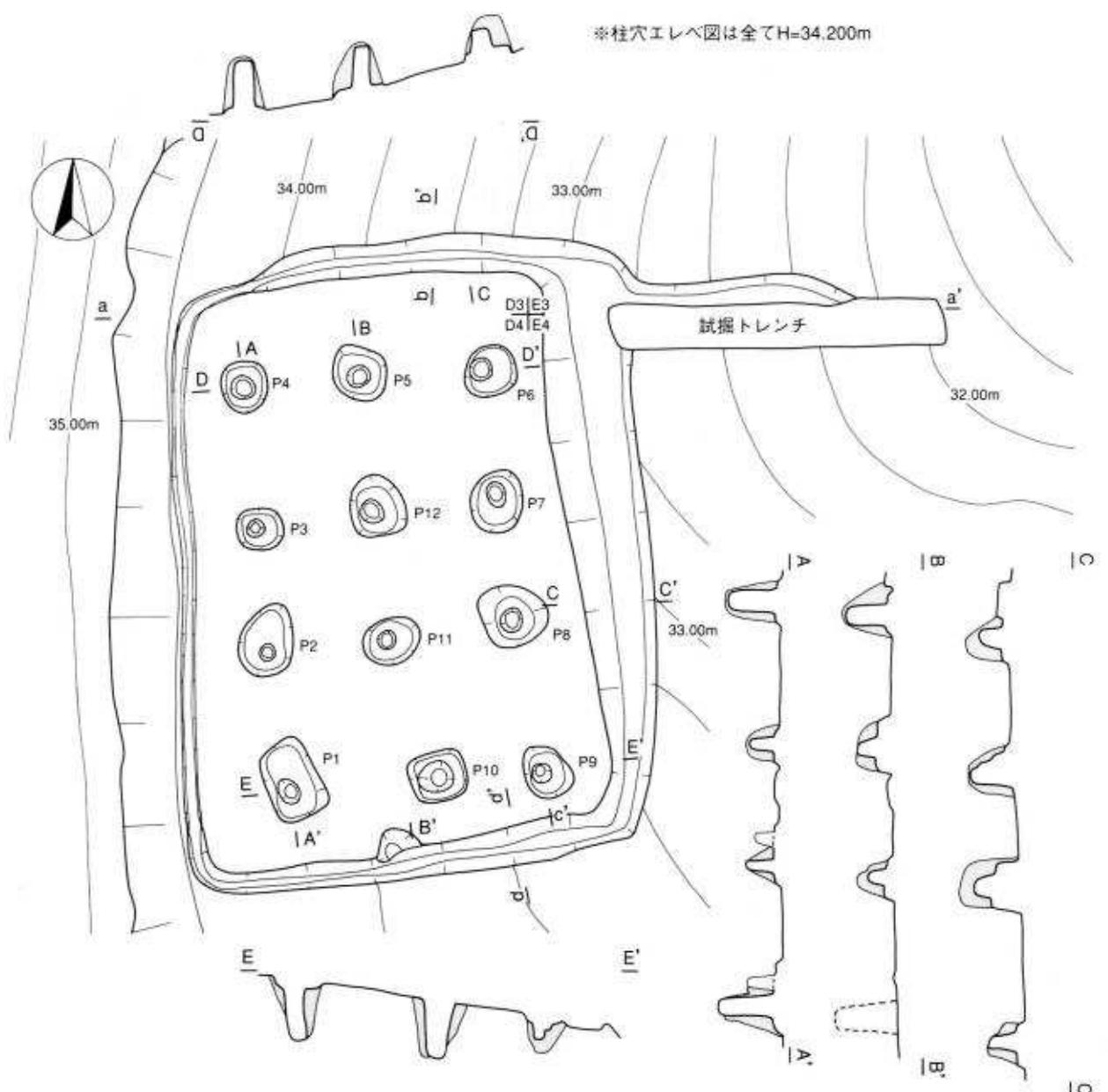
**埋 土**

- 1層 暗褐色土 (10YR3/3)：しまり欠く。
- 2層 にふい黄褐色土 (10YR4/3)：全体的に黒く、黒色土粒多め含有。
- 3層 褐色土 (7.5YR4/4)：全体的に赤み帯びる。
- 3層 褐色土 (10YR4/6)：赤みやや弱く、軟質。
- 4層 (暗)褐色土 (10YR4/4)：黒色土粒少量含み、黒み帯びる。
- 5層 (明)褐色土 (7.5YR5/6)：地山土混在。しまりあり。

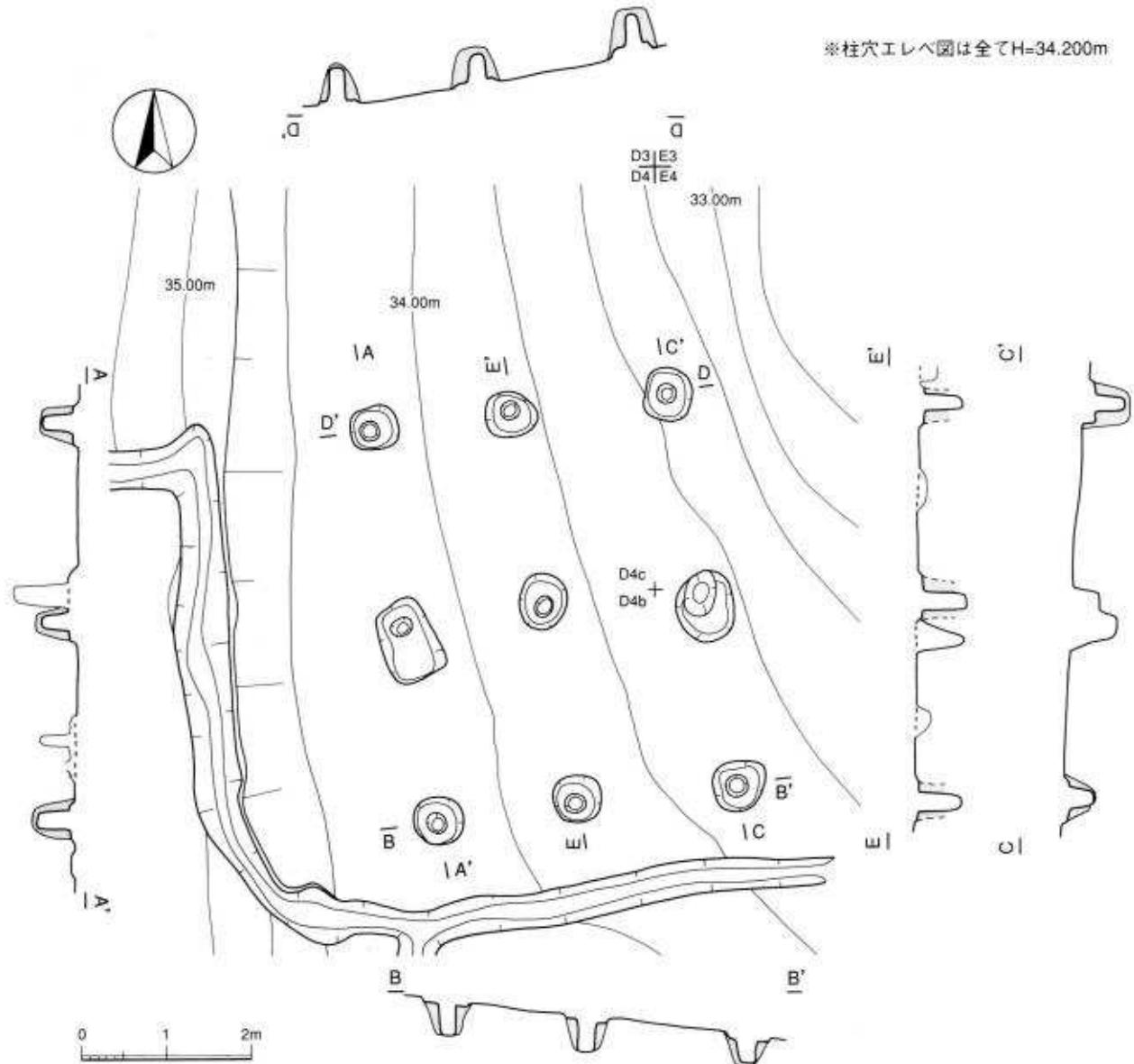
**基盤土**

- 層 (灰)褐色土 (7.5YR4/4)：にふく灰色み帯びる。褐色土粒多く含み、炭化粒少量含有。
- 層 にふい明褐色土 (7.5YR5/6)：炭化粒少量、橙色土塊少量含有。地山土混在。
- 層 にふい黄褐色土 (10YR4/3)：全体的に暗めで、暗褐色土粒多め含有。にふい黄褐色土塊多量混在。

第222図 B遺跡II区SB04(テラス1) テラス1部分平面図・側面図・土層断面図 (1/60)



第223図 B遺跡II区SB02(テラスII-1)平面・断面図(1/80, 1/40)

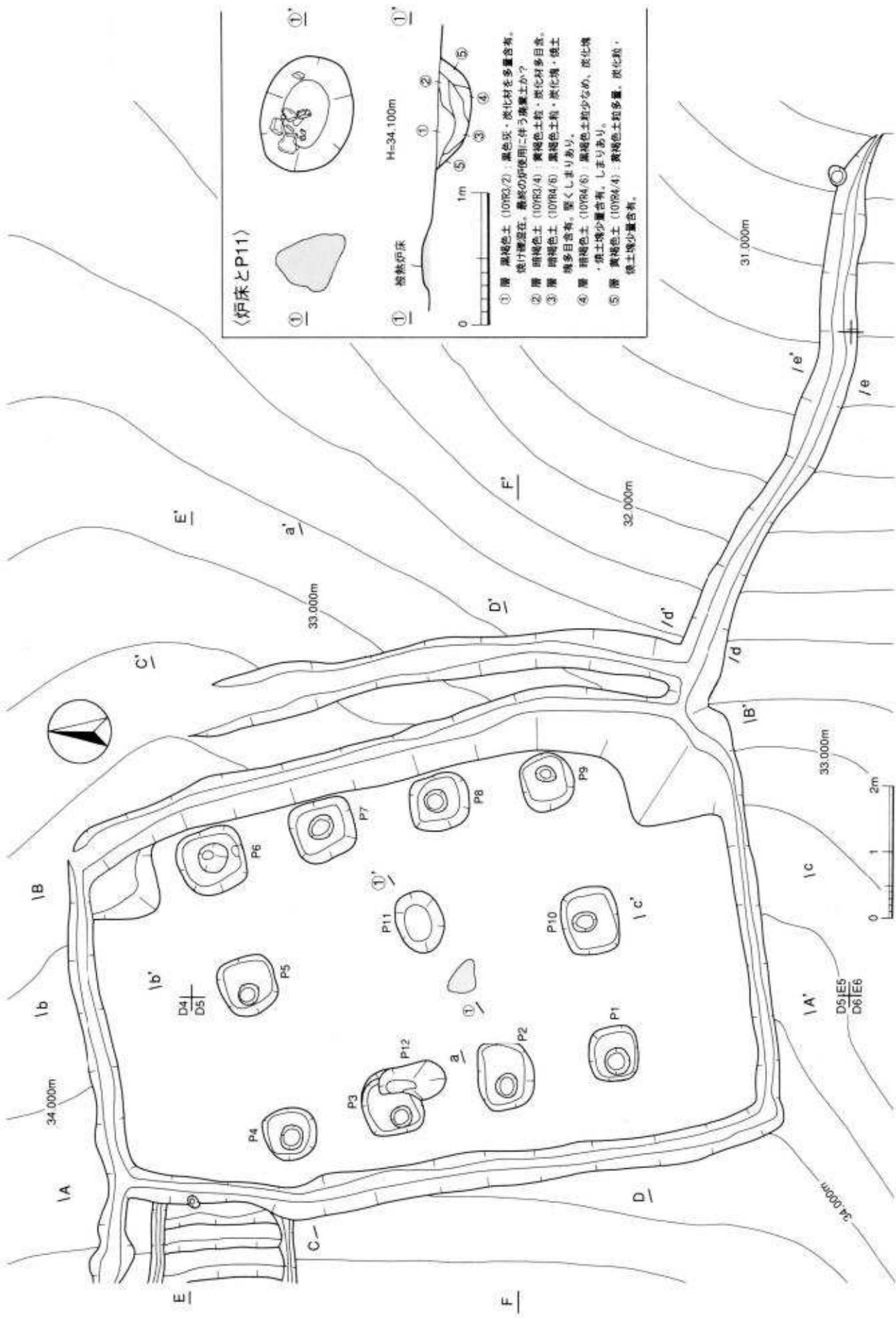


第224図 B遺跡II区SB03（テラスII-2）平面・断面図（1/80）

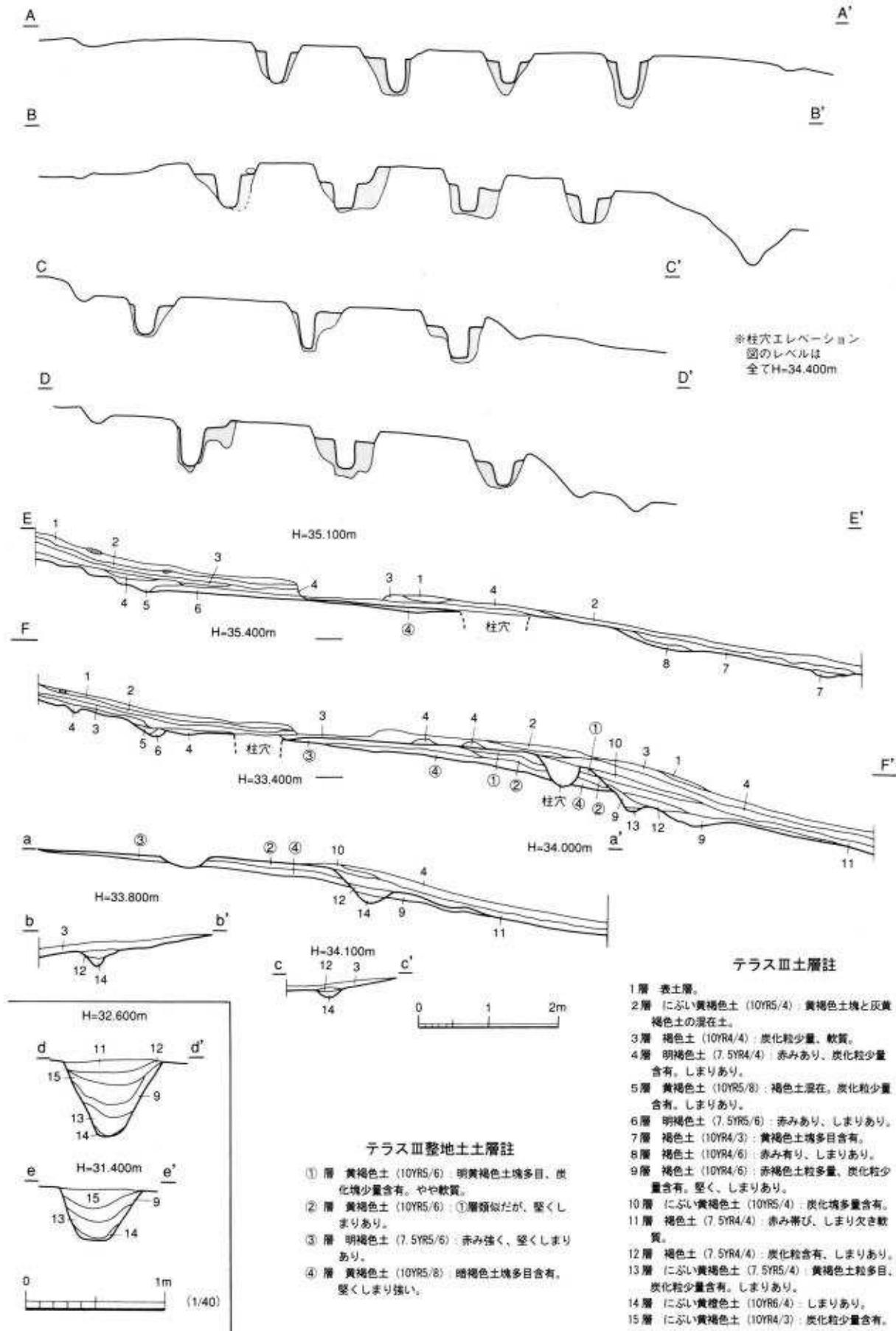
西440~490cmの長方形プランとなる。排水溝は、西側で細く浅いものの、南北側は幅40cm、深さ25cmのしっかりとしたものとなり、東側では幅100cm、深さ30~40cmの溝となる。また、北東側コーナーから谷側へ溝が分岐して3mほど伸びており、水が切れるようになっている。テラスII-2は上記の方形区画溝が埋められたもので、テラスIの北東側から伸びてくるテラスIIIの排水溝区画を併用しているものである。

《SB02》テラスII-1区内に建てられる掘立柱建物跡で、2間×3間の総柱建物。建物主軸は南北に主軸を持つが、西に7.5°振る。規模は桁行長500cm、梁行長290cm、柱間寸法は桁間で150~170cm、梁間で130~150cmを測る。柱穴は掘り方で径50~80cmの略円形。やや方形気味のものもある。柱痕は20cm径で80cmほどの深さをもつものもあり、しっかりと掘り込まれている。

《SB03》テラスII-2に建てられる掘立柱建物跡で、SB02と重複する建物である。SB02柱穴埋土を切ってSB03柱穴が掘られており、SB02の建替え後の建物と位置づけられる。2間×2間の総柱建物で、建物主軸はSB02同様、南北に主軸を持つが、西に9°と、SB02よりもやや西へ振る。規模は桁行長470cm、梁行長360cm、柱間寸法は桁間で230~240cm、梁間で170~190cmを測る。柱穴は掘り方で径50cm前後の略円形。柱痕は20cm径で60cmほどの深さを測る。



第225図 B遺跡II区SB01(テラスⅢ)平面図(1/80)、炉床・P11平面・断面図(1/40)



第226図 B遺跡Ⅱ区SB01（テラスⅢ）断面図（1/80、1/40）

### 3. テラスⅢ (SB01)

《テラスⅢの形態》テラスⅠの南東側に並行して築かれるテラスで、緩く9度程度で下る斜面の山側を10cmほど削り、谷側へ35cmほど盛土して、テラス面を形成している。整地盛土はテラスⅠと同様、版築はせず、地山粘土塊を下層で叩き締めただけのものである。盛土によって整地されたテラス面は方形で、谷側での比高差50cm程度。特に護岸のための石垣などは認められない。テラスⅠ同様、北東隅と南東隅に方形の浅いくぼみがあり、小テラス状となる。北東隅は100cm程度、南東隅は130cm程度のもので、盛土整地面から20cm程度下がる。小さく浅い窪みであるため、テラスⅠと全く同様のものではないが、同様の意図で掘られた可能性が高い。テラス外周を区画する溝は、上記の南東隅・北東隅の窪みに関係なく、長方形プランを呈す。テラスⅠの北東側から伸びてくる排水溝が当テラスの北西コーナーの排水溝へと連結しており、南東隅で分岐して南東方向の谷側斜面へと伸びている。テラスⅠからの雨水を建物外周の排水溝を通し、谷へと流す工夫が取られていたものである。なお、当テラスの西側排水溝の谷側にさらに排水溝が掘られており、一部二重となっている。排水溝は西側で最もしっかりと掘り込まれており、幅50cm、深さ15cm。南北辺では幅40cm、深さ5~10cmと浅くなる。東側では幅40cm、深さ10cm、外側の東側排水溝では幅50~60cm、深さ20cmとなる。上記排水溝に区画された中のテラス面は、南北980cm、東西600~560cmの長方形プラン。ただ、北西側、テラスⅠの階段部が連結される箇所のみは形が歪んでおり、当区画溝の掘削がテラスⅠの階段部と同時期ないしは以後であったことを物語る。

《SB01》テラスⅢ区画内には2間×3間の側柱掘立柱建物跡が1棟存在している。建物主軸は南北に持つが、西に14.5°振り、当建物群の中では最も西に主軸を振る建物である。規模は桁行長530cm、梁行長450cm、柱間寸法は桁間で170~180cm、梁間で220~240cmを測る。柱穴は掘り方で径80cm前後の隅丸方形。柱痕は30cm径で50~70cmほどの深さをもつ。当掘立柱建物跡の中央東寄りには70×90cmの楕円形プランをもつ深さ25cm程度の焼土や炭化材を廃棄した穴が存在する。その西側50cm程度のところには整地面が酸化被熱した炉床があり、建物の中央付近で煮炊行為か、加持祈禱などの仏教関連行為が行なわれていた可能性を持つ。

### 4. 遺物の出土・分布状況

遺物の内容や細かな説明については、次項を参照してほしいが、ここでは、遺物のほとんどを占める土器について、その出土量分布と用途別分布について述べることとする。まず、第227図だが、大まかな種別に分けた土器の出土量分布を示してある。出土量ではテラスⅠの小テラスⅠ内、テラスⅡの前面にあるE4a・E4cGr、テラスⅢ前面にあるE5a・E5c・E5dGrの3箇所がとくに多い。テラスⅢの階段部連結付近やテラスⅡとテラスⅢの土器集中箇所間の区域も100点以上出土しており、テラスⅢ前面集中箇所の東側もその流れ込みか、比較的多く出土している。いずれの集中箇所とも、食膳具主体の構成で、特にテラスⅠの小テラスⅠでの構成は食膳具が95%を占めている。ただ、通常の集中箇



第227図 B遺跡Ⅱ区グリッド別土器出土量構成図  
(各グリッドの右下数字は土器総数)

所では、食膳具 65~70%、煮炊具 25~30%、貯蔵具 5% 程度で構成され、その割合は全体構成比率とほぼ一致している。煮炊具を 40% 以上占める箇所はテラスⅢの階段部連結付近とテラスⅡ・Ⅲの土器集中間の区域にあり、特に前者の箇所では、SB01 内炉跡に近く、同建物内の煮炊きに伴う土器の可能性がある。また、貯蔵具を多く出土する箇所は、特にないのであるが、集中区縁辺の区域などで目立つ傾向があり、それは三彩釉陶器が出土量少ない区域からの出土であることと関連性をもつかもしれない。

次に、第 228 図の用途別分布であるが、灯明具としての使用比率が高い壺 A と椀類、転用硯としての使用比率が高い壺 B 蓋と盤 A、仏器的瓶・鉢類の 3 種で示した。ただ、上記 2 者の使用が伴うものはそのような痕跡のあるものに限らず、それに適した器種を全



第228図 B遺跡Ⅱ区グリッド別土器用途別出土量構成図

て含んだ数量である。全体的には先に示した土器集中箇所での出土が多いのに変りはなく、仏器的器種については貯蔵具類分布と同様の傾向となる。注目は灯明具使用器種と転用硯使用器種比較であり、両者割合で見てゆくと、食膳具割合の突出したテラスⅠの小テラスⅠ内では灯明具 9 に対し転用硯 1 の割合で構成される。同様に灯明具率の高い区域は土器廃棄量の多いテラスⅢの前面にあたる区域で、灯明具 8、転用硯 2 の割合となる。これが、テラスⅡの前面及びテラスⅡ・Ⅲ間の前面になると、灯明具 6、転用硯 4 程度の割合となり、廃棄器種に少なからず偏りがあることがわかった。仏教行為においては、加持祈祷と写経が主な活動であると言われており、灯明具は加持祈祷、転用硯は写経において、使用された容器と言うこととなる。そうなれば、上記の器種用途の偏りは、SB02・SB03 と SB01・SB04 の建物の性格を物語る可能性もあり、注目されるデータと言える。ただ、土器接合関係は、各土器集中箇所の中で接合する傾向が高く、廃棄行為が比較的短期に行なわれた可能性が高い。特定の建物からまとめて廃棄されたというより、比較的広い範囲で投げ捨てられた感じが強いのである。

### 第3項 出土した遺物

#### 1. 出土遺物の概要

須恵器・土師器を中心に、9世紀中葉前後の短期の遺物が出土している。須恵器・土師器以外では、刀子状の鉄製品 3 点と三彩釉陶器 1 点のみが出土するだけで、土製品や瓦、生産に伴うような遺物なども出土していない。遺物のほとんどを占める須恵器・土師器は、破片数で須恵器 2,619 点 (68.5%)、土師器 1,203 点 (31.5%) の計 3,822 点が出土している。通常の遺物箱で 15 箱程度であり、決して多い出土量とは言えないが、土器の復元率は高く、図化可能な個体数も多い。以下に、須恵器・土師器の器種構成について述べるが、破片数による集計と口縁部残存率の数値集計を行ない、比率を出したものである。土器の全量を器種分類した上で全てを集計しており、油煙痕の付く土器の割合は、付着する口縁部破片数により割り出している。なお、土器の時期については、田嶋

明人氏提示の北陸古代土器編年案（田嶋 1988）が北陸共通理解の時間軸と位置づけ可能なものであることから、田嶋編年案表記とする。ちなみに、当遺跡出土の土器はV1期～VI1期のものであり、V1期は9世紀前葉、V2期は9世紀中葉、VI1期は9世紀第3四半期に位置づけ可能である（望月 2002 の遺物凡例参照）。

## 2. 須恵器・土師器の器種構成

須恵器と土師器の器種構成については、次の表のとおりである。用途別にまとめると、食膳具が過半数を占め、破片数割合で70.1%、口縁部計測割合で90.7%となる。食膳具の中では須恵器が92%程度を占め、土師器は少ない。坏Aの比率が高いのが特徴で、土師器も加えれば、57.5%の高率を占める。油煙痕のある個体が多く、専用器種として使われていた可能性が高い。坏Aに次いで、盤Aと坏B蓋が15%以上で構成されており、この中では内面磨耗痕の顕著なものが多い。一部墨痕も残っており、転用硯として使われているものが目立つ。これについても、専用器種として使われていた可能性を持つ。煮炊き具では鍋の確認ができるおらず、短胴釜と長胴釜では構成される。破片数は多いが、個体数はさほど多いとは言えない。貯蔵具・鉢類では仏器的な器種が目立つ。鉄鉢や鉢B類、水瓶などの瓶類が確認でき、甕類は小甕を確認したに止まる。一般的集落または中核的集落などの器種構成とは明らかに異なっており、大きな特徴と位置づけられる。

須恵器器種構成表（上段は破片数構成表、下段は口縁部計測法による○/36 数値の構成表である。なお、種内率とは器種大別内での占有率）

器種名	坏B蓋	坏B身	坏E身	坏 A	盤 A	椀 A	鉢 A	鉢 E	小平瓶	水瓶	瓶 B	瓶 C	瓶 D	小甕
破片数	171	95	22	1672	489	17	16	39	3	14	17	36	22	6
種別計				2466 (94.2%)			55 (2.1%)				98 (3.7%)			
器種名	坏B蓋	坏B身	坏E身	坏 A	盤 A	椀 A	鉢 A	鉢 E	小平瓶	水瓶	瓶 B	瓶 C	瓶 D	小甕
口縁値	294	208	34	1030	350	0	26	16	0	0	36	3	0	0
種内率	15.3%	10.8%	1.8%	53.8%	18.3%	—	61.9%	38.1%	—	—	92.3%	7.7%	—	—
種別計				1916 (95.9%)			42 (2.1%)				39 (2.0%)			

土師器器種構成表（左表は破片数構成表、右表は口縁部計測法による○/36 数値の構成表である。）

器種名	坏 A	内黒椀	鉢 B	短胴釜	長胴釜	甕
破片数	170	45	74	396	482	36
種別計	215 (17.9%)	74(6.1%)		914 (76.0%)		

器種名	坏 A	内黒椀	鉢 B	短胴釜	長胴釜	甕
口縁値	126	25	23	51	52	5
種別計	151 (53.5%)	23(8.2%)		108 (38.3%)		

## 3. 須恵器・土師器の胎土特徴と構成

須恵器と土師器の胎土分類については、これまでの肉眼観察と蛍光X線分析によるクロスチェックにより、加賀地域の土器胎土特徴による産地同定がある程度可能な段階に来ている。本来、複数の人間により、判断を下すべきだが、整理担当者である筆者の独断で、図化した資料のみ産地同定を試みた。基本的に須恵器は能美窯跡群産と南加賀窯跡群産の2種あり、土師器には観察表凡例で示したとおり、4種類がある。土師器についてはA・B・Dを能美窯跡群産及び能美丘陵周辺の地元産と考え、Cのみ南加賀窯跡群産とした。

須恵器全体（資料対象97点）では能美窯産が60.8%、南加賀窯産が39.2%で構成される。これを器種別に直すと、坏Bが能美窯産比率高めに出るが、食膳具は概ね能美窯産62%程度、南加賀窯産38%で構成される。能美窯跡群内に位置する遺跡であるにも関わらず、これだけの南加賀窯産が持ち込まれているのは注目される。特に、瓶類や鉢類の器種に限れば、能美窯産28.6%、南加賀窯産71.4%と、比率が逆転している。また、時期別構成ではV1期で能美65%、南加賀35%だったのが、V2期・VI1期では能美61%、南加賀39%と、南加賀窯産が微増している。能美窯跡群の停滞・衰退に伴うものといえるが、それでもVI1期までは主体的に供給しているものであり、この時期までの生産の持続を示す資料として重要な意味を持つ。土師器については、南加賀窯産と思われるものが確認できたのは、内黒椀のみであり、他の器種は能美窯跡群産か地元産のものであろうと理解する。特に、灯明具として使われている土師器小型坏は、通常の集落又は生産地においても確認できないものであり、特注品の感が強い。

## 4. 須恵器・土師器の使用痕について

これまで何度も何度か触れてきたように、灯明具として使われたためであろう油煙痕跡と転用硯としての使用が予

想される磨耗痕跡伴う墨痕が、多くの須恵器・土師器において確認される。これ以外にも、単なる磨耗痕跡や使用に伴う欠けの痕跡、火があたったことに伴う煤の付着など器面には多々痕跡が残されている。以下に、項目別に述べてゆきたい。

《油煙痕》灯明具使用に伴う灯芯部のタール付着痕跡である。薄い部分は煤との識別が難しいが、タール状にこびりついているものを上げている。口縁部内面を中心にポイント的に付着する場合が多いが、帯状に連なるようなものが数点出ており、このようなものは使用回数の多さを物語るものであろう。また、内面底部近くまで広範囲に付くものも一定量存在している。器種は須恵器坏A・坏B身・盤A、土師器坏A・内黒椀で確認されるが、須恵器・土師器とも坏Aが圧倒的に多い。口縁部破片全数における油煙痕付着点数でその割合を示したが、口縁部に点的に付着するものが多いことから、個体数の実数割合としては、1.5倍はあったと見ている。図示した坏Aの油煙痕率から見ても妥当な数字と考えている。器種別では、須恵器で坏Aが最も多く36%、次いで坏B身の8%、盤Aの4%となる。土師器では坏Aが49%、内黒椀が36%となり、かなり高い確率で確認できている。先に示したとおり、坏Aと土師器椀が専用器種として選択使用されていたと言える。坏Aでの内面磨耗痕の少なさはそれを物語る。当遺跡においては、通常の飲食容器として日常使用されるものは限られ、専ら灯明用容器として持ち込まれたものと考える。特に、土師器小型坏は専用に製作された土器と言えよう。ほぼ同じ器形を持つ須恵器が存在しており、回転ヘラ切りによる成形であることを考えれば、能美窯内の生産が有力である。なお、灯明具使用の時期であるが、特に限られておらず、全時期において見られるものである。

《煤痕跡》煤痕跡には、油煙痕付きの容器と近い形で、中で火を焚いた土器又は火の中にくべられた土器という位置づけと煮炊きに使われ、煤がついた土器の2者が存在する。

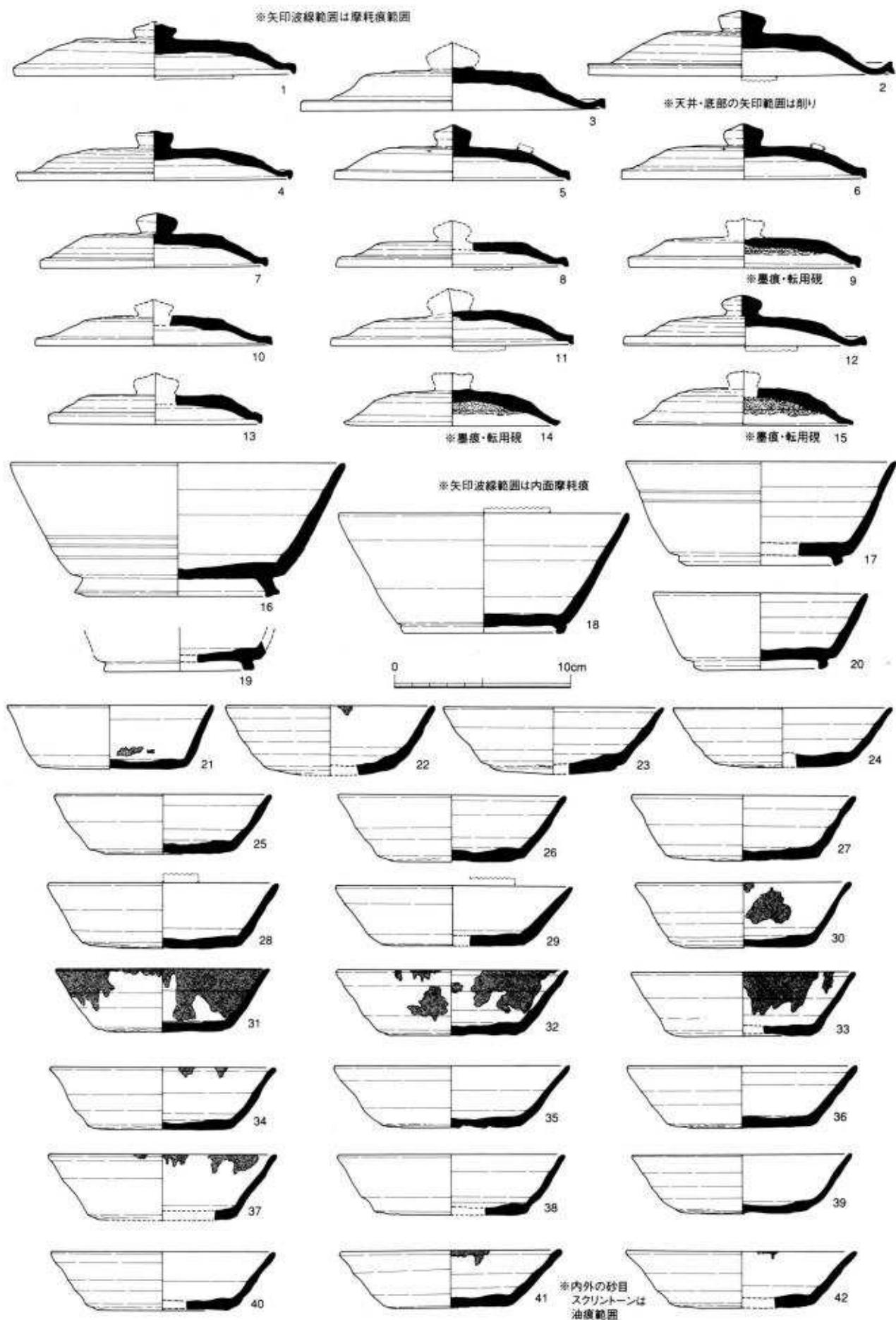
前者については須恵器坏Aに多く見られる。外面に薄く付着するものが多く、油分の多い煤の感じがある。明確な使用の場面がイメージできていないが、宗教活動や祭祀行為などに伴う火を使う場面で、付着したものだろう。また、直接、灯明具の煤が付いたものも見られる。

後者については鍋・釜の加熱調理に伴う煤の付着痕跡で、通常の集落遺跡では頻繁に見られる痕跡である。しかしながら、当遺跡の煮炊具類を見ると、煤痕跡の付くものは少なく、特に短胴釜については、著しくその量は少ない。長胴釜に定量、煤付きのものが見られるが、全体的には低い率と言えるだろう。煮炊き具の出土量自体少ないと、その中でも煮炊き使用のものが少ない傾向は特徴として上げられるものである。

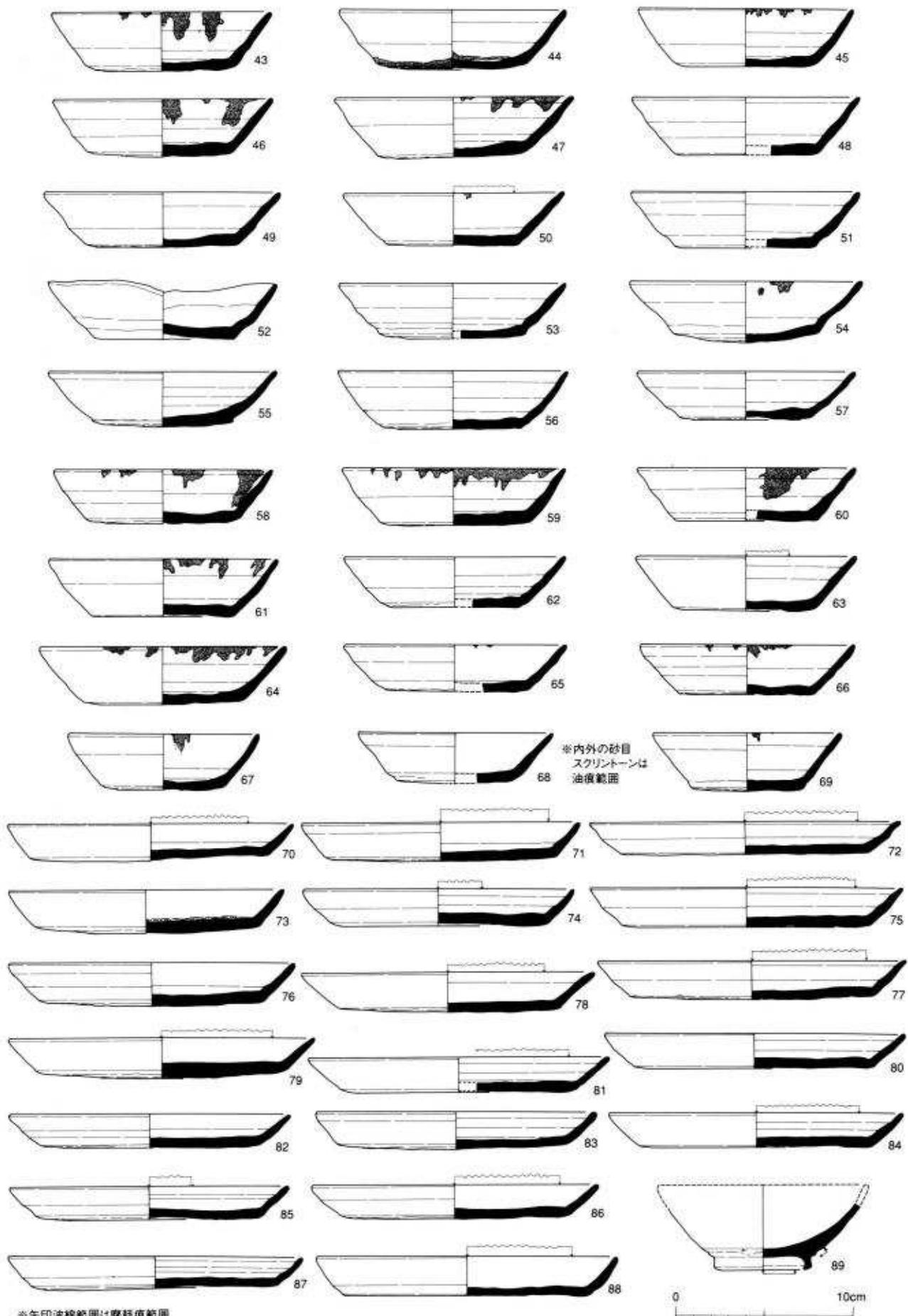
《墨痕と墨擦り行為に伴う磨耗痕跡》平滑な面に墨痕が残り、かつ平滑面の磨耗が確認できるものを墨擦り痕跡と認定している。定型硯以外は転用硯として位置づけられ、坏B蓋や盤A、坏B身などが使われていることが多い。転用硯と認定する際に、墨痕と磨耗痕の条件が必要で、墨の観察は器面遺存の墨粒を拡大ルーペ（×50倍）で観察することが有効とされている（小田2003）。しかしながら、須恵器胎土中に黒色の粒子が入っている場合、墨粒との識別が難しく、当資料では判断しかねた。また、転用硯として使用されたことが墨痕や磨耗痕から明白な個体でも、一部の破片のみ完全に墨痕の消えているものがあった。埋もれている土層やその後の行為によって、墨が消えてしまうことも十分予想できるものであり、墨痕は転用硯の絶対必要な条件にはならないものと理解する。内底面ないしは内天井面の広い範囲で顕著な磨耗が確認できるものを積極的に転用硯と位置づけたい。以上の理解で、図化した個体を見ると、坏B身の外底面を使用する転用硯はなく、坏B蓋と盤Aに限られる。坏B蓋では15点中8点、盤Aでは19点中12点の割合で、内天・内底の広い範囲で磨耗痕跡を確認できた。積極的に転用硯としての位置づけをしておきたい。

## 5. 須恵器・土師器の時期

遺物概要でも述べたとおり、当遺跡から出土する古代の遺物は、北陸古代土器編年V1期からV11期までに位置づけられる。図化した土器の個別の時期については、観察表で示してあるので、参照していただきたいが、あくまでも筆者の独断で時期決定したものである。図化資料の割合で見ると、食膳具ではV1期が24.5%、V2期が51%、V11期が24.5%で構成され、V2期が過半数を占める。建物の建替え時期を示すような遺物の出方をしておらず、重複する2軒の掘立柱建物柱穴遺物の時期についても、逆転現象が見えるなど、混在しているが、建替え時期は、概ねV2期とするのが妥当だろう。また、食膳具の時期に比べ、貯蔵具や鉢類はV1期の割合が高く、煮炊具についても古手に中心を持つ特徴がある。消耗品的に廃棄される食膳具に対し、貯蔵具や煮炊具は買い換えることが少なかったのだろう。特に煮炊具は煮炊き用にあまり使われなかつたことを物語る。

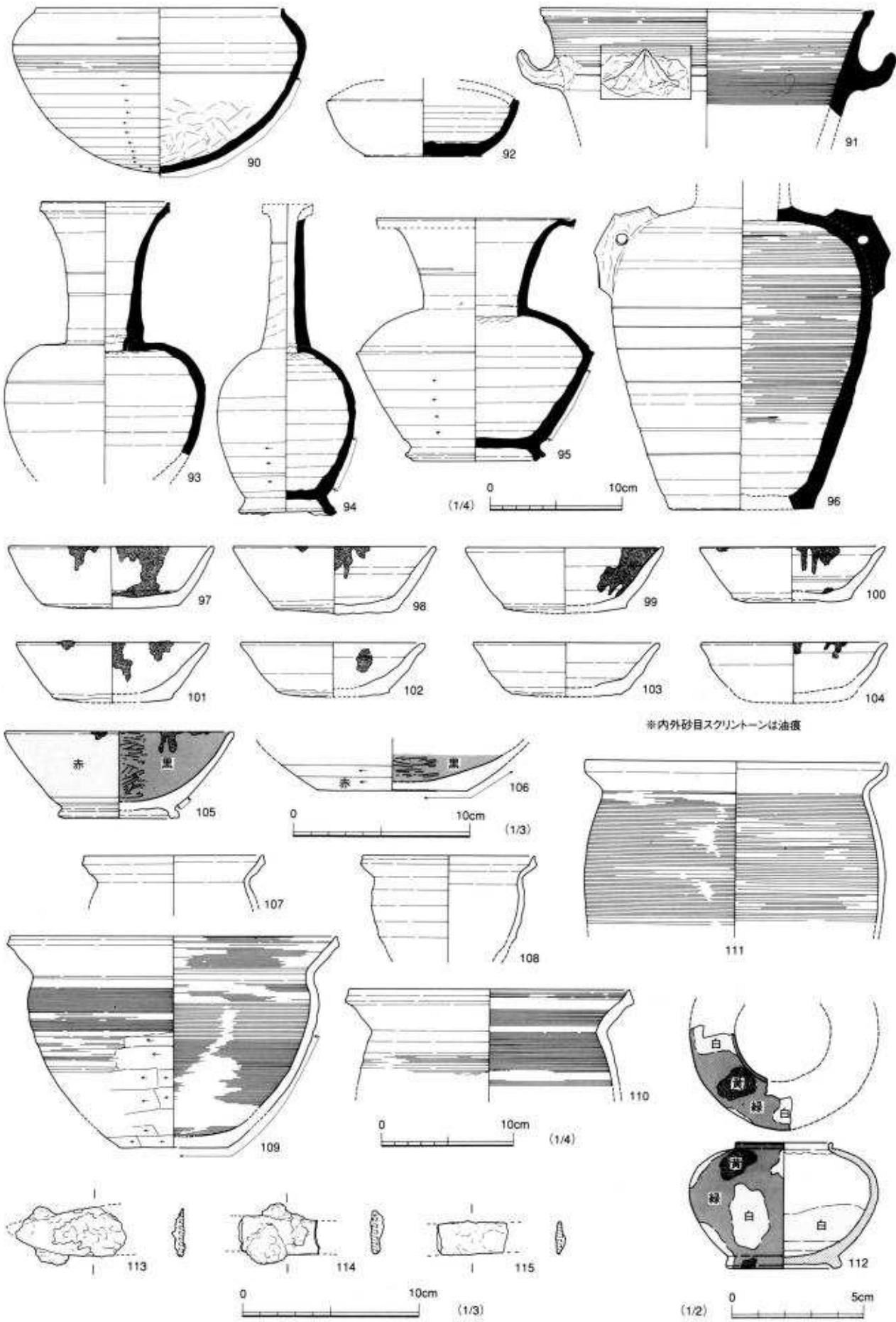


第229図 B遺跡Ⅱ区宗教関連遺跡出土遺物1 (1/3、すべて須恵器)



※矢印波線範囲は摩耗痕範囲

第230図 B遺跡Ⅱ区宗教関連遺跡出土遺物2 (1/3、すべて須恵器)

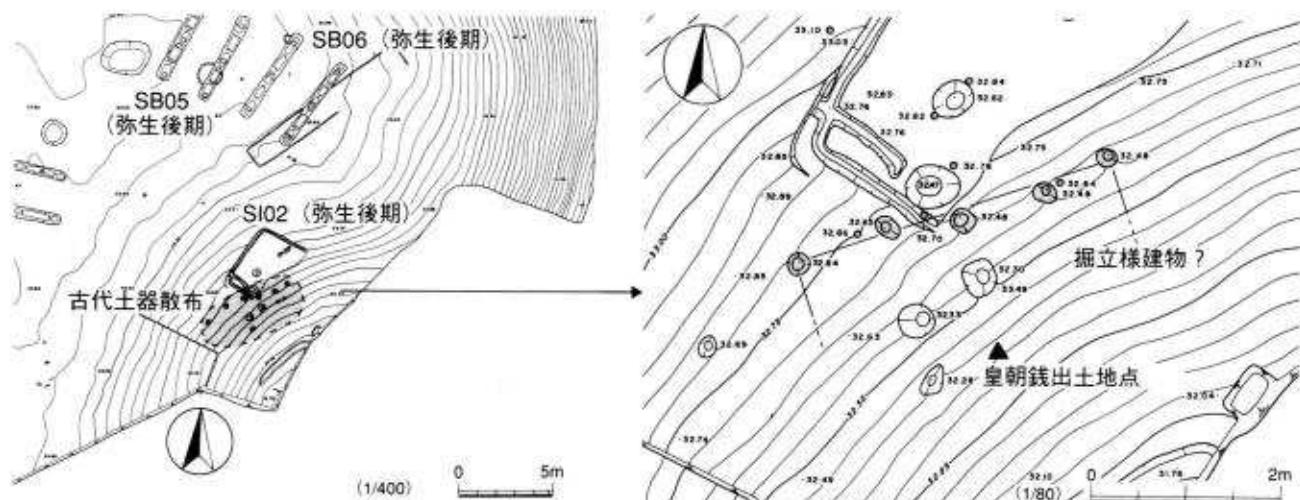


第231図 B遺跡Ⅱ区宗教関連遺跡出土遺物 3 (90~96:1/4・須恵器、97~106:1/3・土師器、107~111:1/4・土師器、112:1/2・施釉陶器、113~115:1/3・鉄器)

## 第3節 C遺跡の遺構と遺物

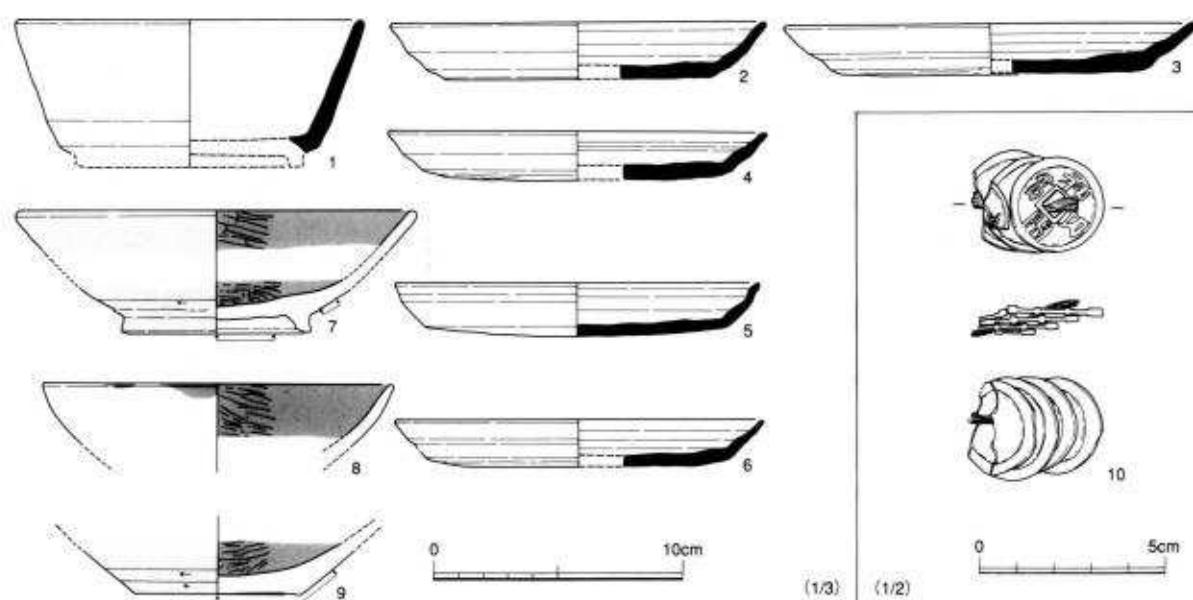
### 第1項 遺跡の概要と遺構について

C遺跡はB遺跡の東側に隣接する尾根突端部に位置する。主に弥生時代後期から古墳時代前期の建物遺構や墳丘墓が検出されており、尾根頂上を中心に放射状に遺構が分布している。古代の遺跡は、尾根頂上から南東側のやや緩い斜面上、弥生時代後期の竪穴住居跡(SI02)の下方斜面に分布する。遺構は、主に遺物廃棄遺構であり、明確な建物遺構はない。ただ、東西棟に5本の柱穴が並んでおり、掘立柱建物跡の可能性を持つ。対応する柱列を確認できていないので、径30cm程度の小規模な柱穴で柱穴列がやや歪むことから、建物遺構であると明言できないが、しっかり深い柱穴も数本存在することから、簡易な建物遺構が存在していた可能性は高い。柱筋は東から北へ18.5°振り、等高線に沿うようにして並ぶ。遺物廃棄層は、この柱列の斜面下方にあたり、須恵器・土師器が集中して出土している。この廃棄層からは土器とともに、皇朝銭5枚以上を紐で束ねたものが出土している。土器については、尾根部ないしは簡易な建物から廃棄された感じを受けるが、皇朝銭については埋納されたものと予想している。確認できなかったが、ピットを伴っていた可能性もある。



第232図 C遺跡古代遺構の位置と平面図

### 第2項 出土遺物



第233図 C遺跡出土古代遺物 (1~9:1/3, 10:1/2)

C 遺跡から出土する遺物は、皇朝錢を束ねたものと須恵器と土師器である。遺物箱で 1 箱弱程度であり、さほど多いという感じではない。須恵器は図示したものを含め、壺 B 身 2 個体、壺 A1 個体、盤 A12 個体、壺瓶片 1 点、甕片 1 点が出土。土師器は全て食膳具で内面黒色椀 7 個体が出土している。須恵器は北陸古代土器編年 V2 期から VI1 期に位置づけられ、土師器内黒椀は全て VI1 期のものである。B 遺跡に比べてやや新しい時期に中心をもつが、B 遺跡の存続時期幅内であり、関連する宗教行為を行なう場所であったと予想している。ただ、B 遺跡のような、油煙痕をもつ壺 A は確認されず、明確に転用硯と判断されるものも確認されないなど、具体的な宗教活動の痕跡を看取できない。なお、須恵器に 1 点のみ末窯産の壺 B 身が存在しており、注目される。

また、遺物廃棄層から出土した皇朝錢は、麻状の纖維の粗い紐で束ねた皇朝錢を並べ置くように埋納したものである。皇朝錢は 5 枚が斜めにずれるようにして重なり癒着した状態で出土した。最も上のものは「神功開寶」だが、2 枚目以降は癒着の為、不明である。皇朝錢を埋納する行為は大型建物の地鎮祭祀に伴って行なわれる事例が多いが、当資料については何らかの宗教行為に関連するものと予想している。

《当遺跡の評価》C 遺跡の評価については、遺跡立地や出土土器の時期、「神功開寶」の埋納などから、冒頭でも述べてきたように、B 遺跡 II 区と関連する宗教活動を行なった場と予想している。ただ、油煙痕付きの壺 A 出土はなく、小屋状の簡易建物の性格についても不明な点が多い。宗教活動といつても、漠然としており、不明な点が多く、今後の課題としておく。

## 第 4 節 D 遺跡の遺構と遺物

### 第 1 項 遺跡の概要と検出した遺構

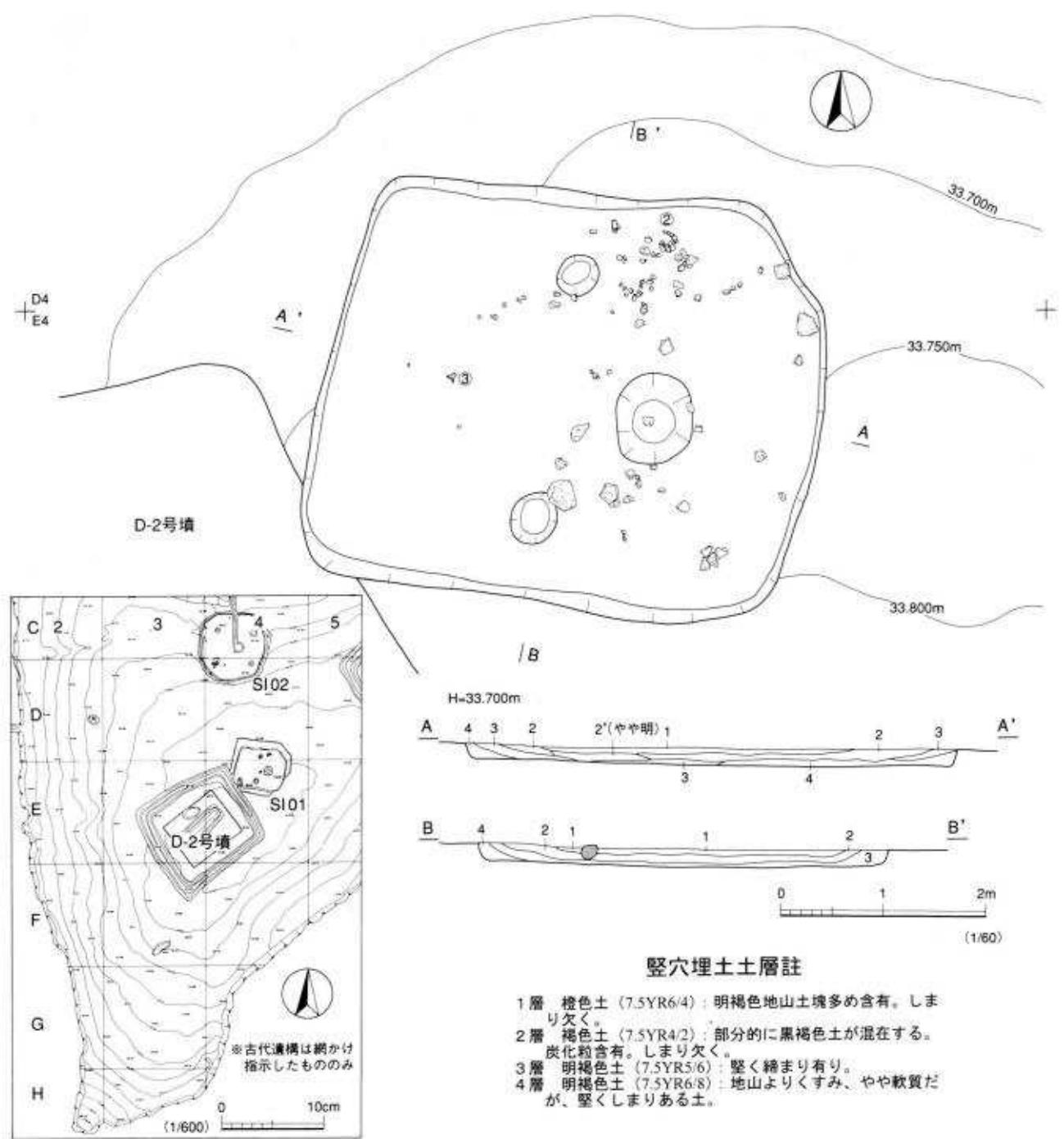
D 遺跡は C 遺跡の東側隣接の尾根上に分布する遺跡で、弥生時代後期の竪穴住居跡と古墳時代前期の墳丘墓とが主に分布している。古代の遺構は、尾根頂上部、D-2 号墳と重複して掘られる竪穴住居跡 1 軒のみであり、他の遺構は確認されていない。

竪穴住居 (SI01) は東西 484 cm、南北 404 cm の隅丸長方形プランを呈するもので、竪穴の深さは 20 cm 程度ある。南北中軸上に柱穴状の径 40 cm 程度のピットが 2 本並んでおり、10~20 cm 程度の深さであり、主柱穴かどうか判断しにくい。また、ピット並びの東側に径 80~90 cm、深さ 15 cm の浅いピットが存在する。上層に焼土塊を充填させるもので、炉床の可能性を持つ。周辺には破碎したような礫が分布し、土器も礫とともに出土する。

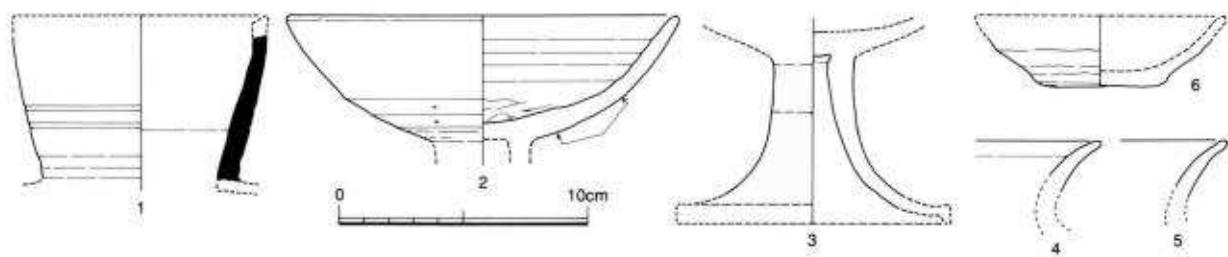
### 第 2 項 出土遺物

D 遺跡より出土する古代の遺物は少なく、SI01 を中心に出土している。図示した須恵器と土師器は SI01 出土のみだが、周辺包含層からも須恵器平瓶や甕の破片が出土している。ほとんどは、ロクロ土師器高壺 2・3 に見るような北陸古代土器編年 II2~II3 期、7 世紀後葉~8 世紀初頭に位置づけられるもので、須恵器平瓶や包含層出土の須恵器も同時期のものと考えている。5・6 の「く」の字外反口縁部をもつ土師器長胴釜についても、同時期と見てよいだろう。ただし、6 の土師器小皿のみは古代末のもので、北陸古代土器編年 VII2 期か中世 I 期に位置づけられるものと考えている。同様の糸切り小皿が数点、当竪穴住居内から出土しており、これらについても同時期のものと考えている。SI01 内に重複する 11 世紀頃のピットや土坑等に伴う遺物と判断されよう。

《当遺跡の評価》竪穴住居 SI01 出土土器には、上記出土遺物の他に弥生時代後期の土器も出土している。隣接する SI02 とほぼ同時期のもので、甕や壺などやまとまった量で、古代 II 期の出土量に拮抗している。ただ、床面出土の土器は古代 II 期の土器であることから、SI01 内の弥生期の土器は混入と調査担当者は判断している。しかしながら、当竪穴住居形態を見れば、弥生時代に伴う可能性も捨てきれず、現在のところはその帰属時期を保留とすべきかもしれない。仮に、当住居が古代の遺構だとすれば、どのような性格の遺跡であったのだろうか。能美窯跡群領域内である点や隣接丘陵部遺跡に同時期のものが存在しないことなどから考えれば、丘陵部での手工業生産に関連する遺跡、例えば土器生産や「袖」などの木器生産に伴う工房などの可能性も考えられる。時期が 7 世紀後葉である点も興味深い点である。



第234図 D遺跡古代遺構の位置(1/600)とSI01平面・断面図(1/60)



第235図 D遺跡SI01出土土器 (1/3)

## 第5節 I 遺跡の須恵器生産関連遺構と遺物

### 第1項 遺跡の概要と調査方法

《概要》第1節で述べたように、I遺跡は能美窯跡群内に属する須恵器窯跡である。能美窯跡群の辰口群と小松・寺井群とを分ける鍋谷川流域周辺に位置する窯跡で、その流域から北に入り込む支谷の北側斜面に立地する（八里向山支群）。当支谷に面して営まれる須恵器窯はI遺跡1基のみであるが、支谷の北東側には北陸古代土器編年IV1～IV2古期に営まれた和氣峠山支群（複数基）が存在する。当遺跡とほぼ同時期の窯であり、I遺跡が派生支群的な性格を持つ窯跡だった可能性を持つ。

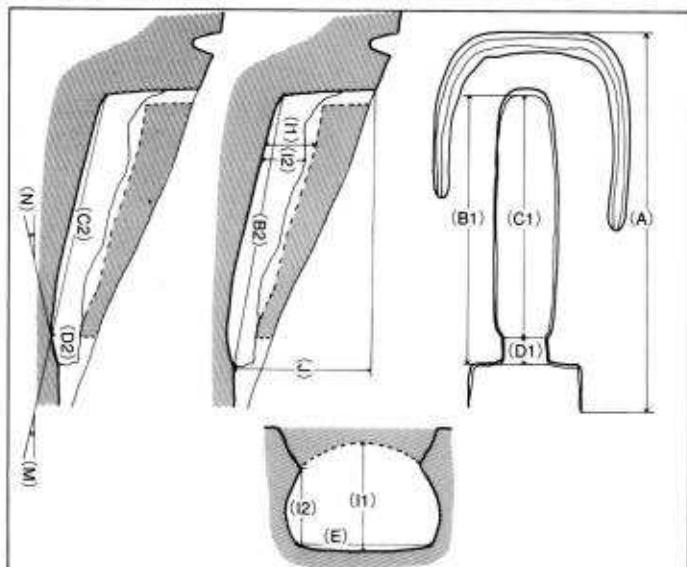
《調査方法》当遺跡は試掘調査段階では確認されなかった窯跡で、取り付け道路工事に伴う法面掘削中に検出された遺跡である。もともとの地形が急斜面であったのと灰原の形成自体少なかったため、窯体下方斜面上には灰原がほとんど遺存していなかったものであり、前庭部下方付近が工事で崖面露出した状態であっても、灰層の検出は極めて薄いものであった。このような状況であったため、調査対象は前庭部より奥の窯体部分が主であり、灰原遺物として取り上げたものはなかった。灰原の存在する谷部は今回の調査対象から外れていたこともあるが、窯体の調査所見からは、灰原の形成自体少なかった窯跡であると理解している。調査で出土した遺物は、前庭部、焚口から奥壁までの窯体内、窯の背面（窯背部）に掘られた逆「U」字形排水溝からのものであり、窯体主軸にあわせて土層断面ラインを設定・区割して取り上げした。なお、遺物には窯体部位と出土層位を明記し、床面遺物は現位置で残して、出土状況を記録した。多くは窯の崩落土内と床面直上からの出土で、須恵器が埋土上層に含まれることはほとんどない。窯内の記録は土層断面図と平面図、床面状況等、手実測で行い、床面遺物出土状況のみはデジタルカメラ写真を図に投影した。床は地山1枚のみで、修復やかさ上げなどは確認できなかった。

### 第2項 検出された遺構

#### 1. 窯体名称と計測方法

筆者は以前、須恵器窯構造名称や部位名称について、用語整理したことがあり、今回報告の須恵器窯跡の記述に関しても、その筆者分類案（望月1999b）に基づく。それによれば、地下掘り抜き式構造の窖窯で、窯背部に逆U字状の排水溝をもつものとなる。窯体水平長786cm、実長では832cmを測る中から大クラス規模の窯である。以下に、窯体構造について説明するが、その前に、窯体寸法の計測部位と計測方法について、凡例を示しておく。

窯跡全長（A）	前庭部土坑から窯体最奥部位または窯背部施設までの水平距離
窯体長（B）	焚口床端から奥壁・排煙口・窯尻床端までの斜距離と水平距離
焼成部長（C）	焼成部境から奥壁・排煙口までの長さ。方法は窯体長に準ずる
燃焼部長（D）	焚口から焼成部境までの長さ。方法は窯体長に準ずる
最大幅（E）	焼成部での窯体最大幅を床面で水平計測した長さ
焚口幅（F）	焚口の幅を床面で水平計測した長さ
焼成境幅（G）	焼成部境の幅を床面で水平計測した長さ
奥壁幅（H）	奥壁の幅。床面水平計測。排煙口・窯尻の場合の計測は明記
窯最大高（I）	焼成部の天井高復元可能な部位での垂直高ないしは最高構築高
窯比高差（J）	煙道端・排煙口端・窯尻床面高-焚口床面高
窯体面積（K）	焚口から奥壁・排煙口・窯尻までの窯体内全床面積
焼成面積（L）	焼成部境から奥壁・排煙口・窯尻までの床面積
焼成床傾斜（M）	焼成部境から奥壁・排煙口までの床面平均傾斜角
燃焼床傾斜（N）	焚口端から焼成部境までの床面平均傾斜角



第236図 須恵器窯跡計測部位模式図

#### 2. 須恵器窯跡の構造特徴

須恵器窯跡の立地する斜面は25度前後の傾斜地で、谷部緩斜面地から約8m程度上がった箇所から前庭部を掘り込んでいる。窯背部の排水溝で標高34.0m、前庭部末端で28.5mであり、窯跡施設の比高差は5.5mを測る。

窯体は等高線にはば直交するように前庭部・焚口から掘り込まれ、焚口から奥へ 200 cm のところで主軸を 12° 西へ振っている。つまり、焚口から屈曲部までの主軸 S—10°—W が、屈曲部から奥壁まで S—22°—W と、右にずれる形となっている。当窯の場合、排煙口が小さいため、掘削は前庭部方向からのみと予想され、窯の軸が途中でずれるのは、当窯の掘削地盤に関連するかもしれない。地盤は軟質の土に礫や軟岩の混じる地下水の通る地層であり、酸化して赤褐色を帯びる。全体的に脆く、焼いても縮まらない土である。窯体平面プランは奥がやや丸くなる胴の張らないすん胴形で、奥壁が直立する構造のものである。以下に各部位の構造について説明するが、詳細な窯跡寸法は以下の計測表を参照いただきたい。

#### a. 排煙施設・奥壁及び窯背部施設

奥壁はほぼ直立するが、床面近くでややオーバーハングしており、排煙口が奥壁際で開くのではなく、やや手前側に開口するものと予想する。奥壁床から排煙口レベルまでは 150 cm しかなく、長い煙道が付く構造にならないが、奥壁のオーバーハングを見れば、上部開口型の排煙口構造ではなく、30~40 cm 程度の短い煙道が付くものと理解する。焼成部上位の床面急傾斜に伴って、煙道短縮した形態のものである。

窯背部の排水溝は窯の排煙口が開口したと予想される箇所から斜面上方へ 100 cm 弱間隔をおいて掘り込まれている。逆 U 字形に窯を取り囲むように両側へ伸び、東側では標高 33.5 m 付近で途切れるが、西側では窯体の燃焼部付近まで伸びる。溝の形態は、山側にあたる部分で「V」字形に深く掘り込んでいるものの（溝上端 40 cm、下端 20 cm、深さ 80 cm）、標高 33.5 m 付近では V 字形掘り込みはなくなり、徐々に浅い幅広溝となる（溝の底が低いステップ状のテラスを形成しており、連続する土坑状にも見える）。東側の溝がこの付近で途切れるのは排水溝の機能はこの付近までであったことを示す。西側の溝が窯体の前庭部方向へと伸びていることを考え合わせれば、ステップ状溝は作業道的な役割であったと言えるだろう。排煙口の閉塞や炎調整に必要だったものといえる。

#### b. 焼成部構造

焼成部は下位（焼成部境から奥へ 180 cm の範囲）で還元状態の床が見られるが、それより奥は半還元状態か酸化状態の被熱で、特に奥壁付近は全くの酸化状態の被熱となっている。被熱層は全体的に薄く、灰原の形成が少なかったことも含め、操業回数は極めて少なかったものと予想している。特に、窯内出土の取り残し製品と思われる一群が酸化生焼けである点から、最終操業では大半が還元せずに、窯内に取り残されたものだろう。築窯地盤などの要因で、早期に廃絶された窯と考えられる。

焼成部側壁は、やや床面より被熱度合いが強いが、それでも焼成部上位は酸化状態である。壁の立ち上がりが内傾気味となっており、窯体断面は下位から上位まで、やや先端の丸いおむすび状の形を呈している。天井高は、焼成部中位で最も高く、155 cm 程度を測るが、下位と奥壁近くでは 120 cm 程度に絞り込んでいる。

床面は地山のままで、焼成部中位（焼成境から奥へ 250 cm 付近の地点から奥の区域）から焼成部上位までの区域で置台石設置のくぼみが確認される。焼成部中位では側壁際を中心に、焼成部上位では全面を使ってランダムに据えられている。石の遺存するものがあり、拳大の河原石を使用している。また、置台石の近くに甕胴部片の出土する箇所があり、棚板状に使われていた様子が伺われる。置台設置は焼成部境から奥へ 530 cm 付近で終わり、それから奥壁までは床面を段状に掘り込んで対応している。あまりしっかりした段ではないが、4 段のテラス面を作っており、テラス面の幅は 5~10 cm と狭い。床面傾斜が増すにつれ、置台石設置、床面段掘りというように、小型製品焼成用の床面にしていったものと言える。焼成部中位までの置台設置の仕方を見れば、中位以下では甕などの大型製品を主軸上に並べる窯詰め方法がとられていたと予想される。

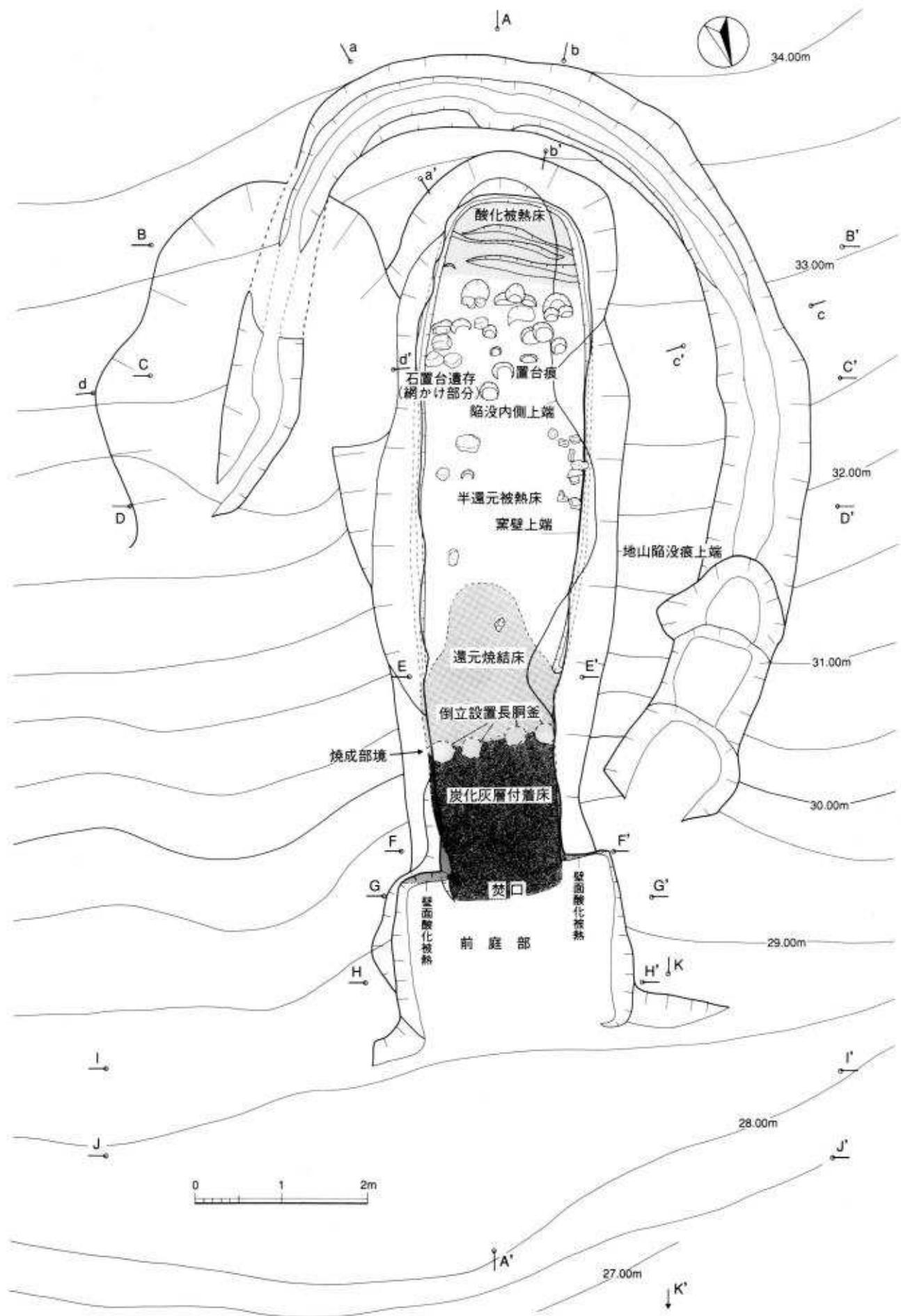
焼成部境から奥へ 70 cm の箇所から奥壁まで壁際を窯内壁周溝が巡る。溝幅 12~15 cm、深さ 5~10 cm で、蓋の痕跡はないが、溝底の被熱は弱い。窯内の途中で溝が切れていることを考えれば、排水のためと考えるのは難しいであろう。沸いてくる地下水を抜くためとも考えられるが、除湿などの機能を有していたものだろう。

#### c. 焼成部境施設と燃焼部構造

焼成部境の幅が 146 cm と、焚口幅よりも広く、平面形に関してはほとんど絞り込みを持たない形態だが、ちょ

A: 1160 cm	B1 水平長: 786 cm	B2 実長: 832 cm	C1 水平長: 624 cm	C2 実長: 708 cm	D1 水平長: 156 cm
D2 実長: 150 cm	E: 204 cm	F: 130 cm	G: 146 cm	H: 140 cm	I2 焼成中位: 155 cm
J: 478 cm	K: 87.25 m <sup>2</sup>	L: 85.85 m <sup>2</sup>	M: 29.5° (下位 11° → 中位 24.5° → 上位 42°)	N: -3.5°	

須恵器窯跡計測表（計測値は前掲計測凡例表に基づく）

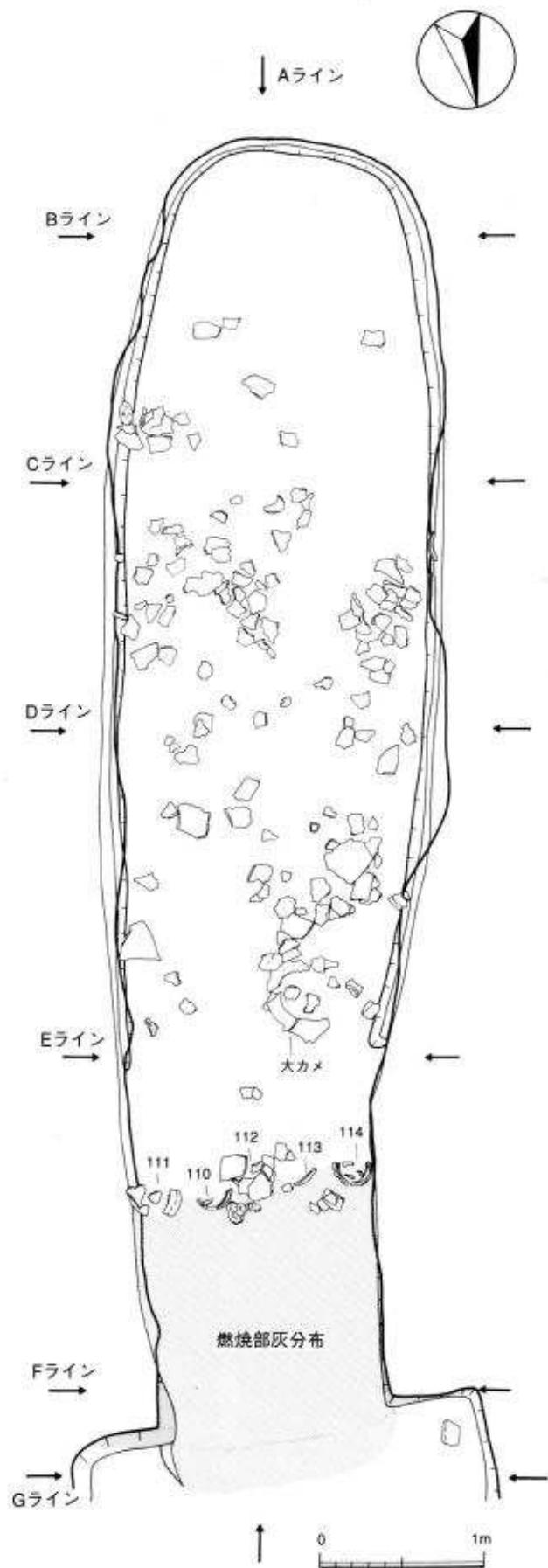


第237図 I 遺跡須恵器窯跡平面図 (1/60)

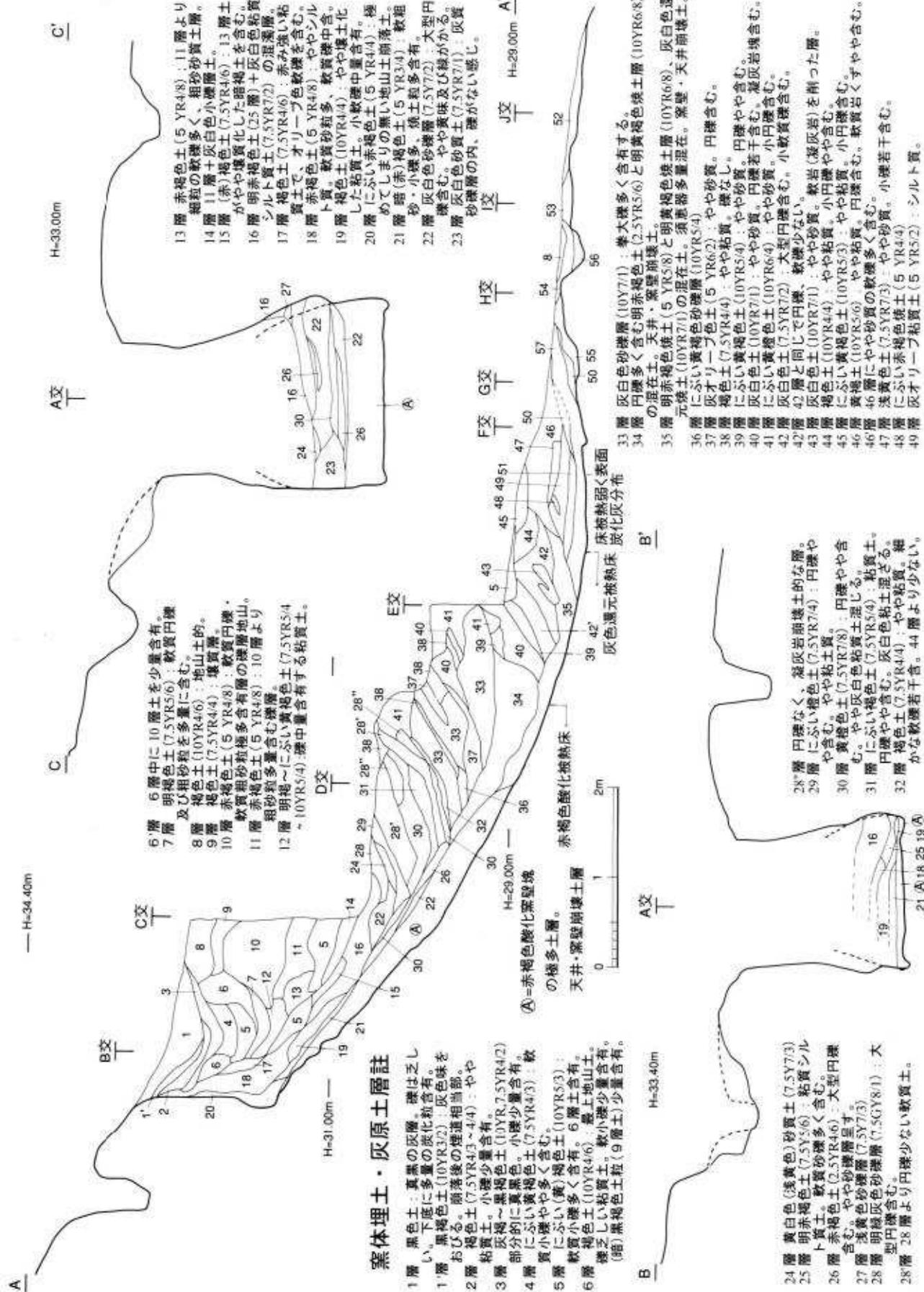
うどこの部分に還元焰に焼けた長胴釜4個体が一定間隔で倒立設置されており、それを境に床面・側壁面の被熱状態、側壁立ち上がり形状などが異なる。長胴釜は3/4程度の縦に割れた半欠け破片で、長胴釜外面を燃焼部側に、内面を焼成部側に向くように倒立設置する。個体同士の間隔は10~15cm程度空いており、壊れた破片がまわりに落ち込んでいる。窯の最終操業時に、焼成部境に固定されていたもので、焼成部境の機能として重要な意味がこめられていたものと予想される。その役割に関しては、燃焼部側に炭化した黒色灰が付着する様子から見て、薪材のオキを止める働きと炎の圧力を高める為の焼成部境での絞込みが主な機能であったと考えているが、ただ単に燃焼部と焼成部とを明確に分ける役割だったのかもしれない。東海猿投窯で出現してくる分焰柱とは全く異なるが、初期の取り外し式の分焰棒に類似した機能をもっていた可能性がある。

燃焼部の床面には炭化灰層が存在し、それを取り除くと、黒色に炭化した床面となる。炭化被熱は表面だけで、地山床は黄褐色に還元し、被熱層は比較的厚い。この箇所で通常見られる舟底状ピットは確認されず、それは舟底状ピットの機能を裏付ける資料となる可能性がある。舟底状ピットは大型製品の窯出しや窯入れの際に天井高確保の目的で床面を掘り窪めたという理解と窯内に湿気があがることを防止する防湿機能という理解がされている。前者の理由において必要としなかったのは、焼成部境の絞込みが弱い窯であったこと、後者の理由においては礫層という築窯地盤が舟底状ピット掘削の必要性をなくした可能性がある。また、操業回数が極度に少ない窯では舟底状ピット掘削が行われていないという、全国的な傾向においても、合致しており、舟底状ピット掘削を必要としなかった条件の窯という位置づけができる。

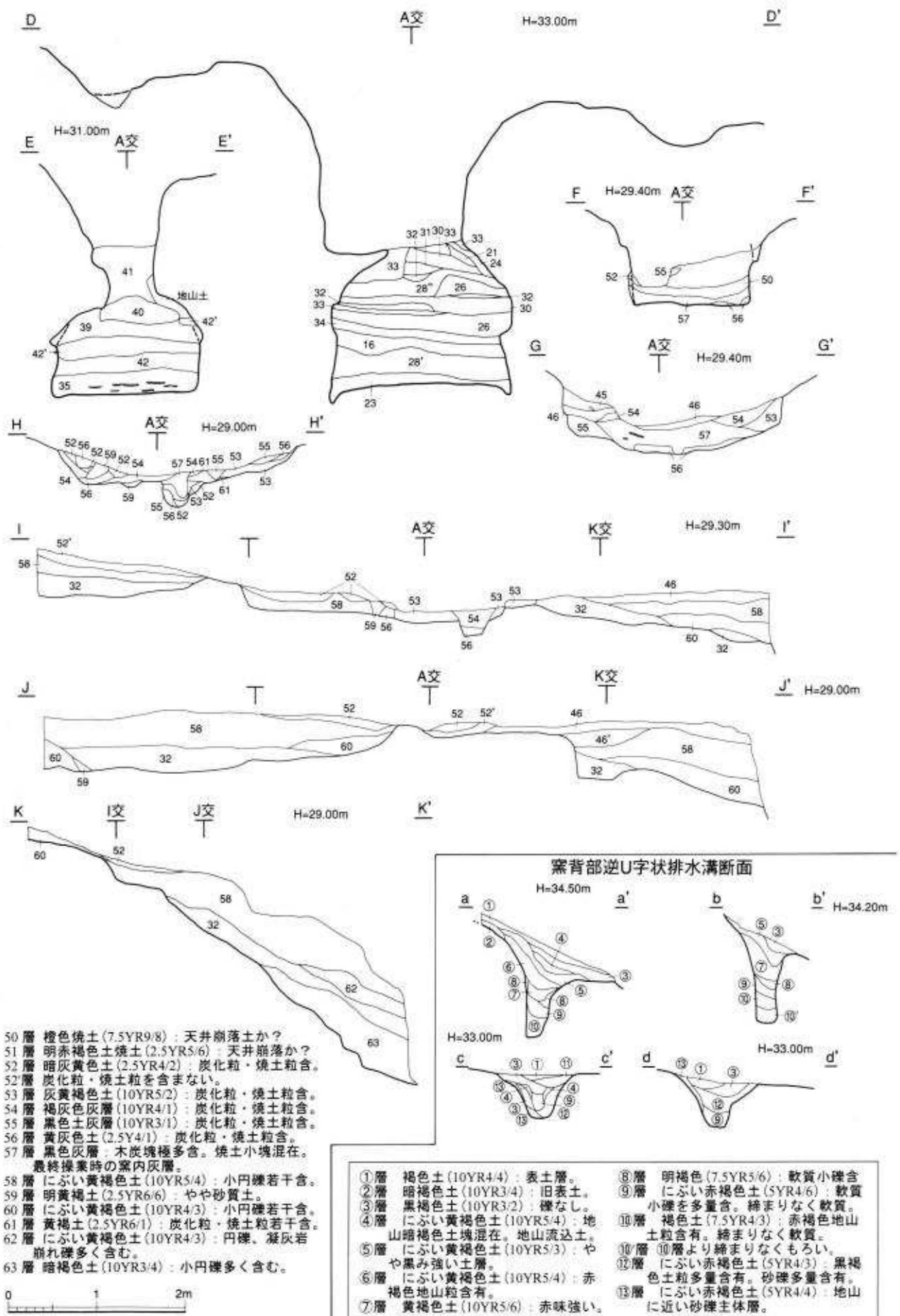
燃焼部側壁はやや内傾して立ち上がるものの、焼成部壁面に比べるとかなり直立しており、焼成部境において天井形態、つまり側壁から天井へとアーチを呈す断面形から側壁直立ないしは開き気味に立ち上がる断面形へと大きく変っている。燃焼部の天井構造を示す痕跡はないが、恒久的な天井がかかっていたとは思い難く、仮設天井を隨時架構していたのだろう。被熱状態は、通常の地下掘り抜き式構造と同様、焼成部境より奥が青灰色に還元した状態であるのに対し、燃焼部では灰色から、黄褐色、赤褐色となっており、さらに表面のみ黒灰色に吸炭している。吸炭層は床面近くで明瞭だが、上方にむかって徐々に薄れる。燃焼部に薪材のオキ溜まりがかなり厚く存在し、燃焼部全体に煤の付着が顕著だった段階、つまり、十分に窯内の温度が上がらない段階で、何かのト



第238図 I 遺跡須恵器窯跡窯体床面平面図 (1/40)



第239図 | 遺跡須恵器窯跡系体埋土・灰原土層断面図 1 (1/60)



第240図 I 遺跡須恵器窓跡窓体埋土・灰原土層断面図2 (1/60)

ラブルがあり、窯を途中廃絶したのだろう。吸炭層は燃焼部内のオキの煤が付着し、それが燃焼不十分のために酸化しなかったと思われる。

#### d. 焚口・前庭部テラス

焚口・前庭部の形態は、まず、斜面に直交して、幅 270 cm、奥行き 200 cm 程度の横長方形のテラス（奥・側壁の直立する前壁もたないテラス状土坑）を掘り、テラス奥壁の中央に焚口を設定して、窯体を掘り進んでゆくものである。焚口は窯体入口にあたり、前庭部は作業場、焚口より奥が窯本体になるわけである。本来であれば、窯の被熱は焚口より奥となるはずなのだが、当窯では燃焼部側壁被熱層が焚口で切れることなく、連続して前庭部奥壁（焚口の両側にあたる前庭部壁）まで及んでいる。燃焼部で確認された吸炭層も同様に前庭部奥壁へ連続しており、床面の黒色に焼けた面も前庭部へ及んでいる。このように、被熱状態を見ると、焚口の認定が困難なのだが、色調は焚口付近で還元色から酸化色へと変化しており、窯の閉塞に関しては焚口で行なわれたことは明白と言える。では、何故、前庭部奥壁が被熱するかであるが、窯焚きの段階で、焚口手前も燃焼部として使用していた状況を考えたい。所謂、アブリの段階では直接窯内に薪を投入することはせずに、焚口の手前で焚くことがあるのだが、当窯のような燃焼部の短い窯においては、焚口の手前でも薪を焚いていたのだろう。しかし、かなり壁の高いところまで強く焼けており、アブリの段階だけで、このような被熱痕跡になるとは考え難い。ある程度温度が上がった段階になっても、前庭部を燃焼部として使っていた可能性は十分にある。同様の 8 世紀代の地下掘り抜き式窯構造においては、よく見られる被熱痕跡であり、偶発的なものではなかったはずである。窯構造の違いにより、窯焚き方法を変えていたものと考えられる。

### 3. 須恵器窯体内埋土と灰層

窯体内埋土は、窯内から排出される黒色灰層、窯崩落に伴う被熱した天井・窯壁塊混在層、窯の崩落陥没に伴う地山埋没土、地山埋没後堆積した黒色土に概ね分けられる。

燃焼部のオキかき出し灰層は、燃焼部床直上から前庭部にかけて存在し、15 cm 前後の厚さを測る。燃焼部では 1 層だが、前庭部では薄い焼土層を間層にして上下 2 層が確認されており、最低 2 回の操業があったことを示す。この燃焼部灰層だが、焼成部境よりも若干奥から確認できており、しかも、従来の窯内灰層に比べて厚い特徴がある。当窯燃焼部壁の吸炭状況からオキの溜まった状態での崩落が予想されているが、上記の特徴もそれを補足する資料となろう。

次に、焼成部床の直上層だが、被熱天井・窯壁塊混在層が 20~30 cm の厚さで存在している。奥壁から焼成部境まで全体に層を形成しており、その一部は流れ込むようにして燃焼部灰層の上に重なる。この被熱天井・窯壁塊層の堆積が下層にのみ存在する状況とその上に存在する地山埋没土層の堆積状態を見ると、窯の崩落と埋没は短期間のうちに進行している感がある。脆弱な地盤に掘り込んだ窯のため、一旦どこかが崩落すると、天井の重みを持ちこたえることはできなかったのだろう。地山層は折り重なるようにして、またはずれ込むようにして、崩落窯壁塊層の上に崩れ落ちている。崩落してしまった天井埋土を掘り起こしたような後世の人为的な痕跡は確認できないが、人为的に天井などを崩した可能性はある。なお、奥壁付近のみで確認しただけだが、埋土最上層には窯体陥没に伴う窪みに堆積した黒色土層を確認している。黒色土層からは当遺跡の尾根頂上部に存在する E 遺跡に伴う弥生時代から古墳時代前期の土器が出土しており、尾根部頂上からの流れ込み土層であることが理解される。

### 4. 遺物出土状況

遺物は、窯体内からほとんど出土しており、前庭部や前庭部下方の斜面などに堆積する灰層から出土することは少ない。窯体内からは燃焼部床直上に存在する灰層より一定量の須恵器が出土しているが、一般的な須恵器窯などに比べると少なく、ほとんどは焼成部からの出土ということになる。焼成部出土の遺物は、床面に遺存した須恵器や直上に存在する被熱天井・窯壁塊層の中に混在しているものがほとんどであり、つまりは窯の最終操業に伴う床面設置の置き台転用か、窯内取り残し製品の須恵器であると理解できる。ただ、製品窯詰めのままにしては製品の量が極端に少なく、最初の崩落があった後、無傷のものは取り出して再焼成に回すなどしたのであろう。取り残されたものは不要品だったと予想される。なお、窯内埋土中で遺物が出土するのは、この下層崩落天井層のみで、地山陥没土層からの出土はほぼ皆無である。窯の陥没に伴って、外部から流れ込んだり、廃棄された遺物はほとんど存在していないことを意味する。

### 第3項 出土した遺物

#### 1. 出土遺物の概要と器種構成、胎土特徴

当遺跡から出土する古代の遺物は、全て須恵器窯跡関連遺物であり、ほとんどが須恵器窯内下層から出土する土器である。遺物箱で30箱程度出土しており、数点の土師器と土製品以外は全て須恵器で占められる。土師器は内黒土師器椀と内外赤彩土師器壺で、赤彩土師器に関しては、同時期の製品と見てよいが、内黒土師器椀は6世紀から7世紀のものと予想する。当窯で焼けた痕跡もなく、混入品と思われる。なお、同様の土師器器種として長胴釜・短胴釜・鍋・瓶などの煮炊具が出土している。窯内の部材として転用されたものや当窯での生産を予想させる器種であるため、ここでは須恵器の中で包括して述べている。

須恵器はその被熱状態から酸化焰焼成の生焼け品（A類）とそうでないもの（B類）とに分けられる。A類はかなり均質な焼き色、焼成具合であり、製品として焼成されたものであることが伺われる。これに対し、B類は（a）焼きしまりあるが酸化被熱を受けるもの、（b）焼成やや甘いが外面側が還元している状態のもの、（c）還元焰焼成で焼き締まり強いものの3タイプがある。（a）と（c）は焼成が良く、窯内で置き台として転用されたものや窯壁補強材ないしは焼成部境の倒立設置長胴釜のように分焰棒的に使われたものであると理解しているが、（b）に関しては還元焰焼成といえども、生焼けに近いため、製品として焼成された可能性がある。ただ、A類とは焼き色が異なっており、これに関しても一応窯の部材として使われたものと位置づけておく。量的にはA類が過半数を占め、口縁部計測比率ではA類が3/4の割合、破片全体の割合では80%以上を占めることとなる。つまり、当窯内の残されたものは製品取り残し品がほとんどで、置き台などの窯の部材転用品は少なかったと言える。なお、B類の中での割合だが、（c）の比率が高く、次いで（a）、生焼け還元焰焼成の（b）は少量といえる。

さて、このA類とB類だが、法量を比較すると明らかに同一器種でもA類がひとまわり大きい。須恵器は乾燥から焼成の間に2度収縮すると言われている（木立2003）。一度は乾燥段階、もう一度は1000度を超えて1100～1200度に焼結するまでの段階である。それぞれ1割程度収縮するといわれており、A類とB類の法量差は焼成不十分のためにによる1割の未収縮を示す可能性が高い。第248図の法量分布図には各食膳具器種の口径と器高を示しているが、先に述べたように、A類の白丸とB類の黒丸とは明らかに分布域が異なる。ところが、A類数値に90%をかけると、ほぼ黒丸圏内に入り、分布領域がまとまってくる。粘土特性によっても収縮率は異なり、A類生焼け品をB類の温度で上げてみないと本当の収縮率はでないのだが、還元焰で硬質に焼き上げようと意識して製品を作っていたとすれば、数値補正の必要があると考えている。後で、個別に法量などの検討を加える際には、以上の理由に基づいて、A類法量については補正值90%をかけた数値で述べてゆくので、了解いただきたい。

器種構成については、全体的に数量が少なく、A・B類個別に構成率を示すと、偏りが出てしまうため、A類とB類を合計した数値で構成表を作成した。以下の表にあるように、種別構成では、食膳具の率が高い。占有率は78%とこの時期としては低めだが、煮炊具の量が異常に多いため、煮炊具を除外すれば、95%の高率を示す。食膳具の中では盤Aが5割近くを占め、圧倒的に多い。壺Bは2割、壺Aは3割弱。盤Bは僅少という比率である。同時期の南加賀窯跡群須恵器比率（二ッ梨一貫山12号窯）と比べると、盤Bの少なさと盤A占有率の高さが目立つ。窯内取り残し品が主であるため、数量に偏りがある可能性は否めないが、盤Aが壺Aを凌ぐ量である可能性は高い。それは同時期の和氣後山谷2号窯の比率（木立1994）からも伺えることであり、能美窯跡群の特徴として位置づけできるかもしれない。なお、稜椀が定量存在することも、この時期の特徴として注目してよい。次に、煮炊具であるが、これに関しては窯内の部材転用と考えられるB類の割合が高い。ただ、焼成部境倒立設置の長胴釜の存在によって高い率となっているもので、これらを除くと、ほとんどがA類となる。A類のみでは長胴釜49%、短胴釜26%、鍋17%、瓶8%となり、長胴釜が半数近くを占める。

器種名	壺B蓋	壺B身	壺A	稜 楓	盤 A	盤 B	瓶 A	横 瓶	中 瓢	大 瓢	短胴釜	長胴釜	鍋	瓶
口縁値	274	111	380	15	640	6	18	27	5	18	53	200	33	15
種内率	20.8%	28.9%	1.1%	48.7%	0.5%	26.5%	39.7%	7.3%	26.5%	17.6%	66.4%	11.0%	17.9%	
種別計	食膳具 1315 (78.1%)						貯藏具 68 (4.0%)				煮炊具 301 (17.9%)			

窯内出土須恵器器種構成表（口縁値は口縁部計測法による○/36数値、種内率は食膳具、貯藏具、煮炊具内の占有率を示す。）

当窯須恵器の胎土特徴については、能美窯跡群ということで、全体的には細かな砂粒の混入が少ない粘土質の胎土となるが、その中では粘土素地がやや粗目で、シルト質系の質感をもつ。能美窯跡群の胎土によく混在している白色のくず石はJ遺跡に比べると少ない傾向があるが、全体的には和気支群のものよりも混入量が多い感じがする。なお、煮炊具にのみ大粒の白色くず石を混和材として入れており、全体的な発色の度合いも須恵器とはやや異なる。

## 2. 各器種の検討

### a. 食膳具

食膳具は全てロクロ成形品で、底部切り離しが回転ヘラ切りによるものである。ロクロの回転方向は全て右回転で、観察表で特に示さないものは、底面回転ヘラ切りのままか、ヘラ切り痕をナデ消す程度の調整である。

《坏B》 蓋と身とあるが、蓋の出土量が多い。蓋・身ともに口径から三法量に分けられる。口径は蓋で、大19cm前後、中12.5~13.5cm、小11.5cm前後、身で大15.5~17cm前後、中11~12cm、小10.5~11.5cm程度となる。法量別構成は、蓋で大7.3%、中85.0%、小7.7%、身で大7.2%、中63.1%、小29.7%となり、中法量が大半を占める。

蓋は天井部ヘラ削りを伴うものが主体的である。大法量は天井部やや緩やかで、頂部盛り上がる宝珠形呈すつまみが付く。なお、天井部突帯の巡る造りの丁寧な77があり、これについては稜椀蓋である可能性が高い。中法量は天井部平坦面の広い扁平な器形を呈しており、厚手で、口縁部折り曲げはシャープさを欠く。つまみは頂部盛り上がるが、扁平気味器形が大半で、口縁部手前の屈曲は微弱である。小法量は、口縁部折り曲げのある83と折り曲げずに口縁端部に至る84とがある。83は扁平器形で小型つまみの付くタイプ。84は扁平つまみである。能美窯跡群における坏B蓋小法量は、口縁部折り曲げるタイプが通常であり、折り曲げないタイプは極めて稀な存在である。南加賀窯跡群では逆に後者のタイプが一般的であり、当窯の系譜を考える上で、重要である。

身は大法量と小法量が径高指数35~40の深身、中法量が29~35の浅身を呈する。前者の器形は体部立ちあがり急で、高台の作りが丁寧であるのに対し、後者は高台低く、作りが雑である。底部削り調整を伴うものが多く、全てヘラ切り痕を残す。

蓋と身の重ね焼きは、蓋と身を正位に重ねて焼くI類が過半数を占める。ただ、蓋を逆位に重ねて柱状に積み上げるII類も25%程度確認されており、IIa類とIIb類がほぼ同量程度存在する。

《坏A》 口径11.5~13cmに分布する。径高指数28前後に分布する扁平器形で、厚手の底部から短めに若干外傾して立つ器形には統一されている。底部平坦で底部境の明瞭なものは僅少で、やや丸みをもった底部から丸く立ち上がるものがほとんどを占める。

《盤A》 通常法量は口径14.5~16.5cmだが、厚手で口縁端部肥厚する口径16.5~17.5cmの大振りの一群(51~55)が存在する。底部やや丸く、底面削りを入念に入れるもので、精製品である。通常法量は焼成状態A類とB類とで器形が異なる。A類は径高指数13~17の体部立ち上がりが長く立つ器形で、底部境丸く、底面削りを全てにおいて施すものである。これに対し、B類は径高指数12前後と体部短く外傾気味となるもので、A類に比べて底部が明らかに薄い。底面削りを施さないものが半数を占める。

《盤B》 口径20cm程度を測る大型法量である。高台により、方形の低い高台がつく100・101とやや足高となる56・102とがある。前者は体部短めに外傾する扁平器形のもの。後者は底部厚手で身がやや深くなるものと予想する。

《稜椀》 口径20cm程度のもので、体部上位に成形時に作り出した稜を1段形成するものである。高台は足高で踏ん張ってつくもので、口縁部外反する深身の103と短く直立する浅身の104とがある。

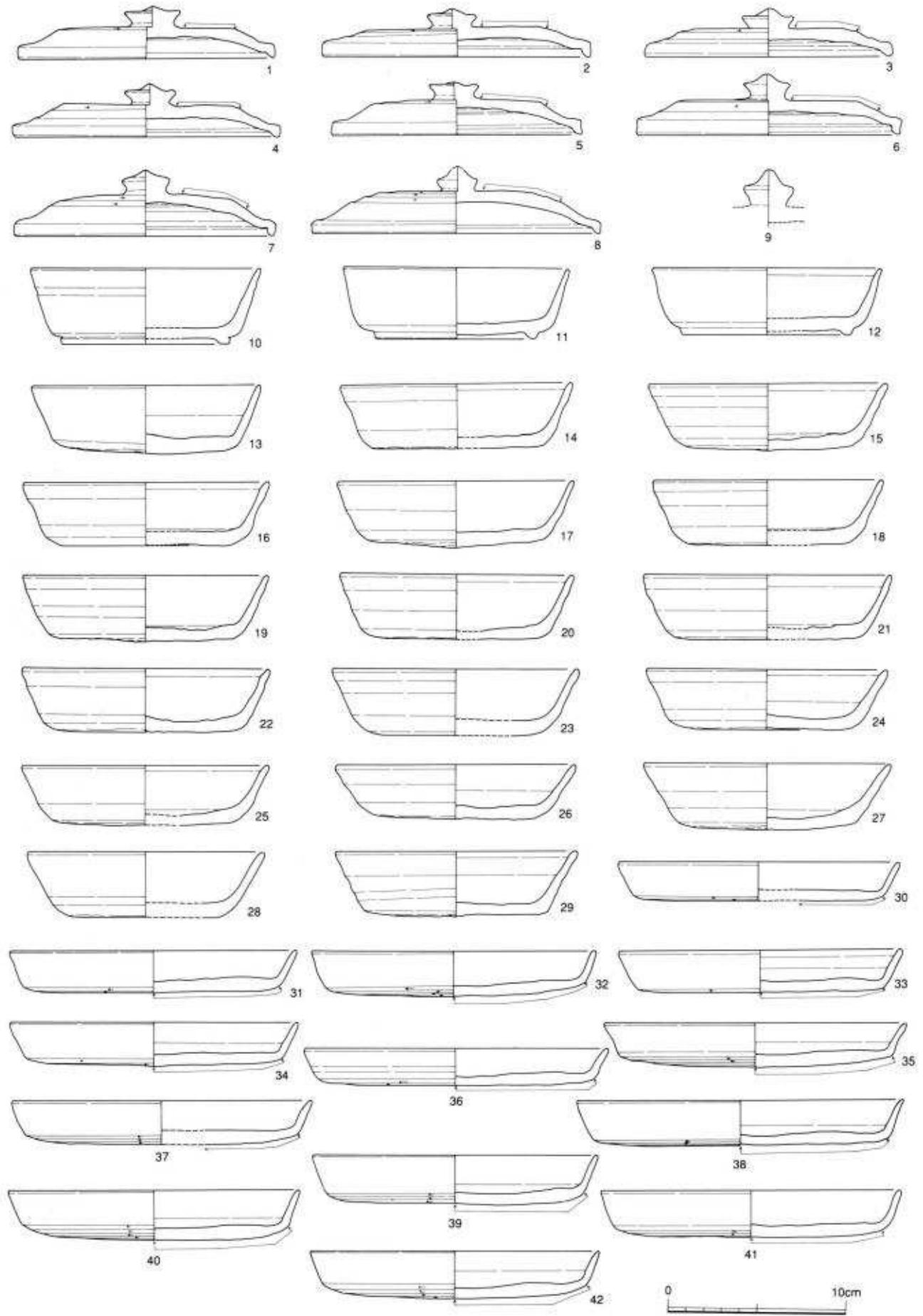
### b. 貯蔵具

小型鉢(105)、水瓶(106)、瓶A(107・108)、壺D(109)、横瓶(57)、甕(76・118~123)などがある(器種名は北野博司1999の北陸古代土器研究8号貯蔵具器種分類に基づく)。以下に特筆すべき器種のみ述べる。

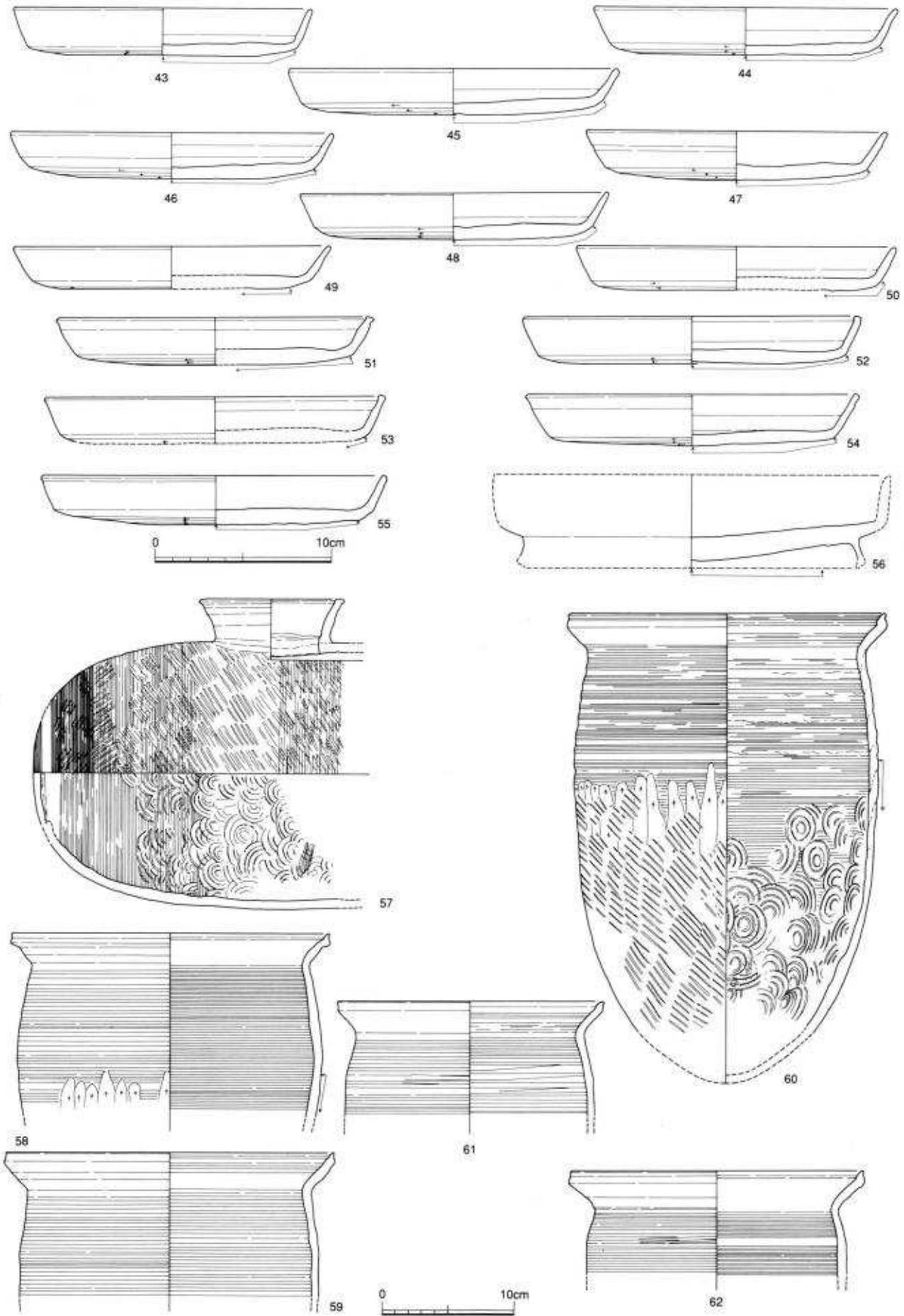
《小型鉢》 口縁部外屈する灯明具状のもの。胎土は煮炊具と同様で、火に使用する器種であることを物語る。底面へら切りでやや深身壺型のタイプである。

《瓶A》 胸部下位に叩き成形痕を残すものである。胸部成形において使われた1次成形叩き痕跡と思われる。

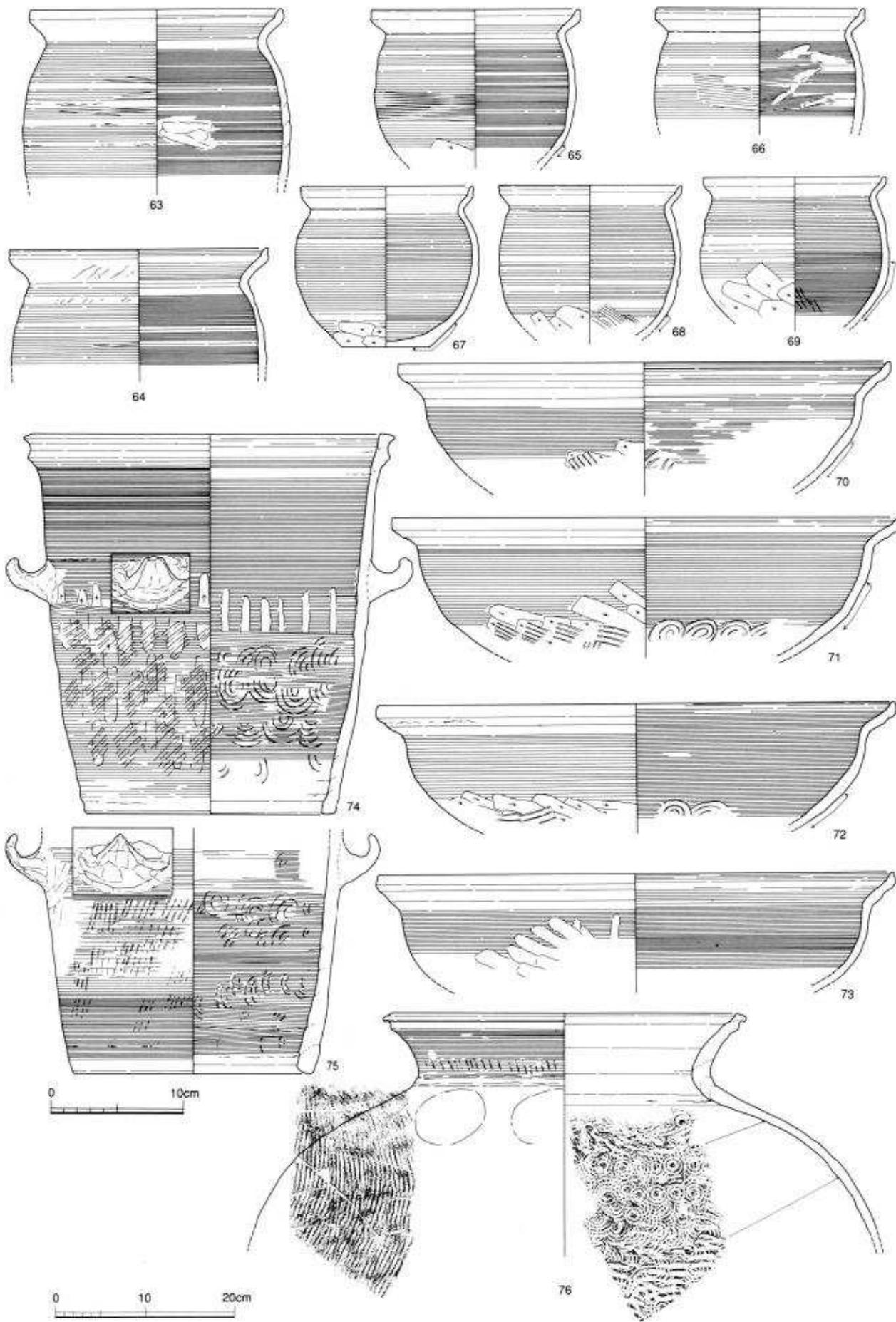
《横瓶》 胸部叩き成形による大型横瓶で、片面しか遺存していないが、両面閉塞である可能性が高い。円盤閉



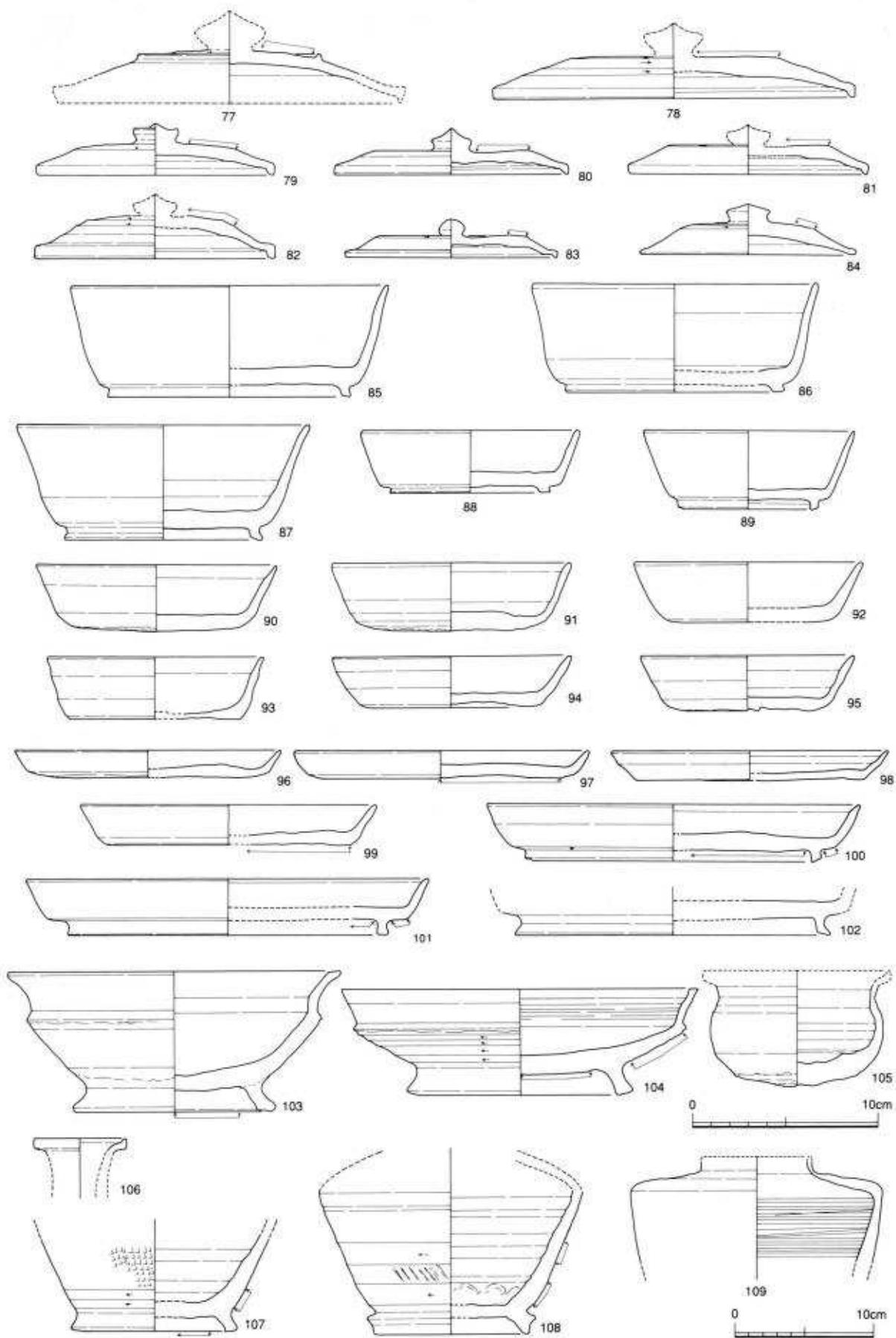
第241図 I 遺跡須恵器窯跡出土須恵器（生焼け）1 (1/3)



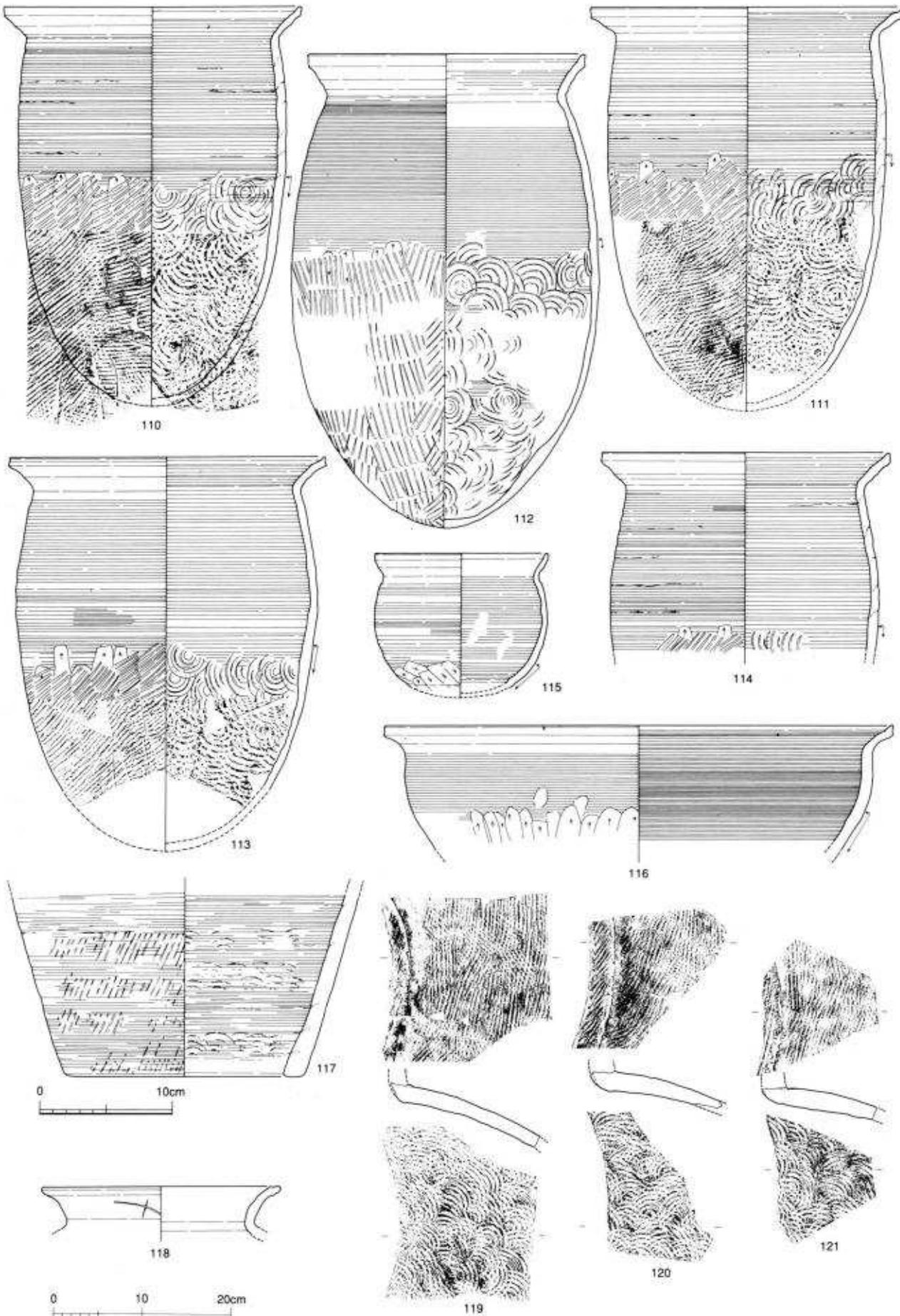
第242図 I 遺跡須恵器窯跡出土須恵器（生焼け）2 (43~56:1/3、57~62:1/4)



第243図 Ⅰ 遺跡須恵器窯跡出土須恵器（生焼け）3 (63~75: 1/4、76: 1/6)



第244図 I 遺跡須恵器窯跡出土須恵器（還元焼け）1 (77~105 : 1/3、106~109 : 1/4)



第245図 I 遺跡須恵器窯跡出土須恵器（還元焼け）2 (110~117 : 1/4、118~121 : 1/6)

塞側は閉塞後に外面からのみの叩き成形（風船叩き）で丸く仕上げる。その後、反対側から当て具を入れて横軸の叩き成形を施す。たぶん、そのまま叩いて絞り込み、円盤で閉塞して仕上げるのだろう。カキ目は胴部成形叩きとともにに入れられるが、閉塞部のカキ目は最終的なもので、細かなカキ目が施されている。

《甕》 76の大甕については、口縁部まで一体的に積み上げ成形してゆくタイプで、内面の粘土紐積み成形痕と頸部外面に残った叩き成形痕で、その技法が推察される。大甕に当成形技法が採用されるようになるのは、9世紀以降と言えるが、それは短い口頸部に伴って導入されるもので、大甕口頸部短縮の見られ始める当期には先行的に導入されていても不思議ではない。後述する資料とは対照的な成形方法と言える。胴部中位から上端へかけて横軸の当て具痕が並び、最大径近くと上端絞り込み部分に当て具縁辺を使った深い当て具が横に並ぶ。胴部張り出しと頸部絞り込みのための2次成形叩き痕と位置づけられるものである。外面胴部上位には口径12.5cmの坏身を伏せて重ね焼きしたような円形変色部位が一定間隔で並ぶ。単なる重ね焼きではなく、円形文様を意識した重ね焼き行為であると評価できる。

119~123は同一個体と思われる大甕破片で、119~121は胴部上端部分、122・123は胴部下位部分である。胴部上端部位に頸部成形粘土の剥がれた痕跡があり、明瞭に胴部外面の叩き痕跡が残っている。胴部成形から頸部成形へ移行する段階で十分な乾燥段階を挟んだことを物語る資料である。胴部上端の内面側は頸部側から及んだ粘土が薄く延びているため、判然としないが、内傾するように端部を取り整形したものと考えられる。頸部側の粘土は胴部よりも細かな砂が多く含まれており、口頸部別作り接合である可能性を持つ資料である。次に胴部下位資料であるが、下位方向の外面側剥離面に当て具痕の反転圧痕が残るものである。これは底部から積み上げ成形してゆく際に、基盤となる鉢状成形土台の上端部に同心円当て具で高さを揃えるように整形したことを物語るもので、胴部側に反転圧痕として残るということは、成形土台が十分に乾燥していたことを物語る。同心円当て具の凹凸は接着度を高めるため施された可能性も高い。また、この破片の内面下位には当て具痕を消すようにナデが施されており、底部から一体化的に施された可能性を持つ。この鉢状成形土台は土台として設置された段階で既に丸底に叩き出された状態であったこと物語る資料と言えよう。

### c. 煮炊具

煮炊具は全くくず石の混和材を含む土師器に通有の胎土で作られている。全て須恵器技法で作られており、焼成も黒斑・火色がないなどの特徴から見て、窯内、つまり当窯で焼成されたものとみている。

《長胴釜》 平底の長胴器形を形作った後に、胴部下位から底部にかけて砲弾型に叩き出す器種である。胴部の粘土紐積み痕跡を明瞭に残すものが多く、胴部成形にあたっては叩き成形を伴わなかったものと見ている。ただし、口頸部外面に成形叩き痕跡の残るものがあり、頸部の「く」字屈曲に叩きが使われた可能性を持つ。ロクロ回転を利用し、口頸部の整形を行なった後、全体をカキ目調整。その後、底部叩き出しを行なう胴部中位以下の範囲に縦方向の削りを施し、削りを施した部位から底部にかけて縦軸に叩き出し成形が施される。基本的に全て同一の作り方をしているが、叩き具の向き、全体的な器形や口縁部器形から、以下の3類に分けられ、さらに底部叩き出しの道具痕跡も対応している。

1類 - 胴部すん胴で、口縁端部は上端を若干摘み上げる程度。厚手で紐積み痕残すもの。胴部叩き具の向きは右上り斜行。

　外面叩き-Hb類叩き。叩き条線食い込み深く、条間隔最も狭い。

　内面当て-Da類当て。当て具条線食い込み深く、線幅が最も狭い。中心円径7mm程度で、片側に寄る。

2類 - 胴部器形や厚手な点は1類同様だが、口縁部内面に段を持ち、クランク状を呈す。胴部叩き具の向きは左上り斜行。

　外面叩き-He類叩き。叩き条線食い込み浅く、条間隔は3mmと狭い。

　内面当て-当て具条線食い込み浅め、線幅3mm程度。中心円8mm径もち、正円で大きい。

3類 - 胴部の張る器形で薄手のもの。口縁部内面に段を持ち、端部摘み上げるもの。胴部叩き具の向きは縦行。

　外面叩き-He類叩き。叩き条線食い込み浅く、条間隔最も広い。

　内面当て-当て具条線食い込み浅め、線幅広く、中心円は10mm程度の正円。

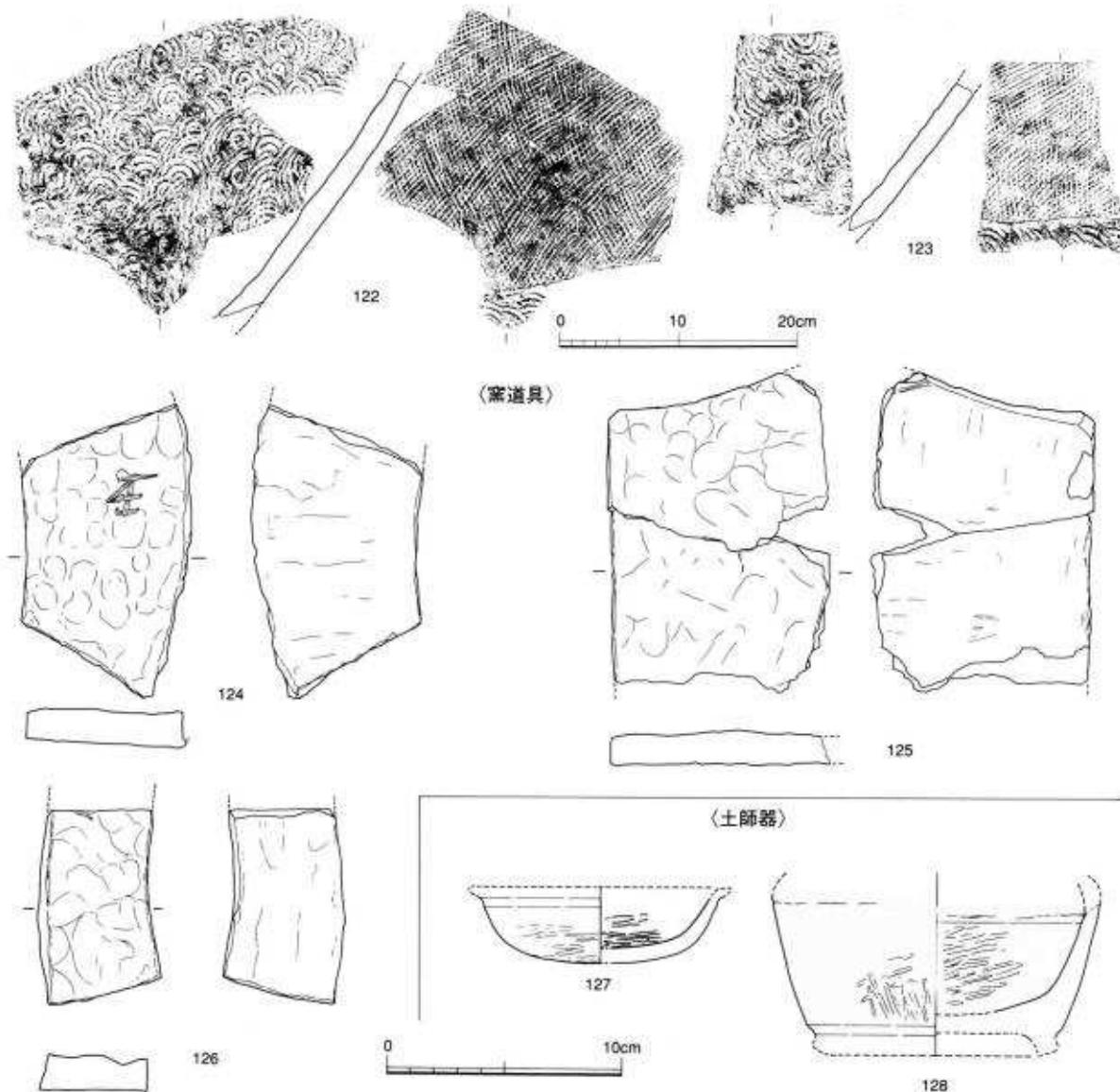
以上の類型を焼成ごとに見ると、B類焼成は1類と3類。ほとんどが1類で、焼成部境に倒立設置された110・111・113・114の4個体が該当する。3類は112のみで、上記4個体と還元の焼き締まりも異なり、窯の部材として使われたものとは限らない。製品であった可能性もある。この3類器形に類するものはA類焼成で多く確認でき、58・61・64などが該当すると見ている。A類焼成では他に2類の59・60・62があり、製品として焼か

れたものをみると、ほぼ2・3類に該当することとなる。1類に該当するA類焼成のものはなく、他の窯で焼かれたものを当窯で部材に使ったものだろう。

**《短胴釜》** 口径13~16cm程度、器高11~13程度の小型短胴釜で、平底(66)と丸底(68・69・115)がある。平底はロクロ成形台から切り離したままのもので、底面に静止糸切り痕を残す。胴部下端のみ横方向の手持削りを施し、下端部の厚さを調整している。丸底は切り離し後に内底面を刷毛工具で押し出し、丸底にしたもので、胴部下位付近から斜め方向の削りを施す。丸底に押し出すため、胴部下位が薄く作られており、口縁部端がやや内湾気味となる特徴がある。当器種はA類がほとんどで、115に関しても製品が還元した可能性がある。

**《鍋》** 器形と調整方法から2種に分けられる。1類(70~73)は浅鉢状器形で、口縁部が長めに外傾する器形を呈す。胴部下位削り調整後に底部叩き出しを行なうもので、削りは手持で斜め下位方向に、叩きは横軸に叩かれる。丸底化の工具としてよく使われる刷毛の押し出しではなく、当て具を使って叩き出したのだろう。成形台からはずした後に、胴部下半を削って薄くし、叩きを使って丸底にしたものと予想する。全て酸化生焼けのA類である。2類は深身で口縁部短い器形をもつ厚手製品である。胴部中位以下に縦方向の削りが見られる。底部を欠損するため、丸底化をどの技法によるか不明だが、叩き成形している可能性が高い。B類焼成の116のみである。

**《瓶》** 底部筒抜け型の瓶である。三角形状の端部巻き込み型の把手が胴部中位やや上につき、口縁部は端部外側肥厚、その直下に稜を1段形成する。胴部下位に当て具伴う叩き成形が施されているが、全形を窺えるのは74



第246図 I 遺跡須恵器窯跡出土須恵器(還元焼け) 3・窯道具・土師器(122・123:1/6、124~128:1/3)

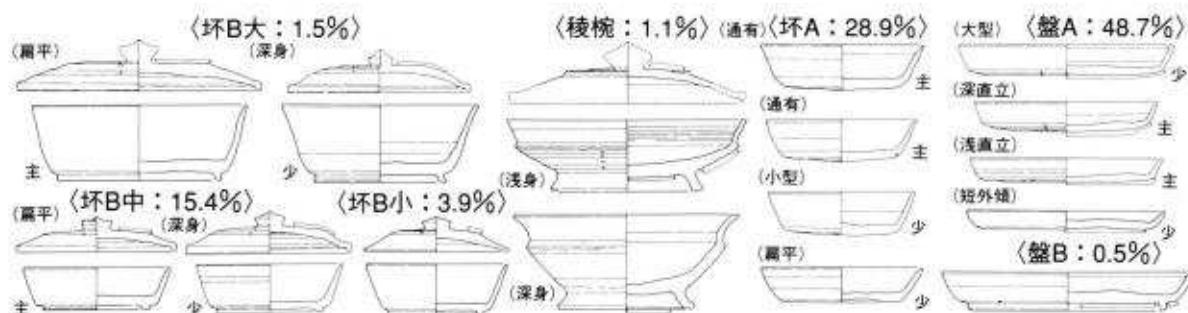
のみで、これについては縦方向削り後に叩き成形を施す。長胴釜や鍋で確認できた技法であり、当窯工人独特の技法と言えるだろう。胴部紐積み成形後、口クロ調整・カキ目調整を行い、胴部下半外面は縦方向削り、内面は縦方向ナデ調整する。その後、ほぼ削り調整を施した範囲において、横軸の叩き成形を行ない、さらにその上からカキ目調整する。胴部上半に残されたカキ目よりも胴部下半に施されるカキ目は粗く、異なる工具を使っていたことがわかる。75・117に削りが伴った痕跡はなく、これにらについては粘土紐積み上げ時の可能性がある。

#### d. 窯道具

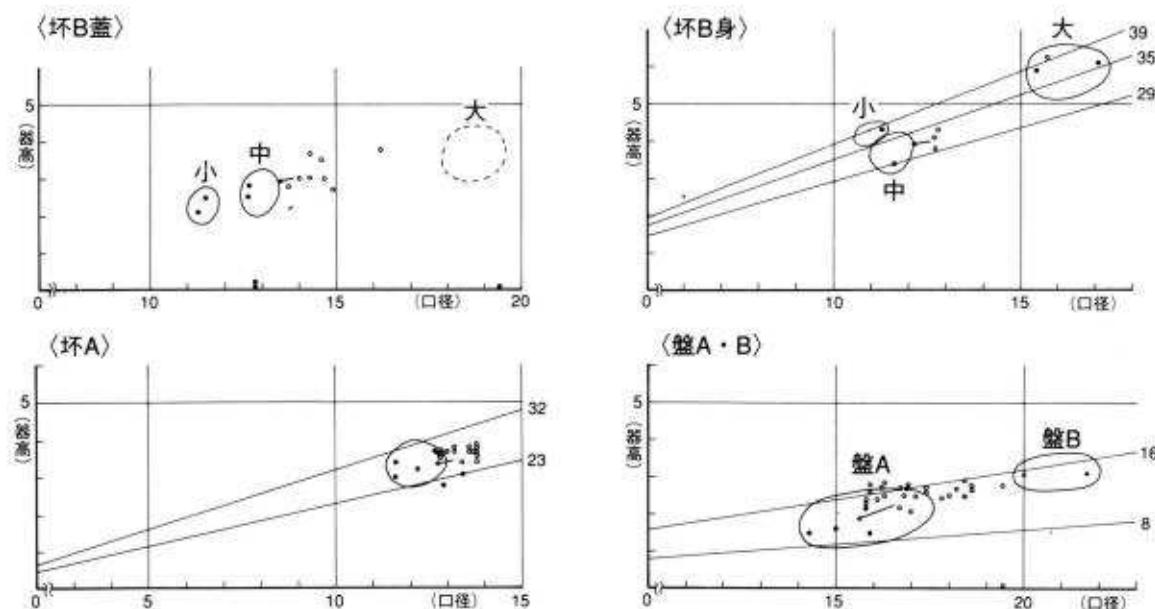
還元焰焼成された不明土製品が3点出土している。成形台の上に粘土を押し付けて板状に延ばし、縁を切り取って形作ったもので、成形台側（B面）には剥がしたような痕跡、その反対側（A面）には指で押し付けたような痕跡が残る。完形品がないため、どうのような形状を呈するのか不明だが、細長く板状に切り取ったり、方形に大きく切り取ったりなど、様々である。厚さは1.5cm程度と均質で、124のA面には「在」のようなヘラ描文字が見られる。胎土はくず石を混ぜた煮炊具同様の胎土で、A面はやや焼きが弱く、B面は堅緻に焼けている。窯の部材か窯道具として使われたものと予想している。

### 3. 当窯跡須恵器の特徴と編年的位置づけ

当窯跡の調査所見や灰層の厚さ、築窯地盤の点から、短期で操業を終えた窯であると想定できる。隣接する須恵器窯跡もなく、集落遺跡などもないことから、出土する古代の遺物は当窯跡に関連するものと評価でき、特に床面直上及び天井崩壊土混在の土層内から出土する酸化生焼け品（A類）については、最終操業時の焼成廢棄品と考えられる。還元焼成品のB類については、強く還元焼結するものから還元しているが焼きの弱いものなどがあり、全てが窯の部材や窯道具として転用したものとは限らない。窯内全体の中で一部還元の及んだ部位があつ



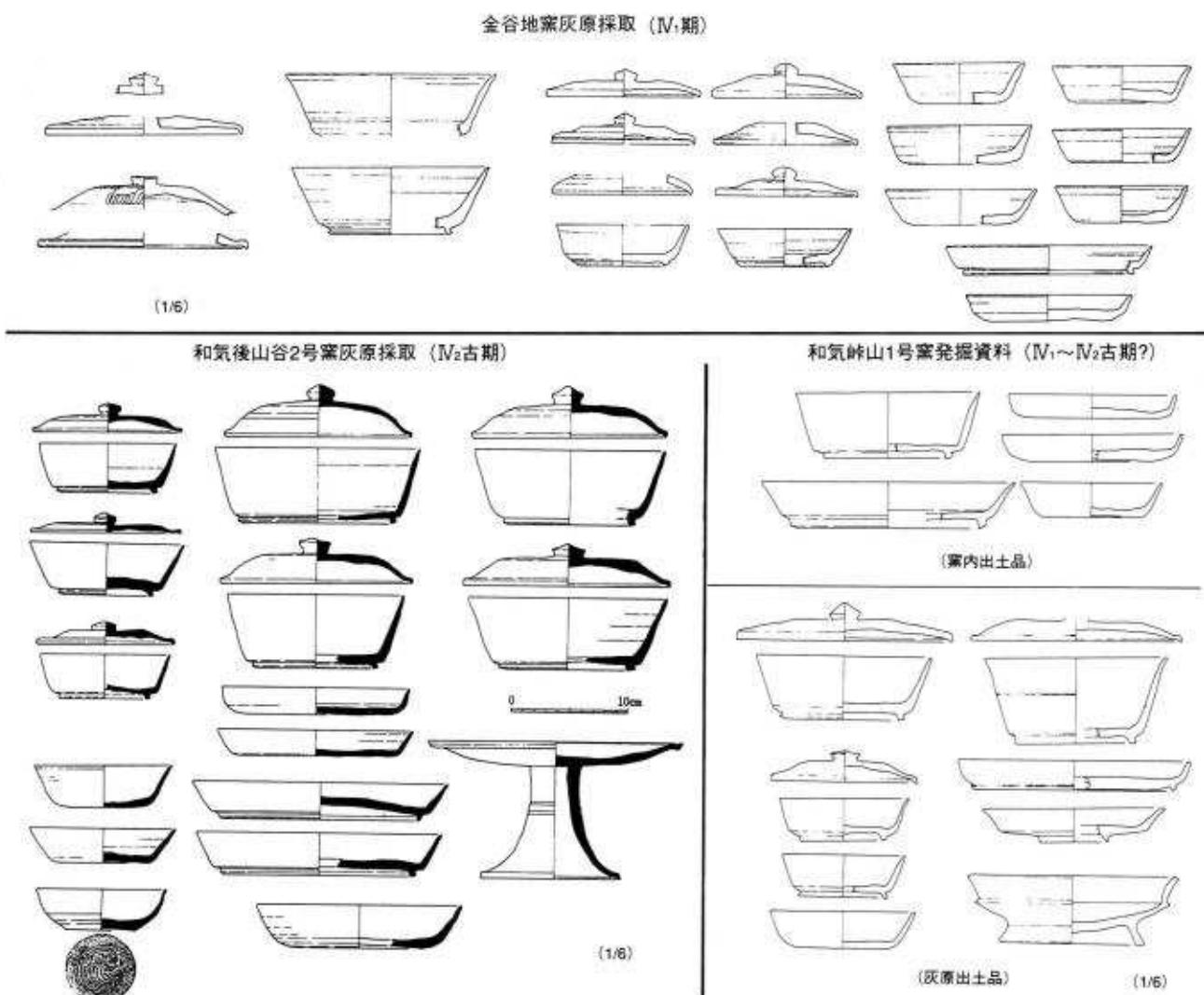
第247図 I 遺跡須恵器窯跡出土須恵器食膳具構成図 (1/6: 生焼けA類は90%縮小して掲載)



第248図 I 遺跡須恵器窯跡出土須恵器食膳具法量分布図 (単位: cm)

た可能性はある。A類とB類を比較すると、明らかに法量のまとまりが異なり、それについては焼成時の1割収縮に要因があることを前項で述べた。第35図にみるように、A類法量に90%を掛けるとB類圏内に入る傾向が強く、B類法量が本来の製品としての大きさだったのだろう。その収縮補正した上で、A類とB類とを比較すると、編年上の大きな隔たりは感じられず、一つの様式内に入る土器群と位置づけできる。

能美窯跡群のこの時期の資料が乏しいが、少ない資料の中で比較対比すれば、坏Aが底部立ち上がり丸く、体部若干外傾して立つ、扁平な器形を呈す点、坏B中が蓋、身ともに扁平器形を呈する点、坏B大身が体部直立気味器形を呈し、大型法量である点、盤Aが体部直立気味器形で、高い底面削り率をもつ点、扁平を呈す稜椀器形の存在などから、和気峠山1号窯跡資料が最も様相として類似する。坏B身中法量、坏A法量においても、少ない対比資料ではあるが、一致する傾向がある。和気峠山1号窯について、従来、IV1期とIV2期の2時期が存在するとされてきたが、平成3年に辰口町教育委員会が実施した発掘調査により、IV1～IV2古期の単期資料であることが確認された（橋場・北野1993）。これに先行するとされる金谷地窯は採集資料のため、比較しづらいのだが、金谷地窯が当窯資料に先行する確たる根拠に乏しいと判断する。坏B中法量、坏A法量の違いはあるが、南加賀窯跡群のIV1期資料である二ッ梨一貫山4号窯及び二ッ梨横川1号窯に器形が最も類似しており、八里向山1遺跡窯をIV1期とするのが妥当と考える。和気後山谷2号窯はこれに後続する資料と位置づけておきたい。ただ、一つ疑問となるのは、和気後山谷2号窯の坏B身中及び坏A口径が12cm台と当窯よりも大ぶりの数値を示す点である。食膳具口径の漸次小型化傾向を考えれば、逆転現象であり、かつ、IV1期に坏B中小法量が融合している様相だったのが、IV2古期で分化したこととなる。資料を実見する必要があるが、後山谷

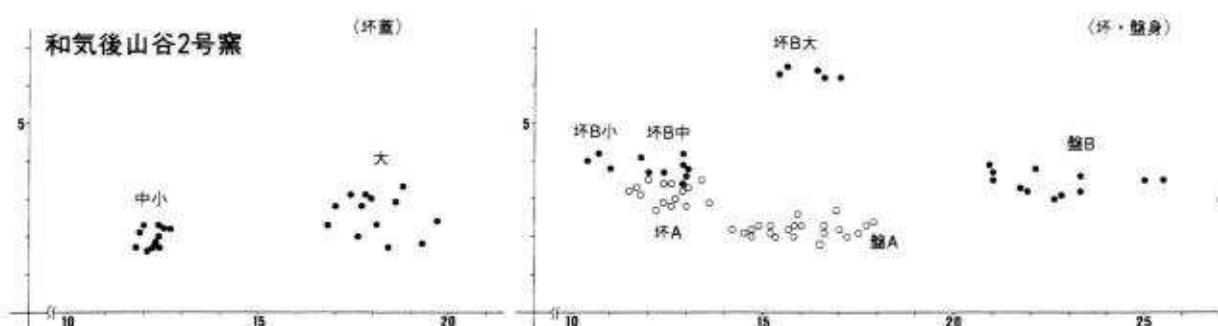


第249図 能美窯跡群N<sub>1</sub>～N<sub>2</sub>古期の須恵器（木立1988、橋場・北野1993）

2号窯の坏B蓋中小法量はひと括りできる分布を示しており、坏B身中小法量のバリエーションないしは生焼け等の理由による数値誤差の可能性もある。もともと、能美窯跡群の坏B中小法量は、中法量の小型傾向による、未分化の様相をもっていた可能性が高い。IV期は器高差で深身は小法量、浅身は中法量という分化の仕方をするが、V期以降は坏B身の楕形指向によって、中法量も深身器形となり、中・小法量の境を区切ることができなくなる。つまり、南加賀窯跡群では3法量分化が明確であったが、能美窯跡群ではIV1期から既に2法量化の様相を呈していたこととなるわけで、能美窯跡群須恵器食膳具の大きな特徴といえる。

また、南加賀窯資料との比較で、当窯資料の特徴をあげれば、①盤A生産量の高さと底面削り率90%という高さ、②稜楕生産、③坏B II類重ね焼き25%、④坏B蓋小法量の口縁端部折り曲げ器形主体化、⑤大甕口縁部の短頸化の早さ、⑥長胴釜胴部下半叩き以前の縦方向削りの存在、⑦短胴釜の底部丸底成形など7点がある。①については、IV2古期の和氣後山谷2号窯でも同様の盤A占有率の高さが確認でき、能美窯跡群の特徴と位置づけられる。それに比べて盤B生産量は低く、盤B生産の多い南加賀窯と対照的である。②については、南加賀窯跡群が生産量低いだけで、金沢末窯跡群などを見ると一定量の生産があり、当期の一般的な傾向と言える。能美窯は南加賀窯に比べて、製品の作りが全体的に丁寧で、良品や仏器的器種などの生産が多いという特徴がある。③はIII期以降に出現していく重ね焼き方法で、IV期の中で一般化するものである。ただ、IV1期は南加賀窯でも1割程度と低く、当資料は普及度高いほうであろう。南加賀窯ではIV2古期には7割以上に普及しているため、次の段階に増加するものと考えられる。その後、能美窯跡群では次第にIIb類統一へ向かうようで、IIa類主体となる南加賀窯跡群とは別系統となる。当期のIIa類、IIb類共存は、当期の南加賀窯でも見られることで、定着前の様相といえるものだろう。④は坏B蓋小の南加賀窯と能美窯とを見分ける目安となるほど、特徴的な作り分けなのだが、当資料でも見るよう能美窯でも少量、口縁端部折り曲げのない素口縁が存在しており、V期にも定量生産され続ける。同様の坏B小蓋素口縁形態は、金沢末窯跡群にも確認されるもので、必ずしも南加賀窯との関連を示すものではないが、突帶付蓋の存在など南加賀窯跡群との交流において出現したものである可能性が高い。⑤の大甕短頸口縁部出現については、南加賀窯ではIV2期以降の様相で、IV2古期までは別作り長頸口縁部をもつ大甕が主体的である。資料が少ないため、位置づけが難しいが、能美窯の先進性を示すものかもしれない。⑥⑦の長胴釜、短胴釜の成形技術については、能登・越中で見られるものと類似する。当窯資料は長胴釜の胴部外面縦方向削り後に叩き成形で丸底にしているため、北陸北東部のものと厳密に同じ技法とは言えないが、関連性は考えられよう。少なくとも、南加賀窯には確認できない技法であり、系譜の違いを感じさせる。

以上、南加賀窯跡群との比較を通して、当窯資料の特徴を提示した。南加賀窯跡群との系統の違いは、IV2古期以降、瓶類生産器種や成形方法の違いで、さらに顕在化し、V期へと継続してゆく。ただ、須恵器器形や生産器種構成など、南加賀窯と同じ須恵器様相圏内にあることは間違いない、南加賀地域の中にありながら、須恵器供給を北へ向けて行なう、窯の性格が出ているものといえる。



第250図 和氣後山谷2号窯出土須恵器食膳具法量分布図（中村1985）

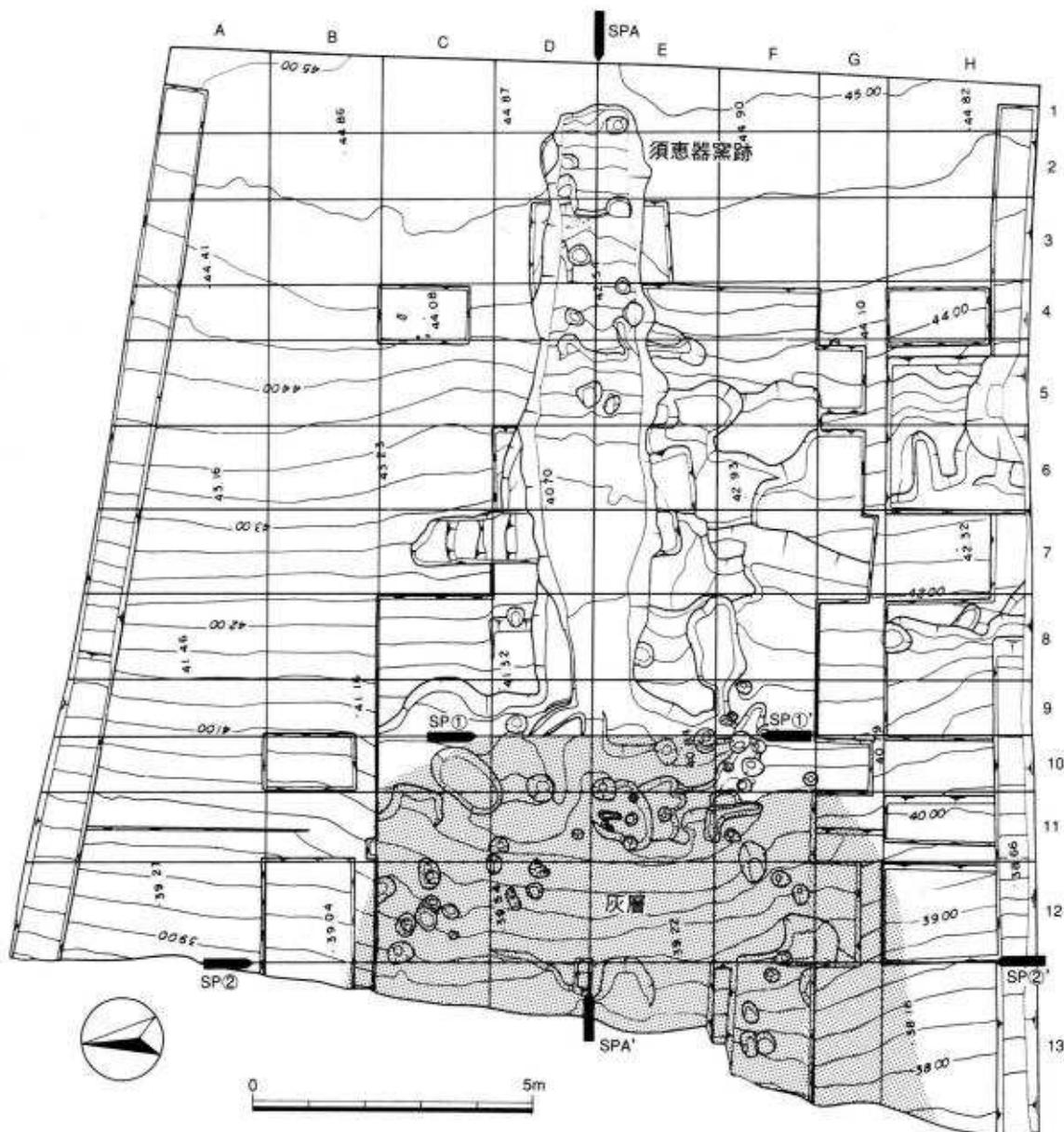
## 第6節 J遺跡の須恵器生産関連遺構と遺物

### 第1項 遺跡の概要と調査方法

《概要》第1節で述べたように、J遺跡は能美窯跡群内に属する須恵器窯跡である。寺井グループの八里向山支群に属する窯で、丘陵部の奥まった浅い谷斜面に立地する。この谷は地蔵谷と呼ばれ、寺井町湯野から伸びる主谷と小松市上八里側の平野部を繋ぐ狭い谷である。須恵器窯は寺井側に近い北側斜面頂上付近に立地する。当期の須恵器窯は辰口町北群のマルヤマ支群で確認されるのみで、最古の部類に入る。消費地資料は7世紀前半から確認があり、当窯を廻る窯の存在が予想される。能美窯出現期の問題は今後の課題と言える。

《調査方法》当遺跡は、今回の開発に伴う試掘調査によって発見された窯である。調査対象は、窯体全域と前庭部、灰原、周辺の関連遺構で、灰原については既設道路によって分断されるまでの区域である。灰原の裾にあたる部分が道路を挟んだ斜面下方に存在するが、開発区域外であり、調査対象からはずれる。

須恵器窯跡は斜面に直交する形で掘られており、斜面頂上部の削平（畑）によって、窯の排煙部が破壊されている。このため、表層除去の段階で、窯尻が確認でき、斜面下方の灰原とを結んだ線が窯体主軸線と想定できた。



第251図 J遺跡全体図及びグリッド配置図 (1/125)

さらに、窯体プランを特定するため、等高線に沿う形でトレンチ調査により、窯体陥没痕ないしは窯壁検出を行なった。窯体プラン確認後、窯尻から灰原までの主軸ラインを設定し、それを基点として、任意に1~2m間隔で土層アゼを縦・横に残した。土層アゼによって区切られた1~2mの区画をグリッド代わりに見立て、東西を1~13、南北をA~Hに分けて、地山まで掘削し、層位ごとに土器の取り上げを行なった。窯体内埋土の掘削、前庭部、灰原についても、上記の土層アゼ区画に基づいて、土器の取り上げを行なったが、埋土上・中層からの出土遺物はほとんどなく、窯体天井崩落に伴う下層埋土や床面に集中していた。窯体の床面及び直上の須恵器については原位置で残し、写真撮影後、出土状況図作成を行なった。また、床面に遺存する石置き台についても、極力原位置で図に書き込んだ。前庭部及び灰原については灰層出土のものと表土層とを区別して取り上げるとともに、灰層除去後の遺構調査を行なった。須恵器窯体とそれに伴う前庭部、灰原以外では、関連施設的な遺構は検出できず、当期に顕在化する排煙調整溝の有無を確認できなかった。窯体構造から排煙調整溝付窯であることは間違いないと思うが、排煙部に付設される溝が斜面下方へと長く伸びなかつたことが、確認されなかつた要因といえる。窯内の記録は土層断面図と平面図、床面の出土状況等、手実測で行い、調査区全体の遺構図（コンタ図）と全景写真は空中写真測量を使った。床面遺物取り上げ後、床面のタチワリ調査を実施。燃焼部付近のみ床下施設が確認されたため、補足的に土層断面図と平面図作成を行なった。

## 第2項 検出された遺構

### 1. 須恵器窯跡の構造特徴

地山掘り抜きの地下式窯である。窯跡立地斜面が26度前後の比較的急な傾斜地で、焼成部上位が畑の削平のためか傾斜が緩くなっている。窯尻の削平箇所で標高45.0m、前庭部末端で40.0mであり、窯跡の比高差は約5mを測る。窯体は等高線にはば直交するように前庭部・焚口から掘り込まれ、焚口から奥へ240cmのところで主軸を5°南へ振る。つまり、焚口から屈曲部までの主軸E-2°-Sが、奥壁までではE-7°-Sと、右にずれる形となっている。当窯はI遺跡と異なり、排煙口が大きく開口する形態で、掘削は前庭部方向からと排煙口方向からの2方向で行なうと予想される。窯の軸が途中でずれるのは2方向掘削が要因であったと理解する。窯体平面プランは細長い紡錘形で、最大幅は焼成部下位付近にある。窯体の推定復元長が12m弱を測る大型窯といえる。以下に各部位の構造について説明するが、詳細な窯跡寸法は以下の計測表を参照いただきたい。

A: 1140 cm	B1 水平長: 残 1064 cm、復元推 1170 cm	B2 実長: 残 1130 cm、復元推 1260 cm	C1 水平長: 残 824 cm
C2 実長: 残 930 cm	D1 水平長: 244 cm	D2 実長: 246 cm	E: 190 cm
H: 窯尻 100 cm	I: 推定天井高 120 cm、側壁高: 50 cm	J: 406 cm	F: 104 cm
L: 残存 12.4 m <sup>2</sup> 、復元 12.8 m <sup>2</sup>	M: 29° (下位 17° → 中位 32° → 上位 42°)	N: -6.5°	G: 130 cm

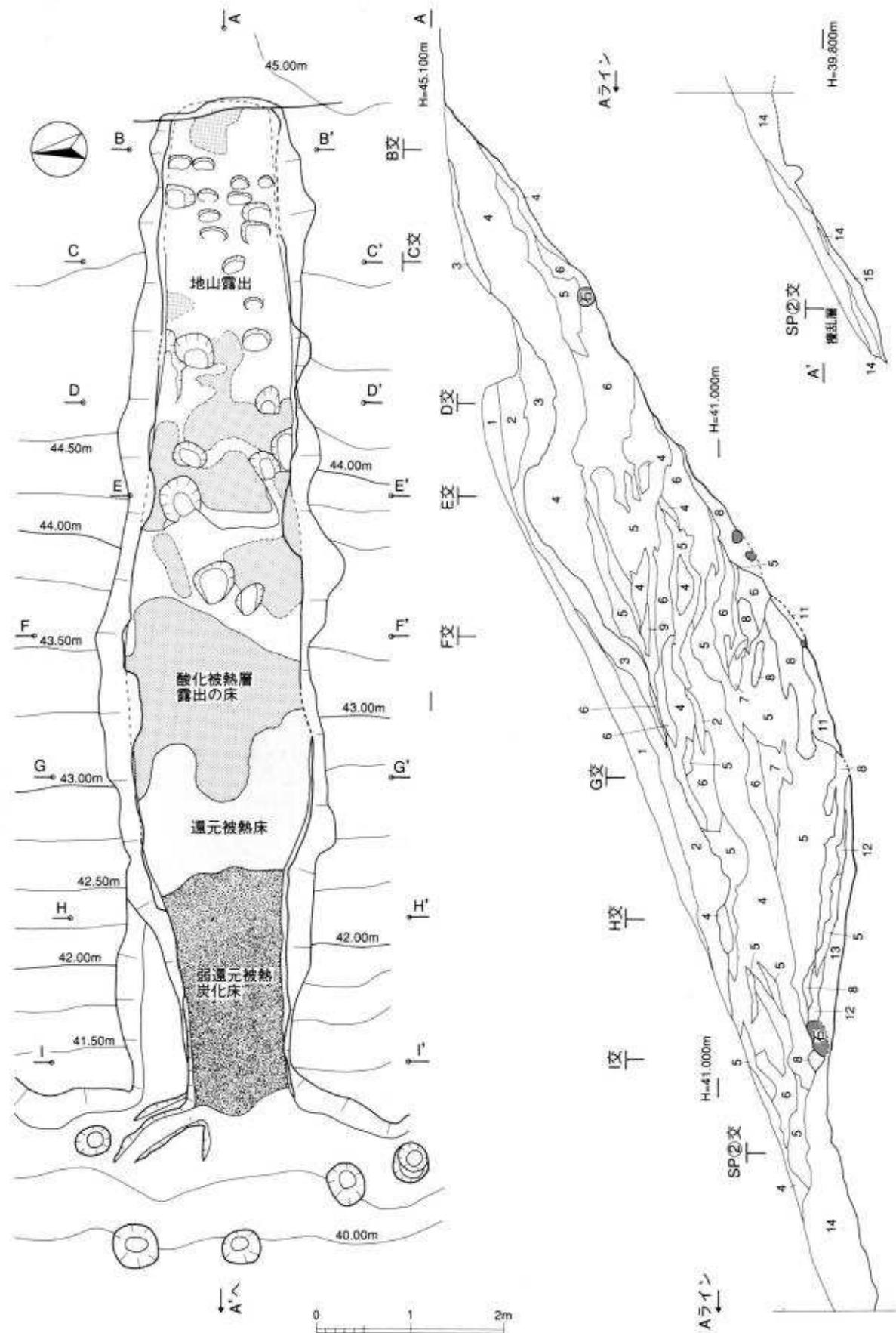
須恵器窯跡計測表（計測値は前項掲載の計測凡例表に基づく）

#### a. 窯尻・排煙施設

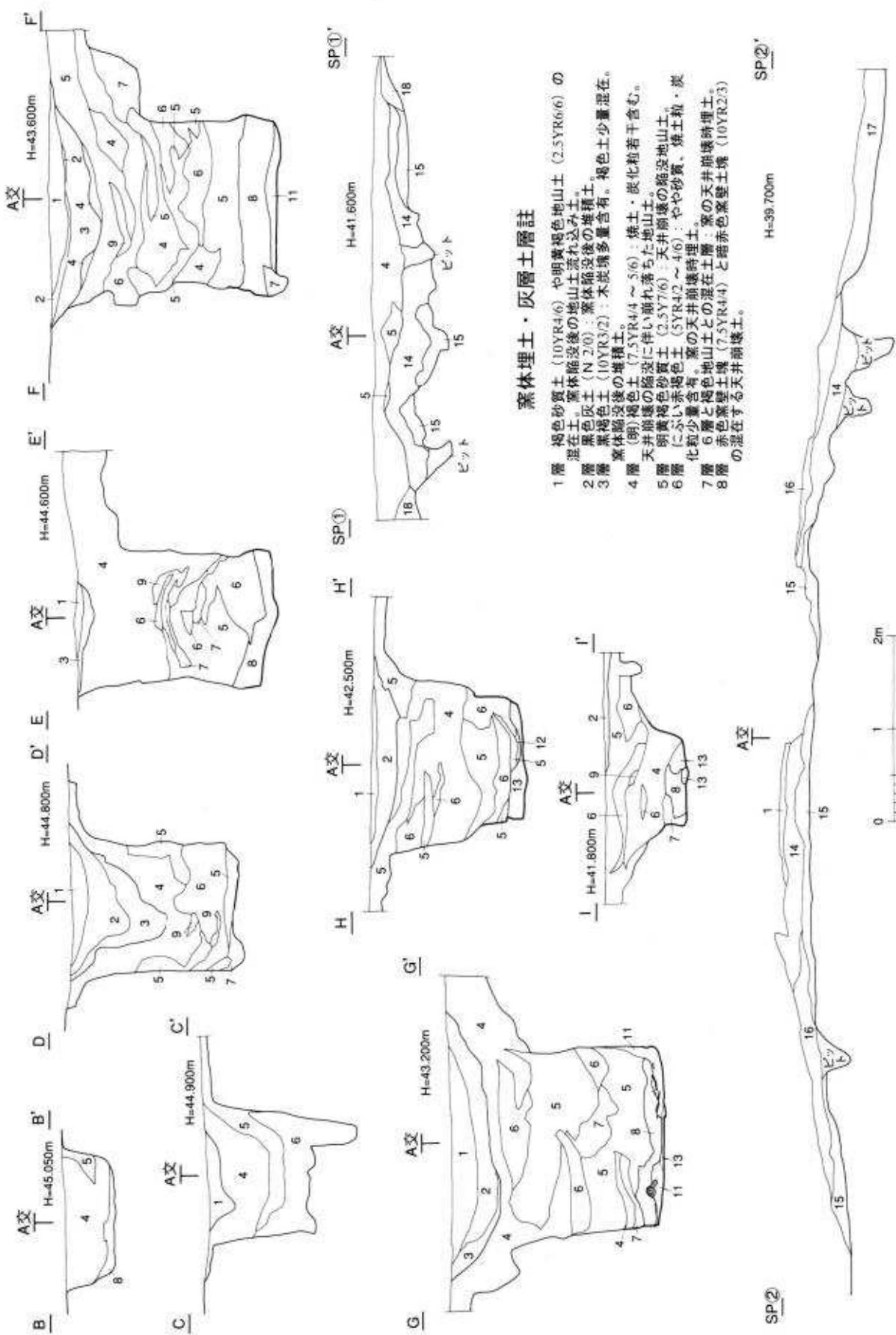
畑開墾で削平を受けたため、排煙部が削り取られている。ただ、この部分の焼成部床面が急傾斜化しているので、排煙口はせいぜい伸びても100cm程度と考えている。窯の全体的な構造から見て、床面傾斜がそのまま増して排煙部が開口する上部開口型とみる。排煙口にはテラス状土坑が掘り込まれ、排煙調整溝が横から連結する所謂「排煙調整溝付窯」（望月1999a）の構造を呈していたものと予想する。ただ、本来なら窯の片側に伸びるはずの溝が確認できていない。排煙調整溝は、北陸では出現当初排煙口に連結した後、焚口方向へ伸びる形態から、短く横に伸びる程度のものへと変化しており、窯尻部の削平によって痕跡を残さずに削り取られてしまった可能性が高い。窯の右側に数段のテラス状があるが、溝に代わるステップ状の通路や作業スペース的なものであった可能性がある。調査所見では、関連遺構との位置づけがなされておらず、詳細については不明といわざる得ない。

#### b. 焼成部構造

脆い砂質地盤に掘り込まれているため、焼成部窯内の遺存状態は悪く、窯壁の大半は剥がれ落ち、床面の被熱層も焼成部下位とそれ以外では部分的に残すのみである。焼成部境から奥へ150cmの範囲で、青く還元被熱した床が残っており、この部分に上から滑落した石置き台や転用置き台、製品、床面の還元被熱砂が溜まっていた。



第252図 J遺跡須恵器窯跡平面図・窯体埋土層縦断面図 (1/60)



それより奥では酸化被熱層が露出したり、地山が露出するが、部分的に残った床の被熱状態（極めて薄く表面のみ暗青灰色還元被熱）を見ると、焼成部境から奥へ580cmまでの範囲は還元被熱状態であったようである。ただ、それより奥では還元が行き渡らずに酸化被熱のままで床が焼けている。操業回数が1回ではないため、どの段階の焼成に伴う製品であるかを判断することは難しいが、床の焼け具合から見て、焼成部中程から奥に関しては、堅敏な焼成を行うことは無理であったろう。ただ、焼成部下位に関しては窯内が還元焼結しており、十分に温度が上がっていたものといえる。長大な窯であったことと大口開口の排煙口を要因として、奥と手前との温度差が大きくなってしまい、それを調整できなかったものとみている。

焼成部下位は砂を敷いたように青砂が存在しているが、これは地山の砂質分が還元焼結したもので、意識的に敷いたものとはみていない。古墳時代の窯では床面の滑落防止に砂を敷くことがあるが、当窯では置台石の使用が滑落防止の方法である。焼成部中位床面（焼成部境から奥へ300cm～600cmの区域）は側壁沿いを中心に配列し、焼成部上位床面（焼成部境から奥へ600cmから窯尻までの区域）は床面全体に渡って置台の配列がある。配列は整然としたものではないが、4～5個の5列程度陥没痕がある。石の遺存するものは少なく、大半は焼成部下位へ滑落しており、原位置で遺存するものも含め、60～70個確認できる。焼成部境から奥へと、置台が設置されない区域（A）、側壁沿いにのみ置台設置する区域（B）、全体に置台配列する区域（C）の3つの区域があり、それは床面傾斜角度（17度の緩傾斜から32度、焼成部上位の42度）の転換点にはほぼ対応している。天井部高の確保も含め、A区は特大貯蔵具中心に大中貯蔵具を窯詰めする方法、B区は大中貯蔵具を中心配列し、側壁沿いに小型貯蔵具・食器類窯詰めする方法、C区は小型貯蔵具・食器類のみを窯詰めする方法と、床傾斜にあわせた窯詰め方法がとられていたものだろう。

なお、当窯では、床や壁面の修復、かさ上げなどは確認できず、地山掘削時の床・壁のままである。

#### c. 燃焼部・焚口構造

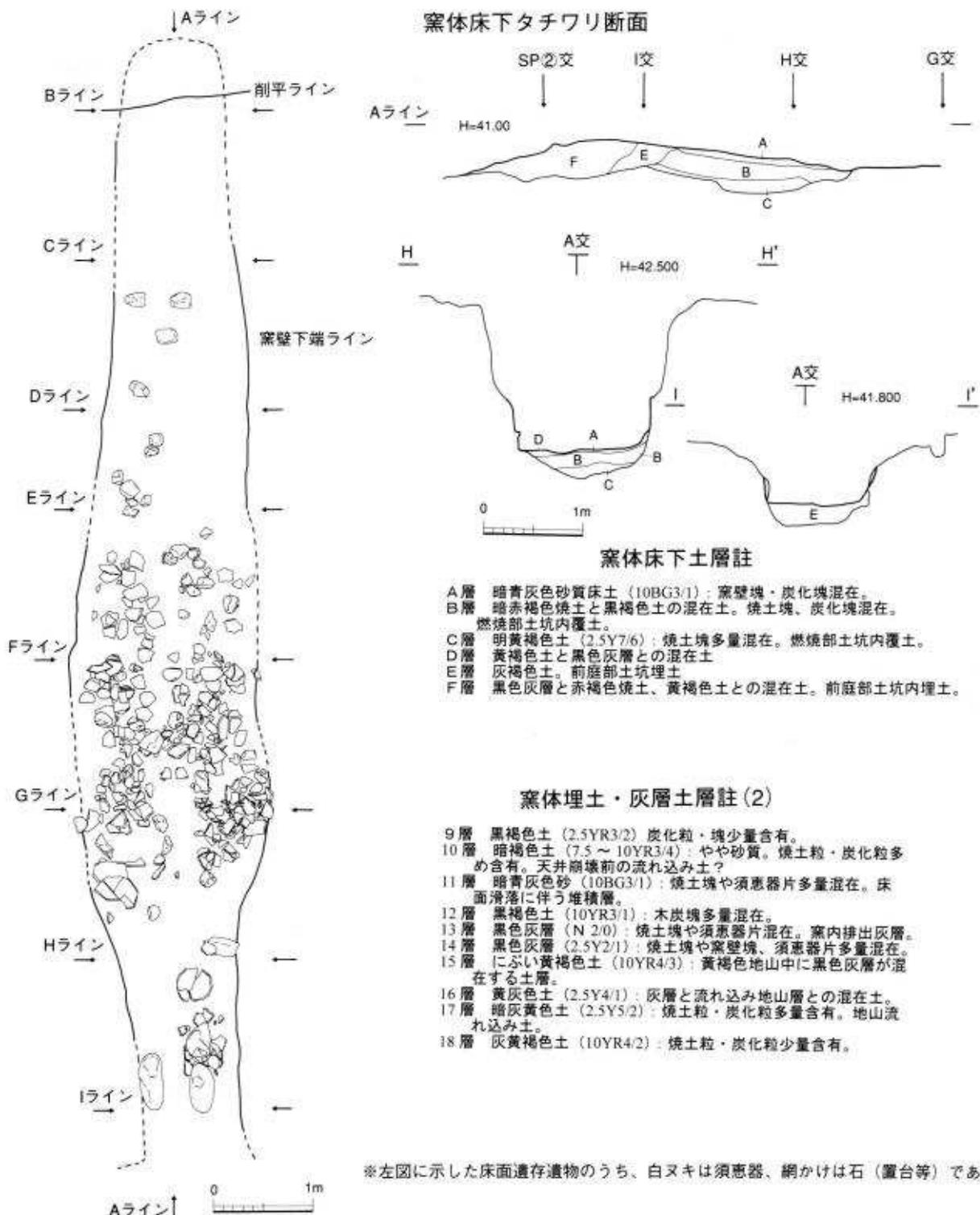
焼成部最大幅190cmから焼成部境130cmへ急激に絞り込むと同時に天井高もこの部分で低く絞り込んでいると予想する。燃焼部は幅110cm程度のまま長く伸び、焚口で104cmと若干絞る。焼成部側壁が内傾してドーム状の地下掘り抜き天井となるのに対し、燃焼部側壁は直立か開き気味の傾斜で立ち上がり、上から掘りこまれる半地下式の構造となる。これまでの調査所見から見て、焼成時には仮設的な天井がかかっていたものと予想されるが、窯出しの度に天井部除去される簡易構造で、焼成部とは構造が大きく異なっていたと予想される。

燃焼部床面、側壁面の被熱状態は、還元被熱するものの、焼成部下位に比べると著しく弱い。側壁では灰白色状に半還元状態に被熱し、壁の上方にむかって還元が弱まる。同様に焚口方向に向かっても、弱まっており、焼成部境を基点に焚口方向へ、床から壁上端へ向かって還元被熱が弱まっていることを示す。床面では青黒く強還元するものの、被熱層は極めて薄く、それは焚口まで一様である。表面の一部は吸炭し、炭化塊が床に食い込んでいる。全体的に還元状態で冷却されているため、閉塞箇所は焚口であることに間違いないが、焼成部下位部分との温度差は歴然である。なお、燃焼部の床下には土坑状の掘り込みが見られる。掘り込みは焚口へそのまま抜けてしまうため、土坑としての立ち上がりをもたず、焼成部境から焚口への傾斜が緩くなった感じのもので、焼成部境付近に見られる舟底状ピットとは存在する位置を含め、様相を異にする。ただ、上面に床を貼って焼成する点など、類似した目的で掘られたものと言えよう。

燃焼部床面直上には幅15～20cm、長さ55cm程度の大きな河原石が置かれている。窯の主軸に沿って、床面中央に1個、その左側壁際に同規模の石を1個、中央主軸上の奥にも短い石を1個並べている。赤変被熱しているため、何らかの形で窯内で使われたものと見るが、床との間に若干の灰層と床敷き須恵器が挟み込まれているため、窯焚き時にはここに存在していなかった可能性が高い。石の出方が並べ置かれた感じを受けるため、燃焼部床構造に関連するものという可能性はあるが、出土位置が焚口近くである点などを見ると、閉塞に使用された石という見方が妥当だろう。

#### d. 前庭部

燃焼部末端が焚口にあるが、それより手前の平坦部分が前庭部にある。山側の焚口両サイドを幅約7mの範囲で、不整規円形状に掘り込み、手前3mの範囲で平坦面を形成するだけで、しっかりとした形状をもっていない。操業時の床面は谷側へ緩く立ち上がるが、この面の下には土坑が掘り込まれており、須恵器を多量混在する灰層を埋めて整地されている。整地面の下には、大小の土坑、ピットがあるが、柱穴状のものは確認できない。



第254図 J遺跡須恵器窯跡床面出土遺物平面図（左）・窯体床下断面図（右）（1/60）

なお、焚口から前庭部左側壁際へ細い溝が伸びており、斜面下方へ排水するようになっている。これに関しては、整地面から掘り込まれたものである。

## 2. 須恵器窯体内埋土と灰層

窯体内埋土は、窯内から排出される黒色灰層（13層）、還元焼結した床面砂の滑落溜まり層（11層）、窯の崩落に伴う被熱した天井・窯壁塊混在層（8層）、窯の崩落陥没に伴う地山埋没土（4・5・6・7層）、地山陥没後堆積した黒色土層（2・3層）に概ね分けられる。還元焼結の床面砂の溜まりは焼成部下位に10cm程度の層を形成し、その中に須恵器が多量混在する。先述したとおり、地山砂が焼結したものであり、意識的に砂を敷いたものではないが、中・大甕の底部痕跡から、この部位での大型製品滑落防止に使っていたものだろう。燃焼部床直上層は、操業に伴う黒色灰層で、焼成部境付近から焚口へ向かって徐々に層を厚くし、窓外の灰層（14層）へ続く。前庭部平坦面を中心に厚く堆積しており、最大で60cmを測る。前庭部下方の傾斜地へは厚さ20~30cmと、若干層を薄くするが、灰原分布範囲は広がり、幅7mに及ぶ。調査区末端では10cm程度となり、純粹な灰層はこの辺で切れるが、土器包含層は、さらに斜面下方へ伸びる。窯壁塊混在の被熱天井崩壊層は、これら焼成部下位の還元焼結砂層の直上、焼成部中位床の直上に存在する。30cm程度の厚さを測り、一部は流れ込むように、焼成部境付近の灰層直上にものる。焼成部上位ではこのような天井崩壊土は確認できず、地山崩落埋土が直接のものだが、それはこの部位での急傾斜床面によって、焼成部下位方向へとズレ落ちたためであろう。

## 3. 遺物出土状況

遺物は当窯で生産された、ないしは使われた須恵器が大半であり、灰原（前庭部含む）から8割、窯体内から2割出土している。器種によって、出土地点に偏りがあり、中小型貯蔵具で灰原出土率高く（9割）、大・中甕などの大型貯蔵具や食膳具でやや低くなっている（灰原出土率6~7割）。窯内で置き台や棚板使用される坏Hや甕片の存在が割合を高くしているもので、最終操業時の製品の偏りを示すものではないと考える。窯内出土の大半は燃焼部灰層や床面直上層で、窯体埋土から出土することは極めて少ない。

灰原出土は、窯主軸上のD・E列で少なく、その両サイドのC列とF・G列で多い。窯主軸上に大きな搅乱が入ることが主要因と言えるが、灰層堆積自体、両サイドで厚い傾向をもつ。窯主軸上の前庭部中央から両側へ緩く傾斜する地形に要因があろう。須恵器食膳具、中小型貯蔵具については、両側の灰原から偏りなく出土するが、中甕・大甕の大型貯蔵具については、F・G列に偏る傾向がある。灰原グリッド間での接合関係は、比較的広範囲に接合するものが多く、大型貯蔵具ではF・G列の11~13グリッドの中で広く接合する。食膳具ではB・C列、F・G列でそれぞれ接合する傾向があるが、大型貯蔵具ほどではなく、隣接グリッド間が大半である。以上のような、灰原廃棄のまとまりや器種偏在性は操業廃棄単位を物語る可能性をもつが、一部C列とF・G列で接合する事例もあり、単に、前庭部を基点として、その周辺の窓みへ失敗品を捨てた状況だったのかもしれない。

なお、当窯須恵器には、次項で述べる生焼品と焼結品とあるが、灰原で生焼品43%、焼結品57%と（図化遺物での比率、以下同様）、焼結品率が高い傾向をもつ。これに対し、窯内出土のものは、生焼品68%、焼結品32%と、割合が逆転している。窯床遺存須恵器は、最終操業段階に伴うものであり、窯内出土の大型貯蔵具の生焼け状態を見れば、窯内全体において十分に温度が上がらなかったものと予想される。生焼品は製品として窯詰めされたもの、焼結品は置き台として使用されたものだろう。特に、129の大甕は置き台転用した破片と置き台として使用していない灰原出土破片とが接合しており、焼き色の差が明確である。灰原出土破片も堅密に焼成されており、灰原における大型貯蔵具の焼結品率の高さなどから見て、最終操業以外では十分に温度が上がり、堅密に焼成できたものと予想する。ただ、窯内被熱の様子から焼成部上位で十分な温度上昇を得たことはなかったようで、灰原出土の生焼品は、その部位での窯詰め品である可能性がある。

## 第3項 出土した遺物

### 1. 出土遺物の概要と器種構成、胎土特徴

#### a. 概要

当遺跡から出土する古代の遺物は、全て須恵器窯跡関連遺物である。遺物箱で70箱程度出土しており、数点の土師器と土製品以外は全て須恵器で占められる。土師器は非クロ成形の内面黒色しない椀で、外面手持削り、

内面粗い磨き調整を施す。前庭部からの出土で、還元被熱していることを考えれば、窯内で置き台として使用されたものだろう。須恵器窯と同時期の土師器と見てよい。

須恵器は全体的に作りがよく、薄く精巧に作られている。食膳具や小型貯蔵具はもちろんあるが、中型・大型貯蔵具においても、薄手の作りのものが目立つ。とくに、薄く成形することが困難な叩き成形の横瓶や甕において、器壁を薄く叩き上げて仕上げている。軽量であり、極めて良質な製品といえる。須恵器製作の高い技術もそうだが、可塑性の高い粘土を使用しているためであろう。ただ、焼き歪みの激しい須恵器が多く、耐火度が低い粘土であった可能性がある。それは能美窯の特に和氣支群全体にいえるものであろう。

須恵器の焼成具合については、前項で触れたように、酸化焰焼成ないしは還元焰でも極度に焼きの弱い、生焼品（焼成1・2）と十分に堅緻に焼け締まった焼結品（焼成3～5）とに分けられる。生焼品は酸化生焼け、白色ないしは灰白色の還元生焼けなどがあるが、基本的に温度上昇不十分な焼成品である。最終操業などの焼成失敗品と排煙口近くなどの窯詰め位置によるものもある。焼結品も、還元焼結と酸化焼結とあり、いずれも十分堅緻に焼け締まったものである。温度上昇が十分な焼成に伴う製品と判断されるが、これに関しても窯詰め位置によるし、また、もともと還元焼結した須恵器を転用置き台として窯詰め使用したものもある。量的にはほぼ半々の割合で存在し、窯内では生焼品が68%、灰原では焼結品が57%を占める。

さて、この生焼品と焼結品だが、法量を比較すると明らかに同一器種でも生焼品がひとまわり大きい。第255図の法量分布図を見ると一目瞭然で、生焼品の白丸と焼結品の黒丸とでは明らかに分布域が異なる。I遺跡窯出土須恵器の説明でも指摘したが、生焼品と焼結品の法量差は焼成不十分のためにによる1割の未収縮によるものである可能性が高い。生焼品法量に90%をかけると、ほぼ焼結品圏内に入ることとなり、分布が一つの領域としてまとまってくる。製品としての仕上がりを、還元焰で硬質に焼き上げようと意識して作っていたとすれば、生焼品法量については、数値補正の必要があると考えている。以下で、個別に法量などの検討を加える際には、上記の理由に基づいて、生焼品法量に補正值90%をかけた数値で述べてゆくこととする。

#### b. 器種構成

以下の表は、窯や灰原など出土地を分けずに、一括して須恵器の器種構成を示したものである。口縁部計測法による測定値での数値割合により算出しており、蓋付き器種は量の多いほうを選択し、種内率、種別率を示した。

まず、種別構成では、食膳具率の低さが目立つ。南加賀窯跡群で同時期に位置付けできる林タカヤマ窯の構成比（食膳具等73.2%、小型貯蔵具4.9%、中型貯蔵具11.5%、大型貯蔵具10.4%）と比べると、その差は歴然である。初期須恵器生産段階または在地窯出現期では、食膳具等が半数以下に止まる状況も見られるが、7世紀以降は7割前後の占有率となるのが一般的といえる（林オオカミダニ窯資料）。つまり、当窯の貯蔵具比率の高さが異常であったわけである。一つの要因として、最終操業廃棄生焼品の中に、略完形の大型貯蔵具が多く含まれることをあげるが、小型・中型貯蔵具品の比率も同様に高く、よい遺存状態の貯蔵具が多いことだけが要因ではない。能美窯跡群内の出現期にあたる窯であることを考えると、実態としても、貯蔵具生産率が高い窯であった可能性はある。越中の様相は不明だが、北加賀から能登、越中地域の一般集落における7世紀前半代の食膳具中須恵器率の低さから考えて、北加賀以東地域では当期までは、須恵器は依然として祭祀的要素が濃い土器として位置付けられていたものと予想する。

次に、種内率だが、食膳具では壺Hが過半数以上を占め、つまみ蓋をもつ鏡・壺Gなどは少ない。ただ、つまみ蓋付き器種の定量存在期であることは確かで、定型化された壺Gの存在も確実であるし、法量の大きな鏡蓋の存在から、壺Bへと繋がる台付鏡の存在も想定される。また、壺H蓋の逆転器形を呈す碗Gの出現も想定される。

器種名	壺H蓋	壺H身	壺G蓋	壺G身	鏡 蓋	碗 G?	高 壺	鉢 F	匙	小型壺	平 瓶	壺	横 瓶	小 壺	中 壺	大 壺
口縁値	388	553	74	68	30	22	123	41	38	90	169	97	107	173	329	187
種内率	65.6%		8.8%		3.5%	2.6%	14.6%	4.9%	29.7%	70.3%	30.9%	17.8%	19.6%	31.7%	63.8%	36.2%
種別計	食膳具等 843 (41.5%)							小型貯蔵具 128 (6.3%)				中型貯蔵具 546 (26.8%)				大型貯蔵具 516 (25.4%)

J 遺跡須恵器器種構成表（口縁値は口縁部計測法による○/36 数値、種内率は食膳具、小型貯蔵具、中型貯蔵具、大型貯蔵具内での占有率。）

量比として注目されるのは、高坏率の高さで、小型高坏として当期にこれだけの占有率を占めるのは、稀である。北陸の中では高坏率の高い南加賀窯よりも多く、当窯の特徴といえるものかもしれない。小型貯蔵具では躰が減少し、小型壺が増加傾向にある。躰が定量を占めるのは当期までで、その中では多いほうであろう。中型貯蔵具では提瓶は確認できず、消滅段階にあり、その代用器種として平瓶が増加して高い比率を占める。当期の南加賀窯と比較すると、平瓶と提瓶の率に違いはあるが、他の器種では大きな差はない。壺と小甕の率が若干違うだけである。壺と小甕については、容量・器形とも互換性を持つ器種であり、7世紀後半以降、小甕が増加傾向をもつことを考えると、その移行期であるのかもしれない。なお、中甕、大甕の比率に関しても、全体的に量が多い傾向にあるが、林タカヤマ窯の比率と同様である。

### c. 胎土特徴

能美窯跡群の胎土は、全体的には細かく緻密な素地で、砂粒の混入が少ないことを特徴とする。その中で、当窯胎土は粘土素地が細かい方で、ややシルトがかるが、緻密な質感をもつ。和気支群の胎土に似るが、それよりはやや緻密さに欠く。また、能美窯跡群の胎土によく混在する白色のクズ石についても、和気支群よりも、前述したI遺跡に比べても多い。胎土分類した記号で示せば、A・Bをクズ石少ない胎土、C・D・Eをクズ石多い胎土とすることができる。図化した遺物の器種別胎土構成を示したもののが以下の表だが、中型・大型貯蔵具でクズ石多い胎土が9割程度の高い率を占めることがわかる。小型貯蔵具はクズ石少ない胎土が過半数を占めるが、小型壺についてはクズ石多い胎土主体であり、中型貯蔵具の胎土構成にはほぼ等しい。これに対し、躰はクズ石少ない胎土で占められ、これまで述べた貯蔵具胎土とは様相を異にする。これは食膳具に近い胎土特徴であり、成形方法の違いに起因するものだろう。食膳具等全体では、過半数をクズ石少ない胎土が占めるが、クズ石多い胎土も35%存在している。ただし、高坏と坏G・鉢・椀Gに限れば、95%をクズ石少ない胎土が占めており、クズ石多い胎土は坏Hと鉢に限られる。鉢に関しては、小型貯蔵具の理解と同様といえるが、坏Hでクズ石多い胎土が過半数を占める状況は成形方法と直接的に関連するものではない。当窯に限って言えば、坏Gや鉢の精製品に対する粗製品の位置づけや一般集落供給用食膳具という位置づけだったのかもしれない。中・大型貯蔵具にクズ石多い胎土を使用することは、紐積み叩き成形する器種であることが要因といえる。ロクロ水挽き成形の小型品と粘土の質を変えることは当然行なわれたことだろう。適した粘土を生成するため、意識的に混和材などを入れたり、逆に不純物を除去したりして胎土調合したか、そのような質の粘土を選択使用したものと予想する。

胎土 種別	A類胎土	B類胎土	C類胎土	D類胎土	E類胎土	計
食膳具・坏H	9(21.9%)	9(21.9%)	4( 9.8%)	5(12.2%)	14(34.1%)	41
食膳具等・その他	21(60.0%)	11(31.4%)	1( 2.8%)	0( 0.0%)	2( 5.7%)	35
小型貯蔵具	4(33.3%)	4(33.3%)	0( 0.0%)	1( 8.3%)	3(25.0%)	12
中型貯蔵具	1( 4.3%)	2( 8.7%)	2( 8.7%)	9(39.1%)	9(39.1%)	23
大型貯蔵具	0( 0.0%)	2( 7.4%)	2( 7.4%)	2( 7.4%)	21(77.8%)	27

J 遺跡出土須恵器種別胎土構成表（数値は図化した須恵器の個体数、胎土は観察表凡例による）

## 2. 各器種の検討

### a. 食膳具等

食膳具は全てロクロ成形品で、底部切り離しが回転ヘラ切りによるものである。成形時のロクロ回転方向は25の坏Hが左回転であるのを除いて、全て右回転である。回転削り方向も全て右回転、観察表で特に示さないものは、底面回転ヘラ切りのままか、ヘラ切り痕をナデ消す程度の調整である。

〈坏H〉 底部に切り離し工具の差込みを行ない、切り離し面を小さくしてから、ヘラ切りを行なうものが多く、その際の工具差込み痕跡が削り状に残る。菱田哲郎氏の言う補助削りであり、底部を丸く成形する新型坏H成形方法のものである（菱田 1990、北野 1993）。当窯ではこの技法による坏Hのみが存在し、多くの個体で補助削り痕跡を残す。当器種は蓋と身とあるが、身の出土量が多い。蓋・身とともに法量にはらつきが少なく、ほぼ1法量にまとまる。口径は蓋で9.5~11.5cm、身で8.5~10.5に分布し、ほぼ蓋は10cm台に、身は10cm前後にまとまりをもつ。身の受け部径は10.6~12.6cmで、11cm台に集中し、口径より2cm弱大きい。

蓋は全体的に器高低く、底部境の明瞭なものは少ない。全体的に丸みをもち、比較的均質な器形を呈す。ただ、

口縁部器形に若干の違いがあり、口縁部にロクロヒダ状の境をもつ A 類と、天井部から口縁部までなだらかに移行する B 類に分類できる。さらに、A 類は口縁部長くそのまま薄くなる A1 類 (1・2・4・7・17~20) と口縁部長く反り気味となる A2 類 (3・8~12)、口縁部短い A3 類 (5・6) とに細分でき、B 類は扁平器形の B1 類 (13) と深い器形の B2 類 (14~16) に細分できる。A 類が主体を占める器形と言え、なかでも A1 類と A2 類が多い。

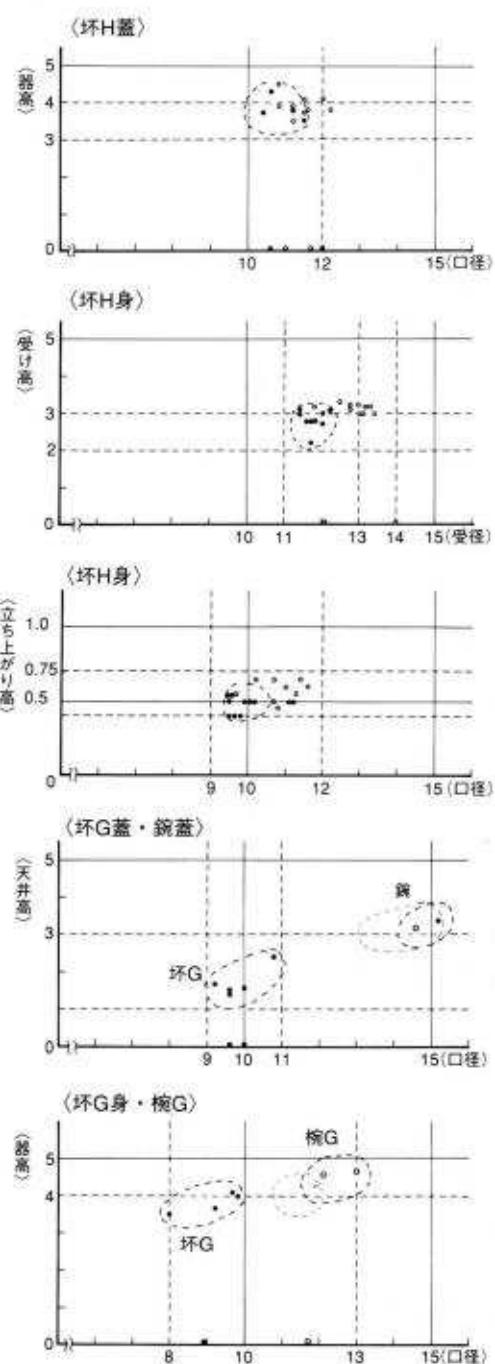
身も蓋と同様に、全体的に丸みをもった均質な器形を呈するが、25 のみは底部の厚さや口縁部立ち上がりの特徴などから、若干異質な感じを受ける。ロクロ回転方向も左周りであり、系統の違いを感じさせる。これ以外は口縁部と受け部の器形より、受け部から口縁部内傾して反り立ちする A 類と受け部短く、口縁部薄く内傾する B 類に分類できる。A 類は立ち上がり基部太く断面三角形状となる A1 類 (26~29・32・35) と基部がやや薄く反って立ち上がる器形の A2 類 (30・31・33・34・36~41) とに細分でき、B 類は扁平器形を呈す B1 類 (23・24) と深身器形の B2 類 (21・22) とに細分できる。蓋と身の溶着資料ないしは重ね焼き資料がないため、確実ではないが、器形特徴との対応関係から、各同類アルファベット記号の蓋と身がそのまま蓋身セット関係をなすものと予想する。なお、当器種の重ね焼きだが、口縁部を合わせ口とする I 類を基本とするが、身の底部側に蓋を重ねる II 類方法が定量確認される。そのまま何個も重ねるのではなく、1 個体の蓋と身を重ねるだけで、違いはないのだが、この重ね方についても、7 世紀に入つて見られるものである。坏 H 蓋の身としての使用が一般化することによって出現してきた重ね焼き方法なのだろう。

**《坏 G》** 精製品であり、胎土・作りともに坏 H とは異なる。天井部、底部を回転削りで丁寧に調整するものが多く、自然釉のかかり具合からみて、高火度還元焼成が可能な場所へ意識的に窯詰めしている。蓋で口径 9~11 cm に、返り径 7~9 cm に分布し、身で口径 8~10 cm に分布する。

蓋は、返りがやや短くなっているものの、口縁部端より下に出ている。器形により、全体的に扁平器形で、受け部長めに広がる形態、返りが基部厚く短く反る断面三角形状呈す A 類 (43~49) と全体的に深く丸みをもつ器形で、受け部短く、返りが薄く長めに反る B 類 (42) とに分類できる。B 類のほうが丁寧な作りをしており、A 類で天井削りを施すものと施さないもので細分できる。いずれもつまみを欠損するが、鏡蓋に近い宝珠形つまみか、乳頭状のやや形崩れしたつまみがつくだろう。A 類に比して B 類は大ぶりであり、全体的に器高が高い。

身についても、深いものを B 類 (50) とし、蓋の B 類と対応するだろう。A 類はそれよりやや浅いが、体部直立気味に作られ、全体的に薄く作られている。削りを施すか否かで、蓋と対応するものと考えている。重ね焼きについては、全て I 類である。

**《鏡》** 鏡身として図示した 56 は小破片であり、詳細は不明である。蓋は当鏡身に伴うものとは考えていない。鏡蓋は坏 G 蓋と同様のつまみ付返り蓋であり、口径が 13~15.5 cm とひとまわり大きい。第 256 図に示したような台付鏡の蓋と予想する。台付鏡の出現は、TK209 型式期にあり、後に坏 B に繋がる器種と位置づけられて



第255図 J遺跡窯跡出土須恵器食膳具  
法量分布図

る。福岡県牛頭後田窯のものは壺Bに器形がかなり近づいているものだが、福井県王子保5号窯の台付鉢が北陸併行期のものであり、このような器形を予想している。蓋の器形は壺G蓋B類に類似して全体的に丸みをもつ54と口縁部がやや反り気味に開く55とがあり、前者がやや小ぶりである。

《椀G》 壺H蓋に類似する器形のものだが、底部厚手で、口縁部が屈曲や一部の肥厚などなく、そのまま薄く仕上げられるものである。壺H蓋よりも口縁部の作りが丁寧で、内面も平滑に作られるなどの理由から、身として考えたものである。口径は壺H蓋よりもやや大きめだが、分布域内である。

《高壺》 有透かし脚の大型高壺はなく、無透かし脚の小型高壺に限られる。壺部の確認はしていないが、70・71は低脚の有蓋高壺と思われる。無蓋高壺は、壺部口径9~11cm、脚部径9~11cm、器高12cm程度のもので、体部に稜を形成するA類と稜形成しないB類に分けられる。A類は体部上位と底部境に各1~2段の稜を形成する椀形呈すA1類(62)と体部中位と底部境に稜形成する体部外傾器形のA2類(59~61・63)、底部境にのみ稜を形成する壺形器形のA3類(64)に細分できる。B類(65)は底部削り調整する壺形のもので、やや深身に作られる。

脚部は細い基部からラッパ状に裾広がりする器形だが、そのまま脚端で外縁に面形成するA類(66~68)と裾で強く広げてから端部を下へ折り曲げるB類(69)に分類できる。両類型とも沈線を中程と脚下位に数条施す。

《鉢F》 厚い円盤状底部をもつ厚底鉢である。底部円盤は厚く定型化しつつあるが、底面刺突は確認できない。

#### b. 小型貯蔵具

《越》 口径8~10cm、胴部径8~9cm、器高14~15cm程度の法量をもつ。胴部、口頸長ともにだいぶ小型化しており、最末期的様相を持つ。胴部の沈線文や列点文装飾はなく、頸部沈線装飾も失われている。全体的に薄手で、頸部はやや太く作られる。口縁部器形より、そのまま外傾するA類(75・76)と口縁部立つB類(77~79)に分けられる。

《小型壺》 口径9~10cm前後、胴径12~14cm、器高9~10cm前後の小型短頸壺である。無蓋器種で、やや広口の鉢状器形を呈す。林タカヤマ窯で多く出土しており、この時期の特徴的な器種といえる。全体的に薄手の作りで、底部は回転ヘラ切り痕をそのまま残し、丸底には成形していない。口縁部内面に沈線状くぼみや胴部上位に沈線を施すなど、金属器的な器種といえる。

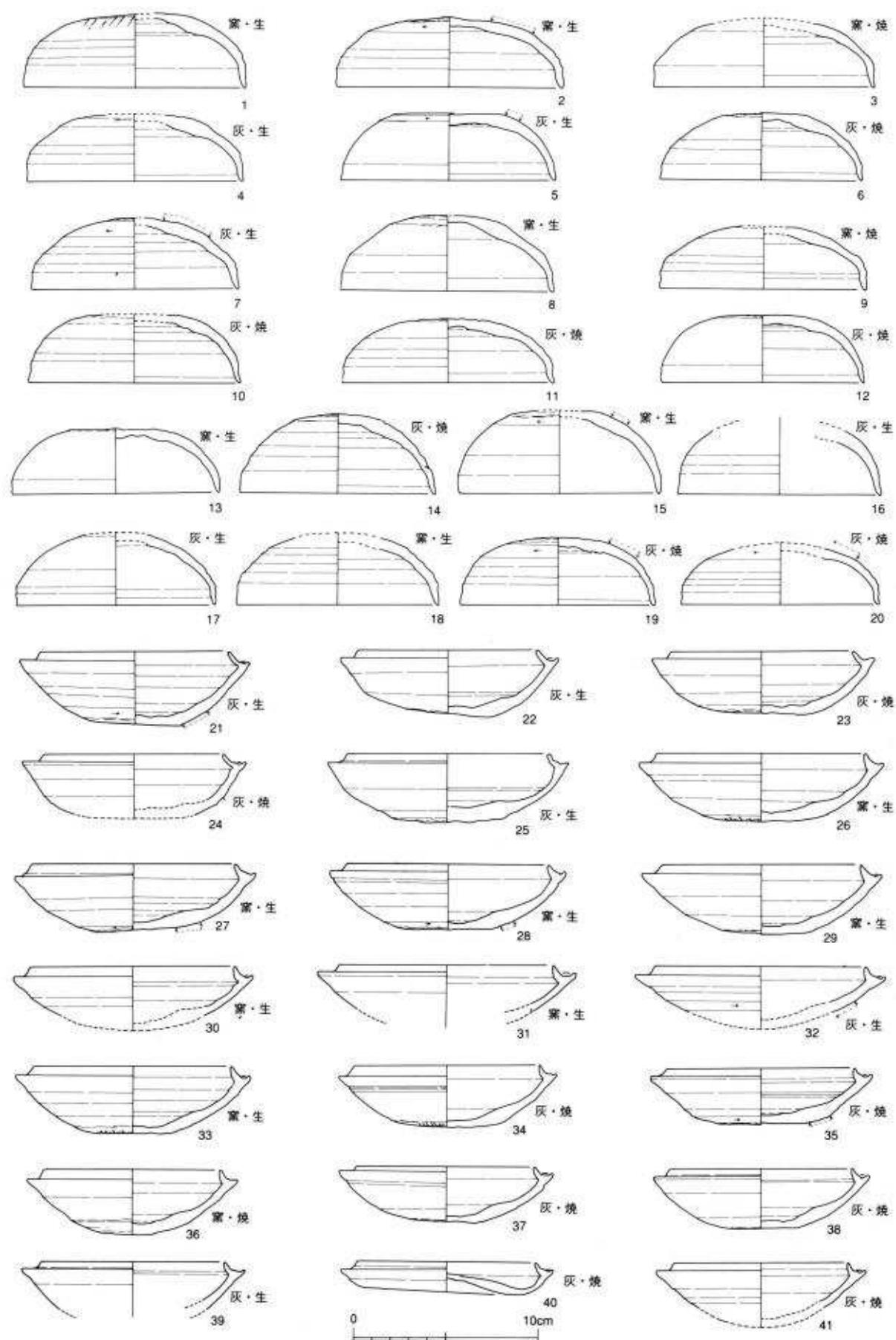
#### c. 中型貯蔵具

《壺》 底部を内面から指や工具によって押し出して丸底状にする壺で、外面削りなどによって胴部を球形にするものもある。口頸部は短頸を呈すが、器形により3類に分けられる。A類(93~96)は口頸部がやや長めで、狭口気味となる6世紀的な壺器形で、口頸部や胴部上位に沈線文装飾を施す。B類(97)は口頸部直立する短頸壺器形で、有蓋の可能性がある。C類(98)は口縁端部に面を形成する広口壺である。A類が主体であり、量産されるのは当期までである。

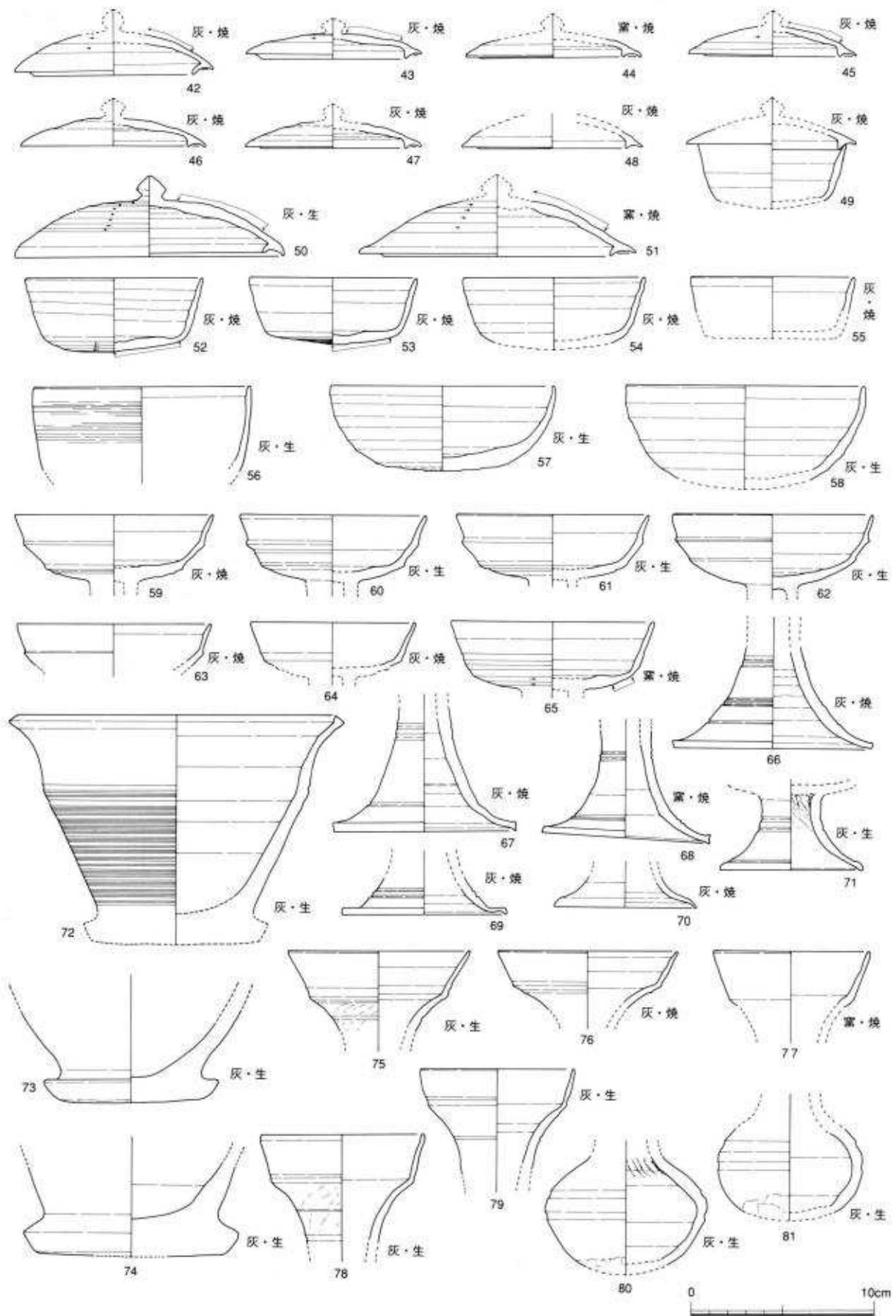
《平瓶》 法量分化する以前の平瓶である。出現期に見られる胴部上位の径と底部径が同様な提瓶胴部器形を呈す平瓶よりも胴部上位が張り、底部へ若干窄まる器形へ変化している。ただ、口頸部が提瓶状の口縁端部内湾器形を呈す点や胴部上半のカキ目調整など、出現期の様相を引きずっており、7世紀後半代の定型化された平瓶とは器形が異なる。胴部中央の閉塞箇所に粘土紐を薄く引き延ばして貼り付けた事例(87・88)があり、装飾的なものとみている。提瓶の把手が退化した時に見られるボタン状の装飾に近いものであり、この点も提瓶の様相を残す点といえる。成形方法では、胴部上端をかなり絞り込んでから小円盤で閉塞しており、とくに89はほぼ絞りきりに近いものである。絞り込んだ際の縮みジワが内面に残るものが多く、閉塞円盤には粘土塊を掌で円盤状



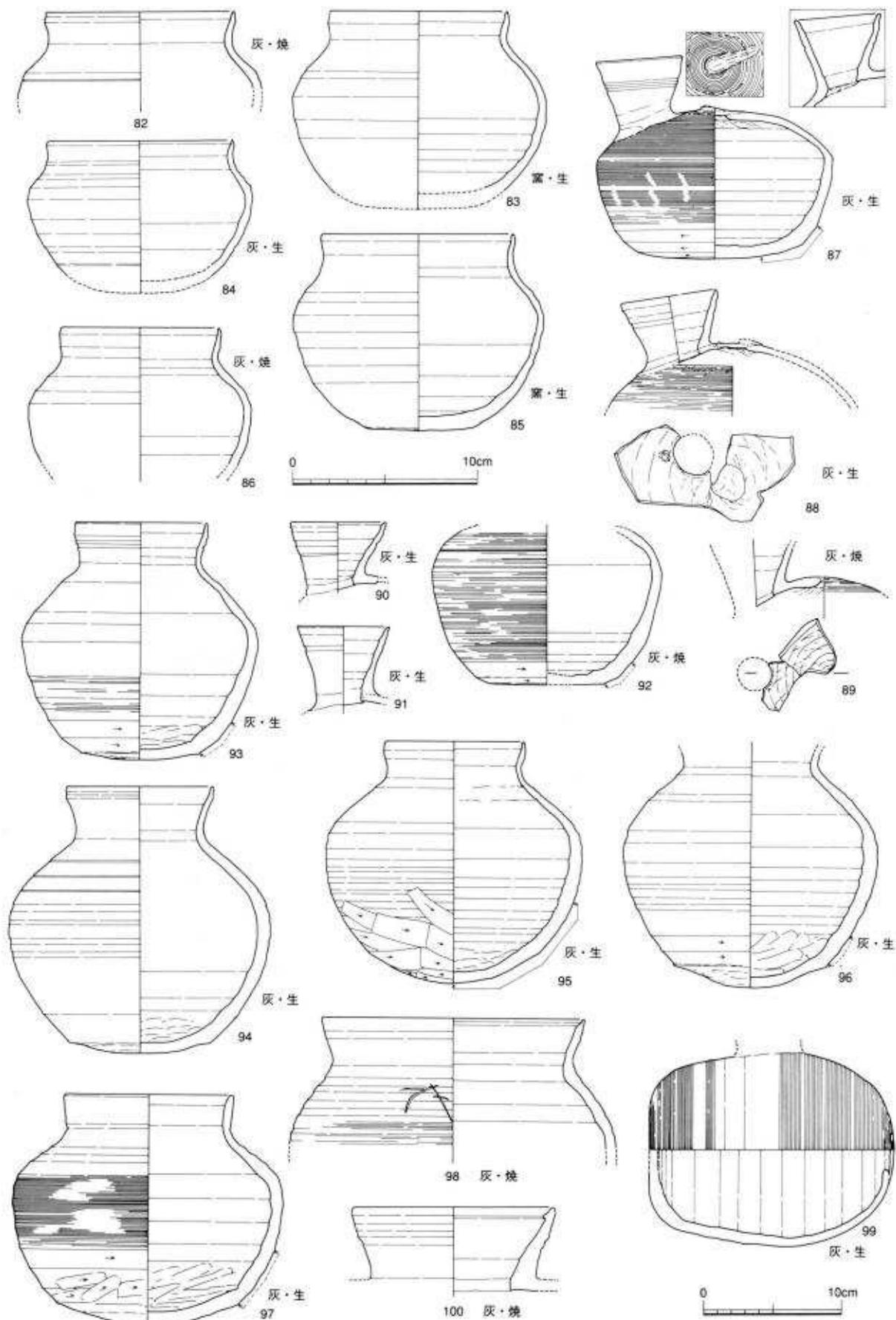
第256図 各地出土の台付鏡 (1/4)  
福岡県牛頭後田46-1号窯出土



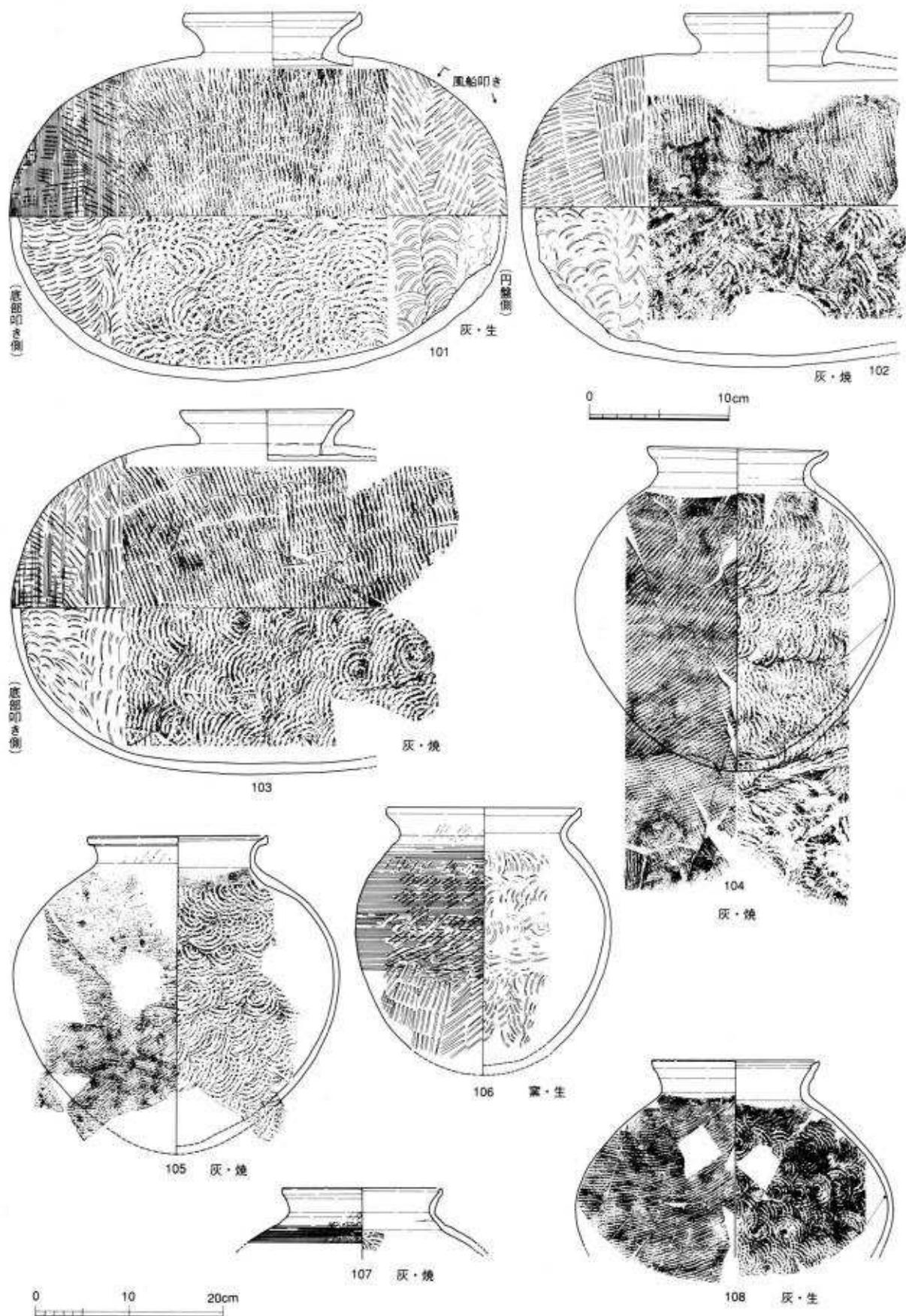
第257図 J遺跡須恵器窯跡出土須恵器1 (1/3、窯—窯体内出土、灰—前庭部・灰原出土。生—生焼品、焼—焼結品。)



第258図 J遺跡須恵器窯跡出土須恵器2 (1/3、窯-窯体内出土、灰-灰原・前庭部出土。生-生焼品、焼-焼結品。)



第259図 J遺跡須恵器窯跡出土須恵器3 (82~86:1/3、87~100:1/4、窯-窯体内出土、灰-灰原・前庭部出土。生-生焼品、焼-焼結品。)



第260図 J 遺跡須恵器窯跡出土須恵器 4 (101~103: 1/4、104~108: 1/6、窯-窯体内出土、灰-灰原・前庭部出土。生-生焼品、焼-焼結品。)

とした際の掌紋痕が残っている。なお、88の胸部には外側から穿孔した小円孔を小粘土塊で塞いだ痕跡がある。塞いだ後に、外面はカキ目を施すため、痕跡を残さないが、内面に成形時痕跡を残す。胸部を円盤閉塞した後に、胸部上位の張りや底部の形、器高を調整するため、風船状となった胸部を空気調整しながら変形させる技法であり、これを風船技法（北野 2001）と呼んでいる。88の小円孔はその際の空気抜き穴であったとみている。多くは口頸部接合近辺に開けられており、そのような痕跡を残さないものでも、口頸部接合箇所にあたる円盤切り抜き部分に穿孔されていた可能性がある。切り取り円盤に小孔の残るものがあり、それを物語る。

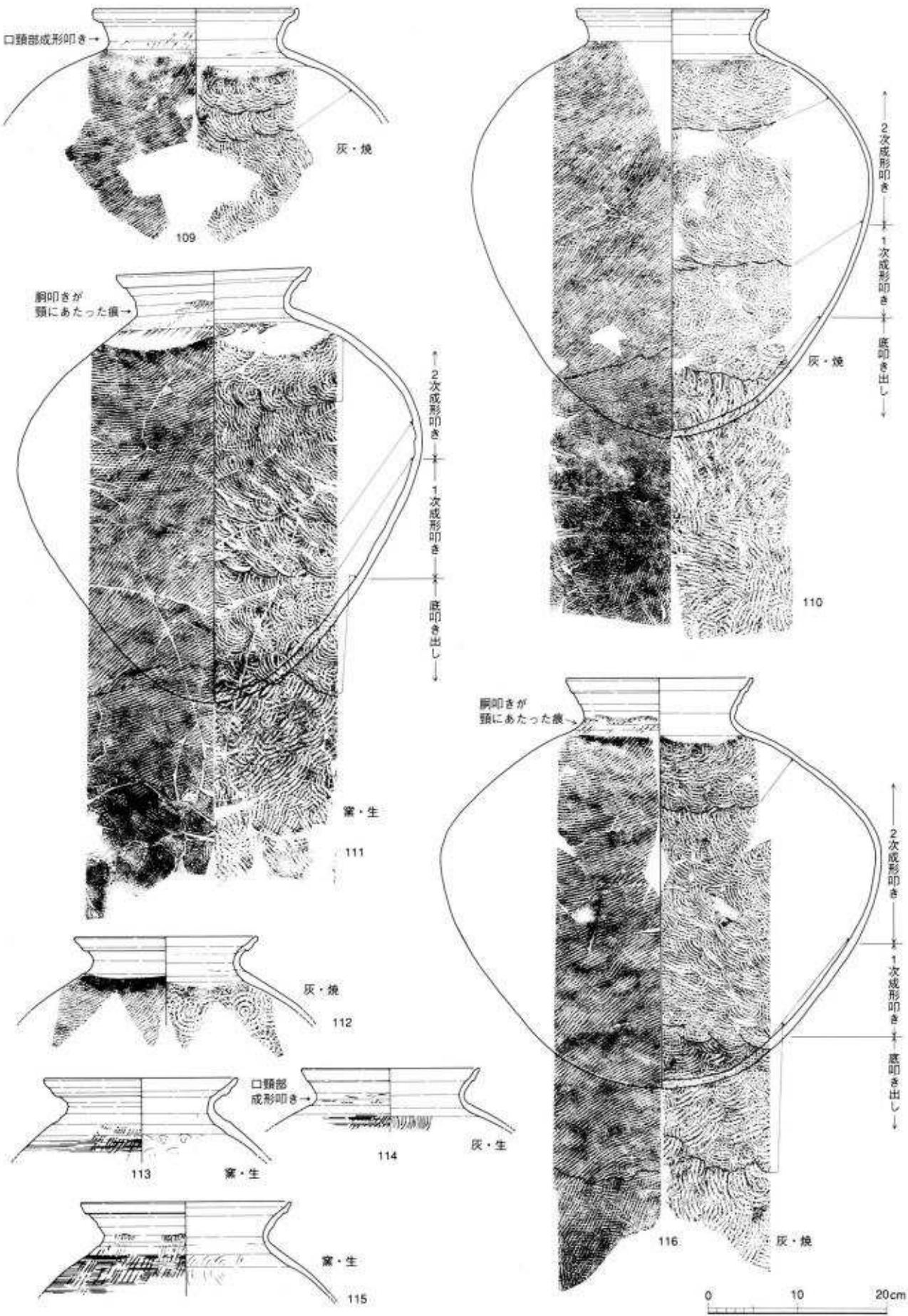
《横瓶》 全て片面閉塞横瓶である。胸部叩き成形による大型横瓶と胸部紐積みロクロ整形の小型横瓶がある。大型横瓶は胸幅 35 cm 程度のもので、器高 26.3 cm 程度を測る。略完形の 101 をもとに成形技法を復元すれば、胸部は紐積み叩き成形（横軸叩き）を基本とし、胸部上端まで積み上げた後、底部側を丸底に叩き出す（縦軸叩き）。底部側を上にロクロに固定し、丸底叩き出し部分のみカキ目でさらに丸くする。底部を下にして、胸部上位のみ閉塞のための絞り込み叩き（横軸叩き）を施した後、端部を指でさらに絞り、粘土円盤で閉塞する。風船状態で閉塞部分のみ丸底となるよう、当て具なしの風船叩きをして、胸部成形を完了する。口頸部器形は筒状の器形を呈す A 類（100）と短く外反した後に口縁端部で内湾気味となる B 類（101～103）がある。いずれも林タカヤマ窯において確認される口頸部器形であり、胸部全体を叩き成形で仕上げる点など、大きな差はない。ただ、確実にサイズが小型化しており、円盤側の叩きを風船叩きで済ませる点など、簡略化の方向性だろう。大型横瓶は 7 世紀前半代の両面叩き成形方法から、8 世紀前半にはロクロで絞って閉塞し、カキ目で丸く仕上げる方法に変化するが、当成形方法はその間の変遷過程を埋める成形技法事例と理解する。なお、小型横瓶については、胸幅 17.6 cm と小型のもので、閉塞側はロクロ回転による絞り込みとカキ目調整によって丸く仕上げる。底部側への叩き成形を施さず、平底のままで、左右対称形とはなっていない。提瓶と樽形甌が融合したような器種であり、小型横瓶の定型前の器形といえよう。

《小甌》 甌は、胸部紐積み叩き成形、口頸部回転成形の後に底部丸底叩き出し成形をする器種である。そのうちの胸径、器高ともに 40 cm 以下、口径 21 cm 以下、容量 50 ℥ 以下のものを小甌とした。なお、甌には長頸で口頸部装飾帶有す A 類と短頸で頸部を絞り込む B 類、頸部絞り込みの弱い広頸器形の C 類とあるが、A 類は大甌に一般的な器形で、中甌、小甌では B 類が一般的である。C 類は少数派の器形といえるが、小甌でのみ確認され、8 世紀代に球胴甌として存続する。小甌 B 類は胸径、器高ともに 35 cm 前後を測る容量 30～40 ℥ のもので、胸部中位が強く張る胸部下半の比較的丸い器形である。口頸部器形により、短く強く外反し口縁端部で内湾する a 類（104・105・107）と、口頸部立ち気味で口縁上端に面を形成する b 類（108）とに分類できる。C 類（106）は胸径、器高が 30 cm 以下、容量 20 ℥ 程度のひとまわり小型のもので、胸部球形呈す。胸部上半の外面叩きはカキ目調整によって消されており、壺に近い。両類型とも、叩き成形痕を胴・底部に残すもので、胸部叩き痕を切って、底部叩き出しが施される。つまり、底部叩き出しが成形・整形工程の最終段階で行なわれるものであり、胸部叩き成形痕が横軸方向に揃う叩きであるのに対し、底部叩き出しが成形痕は縦軸方向に揃う叩きである。

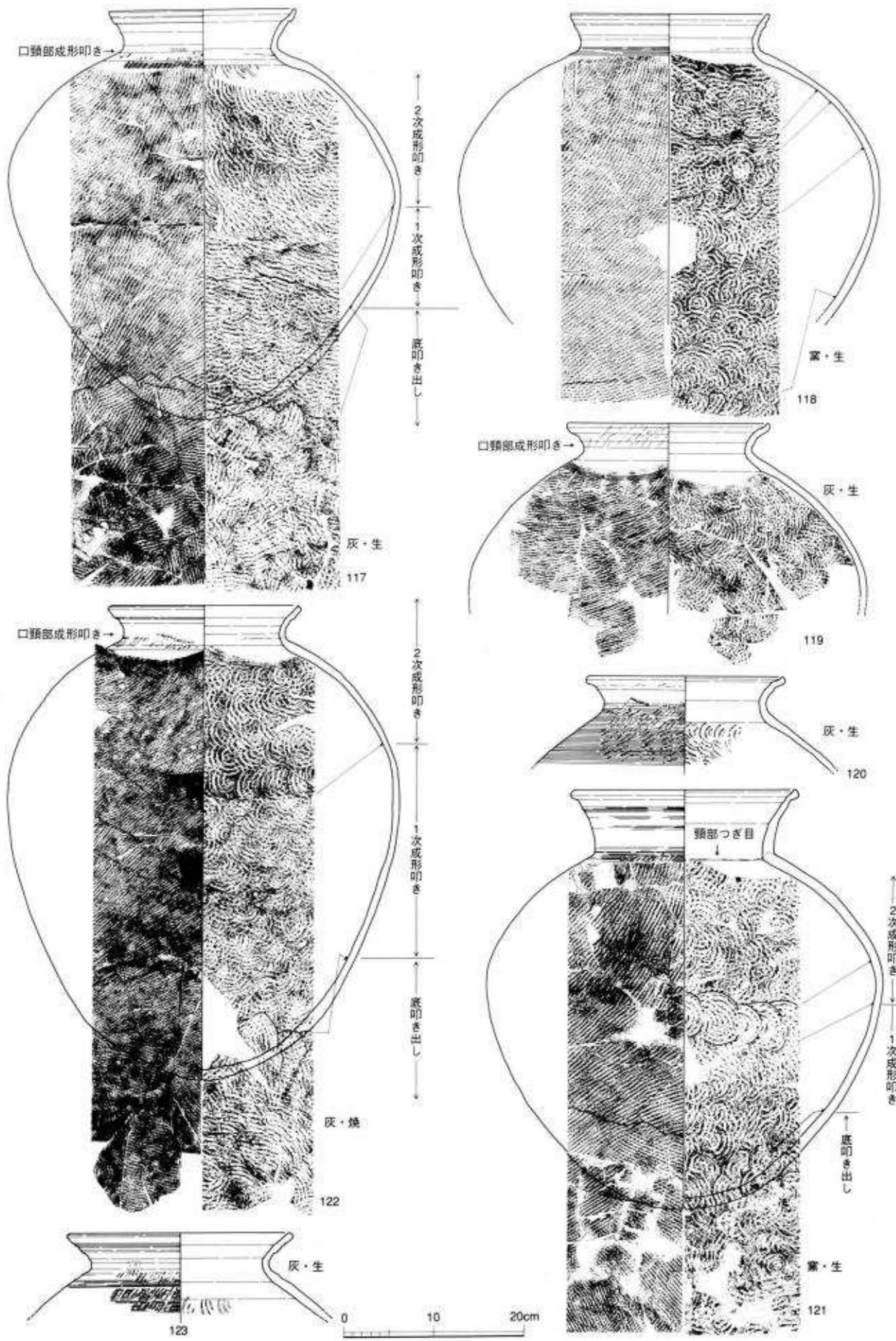
#### d. 大型貯蔵具

《中甌》 甌のうち、口径 20～25 cm、胸径 45～50 cm、器高 45～55 cm、容量 70～100 ℥ のものを中甌としたが、長頸口頸部の A 類に関しては口径 30 cm 程度のものも存在する。短頸口頸部の B 類が一般的器形であり、長頸の A 類が 1 例存在する。B 類は、胸部最大径を中位よりやや上にもち、底部がやや尖底気味となる器形を基本（I 類）とするが、122 のような長胴器形（II 類）も存在する。B I 類は胸部の張りが強く、頸部へ絞り込む器形で、胸高 40～45 cm のものである。これに対し、B II 類は胸高が 50 cm 程度とかなりの長胴で、胸部張りが弱く、底部は丸くなる。さらに、I・II 類とも、口頸部器形により、短く強く外反した後に上端を曲げて直立させる a 類（109・110）と、頸部外反の後に口縁上端をやや内湾させる b 類（119・120）、頸部外反した後、口縁部外面に複合口縁状に段をもつて端部へ丸くなる c 類（111～116）、段ではなく、稜を形成する程度の d 類（117・118）、外反の後、段の下に沈線が入り、端部面形成する e 類（122・123）に細分できる。いずれも頸部外反する器形で、胸部から口頸部まで一体的に成形するものである。頸部外面に胸部から連続する叩き痕跡を残すものが多く、1 次成形段階で口頸部まで紐積み成形されていたことがわかる。叩き成形で、口頸部までの概形を作り、ロクロ回転整形で、細部の形を整えたものと考える。

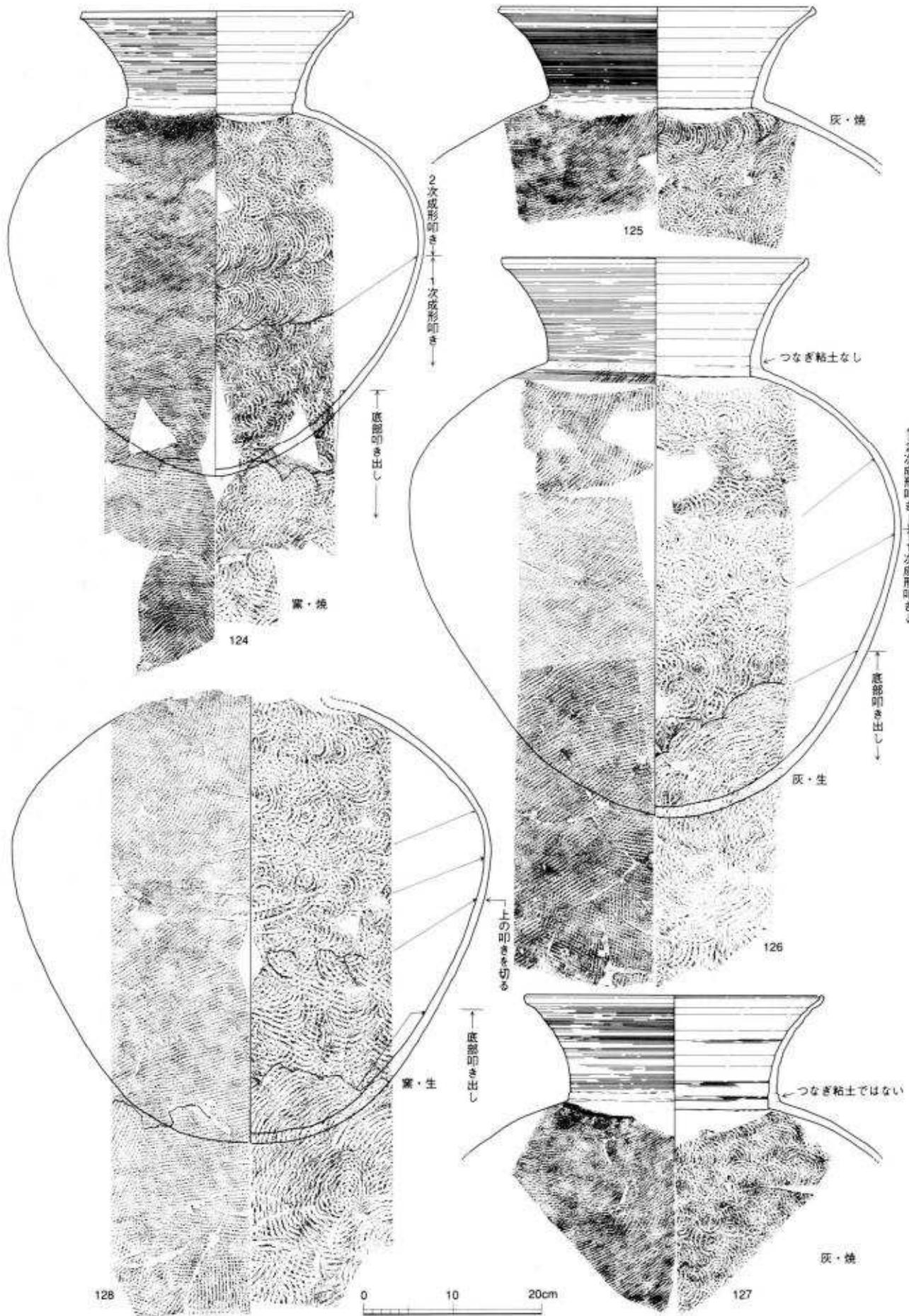
以上の頸部外反緩やかな口頸部器形に対し、121 は頸部屈曲がはっきりしている。内面に粘土継ぎ目が確認で



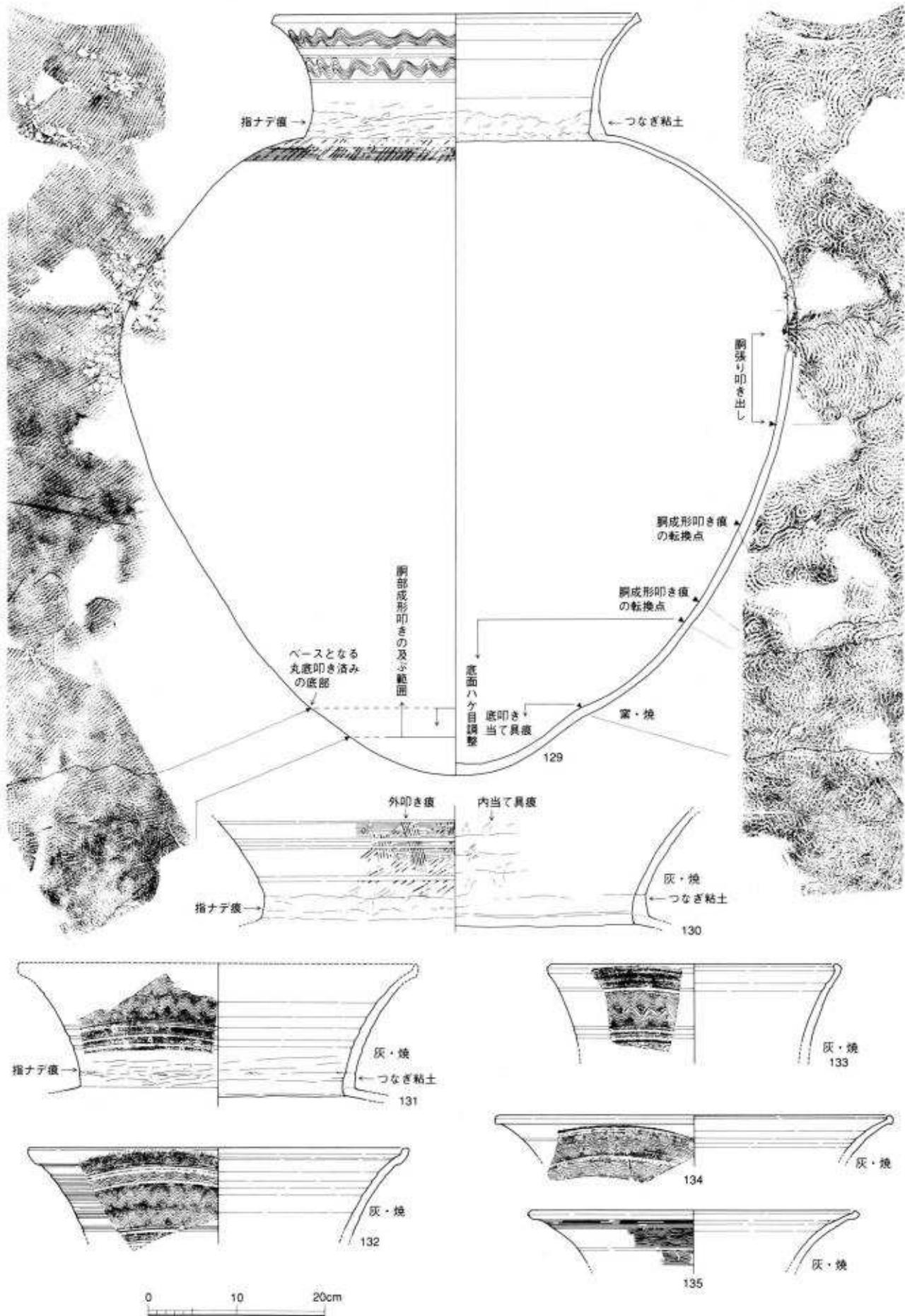
第261図 J遺跡須恵器窯跡出土須恵器5 (1/6、窯-窯体内出土、灰-灰原・前庭部出土。生-生焼品、焼-焼結品。)



第262図 J遺跡須恵器窯跡出土須恵器5 (1/6、窯一窯体内出土、灰一灰原・前庭部出土。生一生焼品、焼一焼結品。)



第263図 J遺跡須恵器窯跡出土須恵器7 (1/6、窯一窯体内出土、灰一灰原・前庭部出土。生一生焼品、焼一焼結品。)



第264図 J遺跡須恵器窯跡出土須恵器8 (1/6、窓一窓体内出土、灰一灰原・前庭部出土。生一生焼品、焼一焼結品。)

き、胴部上端を一度切り揃えてから口頸部を積み上げ成形したか、別作りしておいた口頸部を接合したものと予想する。頸部が長めに立つ器形で、口縁部で短く外屈した後、端部を摘み上げる。カキ目調整を施すなど、A類・B類口頸部の中間的な形態といえる。全体的に厚手で、底部がやや丸く叩かれている。

唯一、A類口頸部を呈す124は、BⅠ類に比べ、頸部絞りの角度が強く、胴部の張りが大きいなど、大甕サイズのA類口頸部甕と極めて類似する器形を呈す。胴部上端を切り揃えて、別作り口頸部を接合するという成形方法も同様であり、サイズだけが違う。大甕の小サイズという位置付けで考えておきたい。

《大甕》 甕のうち、口径30cm以上、頸径25cm前後、胴径55cm前後、器高65cm前後、容量150ℓ前後を大甕とし、頸径30cm以上、胴径70cm以上、器高80cm以上、容量400ℓ以上を特大甕とした。大甕、特大甕とともに、長頸A類を呈し、胴部の張りが強く、底部へ尖底気味となる。胴部叩き成形完了後に、胴部上端を一度切り揃えてから、口頸部成形を行なうもので、胴部端から上に順次、粘土紐を積み上げて口縁部まで成形してゆく1類技法と別作りした口頸部を胴部上端に接合する2類技法がある。1類技法は、全体に紐積み痕跡や非回転整形の痕跡（指ナデ・指頭痕）を残す場合が多いが、中甕のB類口頸部成形のように、胴部成形と一体的にロクロ成形台上で口頸部成形をすれば、回転使用痕跡を残す口頸部となる。その場合、頸部から口縁部まで連続する調整痕となろう。2類技法は口頸部のみを成形するため、ロクロ回転力を使用した水挽き成形が可能であり、ロクロヒダやカキ目調整、口縁部端の回転使用整形痕など、ロクロ回転使用の痕跡を残す。そのまま胴部端にのせて接着してしまえば、1類技法痕跡との差異はなくなるが、胴部側がある程度乾燥していることもあって、強く圧着しないと無理がある。頸部破片に見られる胴部上端との接着面に残された胴部叩き反転圧痕は、頸部側が柔らかい粘土であったことを示すものであり、別作りした口頸部をそのまま載せただけでは圧痕もつきにくい。生粘土を繋ぎとして入れることで接着が可能となったものといえ、頸部に見られる粘土紐1段分の接合痕やその部分での非回転整形痕（指ナデ・指頭痕）は、繋ぎ粘土使用の傍証となろう。口頸部別作り成形の場合は、繋ぎ粘土接合方法を使用したとみるのが妥当である。つまり、繋ぎ粘土接合の確認できるものは口頸部別作り成形、口頸部の一体化的成形・調整痕は、胴部上端で積み上げ成形し、回転力で細部整形したものとみなすことができよう。

当窯資料を見ると、頸部まで口縁部成形・調整痕が連続するもの（125～127）と頸部に繋ぎ粘土痕跡を残すもの（129～131）と確認でき、前者は頸部25cm程度の大甕、後者は頸部30cm以上の特大甕となる。中甕A類口頸部も口頸部全体において成形・調整痕が連続するもので、甕のサイズによって、口頸部成形方法を変えていた可能性が高い。特大甕の口頸部成形を1類技法で行なうとすれば、高さや回転惰力を作るだけの回転台の大きさなど、無理があったのだろう。つまり、大甕クラスまでは1類技法が可能だったこととなる。以上、成形方法について述べたが、それぞれの口頸部器形を見ると、1類技法は頸部から口縁部まで外反してラッパ状に広がる器形、2類技法は繋ぎ粘土部分まで直立し、その後口縁部へと外反して開く器形と、作り方に対応した器形の違いがある。加えて、1類技法ではカキ目調整のみで口縁部装飾は見られないのに対し、2類技法では沈線文と波状文による口縁部装飾が施される。さらに、2類技法では口縁部器形に口頸部外反せずに立ち気味の形態（133）や、口縁部を内湾させてその部分に段を形成する形態（132）、強く外反して開き端部で上下端突出させる形態（129・134・135）など多様性が見られる。ただ、上記の技法と装飾性との関連性は、当窯の特徴であり、この時期の他の窯でも確認できるものではない。サイズと成形方法の違い、装飾性と連動した数少ない窯跡資料といえよう。

#### 《甕の胴部叩き成形について》

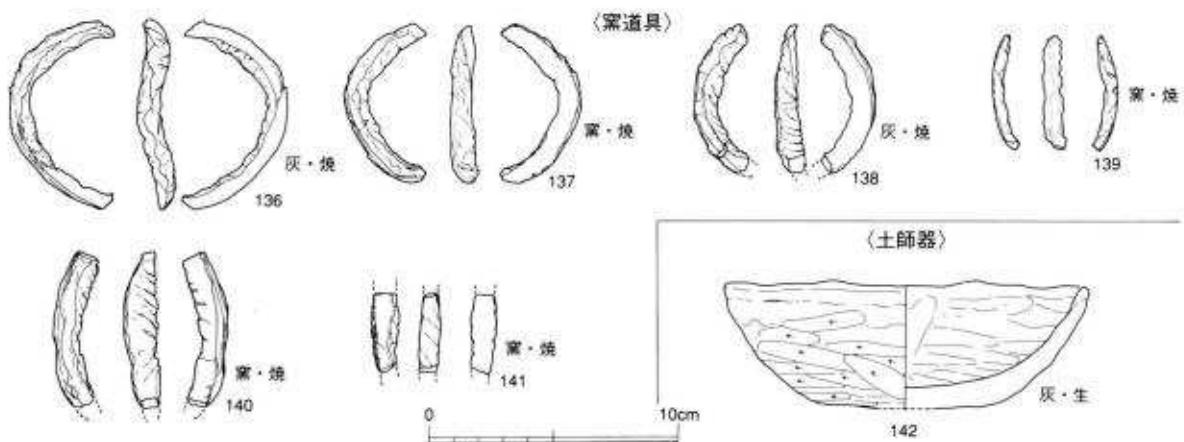
小甕から特大甕まで、法量や器形、口頸部成形方法などについて述べたが、最後にまとめて、胴部・底部成形方法について触れておきたい。小甕の項でも述べたが、当窯の甕は全て丸底に叩き出し成形が施される丸底甕である。底部叩き出し成形は、成形台上で行なわれる胴部から口頸部までの成形・整形工程完了後、成形台からはすして行なわれる最終工程成形（底1工程）である。成形台上での叩き成形が横軸方向であるのに対し、底部叩き出しは底部中心を軸とする放射状の縦軸叩きとなる。成形台上での叩き成形は、粘土円盤を底部とし、粘土紐積み+横軸叩き成形で、口頸部ないしは胴部上端まで順次積み上げる（1次成形叩き）が、1次成形痕を残しやすい胴部下半の叩き痕をみれば、1回の叩きではなく、数回の叩き締めが行なわれていることがわかる。この段階で概形を作り出すといえるが、中甕、大甕については、胴部中位の強い張り出しや頸部への窄まりを作り出す、器形変化を伴う叩き（2次成形叩き）を施す。横軸叩きを基本とし、胴部張り出し部分では内面からの当て具による強い打圧、胴部上位の絞り込み部分では、上へ伸ばしてゆくような叩き具と当て具痕の使い方をしている（横

軸1列ごとに当て具の向きや強弱を変える)。中壺と大壺とで当て具の使い方に違いがあるが、張り出し部分での内面からの強い打圧痕をもつ点では同様である。胴部上位から頸部付近に見られる違いは、頸部を曲げて口縁部に至るB類口頸部の成形と胴部端を切り揃えてから口頸部成形・接合へ移行するA類口頸部の成形に起因するもので、B類口頸部の方が細かな間隔で叩きを施している。頸部整形の叩きが丁寧に施された結果であろう。

底部叩き出し成形は、以上の胴部叩き成形後、カキ目調整やB類口頸部整形が完了した段階で、成形台からはずして行なわれるものだが、A類口頸部については、口頸部の大きさや胴部高から考えて、口頸部成形前に底部叩き出しが行なわれたものと考えている。大壺の底部叩き出しを最終工程で行なったかについては、問題はあるが、以前筆者が結論付けた内面当て具を差し込んで底部を叩き出す行為のはば限界数値は身深60cmであり(望月2001)、口頸部を含めれば無理がある。ただ、口頸部成形前であれば、胴部高55cm未満の数値であり、最終工程での底部叩き出しありは可能であり、大壺に関しても、底部叩き出し成形を最終工程で行う底1工程であったと考える。胴高が70cmを超える特大壺については、底1工程に無理があり、底部を丸底にした上で胴部積み上げ成形を行なってゆく方法(底3工程)か、胴部成形のある段階で底部叩き出し工程を挟む方法(底2工程)がとられていたものだろう(望月2001)。当窯の特大壺では、底部から胴部下位までの内面がナデとハケ目調整、外底面も中心部分が回転ハケ目調整されており、底部叩き出し痕跡が不明瞭となっている。ただ、底部付近の狭い範囲で胴部の横軸叩き具と叩き具の向きが異なっており、その部分を底部叩き出しと判断した。底部付近のみのものであり、底部のみを丸底にする叩きだったと考える。底部叩き痕と胴部横軸叩き痕の重複関係は、底部叩き痕の後に胴部横軸叩き痕があり、つまり、底部を丸底にしてから、胴部紐積み叩き成形してゆく、底3工程と判断されるわけである。胴部積み上げ成形は、順次、上へと粘土紐を積み上げ、叩き成形するものだが、胴部最大径を測る張り出し部までに底部から18cm高、26cm高、38cm高の3箇所で横軸叩きの向きが変化している。1次成形段階で、胴部張り出し箇所までに3回の乾燥段階を挟んだ痕跡である可能性をもつ。胴部張り出しから胴部上端までの2次成形叩き痕は大壺の痕跡と大きな差異がなく、同様の方法によっていただろう。

#### e. 窯道具

内外面に叩き具・当て具痕跡をもつ三日月状土製品が6点出土している。いずれも叩き成形したもの端部を弧状に切り取ったもので、叩き成形痕を残す側に切り取りの際の見込み線が刻まれているものが多い。明確に弧状をなす136~139は径や厚さから考えて、大型横瓶の口頸部接合に伴う内径のはみ出し部切り取り片と推察する。140・141も厚さからみて、同様器種の可能性が高いが、径が大きいため、中壺の胴部端切り揃えするタイプの切り取り片であるかもしれない。このような須恵器成形時に排出される切り取り粘土片や成形失敗品などは、粘土に戻されて、再利用されるのが通常であるはずだが、北陸では特にこの時期の窯で、定量出土をみる。横瓶などを成形する際に頸部切り取り片が胴部内に落ち込んでしまい、そのまま出さずに焼成したものとの見方もされるが、切り取り片以外にも、壺胴部片を方形に切り取ったものや須恵器成形に伴う切り取り円盤が土師器焼成坑で使用されるなど、意図的に窯内で焼かれたものが大半を占めるものと見ている。製品としてではなく、製品固定のための窯道具として使われたものであり、製品の隙間に差し込むトチンのような、かませ材であったと予想する(望月2000)。ただ、使用状態を示す着色資料などはなく、想像の域を出ない。



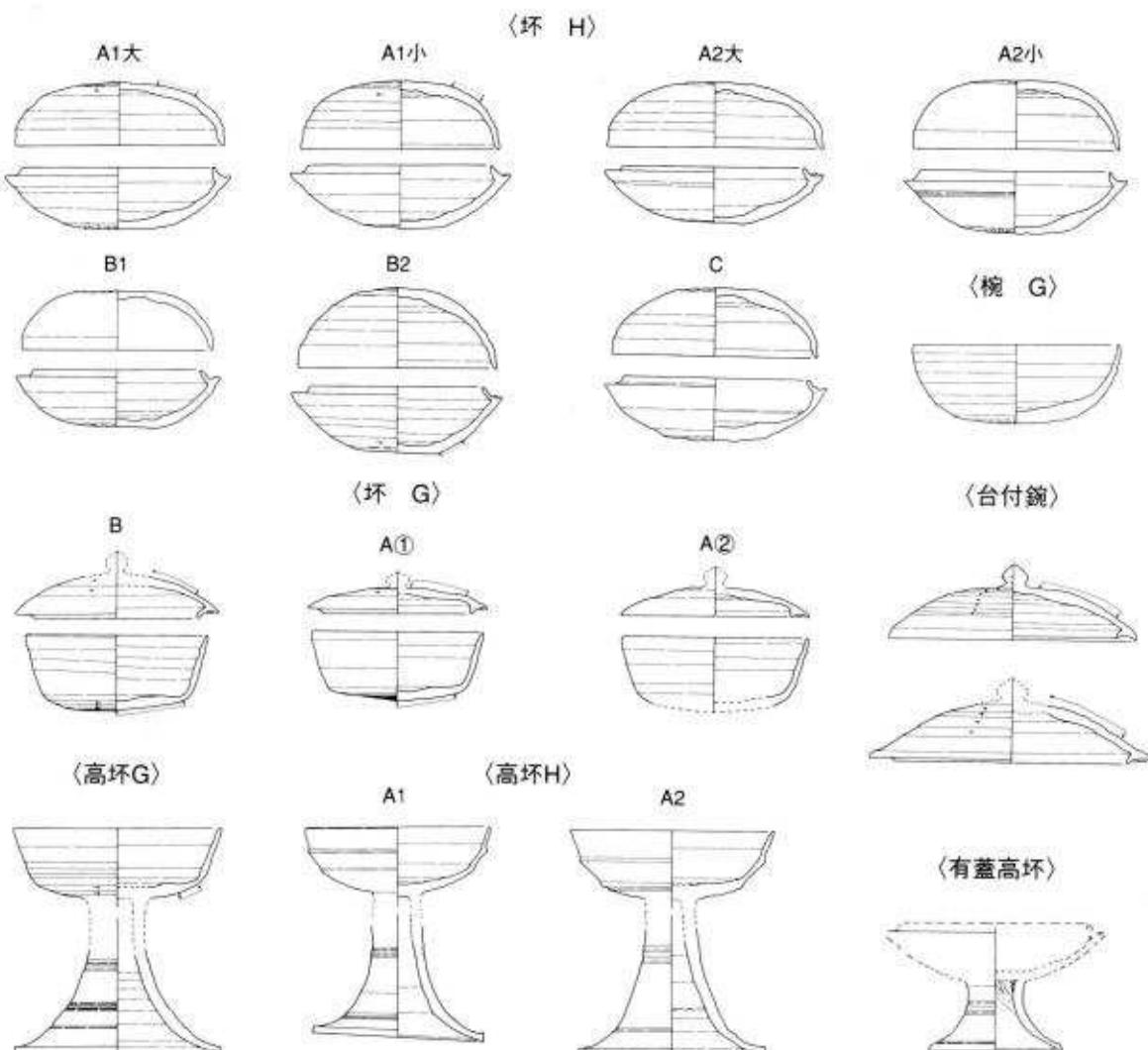
第265図 J遺跡須恵器窯跡出土窯道具・土師器 (1/3、窯—窯体内出土、灰—灰原・前庭部出土。生—生焼品、焼—焼結品。)

### 3. 須恵器の特徴と編年的位置付け

造構痕跡から見て、当窯の改造・改修は認められず、比較的短期のうちに操業を終えた窯であったと予想される。それは、須恵器の出土量や灰層形成の厚さなどにも出ている。ただ、最終操業の還元焼結不十分の焼成段階以外にも、確実に還元焼結できた操業段階があり、それは量比的に見て、少なくとも2回程度の操業は行なわれたものと予想している。

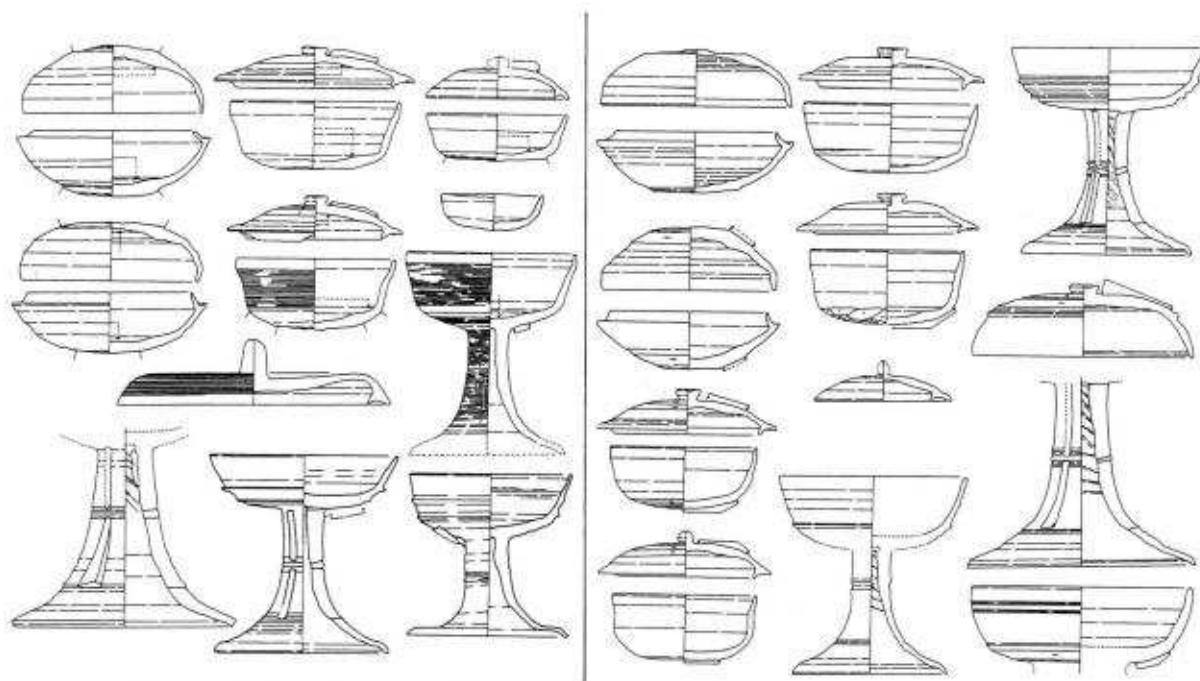
さて、当窯の須恵器だが、短期操業品という前提で見れば、田嶋明人氏が古代I期の編年基準とする平瓶・金属器系鏡の出現以降、坏A・B出現以前という組成に合致し、さらに坏Gの出現を加えれば、古代I2期に比定可能である。当期は依然として、坏Hが食膳具の主体を占めるが、小型化の様相をもつてくる段階である。能美窯跡群で比較する資料がないため、北陸地域内の窯となるが、越前武生南部窯跡群の王子保5号窯が最も類似した様相を示す。坏Gの量比の少なさと削り調整などの精緻な作り、坏Hの法量の一貫性（王子保窯—蓋口径10.5cm前後、身9cm台前半、J遺跡窯—蓋口径10cm台、身口径10cm前後）、高坏の小型化（透かし脚の消滅）、台付鏡の存在など極めて近似した様相と言えるが、細部では、王子保窯の坏G蓋の返り突出や身器形の違い、高坏の新型坏部器形（高坏G）への統一などの相違点がある。ただ、古代I2期に比定できる窯資料で、坏Hの小型化が貫徹されるのは、両窯のみと言え、坏H矮小化の顕著な畿内の様相に比較的近い特徴をもつ。坏Gや台付鏡の導入の比較的忠実な方や小型高坏への移行など、畿内の様式変化に敏感に対応した窯と評価できよう。

これと対極にあるのは南加賀窯跡群であり、特に北群に属す戸津・林地区の当期の須恵器は、古代I1期の様相を色濃く残す。林オオカミダニ支群グループと林タカヤマ・戸津六字ヶ丘支群グループとは若干様相を異にするが、林タカヤマ3号窯と戸津六字ヶ丘2号窯の資料で比較すると、総体的に坏H法量が能美窯などよりもひ



第266図 J遺跡窯跡出土食膳具構成 (1/4)

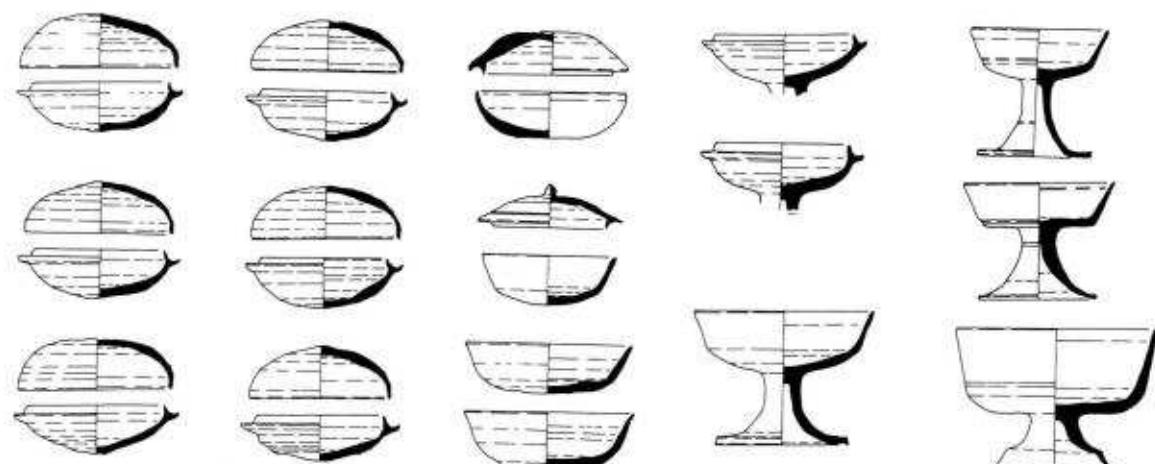
とまわり大きくなり、蓋口径で 12~14 cm の分布域の中で適度にばらつく。高坏は高坏 G が僅かに確認できるだけで、主体は 2 段 3 方透かしの大型脚をもつ高坏 H であり、古代 I 1 期と異なる点は高坏 G が存在する点のみである。古代 I 2 期の指標とされる蓋口径 9 cm 台の坏 G は確実に、これらの窯に出現しているものの、極めて量は少なく、返り蓋の主体は金属器系統の鏡のままである。古代 I 1 期新段階の流れを汲む器形であり、坏 G の影響でつまみ器形や坏身器形に変化が見られるが、坏 G よりもひとまわり大型法量（蓋口径 12~14 cm）を呈し、扁平つまみが主体であるなど、坏 G とは明確に一線を画す。ただ、鏡と坏 G をあわせると、組成の中で定量化された様相をもつ。また、大型法量をもつ台付鏡が存在するが、これについても蓋のつまみが棒状を呈したり、列点文装飾をもつなど、やや古相を呈する。南加賀窯北群は、6 世紀初頭より生産を開始する北陸の初期窯であり、埴輪兼業窯など在地豪族である江沼臣のお抱え窯として営まれた窯である。7 世紀代になって、窯場を北端に移動するなど、他からの強制介入による組織再編があるが、従事する工人組織は継続したものであったようで、それが伝統的・保守的な須恵器を生産させた要因なのだろう。能美窯跡群や武生南部窯跡群が、畿内に比較的忠実な須恵器様相をもつとの対照的であり、それは能美・武生南部窯跡群が 7 世紀に新規開拓された窯場である。



(戸津六字ヶ丘2号窯・林タカヤマ2号窯)

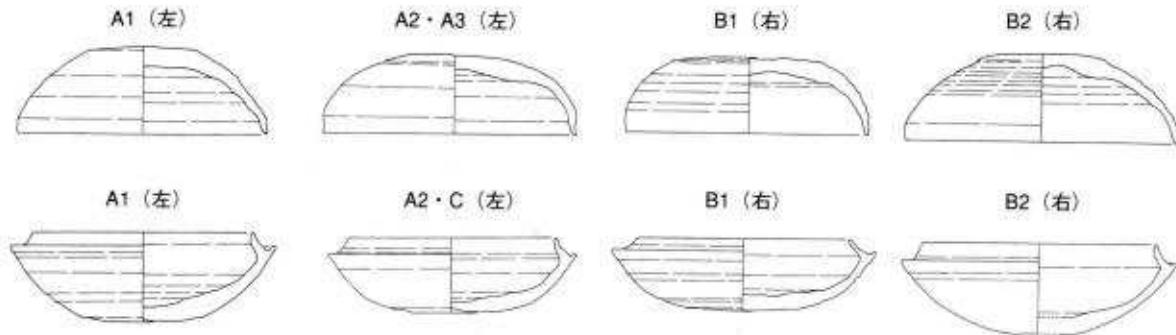
(林タカヤマ3号窯)

南加賀窯跡群（北群）



武生南部窯跡群（王子保5号窯）

第267図 古代 I 2 期の須恵器食膳具 (1/4)

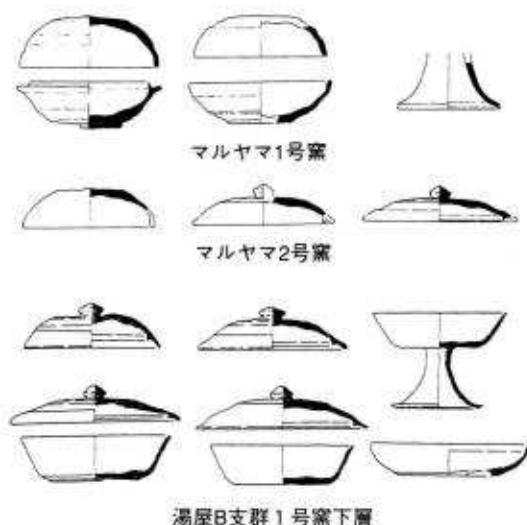


第268図 南加賀窯跡群林タカヤマ1号窯の坏H (1/4)

ことと関連性が深い。両窯跡群とも、新たな工人の参画をもって始められた窯場であったため、先進的な性格をもっていたといえるのではなかろうか。また、II1期に両窯跡群とともに初期寺院へ供給するための瓦生産をおこなっていることも性格付けの傍証となろう。ただ、全ての工人が他からの移入によって編成されたのではなく、在地工人、例えば南加賀窯からの工人も能美窯開窯のために移動させられた可能性はある。J遺跡窯の主体を占める坏H器形を見ると、類似するものが南加賀窯北群で確認することができる。林タカヤマ1号窯の類似する坏Hを図示したものが第268図だが、A類器形はロクロ回転左、B類はロクロ回転右となる。先にも述べたが、J遺跡窯でも左回転は1点だけ確認できており、異質なものとしてC類としたが、実は口縁部器形などはA2類に近似している。J遺跡の蓋A3類に対応する可能性をもち、全体的にはA類系統とみなすことが可能である。つまり、A類系統の作風は林タカヤマ窯の左回転工人グループの系譜をもつ可能性があるわけで、その名残がC類の左回転として現れたのかもしれない。北陸西部の当期の須恵器坏H器形が全体的に類似する傾向はあるのだが、高坏H器形についても、林タカヤマ窯のものと近い器形をしており、その可能性を補足する。ただ、古代I2期の伝統的な法量と高坏を作りつづける南加賀窯跡群北群との繋がりではなく、能美窯跡群の開窯期（消費地資料から、能美窯の生産開始は古代I1期まで遡るものと予想される）における工人移動の可能性を考えておきたい。

なお、J遺跡窯に後続する時期の窯として、マルヤマ1号窯と2号窯、湯屋B支群1号窯が確認されている。いずれも辰口北群に位置する窯で、マルヤマ1号窯は坏H主体構成と坏H口径などから、J遺跡窯と同時期窯と位置づけられる。ただ、7世紀後半の生産中心が辰口北群にあること、そして隣接窯のマルヤマ2号窯がII1期に位置づけられることから、マルヤマ1号窯、2号窯と連続操業された窯場と捉え、マルヤマ1号窯段階で、J遺跡窯から窯場移動したものと想定しておきたい。マルヤマ2号窯の採集須恵器は少なく、器種構成が定かでないが、坏H蓋逆転器形のような椀Gの存在とつまみ付返り蓋器形（坏A蓋的様相）からみて、II1期でも新しい様相かと思われる。能美窯跡群の須恵器生産活性化は湯屋窯の操業段階からであり、湯屋窯開窯初期の段階から瓦生産を伴うと予想される。現在のところ、湯屋B支群1号窯下層須恵器群を、蓋坏Aと小型坏Gの併存から、II1期でも新相段階の資料とみなしている（望月1995）が、さらに1型式遡る窯の存在が予想される。末松庵寺への瓦供給とともに、仏器類や文房具類なども生産されたものだろう。

以上、J遺跡窯須恵器の様相と編年的位置づけを述べてきたが、同じ北陸の古代I期と言えども、窯場の性格によって、新型食膳具の受け入れや伝統的器種・器形の残し方に、違いがあることがわかった。それは古代I2期と古代II1期の段階で顕著であり、この時期の新型器種である坏Gと坏Bの出現に大きく関連するが、伝統的な器種である坏Hと高坏に、その違いが色濃く反映される。同時期に新規開拓される越中や能登窯について、同様に比較検討する必要があるが、北陸全体において、見られる地域差と言えるだろう。



第269図 能美窯跡群辰口北群の須恵器 (1/6)

## 第7節 総括

### 第1項 八里向山遺跡群の古代宗教関連遺跡の特徴と性格

B 遺跡は、山間部立地や大型礎石建物を主堂として付属施設2棟で構成される建物配置などから古代山林寺院として紹介され、様々な報告で、そのような扱われ方をしてきた。出土遺物についても、鉄鉢型の須恵器や須恵器水瓶、三彩釉陶器などの仏器的器種の存在、灯明痕をもつ食器類の大量廃棄、多数の転用硯の存在など、その内容は仏教施設であることを補足するものといえる。しかしながら、本文でも述べたように、当遺跡の主堂的建物が特異な構造をもつ点、建物配置、立地などに他の山林寺院とは異なる特徴が見出せる点などがあり、既に、垣内光次郎氏は山林寺院であることに疑問を投げかけている。以下では、久保智康氏や上原真人氏が示された古代山林寺院の概念規定（久保 1994、2001a、2001b、上原 1986）に基づき、古代山林寺院とされる遺跡と比較検討しながら、当遺跡の性格を探ってゆきたい。なお、当遺跡の時期であるが、一部で資料紹介されている9世紀初頭（出越 1999）よりも若干時期の下る9世紀前葉から9世紀3/4期の時期に位置づけられ、その中でも9世紀中頃が土器廃棄のピークと考えている。

#### 1. 立地に関する比較検討

古代山林寺院の立地特徴として、久保智康氏は「平野部からさほど遠くない山間地、平野部から少し隠れた位置」、「俗地からの隔絶性」（久保 2001b）をあげている。南加賀地域でこれまで調査された里川E遺跡、浄水寺遺跡、宮竹うっしょ山A遺跡の立地をみると、確かに、平野部から丘陵部奥へと入り込んだ支谷に面しており、視覚的に隔絶した場所を選地している。比較的平野部に近い低丘陵上に立地する福井県明寺山廃寺でも、平野側に背を向けるように建物が配置されており、「俗地からの隔絶性」は立地条件の基本であったことがわかる。この条件で当遺跡の立地をみると、山間部かつ尾根筋立地で、直接平野部に面していないものの、鍋谷川によって開析された主谷に面している。その主谷から西側の平野部にかけては複数の平安時代の集落遺跡が点在している。未調査のため、詳細は不明だが、同時期に存在していた可能性をもつ。これらの遺跡を「俗地」とすれば、B遺跡からおよそ0.7~2km程度の距離にあり、ある程度の距離をおくものの、視覚的隔絶性は存在しない。「俗地」から丸見えの山林寺院が成り立たないのかは別にして、上記立地特徴に合致するものでないことは確かである。例外がないとは言えないが、他の山林寺院とは異なる当遺跡の特徴として提示できる。

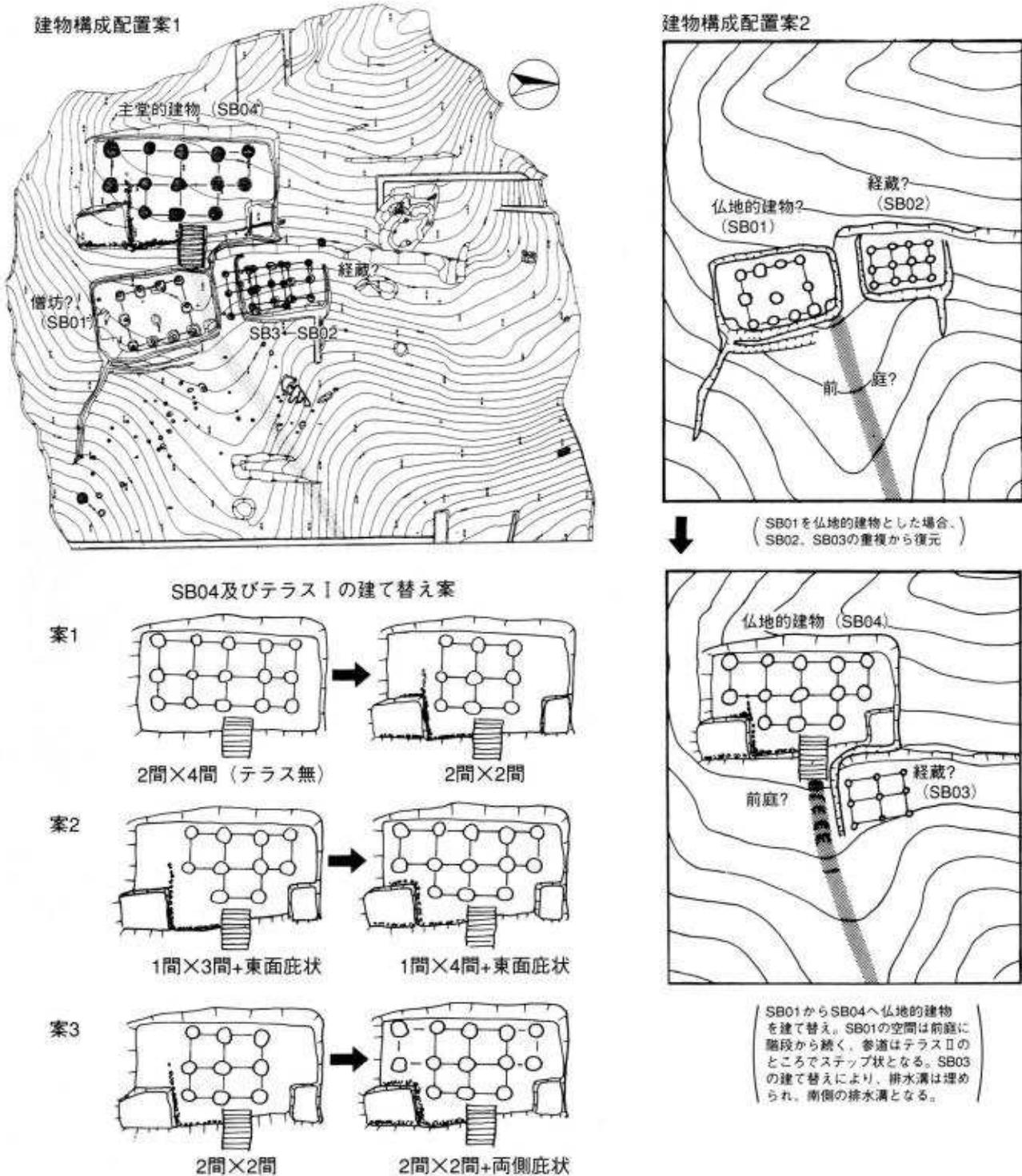
#### 2. 建物配置に関する検討

久保氏は山林寺院の空間構成として、①仏地的建物である主堂を主平坦面の最奥（高）部に配置すること、②主堂前方に空間地（前庭）を確保すること、③僧地的建物（付属建物）を谷寄りに配置することの3点をあげている。また、これに加え、久保氏は古代の山林寺院の場合、大半が南面伽藍を配すことを指摘しており（④条件、口頭でご教示いただいた）、以上4点を当遺跡であてはめてみれば、①の主堂を最奥・最高所に配置する点、③僧地的建物を谷寄りに配置する点などが該当する。しかも、当遺跡の3棟の建物配置は一堂二字構成であり、ある意味で「コ」字状配置に近い建物構成である。しかし、②の条件とした、主堂前方の空間地ではなく、主堂前面スペースを埋める形で、同主軸の付属的建物2棟が近接立地している。地形的制約とも捉えられるが、北側及び



第270図 八里向山B遺跡及び関連遺跡と周辺の平安時代集落遺跡  
(1/6000)

西側に建物配置をずらそうと思えば、前庭の確保は可能であったわけであり、狭い場所に意識的に建物を集中配置した感がある。④の条件についても、当遺跡は東面伽藍であるため、該当していない。北陸地域で山林寺院とされる里川E遺跡、浄水寺遺跡、三小牛ハバ遺跡、明寺山廃寺をみると、上記4条件を確実に具えており、いずれも重要な要素のように思える。しかしながら、宮竹うっしょ山A遺跡は造成テラス面に建てられる主堂的な大型建物の背面に小型礎石建物と掘立柱建物が並列するなど、②条件に合致しない。この遺跡では「大坂寺」と記された墨書き器が出土しており、寺関連の遺跡とみて間違いないく、大型建物を主堂とみなさずに、尾根上の建物のみで構成する見方もある（垣内 2001）。また、他地域事例ではあるが、岩手県国見山廃寺のように建物の存在する場所のみ平坦面を形成する場合もあり（久保 2001b）、必ずしも、②条件に該当する遺跡のみではない。

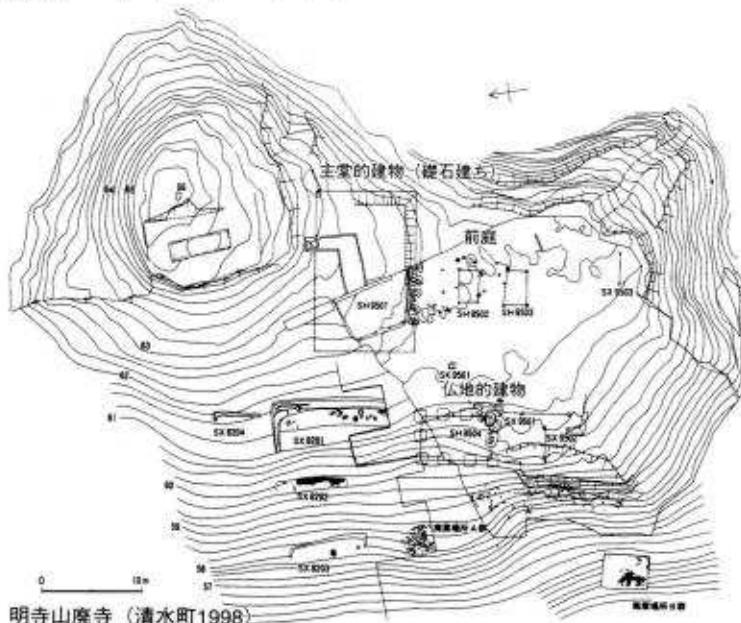
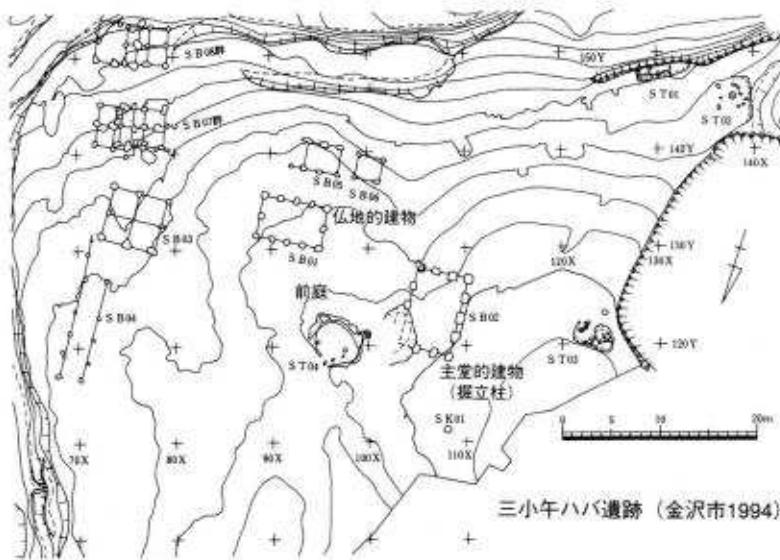


第271図 八里向山B遺跡の建物配置と主堂建て替え (1/500)

そもそも、②に上げた空間地の要素は、どのような意味をもっているのだろうか。前庭と言われるよう、庭としての空間であったことは間違いない、浄水寺遺跡や静岡県大知波崎廃寺ではこの空間地に池が掘られたり、明寺山廃寺では1×2間の仮屋的建物が建てられたりなど、庭儀法要等の儀式が行なわれる場として活用されている（久保2001b）。仏教活動に必須の空間と位置付けされるものではないようにも思えるが、ただ、④の南面伽藍については、古代山林寺院として報告される遺跡のうち、該当しない遺跡は金沢市の三小牛ハバ遺跡以外に確認しておらず、高い規則性を示している。例外はどのようなものでも存在することは確かであるが、4つ条件のうち2つの要素で該当しないことは、やはり、当遺跡を山林寺院とすることに疑問を感じざるおえない。しかも、本文で述べたように、主的的建物の構造に関しては、より特異な様相が指摘できる。

### 3. 建物構造に関する検討

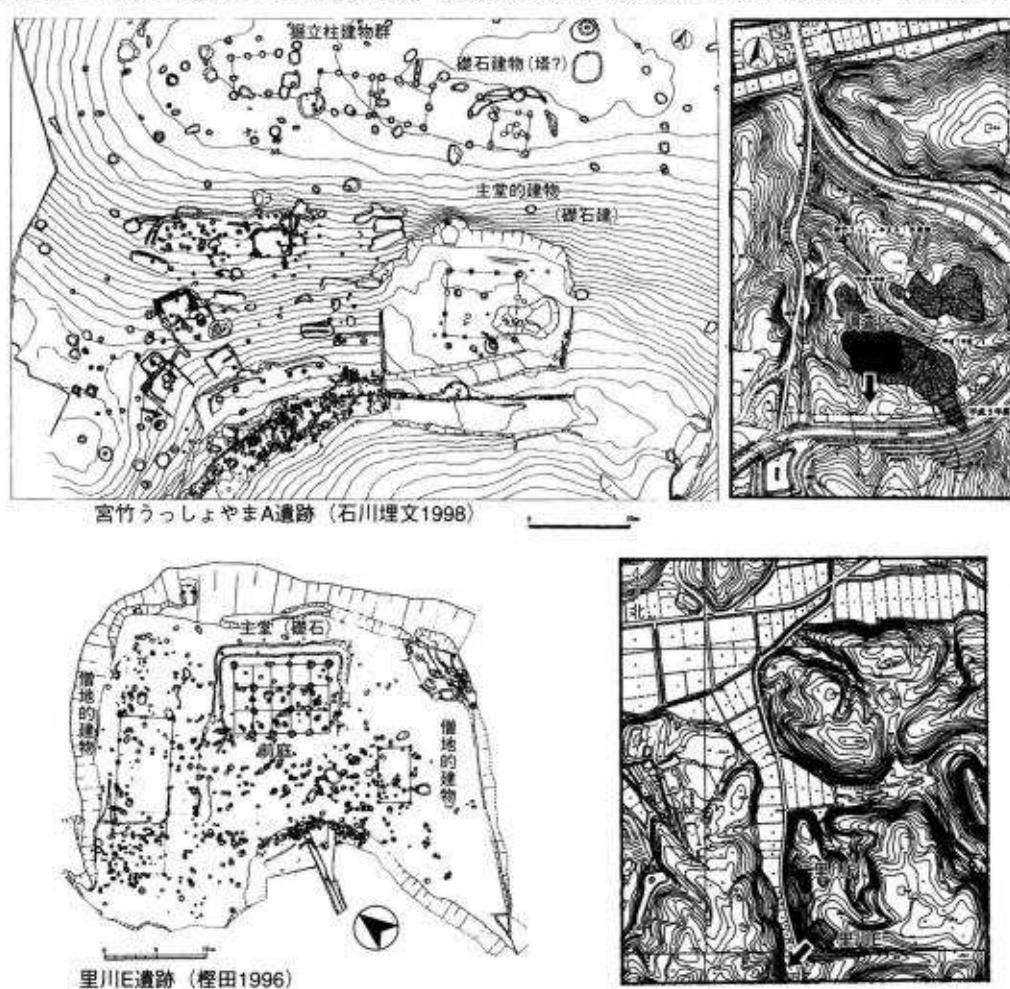
通常、寺院には金堂・塔の仏地的建物と講堂・僧坊・経蔵・食堂などの僧地的建物とがあるわけだが、とくに山林寺院などの場合、金堂と講堂の区別は困難で、中心的な建物を主堂とし、それに付属する僧地的建物とする区分が妥当だとされている。本遺跡を山林寺院とした場合、最も尾根の奥に位置する建物が主堂であり、前面の2棟の建物が僧地的建物となる。主堂について述べる前に、僧地的建物と仮定した2棟の掘立柱建物について述べておく。2棟ともしっかりととした掘立柱建物で、2間×3間の総柱建物（建替え後2間×2間）と2間×3間の側柱建物で構成される。後者の側柱建物には炉状の被熱焼土面が伴っており、周辺から煮炊具出土が目立つ点を



第272図 北陸地域の古代山林寺院遺跡1 (1/750) (右分布図矢印は建物配置の向きを示す)

考え合わせると、僧坊的な建物の可能性がある。ただ、使用痕を残す煮炊具は極めて少なく、日常的な住居空間とは考え難い。加持祈祷など、宗教活動に伴う可能性も十分にあると考えておきたい。その場合、当建物についても、仏地的建物となり、仏地的建物が前後に2棟存在することになる。北側の総柱建物が2棟重複していることとテラスⅠの階段がテラスⅢに取り付くという不自然な位置にあることを考え合わせると、仏地的建物をテラスⅢからテラスⅠへ規模を大きくして建替えた可能性もある（建物配置案2）。なお、北側の総柱建物は規模的に倉庫であり、山林寺院の中では経蔵としての性格が推察されるだろう。

次に、主堂について述べる。三小牛ハバ遺跡のように、3×4間の大型掘立柱建物とすることもあるが、山林寺院の主堂の多くは礎石建物で、里川E遺跡の3間×5間や浄水寺遺跡の4間×5間など、奥行きのあるかなり大型の建物となっている。里川E遺跡の礎石建物のような総柱建物も多く、これについては1×3間の身舎に四面庇のつくタイプと考えられる。当遺跡の主堂建物についての詳しく述べて本文を読み返していただきたいが、奥行き1間、間口4間の細長い建物に中央2間のみ張り出す「凸」形の特異な構造の礎石建物である。テラス形も南東隅と北東隅が小テラス状に落ち込む「凸」形で、その突出部中央前面には地山を削り出した階段が付設されている。建物の礎石があったと想定される窪みの径は大きく、柱間が通常の掘立柱建物に比べてかなり広くとられている。南面の石垣位置から当初、南側の2本の礎石は存在していなかった可能性があり、北東側の総柱掘立柱建物が南へ建替えられていることを考え合わせると、1間×3間に中央1間の張り出し付く建物から南へ1間分拡張し、1間×4間に中央2間の張り出しが付く建物へ建替えたという考え方ができる（主堂建替案2）。本文では、2間×4間総柱建物から2間×2間総柱建物への建替えという考え方（主堂建替案1）も提示したが、小テラス内への継続的土器廃棄や階段の位置を見ると、南側への拡張が妥当だろう。ただ、階段の位置にこだわらなければ、北面の2本の礎石柱間が南側の柱間よりも若干狭くなっていることを重視し、2×2間の総柱建物を当初の建物とし、それを身舎として南北に1間づつ張り出した建物構造へ建替えられたと見ることも可能である（主堂建替案3）。この南北への張り出しの機能をどのように理解すればよいか、疑問とされるところだが、前述の「凸」形を呈す特異な建物構造を身舎とする建物は、他に類例がなく、また東側への張り出しを向拝とすることで当建物を理解するには、柱間や礎石窓みの大きさなどから無理がある。極めて理解しづらい建物構造であるのに加え、礎石が1点も遺存しない事例である点、調査担当したものが報告していない点など、ここで構造復元について、積極的な論を展開することは危険である。当建物構造については、山林寺院とされる遺跡での類例はな



第273図 北陸地域の古代山林寺院遺跡2 (1/750)

く、他の性格の建物としても異例の柱配置であることを提示するに止めた。

#### 4. 出土遺物、遺物廃棄様相からの検討

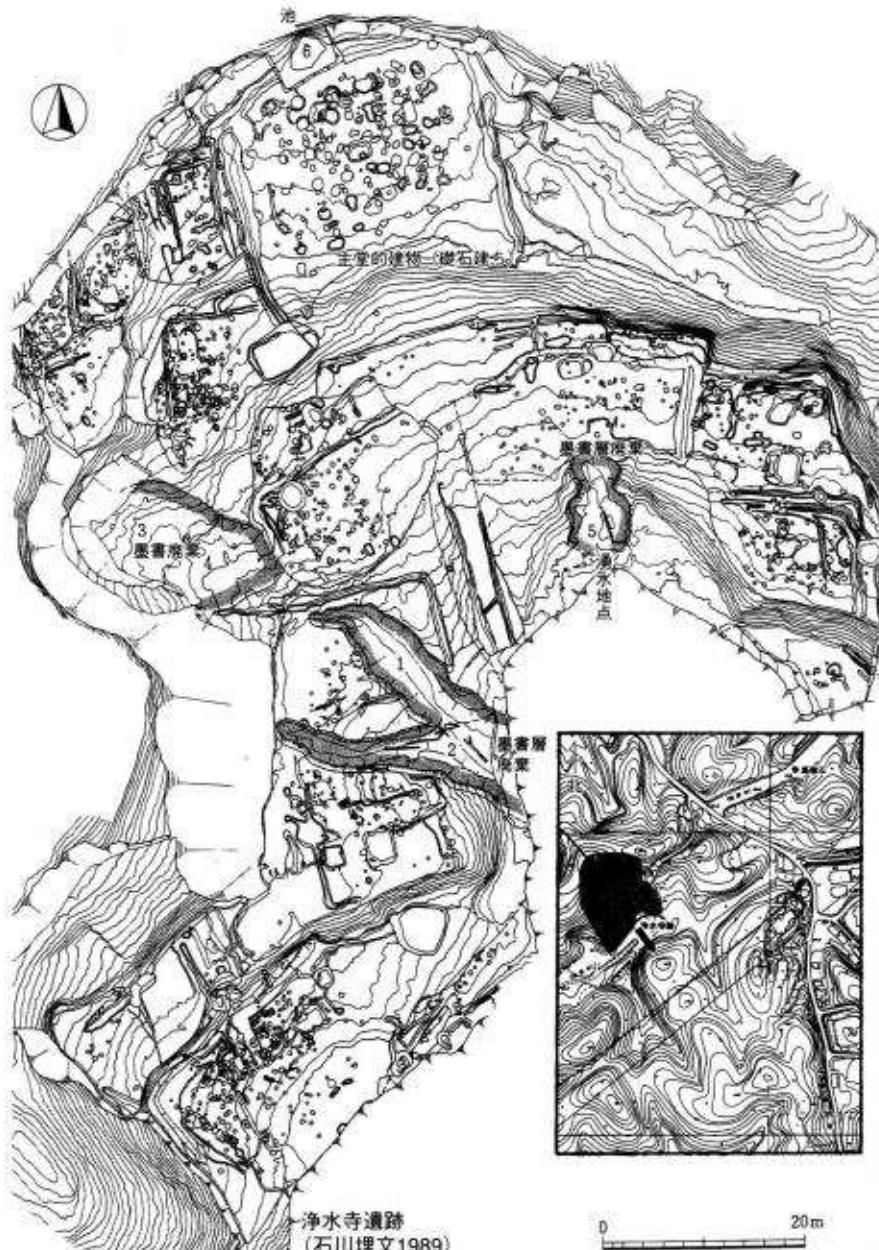
本文で詳細を検討しているため、出土遺物特徴の要点のみまとめると、①灯明具として無蓋食膳具が大量に廃棄されている点、②転用硯が定量存在する点、③三彩釉陶器をはじめ、仏器的器種が定量存在する点、④煮炊具が少なく、その中でも使用痕跡をもつものは極めて少なく、短胴釜においてはほとんど煮炊きに使われていない点などが上げられる。いずれの要素も仏教関連遺跡では、多く見られる特徴と言えるが、当遺跡からは墨書き土器が1点も出土しておらず、他の山林寺院と比べると、異質な感がある。ただ、里川E遺跡でも同様に墨書き土器は皆無に等しく、この点のみで、山林寺院を否定する要因にはならない。仏教活動として必要不可欠の写経行為は、土器に書くことは稀であり、木簡や紙に書いたはずである。その点から見れば、刀子が数点出土していることは木簡削り具としての用途も考えられ、転用硯とともに文房具としての位置づけも可能といえる。灯明具の大量出土も、加持祈祷行為の一端を示す出土品といえよう。

次に、土器出土傾向の特徴をま

とめると、①主堂建物のあるテラスⅠでは南東隅小テラスⅠでの食膳具を中心とした土器廃棄があり、その中で特に灯明具器種が目立つ点、②経蔵建物と仮定するテラスⅡの前面は多様な器種の出土が多く、転用硯器種が多い傾向にある点、③僧坊などの僧地的建物を仮定するテラスⅢでは最も多量の土器廃棄がある点などとなる。このような傾向はその近くにある建物の性格と関連性をもつ可能性はあるが、接合関係は広範囲にあり、廃棄復元は困難といえる。また、土器の廃棄量が最も多いテラスⅢ前面は単に谷部への傾斜地という地形要因と思われ、用途別器種の偏りはその土器出土量に大きく左右されていると感じる。テラスⅠの小テラス廃棄を含め、建物が近接している場合は廃棄場所と建物の関係を結びつけることは危険だろう。

#### 5.B 遺跡を他の宗教施設とした場合の検討

これまで山林寺院と呼ばれる遺跡の特徴と当遺跡とを比較検討してきたが、様々な要素において異なる特徴を提示できた。数多の山林寺院の中で発掘調査が行なわれた件数はまだ少なく、当遺跡がこれまでの調査事例とは異なる類型となる可能性も残されている。以上の検討をもって、山林寺院を否定することは危険といえるが、そうかといって、古代山林寺院とすることにも問題がある。出土遺物や立地、建物規模・構成などから、古代宗教



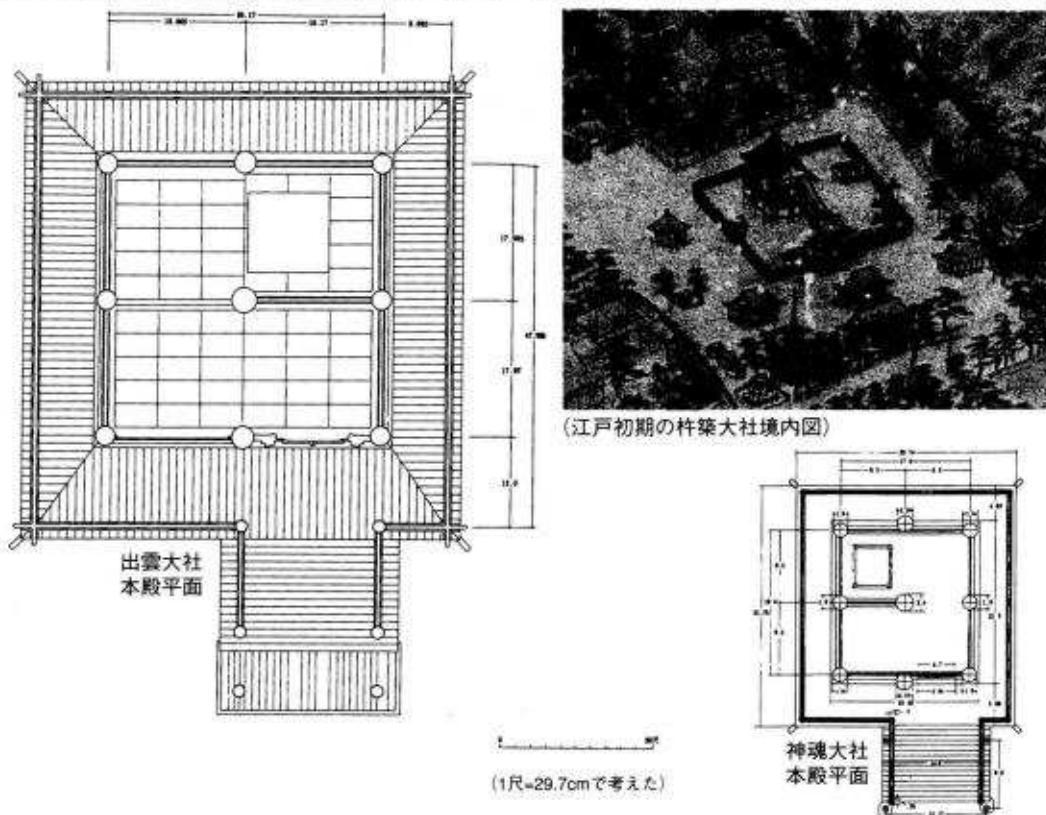
第274図 北陸地域の古代山林寺院遺跡 3 (1/750)

施設であることにはほぼ異論のないところであるから、視点を変え、他の宗教施設の可能性を模索する意味で、神社遺跡としての検討を以下で行ってみたい。

古代の神社遺跡といつても、その実態はほとんどわかつておらず、今日でも神社施設として特定された遺跡は極めて少ない。現在に継承される神社境内での古代遺構の調査事例なら性格付けも可能だが、伝承などもない地域での調査事例をもって神社遺跡と特定することは極めて困難といえる。最近、古代の神社遺構や神社関連遺跡の報告が散見されるようになってはいるが、旧社地伝承や式内社が近隣に存在する遺跡（島根県杉沢Ⅲ遺跡）または、これに加えて絵馬や神像、「神」墨書土器の出土など根拠資料に恵まれる遺跡（島根県青木遺跡や兵庫県栗鹿遺跡。特に栗鹿遺跡は栗鹿神社に付属する着到殿的な施設と予測されている）などを除くと、建物遺構だけで断定している遺跡資料はないといってよい。つまり、遺構から検証することは現段階では無理があり、現存する神社建築物から類推するしか方法がない。現存する神社建築物は鎌倉時代を過る建築物はないとされ、古代神社建築のいざれものが、中世以降に再建されたものである。ただ、神明造や大社造など神社固有の本殿建築の形式を崩さないように、忠実に再建されているとされる。伊勢神宮の式年遷宮はその一面を示すものであり、現存資料と比較することは重要な意味がある。以下では、現存する本殿建築物構造や神社関連とされる遺跡との比較から、建物構造と建物配置、立地・環境の三点を検討する。

**《本殿建築との比較》** B遺跡の主堂とされる最奥部の建物の特異性については、前述したとおりだが、当建物を1間×4間の中央2間張り出しをもつものと見ず、中央の2間×2間の総柱建物を身舎と見れば、大社造との類似性が指摘できる。階段部が向かって右側にずれて付設されることは大社造の特徴であるし、礎石建ちであること、柱間間隔広く、礎石のくぼみの大きさなど、重厚さを持つ点は高い類似性を持つといえよう。身舎の両脇に出るものは神社建築でも類例がないが、庇状に出る付属間なのかもしれない。その場合、平入りということになるが、妻入りを基本とする大社造とは異なることになる。島根県で神社遺構の可能性を指摘される青木遺跡、杉沢Ⅲ遺跡とも、2間×2間の総柱建物を主体的建物とみなしており、大社造に類するものとの見方がなされている。B遺跡の規模と比較すると、身舎の柱間は150cmと狭く、これだけの遺物を出土する遺跡の本殿的建物であるにもかかわらず、当遺跡の半分の規模ということになる。実際、現存する古来の大社造本殿の柱間規模は、出雲大社の534cmは別格として、神魂神社でも282cmであり、名も残らない地方の神社としては、B遺跡の規模は大きすぎる。大社造としては平入りも疑問視されるし、また、古代の大社造において礎石建ちであったかという点も気になる（出雲大社境内遺跡より出土した平安末期の柱が掘立柱のことにより、礎石建ちは近世以降のものとの見方がなされている）。

**《建物配置》** 神社建築の場合、本殿の前面に拝殿を置くことが多く、大社造の出雲大社や神魂神社など、本殿の右側に作られた階段から拝殿の後方へ階級で繋ぐ構造がとられている。古代からそのような構造であったかは定かでないが、拝



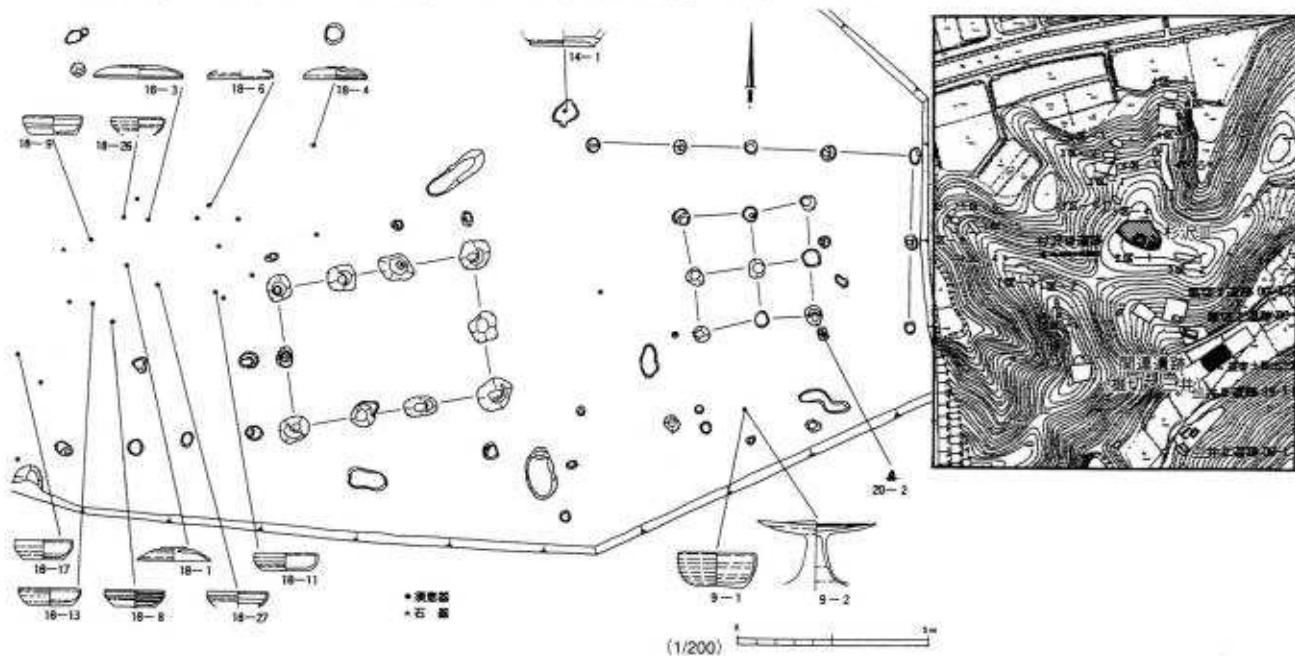
第275図 出雲大社（木造大社）と大社造本殿平面図（太田1998,島根県1996）

殿を本殿の前面に置くことは踏襲されていたと見るべきだろう。このような建物配置は青木遺跡でも確認される。本殿に隣接する形はとらないが、本殿前方約5mのところに若干規模を小さくした2間×2間の縦柱建物が配置されている。拝殿とすべきかは難しい問題だが、B遺跡の主体的建物の前面に2間×3間の側柱建物が建てられる様子は類似するものといえよう。ただし、B遺跡は前面の建物も平入りであることと、若干主軸がずれることが気になる。掘立柱建物内の炉床も理解が難しいだろう。

また、建物配置の向きだが、青木遺跡は西側を正面とし、杉沢Ⅲ遺跡は南面ないしは西面配置。現存する伊勢神宮では南面、出雲大社も南面だが、神魂神社では東面に本殿が向く。多くの事例で検証する必要があるが、神社建築の場合、本殿の向きは一様でないことは確かなようで、山林寺院に見られる南面伽藍の様相はとらない。里を向いて建物配置する傾向が強く、社殿及びそれを囲む森をヤシロとし、崇拜の対象としていたのだろう。

**《立地・環境による検討》** 上記遺跡や現存する古代から継承する神社の立地を見ると、山麓か丘陵部に立地する場合が多い。常陸國風土記行方郡条記載記事からヤシロの立地環境を考察した根本祐樹氏も、「神の土地と人間の土地を区別していることから神域的概念が認識されていた……（中略）……“社”は谷の底部ではなく台地の高所に設けられた」としており、さらに、「谷の底部には湧水が認められると共に、“社”は湧水点に隣接した台地上に設けられる」という興味深い指摘をされている（根本2003）。全ての事例に当てはまるものではないが、当遺跡の立地条件、環境に合致している。これまで同時期の遺物が出土している訳ではないため、VI章では触れなかったが、B遺跡の東側を開析する深い谷を山側へ辿ると、G遺跡とされる湧水遺跡が存在している。湧水点には礫層を敷くなど人為的な浄水施設をもち、縄文時代、弥生時代、そして古代と長期にわたり、その使用が確認できる（本文100頁参照）。水は谷を伝って、鍋谷川へと流れ込んでおり、水源には程遠いが、古くからこの土地で意識されていた湧水点だったのだろう。湧水点に隣接する遺跡は、神社に限ったことではなく、山林寺院でもあることだが、B遺跡のように湧水点を背後に控え、平野部に面する尾根部に立地することはない。平野部や里から隠れた場所を意識して選地していた山林寺院とは根本的に異なっているものであり、神社は常に里を意識して、信仰の対象となれる地、里から望める地を選んでいたものと予想される。

**《神社遺跡とした場合の疑問点》** 以上、立地、建物配置、建物構造の3項目において、神社との比較検討を加えたが、他の山林寺院とされる遺跡よりも、諸要素において神社との共通性は高いといえる。ただ、現段階で対比できる資料が限られ、不明な点が多い。古代の神社としては、本殿建築が礎石建ちであったのか、他の神社に比べて規模が大きすぎないか、神社としては存続期間が短くないかなど、疑問視される部分もある。そもそも、奈良・平安時代に地方の神社に大規模な社殿が伴っていたのかということに疑問を投げかける研究者も少なくない。「令義解」春時祭田条の「古記」にある「毎村在社神」の記事は、地方への神社の普及を物語る資料といえ



第276図 杉沢Ⅲ遺跡の立地と平面図（斐川町2001）

るが、その多くは「祠」に近いものとの見方が一般的である。奈良時代に地方へ整備普及される官社制の意義と地方神社建築を論じた丸山茂氏によれば、「国家が大量に社殿を建設するのであれば、……（中略）……統一的な形式や大きさがあったと考えるのが順当」とし、有力な神に対しては間口3間・奥行2間の社殿が、一般の官社には4尺×6尺の微小な社殿が与えられたと見ている（丸山2001）。つまり、当遺跡のような大規模な本殿とその前面に配置された拝殿状の建物という構成は、『記紀』に記載されるような有力な神社でも想定が困難なものであったということになる。仮に、当遺跡が国府との関連性が強い有力神社であったとしても、前述の青木遺跡や杉沢Ⅲ遺跡が規模としては妥当であるのだろう。このように、多くの要素で神社との共通性を見出せるものの、矛盾する部分も多く、現段階では、当遺跡を神社遺跡と認定することは無理がある。

## 6.まとめ

これまで山林寺院と神社という視点から当遺跡を検討してきた。結論的には、古代の神社遺構としての共通性はあるものの、認定する根拠と規模等の矛盾点から、神社とすることには無理がある。調査事例が増える中で、今後、同類の遺跡が調査され、古代の神社の概念が大きく転換する可能性はあるものの、現段階では山林寺院の一形態と見るのが穩當だろう。ただ、依然として共通要素から逸脱した存在であることは間違いない、今後山林寺院の調査事例が増えたとしても、この問題は解決困難な性格といえる。そもそも、奈良時代の仏教觀には神仏習合の動きがあり、各地で見られる神宮寺の建設など急速に地方へと拡散してゆく。平安時代に神仏習合が、地方へ普及する上で、国司が関わっていたとの説もあり、国衙・国分寺周辺に衛星的に分布してゆく山林寺院との関連性も想起されるところである。山林寺院自体、地域古来の山岳信仰と密教思想とが合体したものとも捉えることが可能であり、神仏習合の地域普及と山林寺院の普及とは時期を同じくすることも考え合わせれば、よりその境界は曖昧なものであったとみるべきだろう。この時代は、神と仏を明確に分離すること自体に無理があったのかもしれない。当遺跡の在り方を神仏習合の世に見られる宗教施設形態と位置づけるつもりはないが、典型的とされる山林寺院の形態とは異なる山間部での宗教施設形態が存在していた可能性を示唆するものといえよう。

以上、八里向山B遺跡の評価について述べたが、まとめるにあたり、垣内光次郎氏、久保智康氏、後藤健一氏、錦田剛氏より多くの資料提供並びにご指摘、ご教示を受けた。制約ある紙面の都合で、それに答えるだけの十分な検討を行えなかったが、論を整理し、比較検討する材料を得ることができたのは、四氏のご教示によるところが大きい。末尾ではあるが、心から感謝申し上げたい。

## 第2項 八里向山J遺跡・八里向山I遺跡の須恵器窯構造特徴と構造復元

須恵器窯については、本文で窯構造の特徴と出土須恵器の特徴及び編年的位置づけを十分に述べているため、総括では、両窯の窯窯構造の特徴整理と構造復元を述べるのみとしたい。

### 1. 八里向山J遺跡須恵器窯（地蔵谷窯）の窯窯構造

J遺跡須恵器窯の構造特徴については、当期の一般的な構造である、大型規模をもつ地下掘り抜き式窯窯構造といえる。排煙口付近から窯背部が削り取られているため、排煙口構造は不明だが、上部に床がせり上がって開口する上部開口型の排煙口で、排煙調整溝が伴うものと予想している。床面は傾斜が急で、掌大の礫石が床面にはめ込まれる段を築き、製品滑落防止のための置台としている。当期の北陸の一般的な窯構造特徴を有しているといえるが、燃焼部構造でやや特異性が見られる。通常、この時期の当構造の窯には、燃焼部床下に舟底状ピットなどを設ける事例はなく、北陸では7世紀後半から出現するが、当窯の燃焼部には類似する除湿機能を意識したと思われる構造が伴っている。床を低く削り取り、その上に炭化層や須恵器を入れ、床を貼るもので、土坑状を呈していないのと焼成部境付近に設けられていないため、舟底状ピットとしなかったが、当施設の機能の一つとされる除湿機能目的の施設と予想する。舟底状ピット出現前の意図的な構築方法を示すものといえるだろう。また、燃焼部床上に並べられた大型の礫石3点も、注目される。ここに置かれていた意図は不明だが、石の下に須恵器が存在しており、焚いている段階のものではないことは確かである。ただ、強い被熱を受けており、窯に伴うものである。焚口閉塞石として使われたものか、焼成部置台として使われたものなのだろう。

当窯構造は北陸で類例が多く、構造復元を試みたことがある（望月1999a）。当資料から、その内容を変更す

る新たな知見はなく、追認する形となった。ただ、窯自体は構造的ないしは焼成技術的に欠陥があったのか、数度の焼成を行なっているにもかかわらず、焼成部上半は酸化被熱のままで、十分な温度上昇が行われていないものと予想された。構築土壌にも大きく関連するが、比較的操業回数の少ない短期に廃絶した窯であったといえる。

## 2. 八里向山I遺跡須恵器窯の窯構造について

I遺跡須恵器窯構造は、地下掘り抜きの窯構造である。能美窯跡群ではIV2期以降、半地下天井架構式の構造にほぼ統一されることが確認されており、当期が地下掘り抜き構造の最終段階なのだろう。ただ、当窯に遡るIII期の来丸サクラマチ1号窯の窯体プランを見ると、焼成部境を若干絞り込む胴張りプランで、緩やかな床面傾斜をもつ長い直立煙道構造をもっている。当窯構造との違いは、床面傾斜増加に伴う煙道短縮というこの時期の構造変遷の流れで考えられる可能性があるが、当窯の焼成部境に絞り込みを持たない「すん胴」プランは異質であり、焼成部最上位の地山作り出しの段構築、石置き台使用など、8世紀の能美窯跡群は勿論のこと、当期の南加賀窯跡群でも確認できない。窯背面の逆「U」字に巡る排水溝も北陸では類例に乏しく、またさらに、焼成部境に伏せ置き並列の長胴釜を設置するという特異な焼成方法も異質といえる。灰の付着状況や床面、長胴釜の被熱具合から、長胴釜の縦に割れた半欠け品を設置して焼成が行なわれたことは間違いない、意図的に窯の部材として使われている。焼成部境に設置される分焰状施設である点から、8世紀後半に尾張で出現していく焼成部境の分焰柱を類似施設として想定しがちだが、柱の本数や天井まで達する太い柱である点など、同一視することはできない。分焰柱には、焰を分ける意味が込められていると思うが、焼成実験結果などから、そのような機能は乏しく、最近では、焼成部口を絞ることと天井の崩壊・溶解防止に具えて付設されたものであろうとの見方が主流になろうとしている。その理解でいけば、当窯の伏せ置き長胴釜は天井支えにならなかったことは勿論のこと、天井部分が空いていることから、焼成部境の絞り込み自体もどれだけ効果があったかと疑われる。燃焼部での熾きの厚い溜まり具合を見ると、熾きが焼成部へと出て行かないようにするためのものであった可能性もあり、焼成部との境目を仕切る目的で設置されていた可能性が高いだろう。また、窯内の被熱状態の違いから、伏せ置き長胴釜設置箇所を境に、焼成部側に強い熱が加わっていたことは確かであり、焰の圧力を高める効果も少なからずあったものと予想する。

以上の特徴から、当窯構造が来丸サクラマチ窯からの系譜的流れで出現したものとは考え難く、窯作りに関し、新たな工人の参画があった可能性を持つ。能美窯跡群のIII期までの中心的操業は来丸サクラマチ窯の所在する辰口グループ北群にあり、IV1期になって、北群から辰口グループの南群、和気支群へと窯場移動していると考えられている。窯場移動は、単なる工人移動のみではなく、この時期の生産増を考えると、新たな工人組織の参画があったことはほぼ間違いない、その一つがI遺跡のような形で顕在化したものと言えよう。南群移動直後の主体的グループが存在したと予測される和気峰山支群のうち、唯一発掘調査が行なわれた和気峰山1号窯は、文章による概略提示のみで（橋場・北野 1993）、窯構造の詳細は不明だが、胴張り平面プランや確認面から床面までの深さ、焼成部上位での坏A・坏Bの転用置台設置などの記述からみて、和気後山支群へと構造的に継続性をもつ半地下天井架構式窯である可能性が高い。当窯とほぼ同時期に位置づけ可能な窯であり、主流となる窯造り工人は、来丸サ克拉マチ窯のような胴張り構造をもつ地下掘り抜き式構造から、半地下天井架構構造へとIV1期には構造転換していったものだろう。ただ、和気峰山1号窯は全長9m程度の大型を呈す窯ということであり、大型化する当期の特徴を備えていたものといえる。

以上、両遺跡の須恵器窯構造について、特徴を述べた。J遺跡窯は燃焼部構造、I遺跡窯は平面プランと掘り抜き構造、そして焼成部境の釜の倒立設置など、当資料は構造復元に興味深い資料を提供している。また、製品に関しては、両窯とも生焼け品が半数以上存在していたため、還元焼結品との法量差を統計的に出すことができ、生焼け品から還元焼結品への法量1割縮小の法則性を導き出すことができた。今後、窯場製品の法量統計を行なう際の重要な視点であるし、注意すべき点だろう。なお、本論をまとめるにあたり、藤原学氏、森内秀造氏、木立雅朗氏をはじめ、窯跡研究会諸氏よりご教示を受けた。末尾ではあるが、心から感謝申し上げたい。

## 附節 参考引用文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1989『浄水寺墨書資料集』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1998『宮竹うっしょやま A 遺跡』『能美丘陵東遺跡群Ⅲ』
- 稻垣栄三 1977『古代の神社建築』『文化財講座 日本の建築Ⅰ 古代Ⅰ』第一法規
- 上原真人 1986『仏教』『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店
- 太田博太郎 1998『日本建築史基礎資料集成 1—社殿Ⅰ—』中央公論美術出版
- 小倉慈司 1994『八・九世紀における地方神社行政の展開』『史學雜誌』第103編第3号 史學會
- 小田和利 2003『地方官衙と陶硯一大宰府跡出土例を中心として—』『古代の陶硯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐって—』古代官衙・集落研究会
- 垣内光次郎 2001『南加賀の山間寺院』『古代学協会公開研究会 北陸の平安時代 山間寺院を探る』金沢大学
- 櫻田 誠 1996『里川 E 遺跡』『大知波岬廃寺跡シンポジウム事業報告書』湖西市教育委員会
- 金沢市教育委員会 1994『三小牛ハバ遺跡』
- 木立雅朗 1994『能美(辰口)窯跡群における8世紀中葉の画期について』『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
- 木立雅朗 1998『能美窯跡群の概要』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(資料編)』北陸古代土器研究会
- 木立雅朗 2003『「刷毛目」調整と工具の基礎的研究 1—「刷毛目」研究の課題と「刷毛目」の役割—』『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会
- 北野博司 1993『「加賀」の須恵器生産における7世紀初頭の画期』『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
- 北野博司 1999『須恵器貯蔵具の器種分類案』『北陸古代土器研究』第8号(須恵器貯蔵具を考えるⅠ) 北陸古代土器研究会
- 北野博司 2001『須恵器の風船技法』『北陸古代土器研究』第9号(須恵器貯蔵具を考えるⅡ) 北陸古代土器研究会
- 久保智康 1994『北陸の山岳寺院』『考古学ジャーナル』No382 ニューサイエンス社
- 久保智康 2001a『古代山林寺院の空間構成』『古代』第110号 早稲田大学考古学会
- 久保智康 2001b『平安時代の山林寺院と越前の遺跡』『古代学協会公開研究会 北陸の平安時代 山間寺院を探る』金沢大学
- 湖西市教育委員会 1996『大知波岬廃寺跡シンポジウム事業報告書』
- 後藤健一 2003『山林寺院』『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会
- 島根県古代文化センター 1996『いにしえの島根ガイドブック第6巻—神々と仮の風景—』
- 清水町教育委員会 1998『越前・明寺山廃寺』
- 田嶋明人 1988『古代土器編年輪の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』北陸古代土器研究会
- 出越茂和 1999『古代北陸における官寺・山寺・里寺』『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会
- 中村英洋 1985『能美窯跡群の須恵器編年(b)南群』『辰口町湯屋古窯跡』辰口町教育委員会
- 錦田剛志 2003『「出雲國風土記」にみるモリ・ヤシロ・ミヤ』『神道宗教学会第57回学術大会 古代の神社』
- 橋場和彦・北野博司 1993『辰口町和気岬山1号窯の発掘調査について』『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
- 斐川町教育委員会 2001『杉沢Ⅲ遺跡』
- 菱田哲郎 1990『八代宮ノ谷窯跡』『鬼神谷窯跡発掘調査報告書』竹野町教育委員会
- 丸山 茂 2001『神社建築史論』中央公論美術出版
- 望月精司 1995『加賀地域における7世紀後半の須恵器・土師器生産』『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
- 望月精司 1999a『排煙調整溝付窯構造考』『林タカヤマ窯跡』小松市教育委員会
- 望月精司 1999b『須恵器窯構造雑感』『窯跡研究会第2回シンポジウム 須恵器窯の技術と系譜(発表要旨集)』窯跡研究会
- 望月精司 2000『窯跡に捨てられた須恵器をどう考えるか』『窯研通信』13号 窯跡研究会
- 望月精司 2001『須恵器窯の製作痕跡と成形方法』『北陸古代土器研究』第9号(須恵器貯蔵具を考えるⅡ) 北陸古代土器研究会
- 望月精司 2002『凡例 図表 北陸古代土器編年表と南加賀窯跡群細分案』『二ッ梨一貫山窯跡』小松市教育委員会
- 根本祐樹 2003『古代神社の立地・環境』『神道宗教学会第57回学術大会 古代の神社』國學院大學

B遺跡Ⅱ区出土土器観察表（第229～231図）

〈須恵器〉

番号	器種名	出土地点	法 算(cm)	軸土	色・形	残存 時期	要件	備 考	番号	器種名	出土地点	法 算(cm)	軸土	色・形	残存 時期	要件	備 考		
1	环B蓋大	E4c	口15.8,高3.2 底2.4,腹高1.0	細美	青灰良好	364	V <sub>1</sub>	内无 脂著	直燒Ⅱb。	32	E4c	E4b+c+E5a+c	口113.1,高3.75	細美	灰白不良	23	V <sub>1</sub>	なし	直燒Ⅱb。 口緣一部加内外油 漬多。 外底不平直。
2	*	E4c+d+E5b	口17.4,高3.7 底2.65,腹高1.25	*	青灰良好	略定	V <sub>1</sub>	内无 中央	直燒Ⅱb。	33	*	E4b+E5a	口12.8,高3.6	粗加	青灰良好	1/3	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。 口緣一部加内外油 漬重。
3	*	E3b+d+E4b+c+ E5b+E5b	口17.0	*	青灰良好	56	*	なし	直燒Ⅱb。	34	*	E4c+E5c	口12.7,高3.6	*	*	略定	*	*	直燒Ⅱb。 外底不平直。 口緣內油漬。
4	*	SB01-P11+D5c+ E4b+d+E5a+c	口15.5,高3.8 底2.2,腹高1.0	南加	青灰白良	1/2	V <sub>1</sub>	内无 若干	直燒Ⅱa。	35	*	E4c	口113.3,高3.6	*	*	35	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。
5	环B蓋中	E4b	口13.4,高3.2 底2.1,腹高1.3	細美	灰色堅緻	28	V <sub>1</sub>	なし	直燒Ⅱb。 天端縫削り。	36	*	E5d+E4c	口13.0,高3.6	能美	青灰良	1/4	V <sub>1</sub>	内无 若干	直燒Ⅱb。
6	*	E3d+E4a+F5a	口13.9,高3.2 底2.1,腹高1.3	*	青灰良好	35	*	*	直燒Ⅱb。 天端縫削り。	37	*	チラス1	口12.8,高3.8	粗加	青灰良好	1/3	*	なし	直燒Ⅱb。 外底へ？記号口 縫。内油漬。
7	*	E5b-d+E5a	口12.7,高3.1 底2.3,腹高1.2	*	青灰白良	45	*	内无 若干	直燒Ⅱb。	38	*	E4a+d	口12.9,高3.45	*	*	35	V <sub>1</sub>	内底 若干	直燒Ⅱb。
8	*	E4c+E5c+F5b	口13.1	*	乳白良好	33	*	内无 若干	直燒Ⅱb。 内唇夜あり？。	39	*	E5d+E5a+b	口12.4,高3.4	*	*	1/2	*	なし	直燒Ⅱb。
9	*	E5c+d+E5b	口13.0	南加	青灰直好	46	*	*	直燒Ⅱa。 内底堅硬(耐用度)。	40	*	チラス1	口12.6,高3.35	*	青灰白良	1/3	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。
10	*	E4b+E5a+c	口13.4	能美	灰色堅緻	34	V <sub>1</sub>	なし	直燒Ⅱb。	41	*	チラス1+D4b+a D5c+E4c+E5a+c +F4c	口12.4,高3.2	能美	*	56	*	内底 若干	直燒Ⅱb。 口縫内油漬。
11	*	D3d+E4c+E5c	口13.8	*	青灰良好	1/2	*	内无 中央	直燒Ⅱb。	42	*	E3d+E4b+c	口12.9,高3.25	*	青灰良	1/2	V <sub>1</sub>	なし	直燒Ⅱb。 口縫加油漬。
12	*	D6a	口13.7,高2.9 底2.5,腹高1.2	*	青灰直好	35	*	内无 全体	直燒Ⅱb。	43	*	SB01-P10+E5d+ D5c	口12.2,高3.4	*	青灰白良	*	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。 口縫一部内油漬。
13	环B蓋小	E5c	口11.8	*	*	28	V <sub>1</sub>	なし	直燒Ⅱb。	44	*	SB02-P4+D4d+ E4a+b+c	口12.8,高3.4	*	青灰白良	*	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。 全体一部内油漬。
14	*	?	口13.7,高3.4 底2.4,腹高1.2	南加	青灰直好	34	V <sub>1</sub>	内无 若干	直燒Ⅱb。 里底・軸用視。	45	*	SB01-P2-P10+ E5a+b+d	口12.0,高3.1	*	青灰良	1/3	*	口縫内油漬。	直燒Ⅱb。
15	*	E5a+c+d+E6a	口12.4	*	乳白堅緻	38	*	*	直燒Ⅱa。 堅致・軸用視。	46	*	チラス1+D6a	口12.4,高3.0	*	青灰良好	2/3	*	内底 若干	直燒Ⅱb。 口縫内油漬。
16	环B身帶大	E4d+E4c	口18.9,高7.65 底11.6,台高3.05	能美	灰白良好	1/2	V <sub>1</sub>	内无 若干	直燒Ⅱb。	47	*	E4b+E5c+F5a	口113.5,高3.4	*	青灰直好	1/4	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。 口縫内油漬。
17	*	E3d+E4b+c+d+ E5c+F3a	口15.3,高3.9 底9.4,台高0.55	南加	青灰良好	1/4	V <sub>1</sub>	なし	直燒Ⅱa。	48	*	E5c	口12.8,高3.3	南加	青灰良	1/2	*	なし	直燒Ⅱb。
18	*	E3d+E4b+c+d+ E5c+F4a	口16.4,高6.85 底9.2,台高0.45	能美	灰白直	23	*	内底 若干	直燒Ⅱa。	49	*	E5d+E4c	口113.2,高3.15	*	青灰白良	3/5	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。
19	环B身中	包合唇	口18.4,台高0.55	*	*	1/5	*	内底 若干	直燒Ⅱa。	50	*	E5c	口112.2,高3.3	能美	青灰直好	2/3	*	内底 若干	直燒Ⅱb。 口縫内油漬。
20	*	SB01+E4b	口112.1,高4.4 底7.7,台高0.06	南加	青灰堅緻	定形	V <sub>1</sub>	内底 若干	直燒Ⅱa。	51	*	E5d+E4d	口112.6,高3.2	*	青灰白良	1/3	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。
21	环E身	チラス1	口111.6,高3.7	*	灰白堅緻	*	V <sub>1</sub>	なし	直燒Ⅱa。 内底深か油漬。	52	*	E4a+b+c+E5a	口12.8,高3.2	*	青灰直好	1/2	V <sub>1</sub>	なし	直燒Ⅱb。 口縫。
22	E4A	E3d+E4b+c+E5c	口111.8,高4.0	*	青灰良	1/2	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱa。 口縫内深か油漬。	53	*	E4c+E5c	口12.8,高3.15	*	灰白不良	2/3	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。 体部内油漬。
23	*	SB03-P2	口12.4,高3.8	*	底内不良	25	*	*	直燒Ⅱa。	54	*	E4d+E4c	口13.1,高3.5	*	青灰直好	1/2	*	*	直燒Ⅱb。 口縫内油漬。
24	*	D6a	口112.5,高3.4	南加	青灰良好	53	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱa。	55	*	E5c	口12.7,高3.2	*	灰色良好	*	*	なし	直燒Ⅱb。
25	*	E4b+E5a+c+d	口112.2,高3.4	南加	七口て鳥脛	2/3	*	内底 若干	直燒Ⅱa。 外底ハラ記号口。	56	*	E5d+c+d	口12.9,高3.3	*	青灰直好	2/3	*	*	直燒Ⅱb。
26	*	D6a	口12.8,高3.8	*	青灰良好	略定	*	*	直燒Ⅱa。	57	*	チラス1-C4a+d D4b	口12.2,高2.25	南加	*	1/2	*	*	直燒Ⅱb。 外底ハラ記号口。
27	*	チラス1	口12.6,高3.8	*	灰白不良	2/3	*	*	直燒Ⅱa。	58	*	E5c	口12.2,高3.1	能美	青灰直好	2/3	V <sub>1</sub>	*	直燒Ⅱb。 口縫内油漬。
28	*	E5a	口113.3,高3.8	能美	青灰直好	1/2	V <sub>1</sub>	内底 若干	直燒Ⅱa。 少しあ。	59	*	E5c	口12.6,高3.25	南加	*	56	*	内底 若干	直燒Ⅱb。 外底へ？記号口。 口縫内油漬多。
29	*	SB01+D5c+ E5a+c+d+E5b	口113.4,高3.45	*	青灰白良	2/3	*	内底 若干	直燒Ⅱa。	60	*	E4b+E5c	口12.4,高3.05	*	灰白不良	1/2	V <sub>1</sub>	なし	直燒Ⅱb。 口縫内油漬。
30	*	E4a+b+E5a+c+d	口12.2,高3.7	南加	青灰良好	*	V <sub>1</sub>	-	直燒Ⅱa。 外底ハラ記号口。 体部内油漬。	61	*	E4a	口112.9,高3.1	能美	青灰直好	*	V <sub>1</sub>	-	直燒Ⅱb。 口縫内油漬多。
31	*	チラス1	口12.2,高3.7	能美	灰白不良	1/2	*	なし	直燒Ⅱa。 内底へ？油漬。										

番号	器種名	出土地点	法 畳(cm)	胎土	色・施	残存時期	厚さ	備考
62	环A	牛生2T	口12.4,高2.9	斎美	青灰良好	1.9	V <sub>1</sub>	なし 重ね目。
63	*	D3d+E3b+E4a+c	口12.4,高3.1	*	*	5.6	V <sub>1</sub>	内底 中央 重ね目。
64	*	牛生2T	口13.8,高3.3	青加	灰白不良	2.0	V <sub>1</sub>	なし 口縁内外油斑。
65	*	E4a	口12.5,高2.7	斎美	青灰良好	4.5	*	重ね目。 口縁内油斑。
66	*	E5c+d+F5b	口12.0,高2.85	*	*	2.0	V <sub>1</sub>	重ね目。 口縁内外油斑。
67	小判A	E3a+c	口10.6,高3.2	*	青灰白且	3.5	*	なし 重ね目。 口縁内油斑。
68	*	E3d+E4c	口10.8,高2.9	*	*	2.5	*	重ね目。 内外に油斑。
69	*	E5c+F5b	口10.6,高3.3	*	灰白且	1.2	V <sub>1</sub>	重ね目。 口縁内油斑。
70	鑿A	E3d+E4a+c+ E5c+d+F2a+F3b	口16.0,高2.05	*	青灰良好	4.0	V <sub>1</sub>	内底 端着 重ね目。 細目。
71	*	E3d+E4a+c+d+ E5a	口15.6,高2.2	*	*	1.2	*	重ね目。
72	*	E3d+E4a+c+F3a	口17.4,高1.9	*	青灰白且	1.5	V <sub>1</sub>	内底 全体 重ね目。
73	*	S801+P2+ E5c+d+F5b	口15.4,高2.5	*	青灰白良好	4.8	V <sub>1</sub>	内底 端着 重ね目。 重ねあわせ。 軽用泥。
74	*	E4a+c+E5c+F5c	口15.2,高2.1	青加	暗青灰良好	2.5	V <sub>1</sub>	内底 中央 重ね目。 軽用泥。
75	*	E3d+E4a+c+d+ E5c	口17.7,高2.25	*	灰白且	3.4	V <sub>1</sub>	内底 全体 重ね目。
76	*	E4a	口16.0,高2.45	*	青灰白且	4.8	*	内底 若干 重ね目。
77	*	E4c+E5c+F4b+ F3a	口17.3,高2.2	斎美	青灰良好	3.4	V <sub>1</sub>	内底 中央 端着 重ね目。
78	*	E4d+c+d+E5c+d	口16.6,高2.3	*	*	*	*	内底 全体 重ね目。
79	*	E3d+E4c+d	口17.2,高2.3	*	灰白不良	*	*	重ね目。
80	*	E3c+E4b+c+F3a	口16.8,高2.0	*	青灰良好	2.0	V <sub>1</sub>	内底 若干 重ね目。
81	*	E4a+c	口16.8,高2.0	*	青灰白且	4.5	*	内底 全体 重ね目。
82	*	牛子A+E5c	口15.9,高1.9	青加	青灰良好	7.8	V <sub>1</sub>	内底 若干 重ね目。
83	*	C4d+D5c+D6c+c+ E4b+E5a+c+d+F5c	口15.7,高2.1	*	暗青灰良好	3.4	V <sub>1</sub>	なし 外底へ少記号上。
84	*	E4b+c+E5a+b+c	口16.5,高2.0	青加	青灰白且	2.0	V <sub>1</sub>	内底 端着 重ね目。
85	*	S801+P1+a+ ナラス1+D4b+c+ E4b+E5c	口13.8,高1.9	青加	青灰良好	1.2	V <sub>1</sub>	内底 中央 重ね目。
86	*	E4a	口16.1,高1.95	斎美	青灰良好	2.0	V <sub>1</sub>	内底 若干 重ね目。
87	*	D5c+E3d+E5a+c+ F5c	口16.5,高1.8	青加	暗青灰良好	3.0	V <sub>1</sub>	内底 若干 重ね目。
88	*	E5c+d+F5a+b	口16.9,高2.25	斎美	青灰白且	4.8	V <sub>1</sub>	内底 全体 重ね目。
89	環B	E3d+E4c	口15.6,台高0.8	*	*	3.5	*	底面削り。 内面若干油斑。
90	鉢E	ナラス1+D4a+b+c+ E4a+b+c+d+E5c	口18.7,高12.5 H22.3	青加	灰堅継	2.8	V <sub>1</sub>	重ね目。体中窓一 筋の有り。内面 玉子文字。 容量5.529L。
91	鉢A	E3d+E4c	口25.0	斎美	灰良好	1.0	*	—
92	小判平腹	B10c	口14.4	青加	暗青灰良好	1.5	?	—

番号	器種名	出土地点	法 畳(cm)	胎土	色・施	残存時期	厚さ	備考	
93	瓶B	S801+P12+D5c+ E4a	口19.6,高15.2 H35.7,肩高10.6	青加	暗青灰堅継	1.0	V <sub>1</sub>	—	
94	水瓶	S801+P12+D5c+ E4a+E5c+F5z	口13.8 H16.5,肩高12.2 H25.7,台高14.0	*	暗青灰堅継	0.4	V <sub>1</sub>	高台 台に焼付付着。 容量約1.046L。	
95	瓶C	ナラス2+D5c+ E4b+c+d+E5c+ F5c+F5a	口14.9,高18.5 H17.8,肩高6.7 H27.0,台高11.6	*	斎美	暗青灰堅継	*	V <sub>1</sub>	容量3.301L。
96	鉢D(灰2T)	E3d+F3a+ E5c	口17.0,高11.0 H19.6,肩高22.8 H29.9~2.0	青加	暗青灰堅継	2.0	V <sub>1</sub>	—	

### (土師器)

番号	器種名	出土地点	法 畳(cm)	胎土	色・施	残存時期	厚さ	備考
97	小判A	E5d	口11.8,高3.45	B	青且	1.0	V <sub>1</sub>	底へ少網目。 口縁内外全漆黒。
98	*	E5c+F5a	口11.4,高3.8	A	青灰且	1.2	*	底へ少網目。 口縁一部内油垢。
99	*	S801+P8	口11.1,高3.7	*	青且	1.0	*	底へ少網目。 口縁一部内油垢少範囲。
100	*	E5b+d+E6a	口10.6,高3.2	*	明青且良	1.0	*	底へ少網目。 口縁内油垢。
101	*	E5d	口10.8,高3.4	*	青灰且	1.0	*	底へ少網目。 口縁一部内油垢。
102	*	E6c	口10.6,高3.1	*	青且	1.0	*	底へ少網目。 体底内油垢。
103	*	E6c	口10.6,高3.1	*	明黄褐不良	1.0	*	底へ少網目。
104	*	E5c+d	口10.4	*	純青不良	1.0	*	口縁内油垢。
105	内底外赤端 B	ナラス1	口12.8,高5.0 H6.8,台高0.6	B	*	1.0	V <sub>1</sub>	内面工字目。 外体少網目。 口縁内外油垢。
106	内底外赤端 A	E3d	底8.5	C	浅黄褐不良	1.0	*	内面工字目。 外相醜目。
107	瓦型盖	E3d	口13.6,底13.6	D	粗且好	1.0	V <sub>1</sub>	—
108	*	E4b+c+E5b	口15.0,底13.2 H15.6	*	明青且良	1.0	*	—
109	鉢B	S801+E5a+c+d+ E5a+b	口24.6,高16.0 H21.1,台22.0	A	純青良	1.0	*	内外工字目。 体底少網目。 容量7.99L。
110	瓦型盖	E4b	口21.0,底17.8	D	*	1.0	V <sub>1</sub>	—
111	*	S801+P2+P12+ S802+P1+S803+ P2+D4c+E5c+ E5b	口22.7,底20.1 H22.8	A	*	1.0	V <sub>1</sub>	脚外工字目。

\* 112は三彩陶器小型蓋A、D4d出土。口径3.6、厚3.1、高4.6、高4.25、台高0.2。残存率1/2。胎土は緻密で飛毛剥く。素地は灰白色目。白色釉をベースに、緑色釉で分割施釉し、緑色釉を羽部へポイント施釉。

章 113~115は鉢器。全て刀子と思われる。113はE3b、114はD4b、115は武振トビンチ出土。

C遺跡出土土器観察表（第233図）

## 〈須恵器〉

番号	器種名	出土地点	法寸量(cm)	胎土	色・焼	残存時間	裏柱	備考
1	环B身中	南行包含部	□13.6	A	褐色 春灰良好	1/10	V	—
2	盤A	南谷P4	□15.0,高2.3	*	青灰白灰	1/3	*	内底 全体 底施瓦。
3	*	南谷E含腰	□16.5,高2.8	*	灰褐良	1/2	*	内底 若干 底施瓦。
4	*	*	□15.0,高3.9	南加	春灰良好	1/4	暗	— 底施瓦。
5	*	南谷P6	□14.5,高2.15	*	*	1/3	*	底施瓦。
6	*	南行包含部	□14.8,高1.85	*	*	1/6	*	底施瓦。

D遺跡出土土器観察表（第235図）

## 〈須恵器〉

番号	器種名	出土地点	法寸量(cm)	胎土	色・焼	残存時間	裏柱	備考
1	平瓶	S001-23-22	ø17.8	A	褐色 春灰良好	1/2	口子	—

番号	器種名	出土地点	法寸量(cm)	胎土	色・焼	残存時間	裏柱	備考
7	外輪内黒焼 B	南谷P4	□15.8,高0.7 台7.7	A	褐色	1/2	口	底面削り。 内面ミガキ。
8	内黒焼	南谷	□13.9	B	明灰燒具	1/10	*	内面ミガキ。
9	外輪内黒焼 A	南谷P4	ø6.6	*	褐色良	*	*	底面削り。 内面ミガキ。

I 遺跡須恵器窯跡出土土器観察表（第241～246図）

## 〈窯体内酸化生焼け須恵器〉

番号	器種名	出土地点	法寸量(cm)	胎土	他成	色調	残存	備考
1	环B蓋中	燒成部下位～ 中位床	□14.3,高3.0 径2.8,腰高1.2	A	1B	Qq16	3/4	
2	*	燒成部下位床	□14.8,高2.7 径2.8,腰高1.3	*	*	*	*	火へ少割り。
3	*	燒成部中位～ 下位床	□13.7,高2.8 径2.9,腰高1.2	E	1C	Hs16	2/3	重焼1。 火へ少割り。
4	*	*	□14.7,高3.0 径2.8,腰高1.2	A	*	Qq16	3/4	重焼1。 火へ少割り。
5	*	燒成部下位床	□14.0,高3.0 径2.8,腰高1.0	*	1B	Qq16	2/1	重焼1。 火へ少割り。
6	*	燒成部上位床	□14.6,高3.5 径2.6,腰高1.5	E	1C	Sq16	完形	重焼1。 火へ少割り。
7	*	燒成部下位床	□14.3,高3.7 径2.7,腰高1.35	A	1B	*	略定	重焼2a; 火へ少割り。
8	环B蓋大	*	□16.2,高3.8 径2.5	*	*	Qq16	1/1	重焼2b。 火へ少割り。
9	*	燒成部床	ø12.8,腰高2.1	B	1A	1B	少 火片	
10	环B身中	燒成部下位床	□12.8,高4.3 ø9.5,台高0.35	*	1B	Qq16	3/5	
11	*	燒成部中位床	□12.7,高4.1 ø9.0,台高0.4	*	*	*	7/8	
12	*	燒成部下位床	□12.7,高3.8 ø9.5,台高0.3	E	2C	Hs17	1/1	裏赤灰痕。
13	环A	*	□12.8,高3.8	B	1B	Sq16	略定	
14	*	*	□12.9,高3.65	A	*	Qq16	1/4	
15	*	燒成部中位～ 下位床	□13.2,高3.6	B	*	Sq16	1/2	「」字痕痕。
16	*	燒成部下位床	□13.8,高3.65	*	*	Qq16	1/3	火へ少割り 稍力消土。
17	*	*	□13.5,高3.8	*	*	*	3/5	

番号	器種名	出土地点	法寸量(cm)	胎土	他成	色調	残存	備考
18	环A	燒成部下位床	□12.8,高3.7	B	1B	Qq16	1/3	
19	*	燒成部中位床	□13.6,高3.8	E	*	*	7/8	
20	*	燒成部床	□13.0,高3.7	A	*	*	1/3	
21	*	燒成部下位床	□13.7,高3.7	B	1C	1q16	3/5	
22	*	燒成部中位床	□13.8,高3.6	A	1B	Sq16	*	
23	*	燒成部下位床	□13.8,高3.8	*	*	*	1/6	
24	*	*	□13.4,高3.4	*	*	Qq16	2/3	
25	*	*	□13.8,高3.4	B	*	Sq16	1/5	重焼日。 表面へ少記号「」。
26	*	*	□13.4,高3.1	C	*	*	4/5	重焼日。
27	*	*	□13.8,高3.85	*	*	Sq16	1/2	
28	*	*	□13.2,高3.7	A	*	Sq16	1/5	
29	*	燒成部中位床	□13.6,高3.7	*	*	Qq16	略定	重焼日。
30	环A	燒成部下位床	□13.8,高2.25	*	*	Sq16	1/3	重焼日。 表面削り。
31	*	燒成部床	□16.1,高2.4	B	*	*	5/6	表面削り。
32	*	燒成部下位～ 中位床 燒成部床	□15.9,高2.0	A	1C	*	7/8	底面削り。
33	*	燒成部下位床	□15.8,高2.4	*	1B	Qq16	1/3	底面削り。
34	*	*	□16.5,高2.5	*	*	*	1/2	底面削り。
35	*	*	高17.1,高2.5	*	*	*	2/3	底面削り。
36	*	*	□17.0,高2.1	*	*	*	*	底面削り。
37	*	*	□16.8,高2.5	*	*	*	1/3	底面削り。
38	*	燒成部床	□18.4,高2.5	B	*	*	4/5	底面削り。
39	*	燒成部下位床	□18.9,高2.8	*	1C	Re17	*	底面削り。

番号	器種名	出土施設	通量(cm)	断土	焼成	色調	残存	備考
40	盤A	燒成部下位～中位床	1116.3,高2.85 底高5.0,側高3.0	A	IB	Qq16	78	底面削り。
41	*	燒成部下位床	1116.7,高2.2	E	*	*	2/3	底面削り。
42	*	*	1116.2,高2.7	B	*	Sq16	56	底面削り。
43	*	燒成部中位床	1116.7,高2.7	A	*	*	*	煮成目。 底面削り。
44	*	燒成部中位床	1116.7,高2.7	B	*	*	78	煮成目。 底面削り。
45	*	燒成部中位床	1118.6,高2.65	A	*	Qq16	略定	底面削り。
46	*	燒成部床	1118.2,高2.7	*	*	*	78	底面削り。
47	*	燒成部下位床	1116.9,高2.8	*	*	*	2/3	底面削り。
48	*	*	1117.4,高2.65	B	*	Sq16	45	底面削り。
49	*	燒成部床	1117.8,高2.45	A	IC	Mq16	18	底面削り。
50	*	*	1118.0,高2.5	B	*	Bq16	*	底面削り。
51	*	燒成部中位床	1117.4,高2.7	A	*	Sq16	52	底面削り。
52	*	*	1118.6,高2.75	B	IB	Qq16	78	底面削り。
53	*	燒成部床	1119.4	*	IC	Ss16	18	底面削り。
54	*	燒成部中位～下位床	1118.4,高2.9	*	*	Sq16	3/4	底面削り。
55	*	燒成部床	1119.4,高2.8	A	IB	Qq16	*	底面削り。
56	盤B	燒成部下位床	—	C	*	Ls16	1/0	底面削り。
57	盤C	燒成部中位床	1116.5,高2.84 底高5.0,側高3.0	B	IC	Bi6	16	円盤形基底外側風痕削り き+カキ目→泡吹で叩き成形(脚叩き,Da当て) +カキ目。
58	瓦壓蓋	燒成部下位～中位床	1113.8,高2.50 底21.0	E	IB	Rr17	1/5	側中位外～底面削り。
59	*	*	1124.6,高22.7 底21.0	*	*	*	断土 1/5	
60	*	*	1123.6,高23.0 底21.0	*	*	Rr18	1/5	側上半内外角半径→側中位削り+側下位～底面 を出し(外輪)叩き、内(Da当て)。 容量基19.962L。
61	*	燒成部床	1120.0,高17.2	*	*	Qq16	断土 1/5	
62	*	*	1122.6,高19.7 底28.4	*	*	Rr17	断土 1/5	
63	*	燒成部中位床	1118.8,高20.2 底16.6	*	*	*	1/2	
64	*	燒成部下位床	1119.6,高18.1 底16.5	*	IA	Bi6	断土 1/4	外面成形叩き無残存。
65	瓦壓蓋	燒成部中位～下位床	1113.6,高15.4 底15.6	*	IB	Rr17	1/2	側下位予掲き削り。
66	*	燒成部中位床	1115.4,高15.8 底13.8	*	*	Qs18	1/0	
67	*	燒成部下位床	1112.9,高11.1 底11.6,高13.9 底6.6	*	2B	Rr17 sq9	2/4	側下端～後端移へ側9% 底中央部分無叩き倒。 容量2.324L。
68	*	燒成部中位床	1113.6,高13.6 底12.2	*	IB	Qs18	1/8	側下端予掲き削り。 内ハサウ。
69	*	*	1113.6,高14.2 底12.4	*	*	Qq18	*	側下外予掲き削り。 内ハサウ。
70	盤	*	1136.7,高3.3	*	*	Qq17	1/2	側下平面手掲き削り。 底叩き出し(外輪)叩き。 (内Da当て)。
71	*	*	1137.8,高34.3	*	*	*	1/8	側下外予掲き削り。 底叩き出し(外輪)叩き。 (内Da当て)。
72	*	*	1138.5,高35.0	*	*	Qq16	1/6	側下平面手掲き削り。 底叩き出し(外輪)叩き。 (内Da当て)。

番号	器種名	出土施設	通量(cm)	断土	焼成	色調	残存	備考
73	盤	燒成部下位床	1138.6,高35.4	F	IB	Rr17	1/10	子牛外羽ニシナ。
74	盤	燒成部下位～中位床	1128.0,高28.8 底17.0	*	*	Qq18	3/3	脚丁半外羽削り。内 側9%後端き成形(例) He叩き。内(Da当て)内 外9%目。 容量21.372L。
75	*	燒成部下位床	1137.8	*	*	Ss18	断土 1/5	内外面に底叩き無残存 (例)叩き。内(Da当て)。
76	脊火堆	燒成部下位～燒成部床	1139.0,高38.2 底14.3	B	IC	Ip16	3/4	頭部成形叩き無残存。 部分R印さぬやき目。 内(Da当て)。 肩部环状走模。

### 窯体内遇元焼成須意器

番号	器種名	出土施設	通量(cm)	断土	焼成	色調	残存	備考
77	环B垂特純	燒成部下位床	支薪径10.0	B	4A	Xe5	1/10	重焼工。 天ヘラ削り。
78	环B蓋大	*	1119.4	C	2B	Aq12	1/6	重焼工。 天ヘラ削り。
79	环B蓋中	*	1112.7,高2.8 底2.4,粗高1.1	*	2D	Fq16	定窓	重焼工。 天ヘラ削り。
80	*	*	1112.6,高2.5 底2.2,粗高1.2	A	*	Qq17	1/3	重焼工。 天ヘラ削り。
81	*	*	1112.8	B	5A	Ec5	1/8	天ヘラ削り。
82	*	*	1112.8	C	2A	Gt9	3/2	重焼工。 天ヘラ削り。
83	环B蓋小	*	1111.3,高2.1 底1.4,粗高0.9	*	3A	Aq12	1/3	重焼工。 天ヘラ削り。
84	*	燒成部中位床	1111.5,高2.7 底2.3,粗高1.0	*	2A	HhK	5/6	重焼工。 天外にヘリ記号(×)。 天ヘラ削り。
85	环B身大	燒成部下位床	1117.1,高6.1 底13.2,粗高0.65	B	4B	Gs14	3/5	翼白軸用。
86	*	*	1115.4,高5.9 底11.9,粗高0.4	A	3A	Mb8	1/5	
87	*	*	1115.7,高6.25 底10.7,粗高0.65	C	4A	Xe5	1/6	翼白軸用。
88	环B身中	燒成部中位床	1111.6,高3.4 底8.7,粗高0.4	B	5A	Xa4	1/2	翼白軸用。
89	环B身小	燒成部下位床	1111.3,高4.5 底7.6,粗高0.55	A	4B	Aq13	略窓	
90	环A	*	1112.8,高3.6	C	2D	Aq12	1/2	重焼工。
91	*	*	1112.7,高3.7	B	5A	Ft6	*	
92	*	*	1112.2,高3.3	*	3C	Lt6	1/4	重焼工。
93	*	*	1111.6,高3.4	A	4A	Ft6	1/6	翼白軸用。 底ヘリ記号(×)。
94	*	燒成部中位床	1112.9,高2.8	C	3C	Aq6	2/5	重焼工。
95	*	燒成部灰屑	1111.6,高3.0	B	2B	Mt7	3/5	重焼工。
96	盤A	燒成部下位床	1114.3,高1.5	*	3B	Aq12	1/8	翼白軸用。 底ナガタグ。
97	*	*	1115.9,高1.5	*	2D	Fm13	2/3	重焼工。 天ヘラ削り。
98	*	*	1115.0,高1.6	*	4A	Bc7	3/5	翼白軸用。 底ヘリ削り翼。
99	*	*	1115.8,高2.2	A	4B	Dm13	*	翼白軸用。 底手控ち削り。
100	盤B	*	1120.0,高3.1 底16.0,粗高0.6	B	2D	Ft7	1/6	重焼工。底ヘリ削り。
101	*	*	1121.7,高3.1 底17.3,粗高0.85	*	3A	Ft6	*	底ヘリ削り。
102	*	*	1117.1,高3.0,底0.95	C	3B	Lt12	1/20	底ヘラ削り。

番号	器種名	出土場所	法 長(cm)	地 土	焼成	色調	残存	備 考
103	後輪	焼成部下位床	1120.0,高7.6 受10.8,高13.5	B	BD	Cm12	1/2	重焼土。 表へつ割り。 内底上口縁内面摩耗痕。
104	*	*	1119.2,高5.7 受12.2,高1.4	*	4A	E6	1/3	赤土手一端ハラ削り。
105	小笠鉢	焼成部左側壁	1108.8	F	2A	Be0J	2/3	表へつ切口孔。
106	耳	燃焼部	116.0	B	*	Hm8	1/1	
107	丸穴	焼成部中窓	112.0,高1.1	*	4A	Xg7	1/10	側子手叩き。 側子底へ吹削り。
108	*	後成部下窓	116.9 受12.1,高1.2	*	4B	Gm4	1/5	叩き成形底。
109	頭D	*	118.0	*	4C	O96	1/10	
110	長柄釜	焼成部後窓 設置右から 3番目	1122.5,高甚30.0 受16.0,高20.1	F	3A	Gg7	4/8	側子手幅削り後He叩き。 内Dg当て。 口縁部と側子手底内面 焼け合がみ。 容量13.763L。

番号	器種名	出土場所	法 長(cm)	地 土	焼成	色調	残存	備 考
116	鍋	焼成部床	1138.0,高8.0	F	2A	H9 Gg7	1/8	下至外底削り。
117	蓋	焼成部下位床	1138.1	*	*	*	側子手底削り。側子底 外側青くり結合[×]上。	
118	中窓	*	1124.5,高4.2 受21.2	B	4C	Mm7	1/10	側外青くり結合[×]上。
119	等大窓	焼成部下位中窓	*	*	3B	Om12	側土 信片	側外He叩き。内Dg当て。
120	*	*	*	*	*	*	*	側外He叩き。内Dg当て。
121	*	焼成部中窓	*	*	*	*	*	側外He叩き。内Dg当て。
122	*	焼成部中窓 下位床	*	*	*	*	*	側外He叩き。内Dg当て。
123	*	焼成部中窓	*	*	*	*	*	側外He叩き。内Dg当て。

### 〈窯体内窯道具・土師器〉

番号	器種名	出土場所	法 長(cm)	地 土	焼成	色調	残存	備 考
124	窯道具	焼成部床	中 窓長 7.0×12.5×1.4	F	3A	AiH BfD	-	A面粗面直。B面はかがり直。 縦面切削痕。 A面に焼き文字「在作」。
125	*	焼成部下位床	中 窓長 9.3×13.5×1.4	*	*	*	-	A面に指頭痕。 B面にはがれ直。 縦面切削痕。
126	*	焼成部中窓	中 窓長 4.5×8.1×1.3	*	*	*	-	A面強面直。 B面はがれ直。 縦面切削痕。
127	内里土師碗	*	*	B	内里 燒成 内 面化	Ob	1/3	本口クロ追毛筋。 内外3方割調整。
128	小砂土鉢兼 A	焼成部下位床	*	A	具 肌色	1/8	内外3方割。 なぐり成形。	

### J 遺跡須恵器窯跡出土土器観察表 (第257~265図)

#### 〈須恵器〉

番号	器種名	出土場所	法 長(cm)	地 土	焼成	色調	残存	備 考
1	环H蓋	焼成部190	1120.0,高4.1	A	3C	H7	2/3	重焼土。 瓦形斜面《七十アツケ》。
2	*	焼成部中窓(E6) 床	1122.0,高3.8	E	*	I7	*	重焼土。 瓦形斜面削り。
3	*	焼成部中窓(D0) 床	1122.0,高3.8	D	4A	Cm3	1/5	重焼土。
4	*	灰(F1)	1116.0,高3.7	E	2D	Cp13	1/4	重焼土。
5	*	灰(C11-12+F10+ G11-12)	1121.5,高3.7	*	2A	Hb12	3/4	重焼土。火通助削り。
6	*	灰(F11-12)	1120.9,高3.7	A	3A	D67	2/1	重焼土。
7	*	灰(B12+C10-11- 12)	1111.2,高3.9	D	2D	Fh2	1/3	重焼土。 火通助削り。
8	*	焼成部床1954 焼成部中窓164	1111.5,高4.1	E	H-	I68	4/5	重焼土。
9	*	焚口床(E10)	1111.0,高3.4	B	3A	Gg7	2/5	重焼土。
10	*	灰(F12+F11-12)	1111.4,高3.8	E	4A	E67	*	重焼土。
11	*	灰(F11)	1111.5,高3.5	*	3A	Gg5	*	重焼土。
12	*	灰(F11)	1108.0,高3.65	B	*	Gg8	略定	重焼土。
13	*	焼成部中窓	1111.2,高3.5	A	1C	Ie7	1/4	重焼土。

番号	器種名	出土場所	法 長(cm)	地 土	焼成	色調	残存	備 考
14	环H蓋	灰(C11-12+F11- 12)	1110.6,高4.3	A	4A	Cg7	2/3	重焼土。
15	*	燃焼部床	1110.8,高4.3	*	1B	Qn16	3/4	火通助削り。
16	*	灰(F12)	1111.0	E	2D	Hf12	1/8	重焼土。
17	*	灰(C11)	1110.7	B	3A	Eg7	1/5	重焼土。
18	*	燒成部中窓(E6) 床	1108.0,高3.9	D	2B	Oq15	1/6	重焼土。
19	*	灰(F11)	1104.0,高3.7	E	3A	Ef7	1/2	重焼土。 火通助削り。
20	*	灰(F12+Hf3)	1104.0	*	4A	Ee5	1/8	重焼土。 火通助削り。
21	灰H灰	灰(F11)	1104.2,高3.9 受12.5,0.7±0.65	*	2D	Hr17	3/4	重焼土。瓦通助削り。
22	*	灰(C11-12+F11)	1109.7,高3.4 受11.8,0.7±0.55	*	*	Eh11	S6	重焼土。
23	*	灰(C11-12+F11- +G11-12)	1108.0,高3.4 受12.0,0.7±0.64	A	4A	Eh8	略定	重焼土。
24	*	灰(F11)	1109.7 受12.2,0.7±0.55	B	3A	Gg7	1/8	
25	*	灰(F11)	1111.2,高3.7 受13.2,0.7±0.55	C	2A	*	1/3	ひびけ瓦剥離。

番号	器種名	出土場所	底 質	量(g)	幅 寸	堆 積	色調	残存	備 考
26	IH身	後成部下段(190)	II10.3高3.2 -受13.3,立高0.85	A	2B	Mg6	泥色	重鉛II。	底部に少く鉛付。
27	*	後成部中段(19)	II11.1高3.6 -受13.1,立高0.85	*	2D	Mg.17	34	重鉛I。	直筋脚付。
28	*	後成部中段-(D 5)底	II10.8高3.5 -受12.8,立高0.45	B	2B	Mg.16	泥色	重鉛II。	直筋脚付。
29	*	後成部子口-( 後成部中段19)	II10.7高3.8 -受13.0,立高0.5	D	2C	Rg9	泥色	重鉛II。	
30	*	後成部下段(E19)	II11.0高3.6 -受13.0	C	2A	Gg9	1/8	重鉛I。	
31	*	後成部底	II11.6立高0.6 -受14.0	A	2B	Qn16	1/15		
32	*	底(F10)	II11.4立高0.65 -受13.4	C	2D	Mg11	1/10	重鉛I。	直筋脚付。
33	*	後成部子口- 後成部底(164)	II10.7高3.7 -受12.75,立高0.65	E	2C	Sg10	泥色	重鉛II。	底筋脚付少く直筋付。
34	*	(E113+P12)	II10.1高3.3 -受12.8,立高0.5	B	2B	Ox13	34	重鉛I。	直筋脚付。
35	*	底(E11)	II10.2高3.1 -受12.0,立高0.5	*	2A	Mg11	*	重鉛I。	直筋脚付。
36	*	(E12+D11)+ 後成部(E10)底	II10.8高3.5 -受11.4,立高0.5	C	*	Gg8	*	重鉛II。	
37	*	底(C12+E12)	II10.65高3.0 -受11.7,立高0.4	E	4A	Dg7	1/2	重鉛I。	
38	*	底(E12)	II10.9高3.2 -受11.6立高0.5	B	4B	Ez14	*		
39	*	底(E11)	II10.9立高0.5 -受12.1	*	1A	fg9	1/10		
40	*	底(斜面)	II10.5立高0.65 -受11.7,立高0.4	E	5A	Dg5	56	部分軽品。	中がみ抜てV字。
41	*	直筋部(F9)	II10.5立高0.55 -受11.4	D	4A	Ez5	1/10		
42	160底	底(E10+P11+ G12)	II10.8立高7	A	*	Xg7	1/3	重鉛I。	丸ヘラ削り。
43	*	底(C11+12)	II10.6立高7.9	*	*	*	1/4	重鉛I。	丸ヘラ削り。
44	*	後成部底(F)	II10.6立高7.7	*	*	*	*	重鉛I。	
45	*	底(F11+12)	II10.6立高7.4	*	*	*	2/8	重鉛I。	
46	*	底(F13)	II10.6立高7.2	*	*	*	1/8	重鉛I。	
47	*	底(E11+12)	II10.6立高7.9	*	*	*	*	重鉛I。	
48	*	直筋部(P9)+ 底(Dg2+13)	II10.6立高7.2	*	*	*	1/10	重鉛I。	
49	HG蓋・身	底(E13+P11)	蓋II0.5立高7.3 身II0.0	*	*	*	0.15 H1/4	重鉛I。	
50	調査	底(C12+13)	II10.6立高4.5 -高12.4,底1.05 底G1.7	B	2A	Cg9	1/2	重鉛I。	直筋脚付。
51	*	後成部底(F)	II10.2立高2.5	*	1A	Cg5	1/3	丸ヘラ削り。	
52	HG身	底(C11+D12+ E10)	II10.1立高4.1	A	4A	Nk7	4/5	直ヘラ削り。	
53	*	底(C12)	II10.1立高3.7	*	*	Xl7	1/2	丸ヘラ削り。	
54	*	底(C11+12+P11)	II10.8	*	*	*	2/5	重鉛I。	
55	*	底(C12)	II10.9	B	*	*	1/10	重鉛I。	
56	底?	底(B12+C12)	II11.7	*	1A	Eg9	1/15		
57	HG?	底(斜面)	II12.1立高4.6	C	2A	Dg8	2/9		
58	*	底(C9+P13+ E10)	II10.0	A	*	Hg9	1/5		

番号	器種名	出土場所	底 質	寸	堆 積	色調	残存	備 考
59	無蓋鉢	前成部(D10+ E11+C11+12+P11)	II10.8立高5.6	B	4A	Nx3	1/4	直筋。
60	*	前成部(F9)	II10.1立高3.6 脚G2.8	*	2A	Mg9	1/6	
61	*	底(F12)	II10.5立高3.8	A	*	Hg7	1/18	
62	*	底(D12+13+ F10+11+G10)	II10.8立高3.9	B	2C	Lg8	1/2	
63	*	直筋	II10.5	A	4A	Nx7	1/16	直筋。
64	*	底(C11)	II10.9	B	3A	Eg5	1/6/3	
65	*	後成部(E10)	II10.0立高3.7	A	4A	Nx3	1/6	直筋。
66	*	底(斜面)	II10.8	*	*	Nx3	1/4	
67	*	底(F11+12)	II10.0	*	*	*	1/3	直筋。
68	*	後成部(E10) +底(E12)	II10.1	B	3A	Nx3	1/2	直筋。
69	*	底(F10)	II9.0	*	4A	*	1/12	
70	有蓋直口?	底(D11+12)	II9.7	A	*	Nx3	1/5	
71	*	底(F11+12)	II7.8立高4.2 脚G1.7	B	1B	Sg10	2/5	
72	35F	底(F12+13)	II17.4	E	2A	Fg8	1/4	李陵2.4097。
73	*	底(B+C11)	II9.7	*	1B	Qn16	1/3	直ヘラ削り直。
74	*	底(C11)	II13.8	A	1A	Sg8	1/10	
75	*	底(C12+P13)	II10.0	B	2A	Gg9	1/6	直ヘラ削り。
76	*	底(C13)	II9.8	A	3A	Dg6	1/10	
77	*	直筋部(E7)	II8.4	B	4A	Eg5	*	
78	*	底(C12)	II10.9	*	2A	Eg5	*	直ヘラ削り。
79	*	*	II8.1	A	*	Mg8	1/6	
80	*	底(F11+G11)	II8.8	*	*	Dg8	1/7	直ヘラ削り。
81	*	底(D12)	II7.9	*	*	Lm1	1/6	直ヘラ削り机。
82	小盤蓋	底(斜面)	II10.2立高9.0	E	3A	Dg8	1/8	
83	*	後成部小盤蓋 (D5+E6)	II10.5立高9.5 脚G3.8	B	1A	Gg7	2/5	野原1.8557。
84	*	底(F12)	II10.0立高9.0 脚G2.2	E	2A	Eg8	1/4	容量第1.0887。
85	*	後成部下段底 (D6+E6+7)	II10.1立高9.7 脚G4.4脚G1.6	D	*	Gg9	3/4	脚下段-底面にヒダヌキ。 容第1.8067。
86	*	底(F12)	II8.5立高8.4 脚G2.0	E	3A	Dg5	1/8	
87	平盤	底(B12+E16+ F11)	II6.2立高4.6 脚G2.0立高6.0 脚G1.5脚G1.1	*	2A	Eg8	2/3	脚下段-底面へヒダ付。 容第1.7877。
88	*	底(F13+G12)	II6.7立高5.1	*	*	Gg9	1/10	脚内面直角溝等元空 凹。
89	*	底(斜面)	-	A	3A	Eg8	頭部 直角	脚内面直角。
90	*	底(F10+G10)	II6.8立高4.8	E	2A	Gg8	1/10	
91	*	底(斜面)	II6.4立高5.6	D	*	*	*	
92	*	底(C9+P13+G13)	II6.6	*	4A	Eg5	1/3	
93	蓋	前成部(D10+ E10)+底(C11+ 12)	II9.4立高17.2 脚G7.0脚G17.0	*	2A	Gg9	1/2	外孔周補助脚付。 内孔直角。直角。容第1.6637。
94	*	底(B11+12+F10)	II10.5立高19.3 脚G1.5脚G18.8	C	1A	Kg11	1/8	内底押上直角直。 容第1.4927。

番号	器種名	出土場所	法 墓(m)	形状	焼成	色調	残存	備考
95	壺	石(C12+F11)	110.0,高17.5 109.75,頭18.5	D 2A G99	20	馬蹄子持ち壺。	内燒押し出し張。 容量4,500ml。	
96	*	石(B12+C11+ G11-12)	109.6,頭18.3	*	*	*	1/3	外輪子燒通路壺。
97	*	石(F11-12-13)	112.1,高16.6 頭11.6,頭19.4	C *	*	4/3	外輪子燒通路壺。	
98	*	石(C22-13)	110.0,頭17.4	D 4A Ep6	1/20	外輪子燒通路壺のヘコ 部分。		
99	壺	石(C11-12+B6+ 12-13+F10)	111.4,頭高12.9	*	2A	G99	A4	
100	*	石(F5+B6)	111.4,頭高5.2 頭11.9	*	4A	Xg3	1/20	
101	*	石(F12+G12-13)	1112.8,頭高26.3 頭9.5,頭高2.8 頭幅19.4,頭高21.4	E 2A	Cg9	2/7	外輪子燒。内燒当て。 燒文に焼、火前口。 容量18,296ml。	
102	*	石(C9+F13)	1112.2,頭高25.9 頭9.7,頭高2.8 頭幅22.5	*	5A	Xc3	1/4	外輪子燒。内燒当て。 燒文に焼、火前口。
103	*	从(F12-13)+G12 +13	1112.2,頭高26.0 頭9.6,頭高2.4 頭幅23.6	*	4A	Fg5	*	外輪子燒。内燒当て。 燒文に焼。
104	小壺	石(D11+F11-12+ G11-12-13)	110.0,頭高34.5 頭16.5,頭高2.8 頭幅34.3	D 3A 1A	G99 G95	3/4	外輪子燒引き後。カ今日。 <td> 内燒当て。 外輪子燒引き。内燒当て。 容量32,483ml。</td>	 内燒当て。 外輪子燒引き。内燒当て。 容量32,483ml。
105	*	石(B11-12)	110.1,頭高34.8 頭17.0,頭高2.8	E 4A	Xg3	1/2	外輪子燒引き後。カ今日。 内燒当て。 容量35,232ml。	
106	*	燒成部+焼床+ 石(B10+C11-12+ F10+G9-11)	1120.6,頭高24.5 頭17.6,頭高3.0 頭幅27.7	*	2B	Qg16	1/4	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 外輪子燒引き。内燒当て。 容量19,242ml。
107	*	泊底壺+ 石(E13+F11-12)	110.6,頭高2.8 頭15.6	*	3A	F16	1/5	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。
108	*	石(B12+C12)	110.7,頭高34.0 頭15.7,頭高3.4	B 2A	G99	1/4	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。	
109	中壺	石(F10-11-12+ G10-11)	1123.2,頭高4.5 頭20.3	E 4A	Cg7	1/6	外輪子燒。	内燒当て。
110	*	石(F10-12-13+ G12-13)	1121.6,頭高48.5 頭19.0,頭高3.7 頭幅2.0,頭高45.0	*	*	Cg7	1/2	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 外輪子燒引き後古手口アソケ。 内燒当て。 容量9,291ml。
111	*	燒成部中燒床(G2+ 4石(D11+F12))	1121.8,頭高48.6 頭17.4,頭高4.5 頭幅2.0,頭高44.2	*	1A	Lg17	4/5	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 外輪子燒引き。内燒当て。 克部酸化焼け。 容量84,055ml。
112	*	石(F11+H12)	1120.8,頭高3.4 頭17.0	*	5A	Cg6	1/4	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。
113	*	燒成部中燒床+ 石(E13+F12+ G12)	1120.8,頭高4.0 頭17.1	B 1A	H9	1/10	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。	
114	*	石(C11)	1109.8,頭高3.6 頭16.7	*	*	L10	1/4	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 口縁外輪子燒。
115	*	燒成部床+ 石(F11-12+G11)	1123.6,頭高4.1 頭18.6	*	*	Dg9	1/2	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て後手口。
116	*	石(F10-11-12-13+ G12-13)	1120.6,頭高46.4 頭17.0,頭高4.9 頭幅2.0,頭高41.2	E 4A	Xg7	2/3	外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 内燒当て。内燒当て。 内燒当て。 容量87,587ml。	
番号	器種名	出土場所	法 墓(m)	形状	焼成	色調	残存	備考
117	中壺	石(E11-12-13+ G11-12)	1120.8,頭高46.0 頭17.3,頭高4.5 頭幅2.0,頭高42.2	E 1A	Mg12	3/4	側24HR印さ後古手口。 内燒当て。 足外輪子燒引後。一頭ナラ。 内燒当て。 容量72,502ml。	
118	*	燒成部下焼床+	1122.0,頭高47.0 頭20.0,頭高3.8	*	2D	Mg12	1/5	側24HR印さ後古手口。 内燒当て。 足外輪子燒引後。内燒当て。
119	*	石(B11-12)	1122.4,頭高44.8 頭18.8,頭高3.2	*	1A	Lg9	2/3	側24HR印さ後古手口。 内燒当て。 足外輪子燒引後。
120	*	石(F10-12+G13)	1121.6,頭高3.6 頭18.2	C 2B	Qg16	1/5	側24HR印さ後古手口。 内燒当て。	
121	*	燒成部中~下焼 床+燒成部床+ 前焼床	1124.4,頭高46.7 頭20.0,頭高3.1 頭幅4.0,頭高40.0	E 2A	Mg9	S6	側24HR印さ後古手口と 燒成部。内燒当て。 足外輪子燒引後。内燒当て。 底のみ點面化焼成。 容量22,713ml。	
122	*	石(F11-12)	1121.2,頭高5.1 頭18.2,頭高3.6 頭幅4.0,頭高39.4	*	4A	Cg7	2/3	側24HR印さ後古手口。 内燒当て。 足外輪子燒引後古手口。 内燒当て。内燒当て。 容量91,625ml。
123	*	石(E12-F13+ F11-12)	1124.6,頭高4.3 頭20.4	C 1A	H9	1/4	側24HR印さ後古手口。 内燒当て。	
124	*	燒成部中燒床+D6+ 石(C9+F10-11- 12-13+G11)	1130.6,頭高32.8 頭20.0,頭高10.5 頭幅4.0,頭高42.3	E 4A	Xg3	1/3	側外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 足外輪子燒引き。内燒当て。 容量87,248ml。	
125	大壺	石(C9+F12-13+ G10)	1135.6,頭高10.4 頭24.4	*	*	Xg7	1/4	側24HR印さ後古手口。 内燒当て。
126	*	石(F11-12-13+ G13-12-13)	1134.6,頭高44.2 頭24.3,頭高12.0 頭幅5.8	弱E 1B	2A	Mg13	2/3	側外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 外輪子燒引き。内燒当て。 底のみ點面化焼成。 容量158,009ml。
127	*	石(F10-11-12- 13+G11-12-13)	1133.7,頭高12.1 頭24.2	E 4A	Xg3	1/2	側外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。	
128	*	燒成部下焼床+ 燒成部床+ 前焼床	1134.4,頭高4.4	*	2A 1A	Cg6	2/5	側外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 足外輪子燒引後。内燒当て。
129	砂大甕	燒成部中燒床+ 下焼床+ 前焼床+石(E10- 11-12+G11-12-13)	1144.2,頭高86.6 頭34.4,頭高14.0 頭幅7.7	*	5A	Xg3	4/5	室内重力軸用多段。 側外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 側外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 容量44,612ml。
130	*	石(C9+F13)	1144.2	D 4A	Dg4	3/8		直立軸用。 側外輪子燒引き後古手口。 内燒当て。 直立軸用。内燒当て。
131	*	石(G11)	1131.2	E	*	Xg7	*	
132	大甕	石(C11)	1142.6	A 4	A		1/6	
133	*	石(E13)	1132.2	*	*	*	*	
134	*	石(E13+F13)	1144.2	*	*	*	*	
135	*	石(E12)	1136.2	*	*	*	*	

### 〈窯道具・土師器〉

番号	器種名	出土場所	法 墓(m)	形状	焼成	色調	残存	備考
136	窯道具	石(E13)	長7.6,大1.9	B 4A	F16	完形		横焼口部泥接合時の剥切 り取れ片断面。 外壁切取れ見込み破。
137	*	燒成部下焼床 D7	長6.4,大1.0	E	*	Og7	*	横焼口部泥接合時の剥切 り取れ片断面。 外壁切取れ見込み破。

番号	器種名	出土施設	法量(cm)	胎土	焼成	色調	残存	備考
138	一	朱(D10)	残長6.0×太1.0	C	+	-	-	椎角口頭部縫合時の側切 り取り内軸組、 外面切り取り見込み縫。
139	一	焼成部未 (E8-)	長4.6×太0.7	B	4A	Gp7	完形	椎角口頭部縫合時の側切 り取り内軸組。
140	烹道具	焼成部未 (E8)	残長6.2×太1.3	B	3A	Gp7	-	椎角口頭部縫合時の側切 り取り内軸組。 外面切り取り見込み縫。

### 1.B・C・D遺跡出土古代土器観察表凡例

- a. 土器の器種名については、北陸古代土器研究会で使用する器種名に基づくものであります。以下文献を参考とする。

田嶋明人1988「古代土器調査手帳」『シンボジウム北陸古代土器研究の現状と課題』北陸古代土器研究会

北野博司1999「燒成器群藏具の器種分類案」「北陸古代土器研究」第8号北陸古代土器研究会

なお、土師器煮炊炊具については、窯の用語を使用せず、器とし、小型要是坂脚釜、長柄要是長柄釜とする。また、碗で外赤内黒とするものは外面赤彩塗布、内面黒焼成したものを示す。

- b. 土器の時期については、前掲、田嶋明人の古代土器編年年表に基づく。

- c. 法量で示した口は口径、底は底部径、台は台径。体は体部最大径、紐径は巻つまみ径、鋸高は巻つまみ高、胴は胴部最大径、頸は器高、台高は高台高、頭高は口腹部高、腰高は胴部高。耳厚は板状把手厚を示す。

- d. 胎土は須恵器では車輪窓地別で表記し、土師器では胎土位置で以下に分類した。

A=赤褐色系、石英粒、白色粒入る胎土で、雲母粒も入る。辰口在地胎土か?

B=白色くず石粒を含む能美窓産の可能性が高い胎土。

C=白色微妙粒を含む雨加賀窓産に類似する胎土。

D=胎土Aに類似するが、多く赤褐色や石英粒の大粒を含む。

- e. 色焼について、色調と焼成を記したが、とくに焼成については堅焼=良好=真=不良の順で示した。

- f. 磨耗は使用による磨耗痕跡を表記したもので、部位と磨耗度合いで示してある。なお、「なし」は磨耗のないもの、「-」は確認不能であったもの。

- g. 情考中に示す重ね分類名は次の分類に基づく。I類=蓋身正位で重ねたものを1単位として2段程度で重ね焼きするもの。II類=蓋を逆位で身に重ねたものを1単位として身・蓋・身・蓋の順で状況に高く重ね焼きするもの。III類=逆位蓋は同様だが、1単位を重ねる際に身・蓋・身・身・蓋・身の順で重ね焼きするもの。IV類=蓋は蓋のみの重ね焼き、身は身のみの重ね焼きを行なうもの。

- h. 情考中に示す容量は口径部端までの容量を示したもので、推としたものは想定容積に基づく予想容量である。

- i. その他、備考では特筆される調整技法、器面の付着物、ヘラ記号を示してある。よくに、付着物については、付着部位と付着物の内容を示したが、墨推動行で転用規の可能性の高いものについては、付記した。

### 2.1・J遺跡出土古代土器観察表凡例

- a. 土器の器種名については、前掲觀察表同様、北陸古代土器研究会で使用する器種名に基づくものであるが、蓋については、小・中・大・特大に分けており、以下の基準に基づく。小蓋一口径21cm以下、胴径・器高40cm以下、容量50L以下のもの。中蓋一口径20~25cm、胴径45~50cm、容量70~1000Lのもの。大蓋一口径30cm以上、胴径55~70cm、器高60~70cm、容量150~200Lのもの。特大蓋一口径30cm以上、胴径70cm以上、器高80cm以上、容量4000L以上のもの。

- b. 法量で示す略記は前掲のとおりだが、他に、坪H・坪Gで示す受は受け部括弧は返り部括弧、立高は立ち上がり高である。高杯で示す脚基は脚部基部径、脚は脚部部径、杯高は杯部高、脚高は脚部高である。横軸で示す脚幅は脚部最大幅であり、成形時状態の脚部の高さ、脚高は成形時状態の脚部最大幅である。座道具で示す幅は短軸長、長さは長軸長、厚は器壁厚、太は短軸最大長である。

- c. 胎土は、基本的に能美窓産胎土の特徴を示すが、以下に細分できる。

A類=白色くず石粒のあまり入らない胎土。

特A類=砂粒や白色くず石粒の全く入らない精製胎土。

B類=白色くず石粒が多く入る胎土。

C類=白色くず石細粒が多く入る胎土。

番号	器種名	出土施設	法量(cm)	胎土	焼成	色調	残存	備考
141	一	西側部床	残長12.0×太1.0	C	+	F6	-	椎角口頭部縫合時の側切 り取り片軸組、 外面切り取り見込み縫。
142	土鍋壺	東部部(D10)	口14.6×底5.0	D	2A	G9	2B	鉢口クロ、 腹元焼成品、 外手内ち削り内土ガサ。

D類=白色くず石大粒が目立って入る胎土。

E類=白色くず石大粒多めに含まれるが、細粒は少ない胎土。

F類=A類胎土に1~2mm大の砂粒が多量混在する胎土。土師器煮炊具胎土と同じ様土。

d. 焼成は、焼き締まり具合と還元、酸化状態により、以下に細分できる。

IA=灰白色に還元焼成されるが、焼き締りが極めて甘いもの。IB=流煙褐色に酸化焼成で甘い焼きのもの。IC=表面のみ白色に還元焼成だが、内面は酸化で焼きの甘いもの。2A=青灰白色状に還元焼成されるが、若干焼きが甘いもの。2B=比較的焼き締り強いが、褐色系の酸化焼成のもの。2C=2Aの表面のみ薄く酸化被熱するもの。2D=2Bの表面のみ薄く還元被熱するもの。3A=青灰色に焼き締る焼成良好品。薄い陰灰も一部で見られる。3B=堅焼に焼き締まるが、褐色系に酸化焼成されるもの。3C=3Aだが、薄く表面のみ褐色に酸化被熱するもの。4A=暗灰色または暗青灰色に還元焼成されるもので、自然消が溶解するほど、高温となる焼き締り堅致のもの。4B=断筋セピア状を呈すが、表面還元焼成されるもの。焼き締りは堅致で、隕灰や融たれも見られる。4C=4Aの表面のみ薄く褐色系に酸化被熱するもの。5A=過度に焼けすぎたもので、胎土発泡などの見られるもの。

e. 色調は表面(重ね焼きの際の外側になる部分)、断面に分けて、アルファベットの大文字と小文字でA~R、a~r、J~tの18段階表示した。なお、表面のみは貼付者のものがあるため、Xを加えた。18段階色調表示は以下のとおり。

A=a-1.黒(緑)色、B=b-2.黒灰色、C=c-3.暗灰褐色、D=d-4.暗青褐色、E=e-5.(青)灰色、F=f-6.青(灰)色、G=g-7.灰色、H=h-8.青灰白色、I=i-9.灰白色、J=j-10.白色、K=k-11.乳白色、L=l-12.淡褐色、M=m-13.暗灰褐色、N=n-14.(暗)褐色、O=o-15.赤褐色、P=p-16.深褐色、Q=q-17.深所褐色、R=r-18.淡青灰褐色。

f. 情考中に示す容器重ね焼き痕跡の分類や容量表示については、前掲凡例のとおりだが、皆筆記される成形・調整技法のうち、とくに笠・鍋類、壺類、蓋については、成形方法などの手順等を示したが、印き文様と当て具文様については記述を使用したので、以下に示しておく。

Hu類=一本目直交の平行線文、Hb類=一本目左下がり斜交の平行線文、Hc類=一本目右下がり斜交の平行線文、Hd類=一本目平行の平行線文、He類=一本目確認できない平行線文。Da類=一本目確認できない同心円文。Db類=一本目が年輪状で平行して入る同心円文。Dc類=一本目が同心円に間接なく平行窓で入る同心円文。Sd類=細かな年輪状本目が同心円状に入る無文。

### 3.その他、図版等凡例

B・C・D遺跡の遺物図版で示す須恵器は断面黒塗り。土師器は断面白抜きとし、色彩には深い網点スクリントーン、黒色焼成には濃い網点スクリントーンを貼り付けた。

I・J遺跡出土遺物図版についても、土師器は同様だが、須恵器については断面白黒塗りとしなかった。遺物の付着物や使用痕跡については、図中凡例で示したが、整形技法についてはとくに記していない。外周矢印区画内はすべての遺物とも削り調整を示すが、他のは親経表で示した。



写真1 八里向山B遺跡遠景（北東方からの航空写真：C遺跡側からB遺跡の尾根と主谷平野を望む）

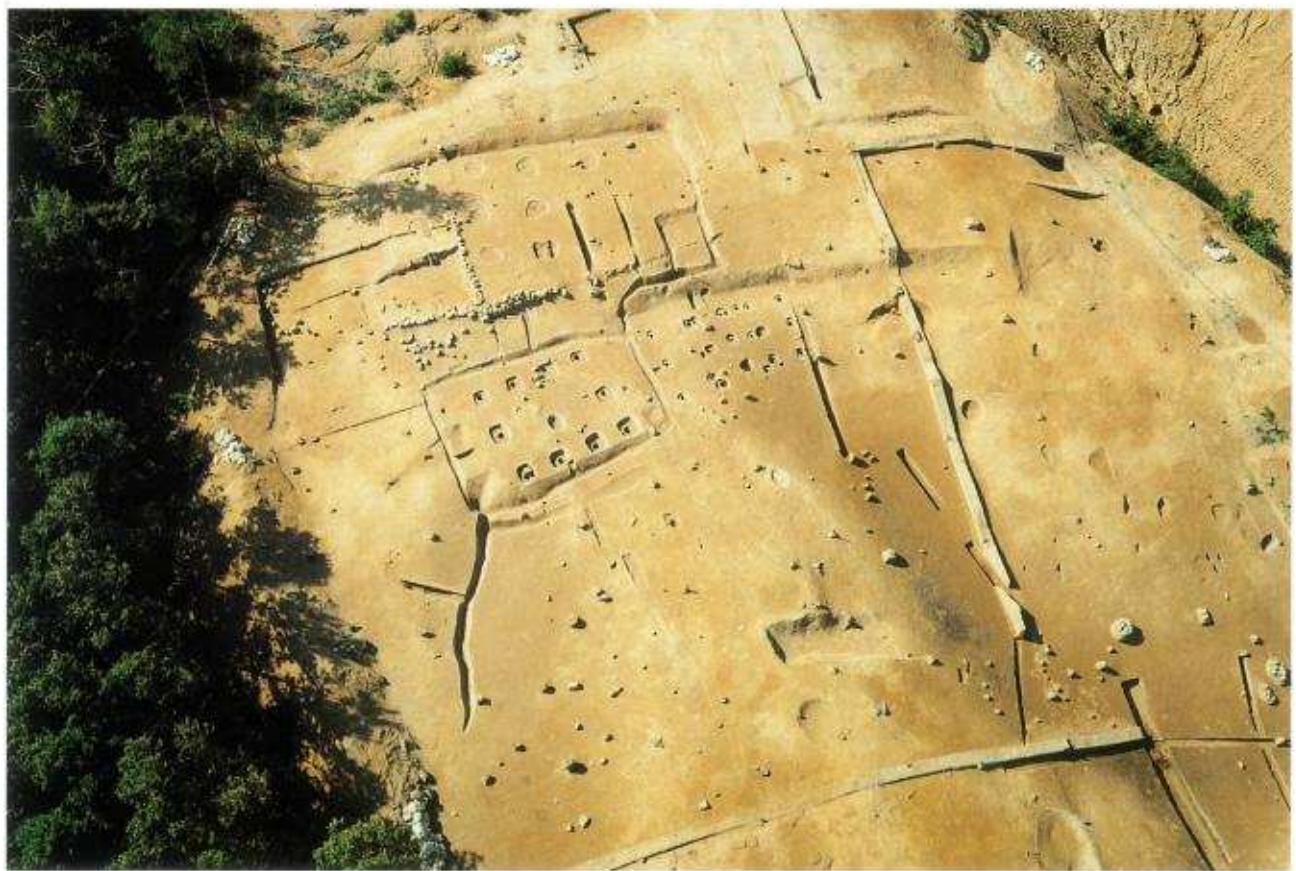


写真2 八里向山B遺跡II地区航空写真垂直全景（右下へと伸びる黒い帯状の部分の尾根側に参道らしきもの）

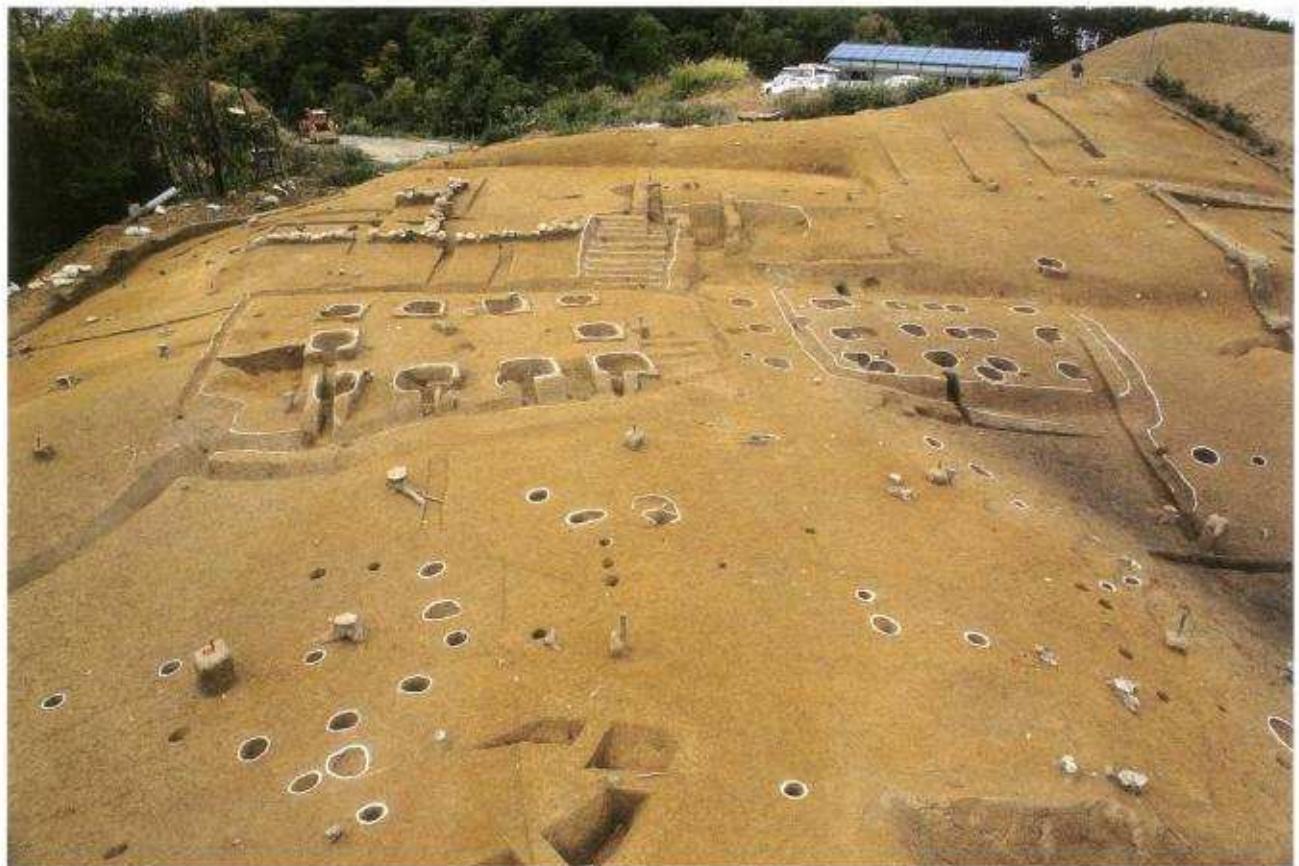


写真3 八里向山B遺跡Ⅱ地区完掘全景（奥がテラスⅠ、左下がテラスⅢ、右下がテラスⅡにあたる）



写真4 B遺跡Ⅱ地区テラスⅠの山側埋土の東西断面

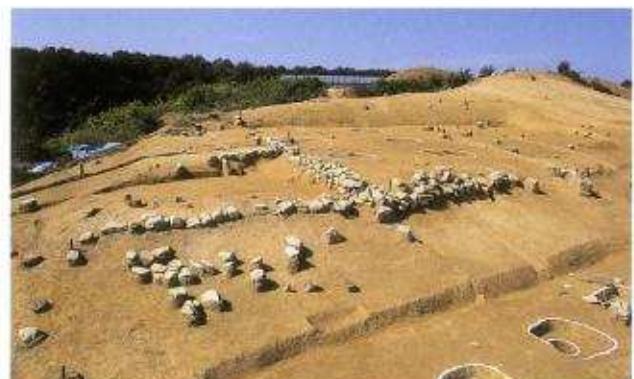


写真5 B遺跡Ⅱ地区テラスⅠの南東側テラスⅠ石垣全景



写真6 B遺跡Ⅱ地区テラスⅠの南東側テラスⅠ東面石垣



写真7 B遺跡Ⅱ地区テラスⅠの南東側テラスⅠ南面石垣



写真8 B遺跡II地区テラスI正面階段



写真9 B遺跡II地区テラスI正面階段埋土縦断面



写真10 B遺跡II地区テラスI正面階段アップ

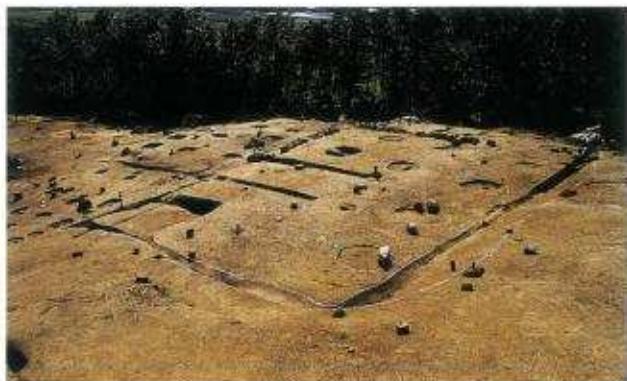


写真11 B遺跡II地区テラスI SB04(北西から)



写真12 B遺跡II地区テラスI SB04西面柱穴列



写真13 B遺跡II地区テラスI北東側テラス2



写真14 B遺跡II地区テラスI基盤土下土坑土層断面



写真15 B遺跡II地区テラスII SB02・SB03全景

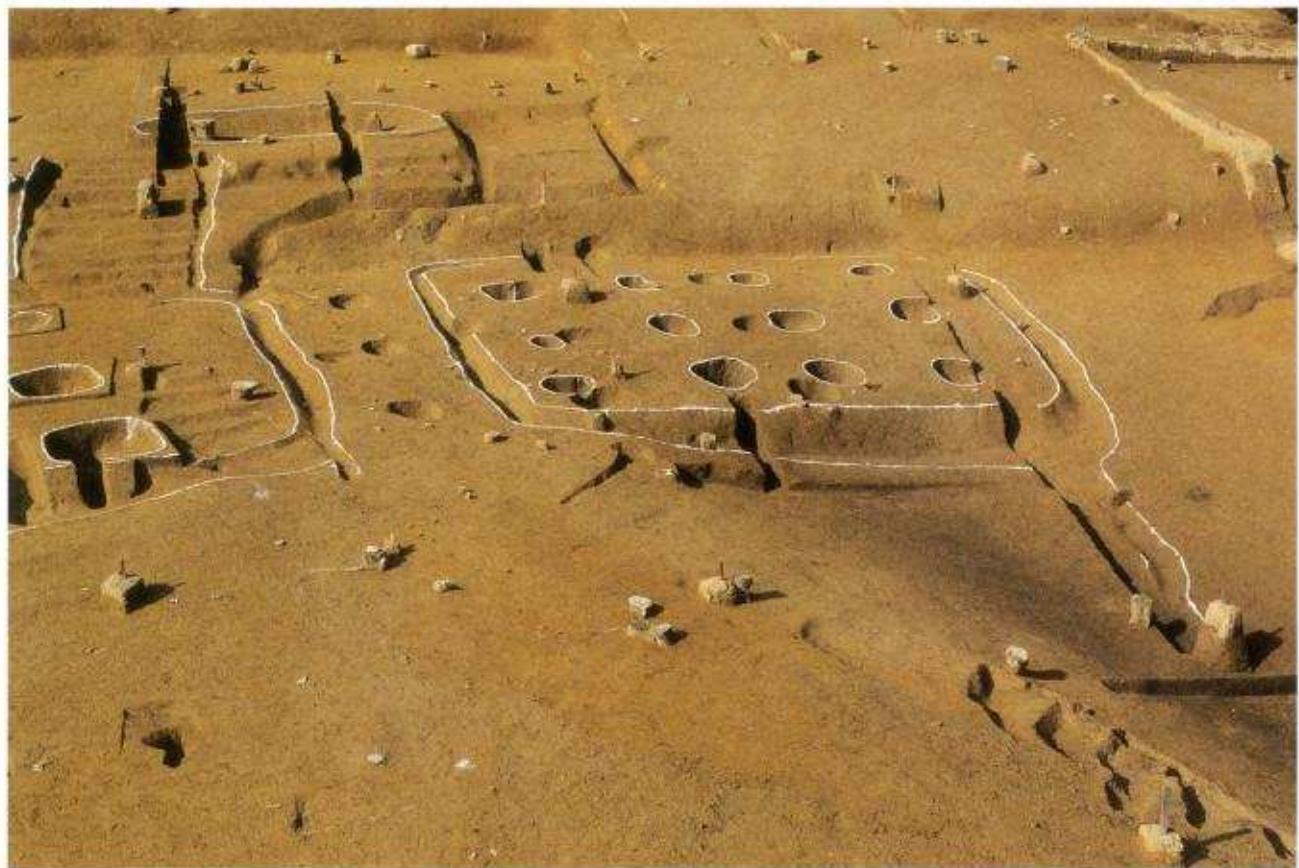


写真16 八里向山B遺跡Ⅱ地区テラスⅡ SB02及び排水溝完掘全景

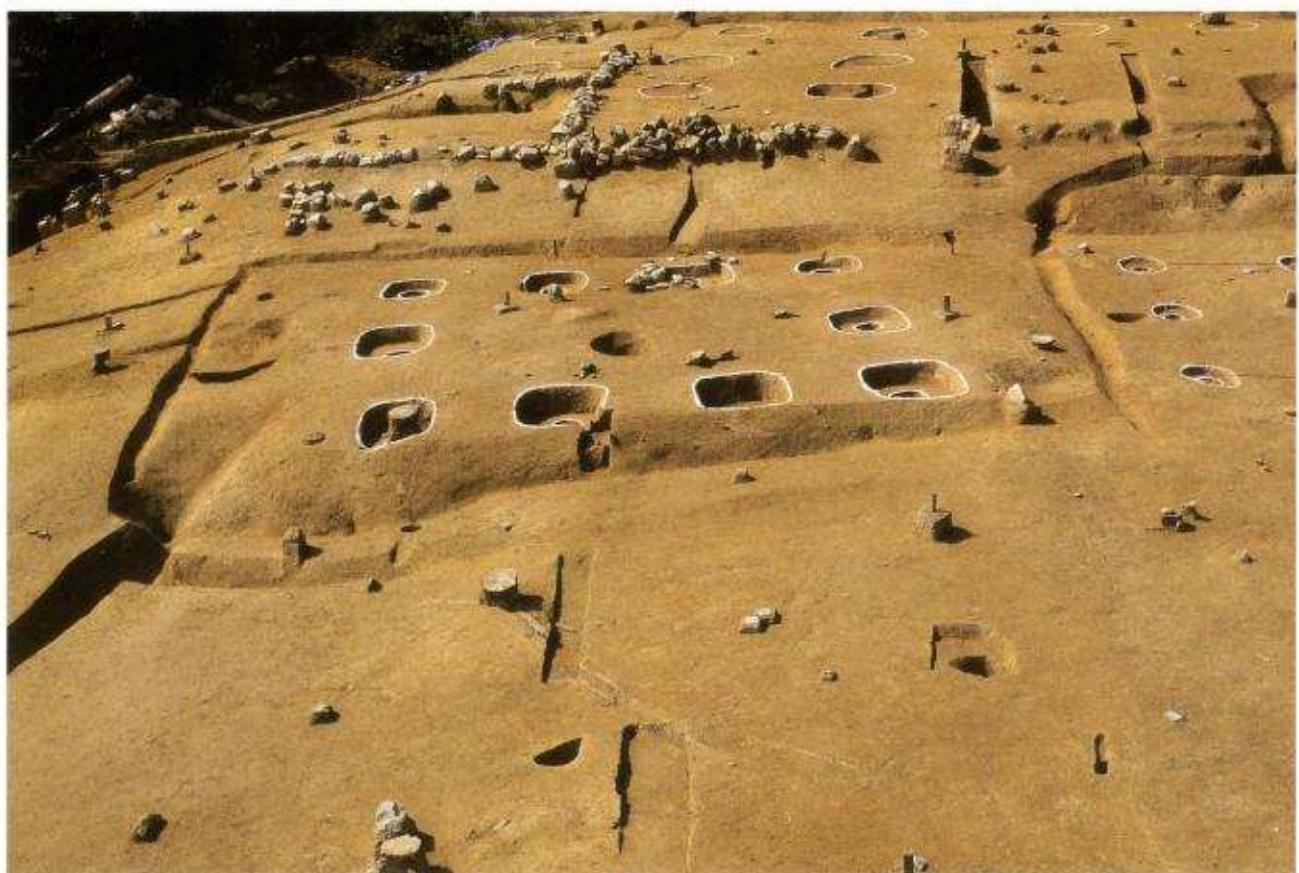


写真17 八里向山B遺跡Ⅱ地区テラスⅢ SB01完掘全景



写真18 I 遺跡調査前遠景（北方から）



写真19 I 遺跡調査中遠景（北方から：中央が窯跡）

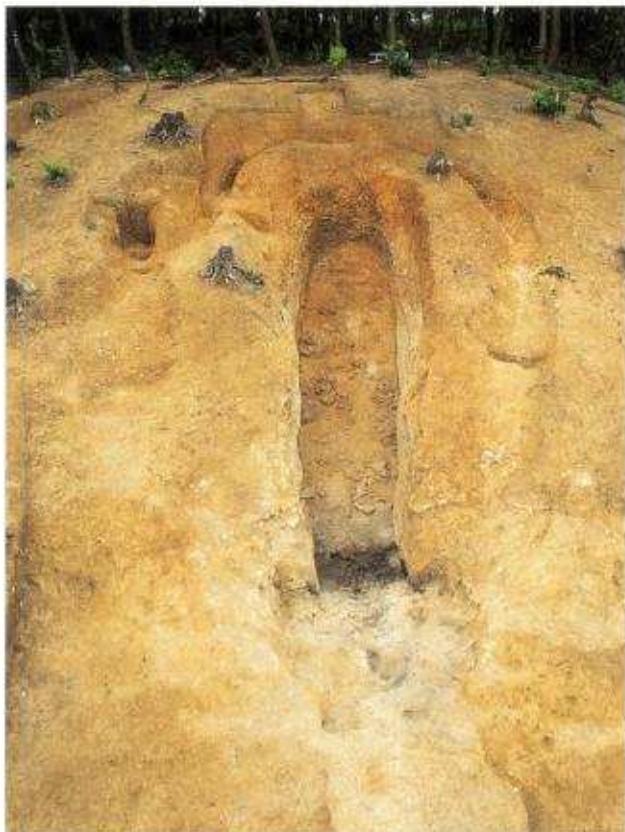


写真20 I 遺跡須恵器窯跡全景



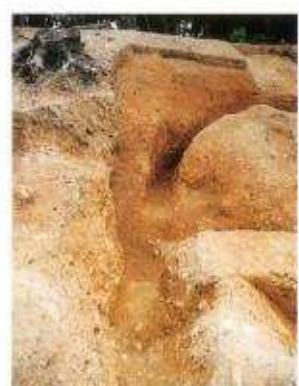
写真21 I 遺跡須恵器窯跡窯体遺物遺存全景



写真22 I 遺跡窯跡窯背部排水溝（窯尻から）



写真23・24 I 遺跡窯跡窯背部排水溝のアップ  
(右：最奥部分、左：左侧溝の末端)



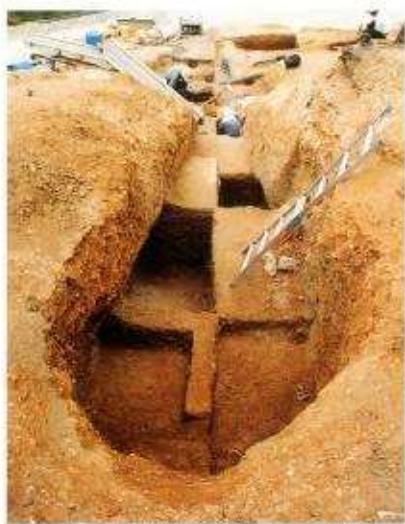


写真25 窯体焼成部埋土掘削状況



写真26 窯体焼成部下位埋土横断面



写真27 窯体焚口・前庭部土層断面

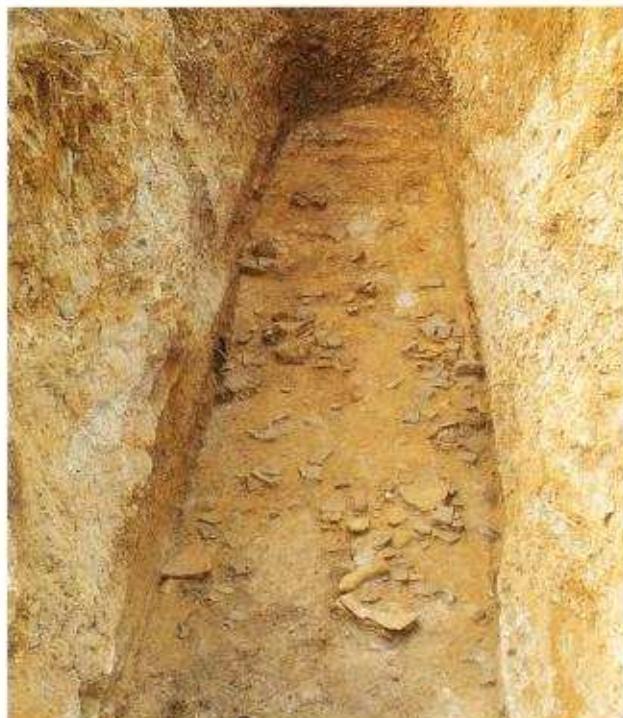


写真28 I遺跡窯体焼成部全景

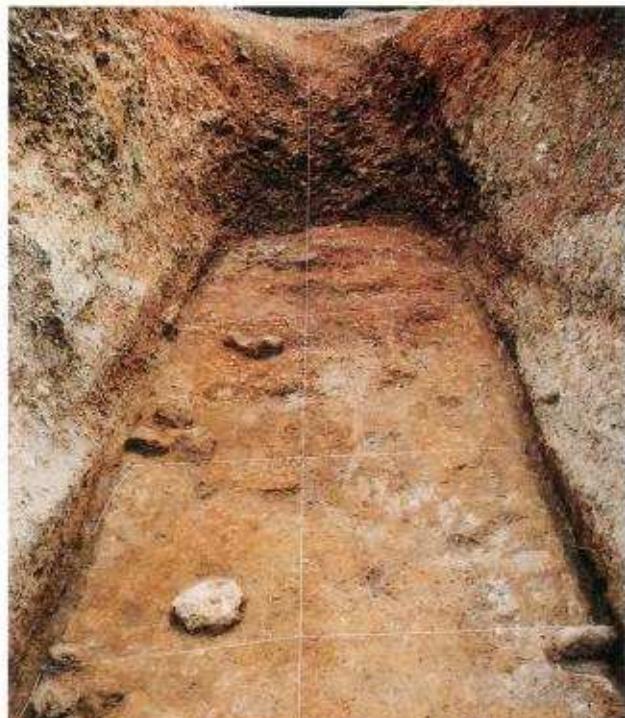


写真29 I遺跡窯体奥壁と焼成部上位段築床面



写真30・31 I遺跡窯体焼成部床面石置台設置状況（酸化生焼品は製品、還元焼結品は置台。）





写真32 Ⅰ遺跡窯体焼成部下位～燃焼部全景



写真33 Ⅰ遺跡窯体焼成部下位～焚口左側壁全景



写真34 Ⅰ遺跡窯体焼成部境の倒立設置長胴釜



写真35・36 Ⅰ遺跡窯体焼成部境の倒立設置長胴釜と側壁の被熱状況（左：左側壁。右：右側壁）





写真37・38 I 遺跡窯体焼成部境側壁際の倒立設置長胴釜アップ（左：左側壁際。右：右側壁際）



写真39 I 遺跡窯体燃焼部完掘状況（倒立長胴釜設置痕）



写真40 I 遺跡窯体燃焼部～焚口右側壁被熱状況



写真41 I 遺跡窯跡焚口右側前庭部壁の酸化被熱状況

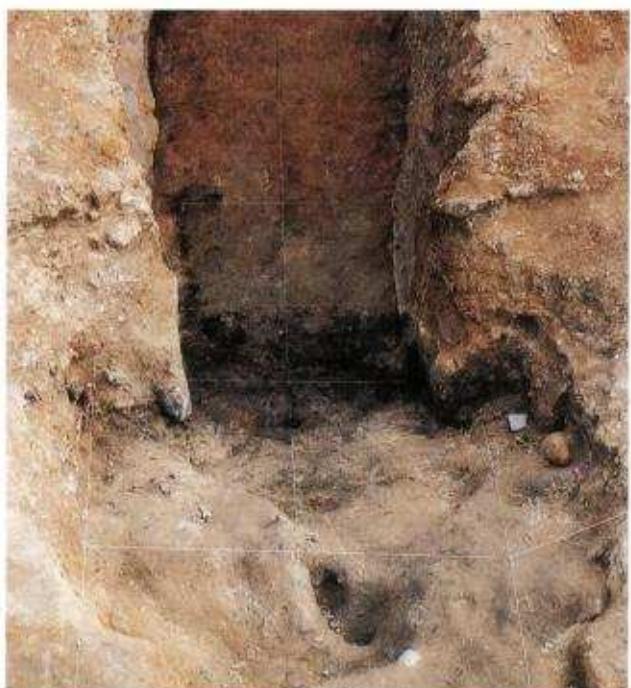


写真42 I 遺跡窯跡焼成部下位～前庭部全景



写真43 J遺跡須恵器窯跡遠景（北西方から。航空写真）



写真45 J遺跡須恵器窯跡全景（垂直航空写真）



写真44 J遺跡須恵器窯跡調査前全景



写真46 J遺跡須恵器窯跡窯体掘削調査風景

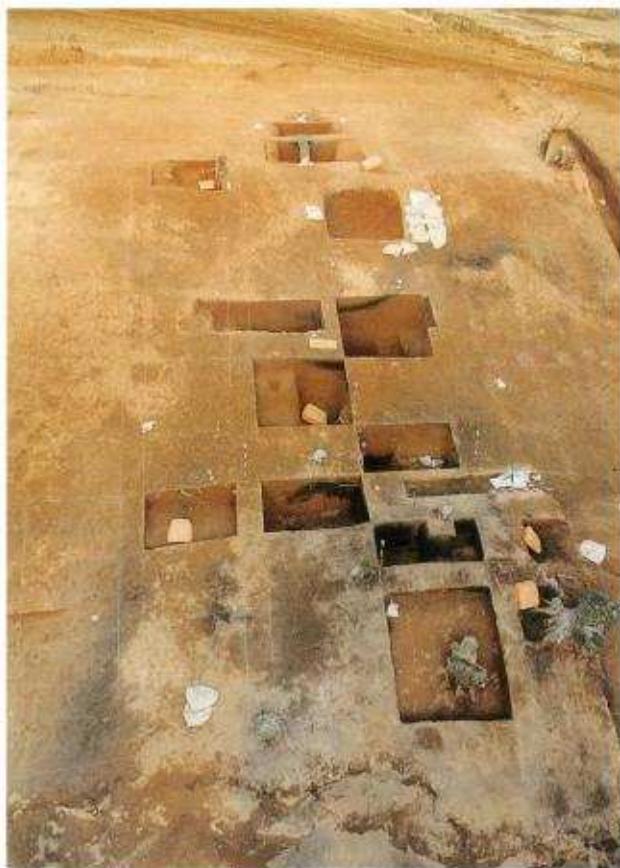


写真47 J遺跡窯体埋土土層断面全景



写真48 J遺跡窯体焼成部下位埋土土層横断面

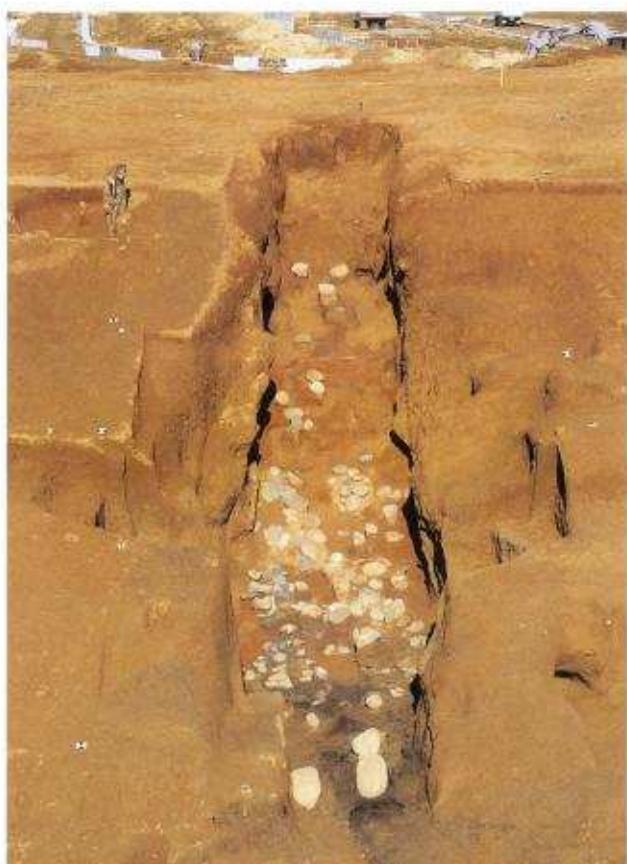


写真49 J遺跡窯体遺物遺存状態全景（焚口から）

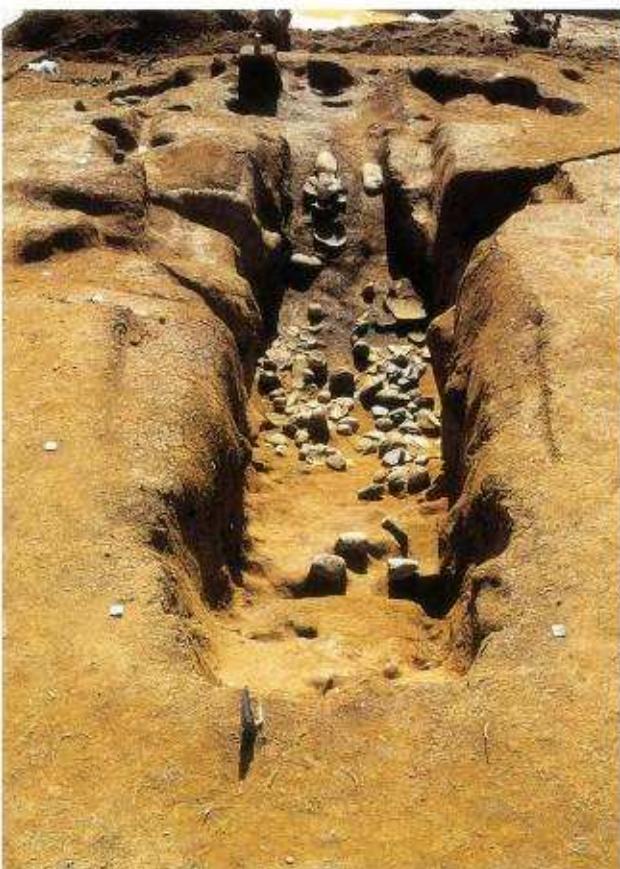


写真50 J遺跡窯体遺物遺存状態全景（窯尻から）



写真51 J遺跡窯体焼成部上位から窯尻付近

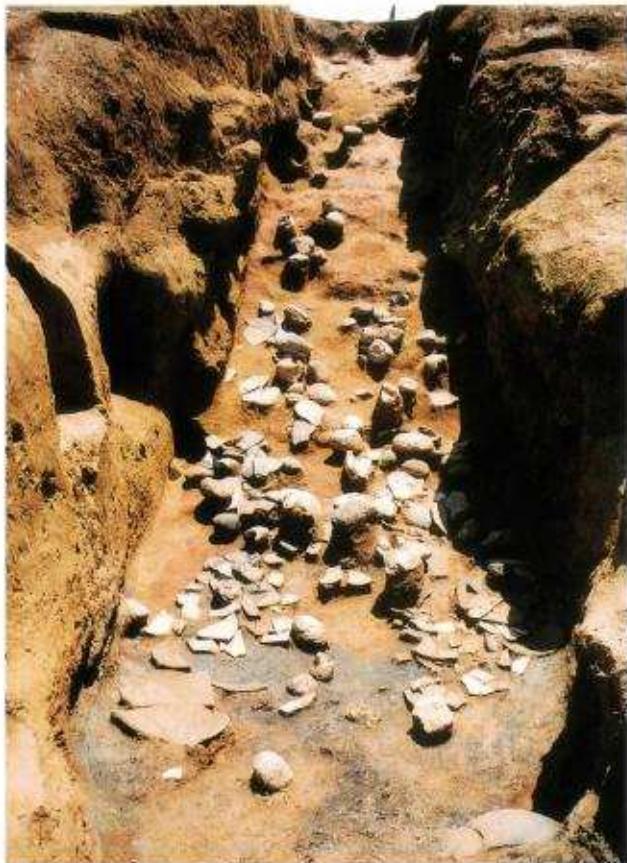


写真52 J遺跡窯体焼成部床面遺存遺物と被熱状態



写真53 焼成部下位床面遺存遺物と被熱（左が燃焼部側）

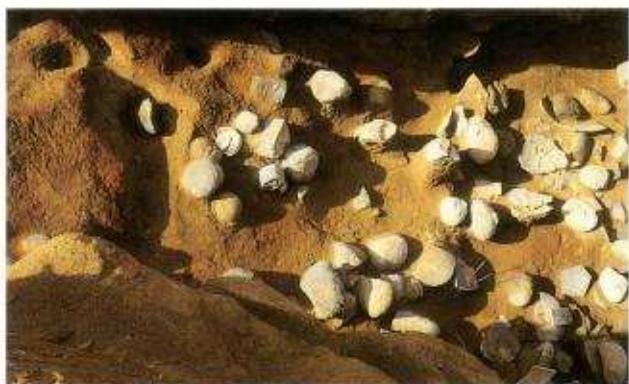


写真54 焼成部中位床面遺存遺物と被熱（左が窯尻側）

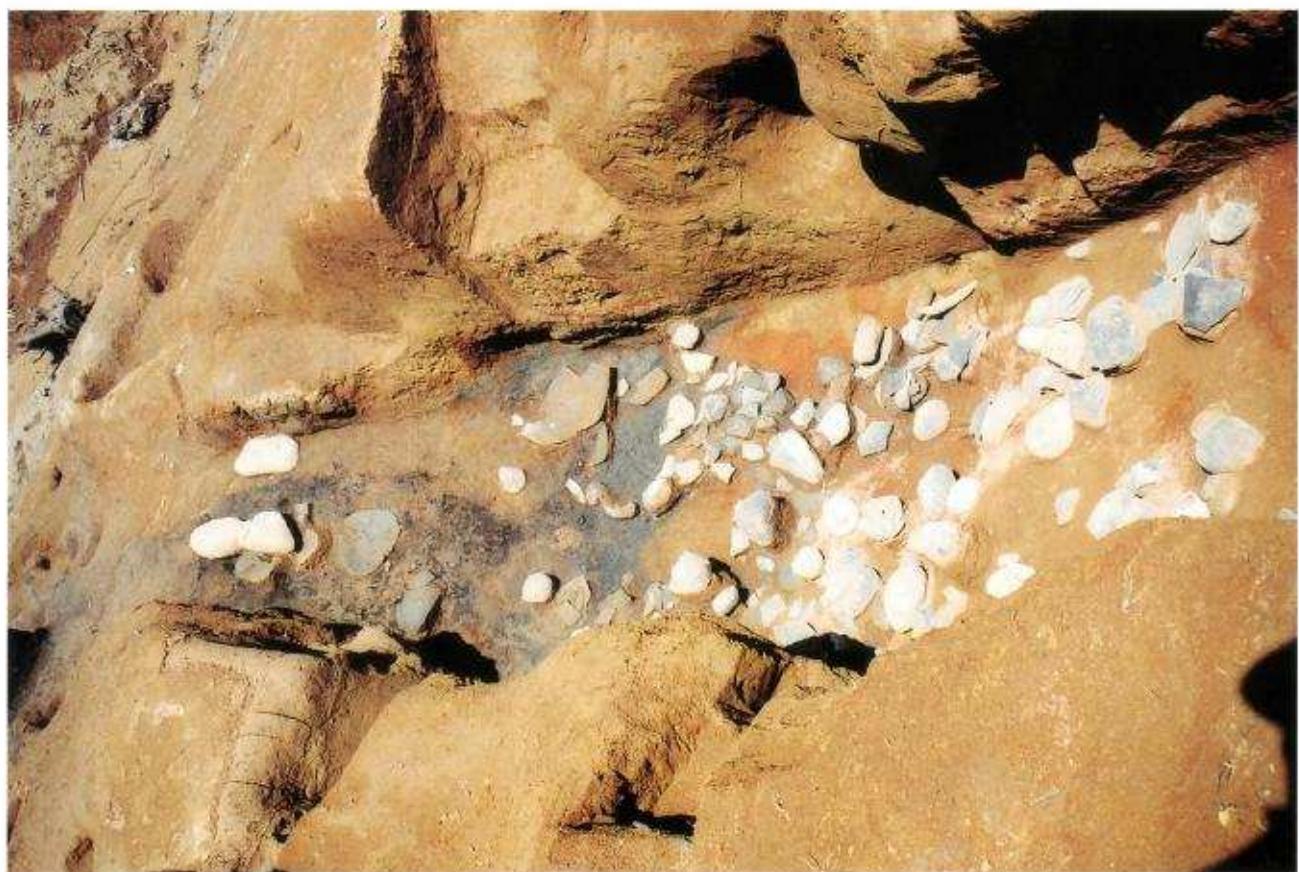


写真55 J遺跡窯体焼成部下位～焚口の床面遺存遺物と被熱状態



写真56 焼成部境付近左側壁被熱変化（燃焼部→焼成部）



写真57 燃焼部～焚口左側壁被熱変化（焚口→燃焼部）



写真59 J 遺跡窯体完掘全景



写真58 窯体燃焼部～焚口の被熱変化と縦列配置石



写真60 窯体燃焼部床下土坑完掘状態



写真61 窯体燃焼部床下土坑埋土層横断面



写真62 窯体燃焼部床下土坑埋土層縦断面



写真63 窯体焼成部下位還元焼結床の被熱層断面



写真 64 八里向山 B 遺跡 II 地区出土古代土器（右奥のみ土師器で、他は須恵器）



写真 65 B 遺跡 II 地区出土の灯明痕付き食膳具（右前 2 個体のみ土師器坏 A で、他は須恵器坏 A）



須恵器壺 A



墨痕付壺 B 蓋



土師器壺 A



写真 66・67 壺 A 口縁部に付着する灯明油煙痕

写真 68・69 須恵器壺 B 蓋・壺 A を転用した転用硯



写真 70 B 遺跡Ⅱ地区出土須恵器瓶 C・水瓶・瓶 B 類



写真 71 B 遺跡Ⅱ地区出土鐵製品（刀子）



写真 72 B 遺跡Ⅱ地区出土三彩釉陶器小型壺 A



写真 73 八里向山 C 遺跡土器廐棄場出土皇朝錢



写真 74 八里向山Ⅰ遺跡須恵器窯跡出土の酸化生焼け須恵器（製品生焼け）



写真 75 八里向山Ⅰ遺跡須恵器窯跡出土の還元焼結須恵器  
(置台や窯内部材として転用された還元須恵器。褐色呈すものは製品焼成時の酸化被熱受けたもの)



写真 76 I 遺跡窯跡出土の窯内酸化焰焼成された土師器



写真 77 I 遺跡窯跡出土の窯内で還元 2 次被熱した土師器

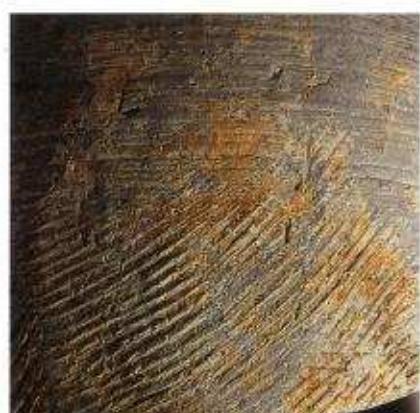
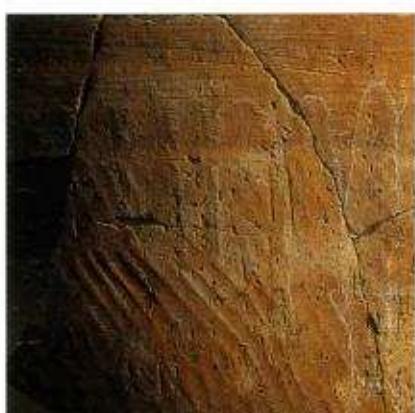


写真 78・79・80 土師器長胴釜と瓶に見られる胴部下半削り成形と叩き出し成形（左：60、中：110、右：74）



外面叩きと剥離面



写真 83 大甕胴部上位に残る小型容器重ね焼き痕（76）



写真 81・82 大甕胴部成形痕と底部土台剥離面（122）



写真 84・85 窯道具状の板状土製品（124）



写真 86 八里向山 J 遺跡須恵器窯跡出土の須恵器食膳具及び小型貯蔵具  
(右手前的一群のみ還元焼結晶で、他は酸化生焼けや焼き締り弱い白色還元品である)



写真 87 八里向山 J 遺跡須恵器窯跡出土の須恵器横瓶・小甕・中甕



写真 88 J 遺跡窯跡平瓶内面に残る風船作り痕跡 (88)



写真 89 J 遺跡窯跡貯藏具成形時切り取り片転用窯道具



写真 90 J 遺跡中甕口頸部外面に残る叩き成形痕 (119)



写真 91 J 遺跡中甕胴部最上位叩きの頸部接触痕 (111)



写真 92・93 J 遺跡特大甕口頸部別作り成形、繋ぎ粘土接合痕 (129)



写真 96・97 J 遺跡特大甕口頸部積み上げ成形叩き痕 (130)

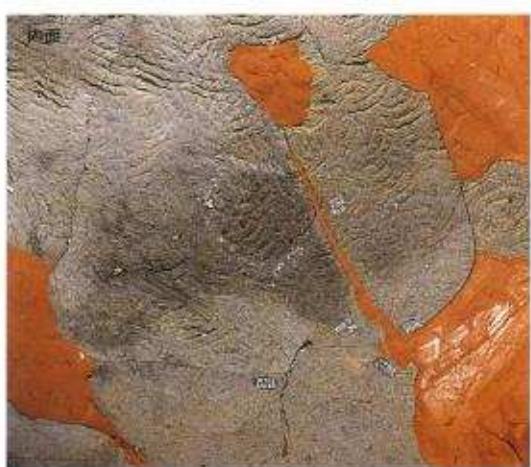


写真 94・95 特大甕 129 の底部叩き痕と調整痕